公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（８）

東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ.）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

永吉天神段遺跡
第１地点

（曽於郡大崎町）

２０１６年３月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（８）
永吉天神段遺跡第１地点
二〇一六年三月
鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

遺跡遠景（南側上空から、シラス採取場の北側台地）

遺跡調査範囲（東側上空から、第１地点と第２地点）

縄文時代の土器（左３点：前期、右３点：晩期）

縄文時代晩期の組織痕のある鉢

序　　文

この報告書は，東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ.）の建設に伴って，平成 24 年度に実施した曽於郡大崎町に所在する永吉天神段遺跡第１地点の発掘調査の記録です。

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターは平成 25 年４月に発足しました。当調査センターの役割は，近年増加している国事業に係る発掘調査に円滑に対応するため，従来鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施してきた発掘調査を引き継ぐとともに，新規の国事業に係る発掘調査を実施することにあります。このため永吉天神段遺跡については，平成 24 年度は，鹿児島県立埋蔵文化財センターが発掘調査を行いましたが，平成 25 ～ 27 年度発掘調査と平成 27 年度整理作業及び報告書刊行は当調査センターが担当することになりました。なお，発掘調査と整理作業及び報告書作成作業では，株式会社パスコに支援業務を委託し，業務の更なる効率化を果たしております。

永吉天神段遺跡第１地点では，縄文時代から古代の遺構・遺物が発見されました。なかでも，約 7,300 年前の鬼界カルデラの噴火による液状化現象に伴う噴砂跡は，今後の地震に対する防災・減災を検討する重要な基礎資料になるものと期待されます。縄文時代晩期では，丹塗土器・壺など特殊なものも含まれており，壺は，器形や文様などに他地域（韓半島など）との関連も考えられるものも出土しています。組織痕土器は完全なものが３個体あり，個体の大きさや布・網の作りなどを探る上で貴重な資料を得ることができました。また，古代の掘立柱建物跡６棟をはじめ，土坑や溝状遺構が発見され，土師器など多くの日用品が出土し，古代集落の在り方を考える上で，有効な情報を得ることができました。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助になれば幸いです。

最後に，調査にあたり本県の埋蔵文化財保護のためにご協力いただきました国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，鹿児島県教育庁文化財課，鹿児島県立埋蔵文化財センター，大崎町教育委員会，調査中にご指導をいただいた先生方，株式会社パスコ，発掘作業員，整理作業員，本遺跡の所在する大崎町永吉の档ヶ山集落の皆様，その他関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成 28 年３月

公益財団法人　鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター長　堂込秀人

報　告　書　抄　録

ふりがな	ながよしてんじんだんいせきだいいちちてん
書名	永吉天神段遺跡第１地点
副書名	東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ．）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
シリーズ番号	8
編集者名	湯場﨑 辰巳・隈元 俊一・株式会社パスコ（池畑 耕一・黒沢 聖子・関口 真由美・松本 拓）
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　℡ 0995-70－0574　FAX0995-70-0576
発行年月日	2016年3月11日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
ながよしてんじんだんいせき 永吉天神段遺跡 だいいちちてん 第１地点	かごしまけん 鹿児島県 そおぐん 曽於郡 おおさきちょう 大崎町 ながよしあざてんじん 永吉字天神	H 25-46468	104	31° 26’ 34”	130° 59’ 6”	確認調査 2011.07.01～ 2011.09.28 本調査 2012.07.02～ 2013.01.28	2,262㎡	東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ．）に伴う記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
永吉天神段遺跡 第１地点	散布地	縄文時代 早期		下剥峯式土器, 押型文土器	鬼界カルデラ噴火に伴う噴砂跡
	散布地	縄文時代 前期		曽畑式土器，轟Ｄ式土器, 条痕文系土器，石鏃	
	散布地	縄文時代 後期		岩崎下層系土器, 岩崎上層式土器, 中岳Ⅱ式土器	
	集落	縄文時代 晩期	竪穴住居跡　１軒 土坑　２基	黒川式土器，刻目突帯文土器，組織痕土器，丹塗土器, 円盤形土製品，石鏃，石錐, 石匙，打製石斧，磨製石斧, 磨石，叩石，石皿	
	集落	弥生時代 中期	土坑　１基	入来Ⅱ式土器，山ノ口Ⅰ式土器，山ノ口Ⅱ式土器，磨製石鏃	
	散布地	古墳時代 中期		東原式土器・辻堂原式土器, 須恵器	
	集落	古代 中世	掘立柱建物跡　６棟 土坑　１０基 溝状遺構　８条	土師器，墨書土器，ヘラ書き土器，須恵器，焼塩土器, 鉄鏃，刀子，鉄滓，鞴の羽口, 砥石	

要約

持留川とその支流に挟まれた標高約35ｍの河岸段丘に位置し，縄文時代早期～古代の複合遺跡である。

約7,300年前の鬼界カルデラの噴火による液状化現象に伴う噴砂跡が発見され，火山灰分析の結果，シラスを主成分とすることが明らかになった。南九州の縄文時代早期の文化・自然に与えた影響を考察し，今後の地震に対する防災・減災を検討する重要な基礎資料になる。

主となる時代は縄文時代晩期と古代である。縄文時代晩期の遺物は多様で，特に土器は深鉢・浅鉢の他に，丹塗り土器・壺など特殊なものも含まれている。壺は，器形や文様などに他地域（韓半島など）との関連も考えられる。組織痕土器は完全なものが３個体あり，個体の大きさや布・網の作りなどを探る上で貴重である。

古代では，掘立柱建物跡６棟をはじめ，土坑や溝状遺構が発見され，土師器など多くの日用品が出土し，古代集落の在り方を考える上で貴重な資料である。墨書土器・小壺・鉄製刀子・焼塩土器・提砥なども含まれている。

第１図　遺跡位置図（1:50,000）

例　言

１　本書は，東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ.）に伴う永吉天神段遺跡第１地点の発掘調査報告書である。

２　本遺跡は，鹿児島県曽於郡大崎町永吉字天神に所在する。

３　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局から鹿児島県が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センター及び公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが実施した。

４　発掘調査は，平成 24 年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

５　整理・報告書作成は，平成 27 年度に公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが実施した。

６　平成 24 年度は，発掘調査業務を株式会社パスコへ委託し，川口雅之の指揮・監督のもと実測図作成及び写真撮影を行った。また，空中写真撮影は株式会社ふじたに再委託した。

７　平成 27 年度は，整理作業及び報告書作成作業支援業務を株式会社パスコへ委託し，湯場﨑辰巳と隈元俊一の指揮・監督のもと業務を実施した。

８　遺構図・遺物分布図の作成及びトレースは，湯場﨑辰巳が株式会社パスコの協力を得て行った。

９　出土遺物の実測・拓本・トレースは，湯場﨑辰巳と隈元俊一が株式会社パスコの協力を得て行った。なお，報告書の作成には Adobe 社製「InDesignCS5」，「IllustratorCS5」，「PhotoshopCS5」を使用した。

10　出土遺物の写真撮影は，鹿児島県立埋蔵文化財センターの写場にて，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターの吉岡康弘・辻明啓が行った。

11　金属製品の保存処理は，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

12　本報告に係る自然科学分析は，テフラ分析・放射性炭素年代測定・植物珪酸体分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に，放射性炭素年代測定及び種実同定を株式会社古環境研究所へ委託した。

13　墨書土器の文字鑑定について，ラサール学園永山修一教諭にご教示いただいた。

14　執筆担当は以下のとおりである。また本書の編集は、湯場﨑が株式会社パスコの協力を得て行った。

第１～３章・第４章第１～６節・第６章第１・３～７節	湯場﨑辰巳
第４章第４節（石器）	関口真由美
第４章第７・８節	池畑耕一・黒沢聖子・関口真由美
第５章	パリノ・サーヴェイ㈱・㈱古環境研究所
第６章第２節	立神倫史

15　本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用を図る予定である。なお，遺物注記等で用いた遺跡記号は「ＮＴＪ」である。

16　巻末に添付してあるＤＶＤには，報告書に記載できなかった掲載遺物出土位置図・土器接合図・掲載遺物国土座標・遺構の調査実測番号と本報告書掲載番号の新旧対応表を納めてある。

17　使用した土色は『新版標準土色帖』(1970，農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。

18　本書で用いたレベル数値は，海抜絶対高度である。

19　本書で使用した方位は，すべて座標北（Ｇ．Ｎ.）であり，測量座標は国土座標系第Ⅱ系を基準としている。

20　遺構種別ごとに略記号を付して調査を行った。遺構の略記号を次に示す。　ＳＩ：竪穴住居跡　ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＫ：土坑　ＳＤ：溝状遺構　Ｐ：柱穴

21　遺構の縮尺は次のとおりである。竪穴住居跡・土坑１／40，掘立柱建物跡・溝状遺構１／60（一部掘立柱建物跡は１／80)。

22　掲載遺物番号はすべて通し番号であり，本文，挿図，表及び図版の番号は一致する。

23　掲載遺物の縮尺は次のとおりである。土器・土製品・拓本１／３，小型石器が１／１～１／２，大型石器１／３～１／４，鉄製品１／３。（大型の土器・拓本についてはこの限りでない。）それぞれの図中にスケールを示してある。

24　掲載土器の拓本を表裏とも貼付の場合，表面が左，裏面が右に配置してある。

本 文 目 次

第１章　発掘調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
　　第１節　調査に至るまでの経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
　　第２節　確認調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
　　第３節　本調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
　　第４節　整理・報告書作成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3
第２章　遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4
　　第１節　地理・地質的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4
　　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4
　　第３節　大崎ＩＣ（仮）付近～鹿屋串良ＪＣＴ．間の遺跡・・・・・・・・・・　10
第３章　調査の方法と層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　13
　　第１節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　13
　　第２節　層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　16
第４章　調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　19
　　第１節　縄文時代早期の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　19
　　第２節　縄文時代前期の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　23
　　第３節　縄文時代後期の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　30
　　第４節　縄文時代晩期の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　34
　　第５節　弥生時代の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　63
　　第６節　古墳時代の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　67
　　第７節　古代の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　70
　　第８節　中世の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　87
第５章　自然科学分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・100
　　第１節　自然科学分析の種類と目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・100
　　第２節　永吉天神段遺跡のテフラ分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・100
　　第３節　土器付着炭質物の放射性炭素年代測定と堆積物の植物珪酸体分析・・104
　　第４節　遺構内埋土の出土炭化物における放射性炭素年代測定と種実同定・・108
第６章　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・111
　　第１節　縄文時代早期の液状化現象（噴砂跡）について・・・・・・・・・・・111
　　第２節　縄文時代前期の土器について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・111
　　第３節　縄文時代後期の土器について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・112
　　第４節　縄文時代晩期の土器について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・113
　　第５節　弥生時代について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・114
　　第６節　古墳時代について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・114
　　第７節　古代について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・115

挿 図 目 次

第 1 図　遺跡位置図
第 2 図　周辺遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・7
第 3 図　東九州自動車道建設に伴う遺跡・・・・・・12
第 4 図　確認調査トレンチ位置図・・・・・・・・・14
第 5 図　調査範囲図・・・・・・・・・・・・・・・15
第 6 図　基本土層図・・・・・・・・・・・・・・・17
第 7 図　グリッド配置図・・・・・・・・・・・・・17
第 8 図　土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・18
第 9 図　下層確認トレンチ位置図・・・・・・・・・19
第 10 図　縄文時代早期の液状化現象 (1)・・・・・20
第 11 図　縄文時代早期の液状化現象 (2)・・・・・21
第 12 図　縄文時代早期の土器・・・・・・・・・・22
第 13 図　縄文時代早～後期の土器出土分布図・・・23
第 14 図　縄文時代前期の土器 (1)・・・・・・・・24
第 15 図　縄文時代前期の土器 (2)・・・・・・・・25
第 16 図　縄文時代前期の土器接合図・・・・・・・26
第 17 図　縄文時代前期の土器 (3)・・・・・・・・27
第 18 図　縄文時代前期の土器 (4)・・・・・・・・28
第 19 図　縄文時代前期の土器 (5)・・・・・・・・29
第 20 図　縄文時代後期の土器 (1)・・・・・・・・31
第 21 図　縄文時代後期の土器 (2)・・・・・・・・32
第 22 図　縄文時代後期の土器 (3)・・・・・・・・33
第 23 図　縄文時代晩期・弥生時代の遺構配置図・・34
第 24 図　縄文時代晩期の竪穴住居跡 1 号・・・・・35
第 25 図　縄文時代晩期の土坑 1 号・2 号・・・・・36
第 26 図　縄文時代晩期の土器 (1)・・・・・・・・36
第 27 図　縄文時代晩期の土器出土分布図・・・・・37
第 28 図　縄文時代晩期の土器 (2)・・・・・・・・38
第 29 図　縄文時代晩期の土器 (3)・・・・・・・・39
第 30 図　縄文時代晩期の土器 (4)・・・・・・・・40
第 31 図　縄文時代晩期の土器接合図 (1)・・・・・41
第 32 図　縄文時代晩期の土器接合図 (2)・・・・・41
第 33 図　縄文時代晩期の土器 (5)・・・・・・・・42
第 34 図　縄文時代晩期の土器 (6)・・・・・・・・ 43
第 35 図　縄文時代晩期の土器 (7)・・・・・・・・44
第 36 図　縄文時代晩期の土器接合図 (3)・・・・・45
第 37 図　縄文時代晩期の土器 (8)・・・・・・・・46
第 38 図　縄文時代晩期の土器 (9)・・・・・・・・47
第 39 図　縄文時代晩期の土器 (10)・・・・・・・・48
第 40 図　縄文時代晩期の土器 (11)・・・・・・・・49
第 41 図　縄文時代晩期の土器 (12)・・・・・・・・50
第 42 図　縄文時代晩期の土器 (13)・・・・・・・・51
第 43 図　石器出土分布図・・・・・・・・・・・・52
第 44 図　縄文時代の石器 (1)・・・・・・・・・・54
第 45 図　縄文時代の石器 (2)・・・・・・・・・・55
第 46 図　縄文時代の石器 (3)・・・・・・・・・・56
第 47 図　縄文時代の石器 (4)・・・・・・・・・・57
第 48 図　縄文時代の石器 (5)・・・・・・・・・・58
第 49 図　縄文時代の石器 (6)・・・・・・・・・・59
第 50 図　縄文時代の石器 (7)・・・・・・・・・・60
第 51 図　縄文時代の石器 (8)・・・・・・・・・・61
第 52 図　縄文時代の石器 (9)・・・・・・・・・・62
第 53 図　弥生時代の土坑及び出土遺物・・・・・・63
第 54 図　弥生・古墳時代の遺物出土分布図・・・・64
第 55 図　弥生時代の遺物 (1)・・・・・・・・・・65
第 56 図　弥生時代の遺物 (2)・・・・・・・・・・66
第 57 図　古墳時代の遺物 (1)・・・・・・・・・・67
第 58 図　古墳時代の遺物 (2)・・・・・・・・・・68
第 59 図　古墳時代の遺物 (3)・・・・・・・・・・69
第 60 図　古代の遺構配置図・・・・・・・・・・・70
第 61 図　掘立柱建物跡 1 号・・・・・・・・・・・71
第 62 図　掘立柱建物跡 2 号・・・・・・・・・・・72
第 63 図　掘立柱建物跡 3 号・・・・・・・・・・・73
第 64 図　掘立柱建物跡 3 号の出土土器・・・・・・74
第 65 図　掘立柱建物跡 4 号と出土土器・・・・・・75
第 66 図　掘立柱建物跡 5 号・・・・・・・・・・・76
第 67 図　掘立柱建物跡 6 号・・・・・・・・・・・77
第 68 図　古代の土坑 1 ～ 10 号・・・・・・・・・78
第 69 図　古代の溝状遺構 1 ～ 8 号・・・・・・・・79
第 70 図　古代の遺物出土分布図・・・・・・・・・80

第 71 図　古代の土師器 (1)・・・・・・・・・・・・81
第 72 図　古代の土師器 (2)・・・・・・・・・・・・82
第 73 図　古代の土師器 (3)・・・・・・・・・・・・83
第 74 図　焼塩土器・・・・・・・・・・・・・・・・84
第 75 図　黒色土器・赤色土器・墨書土器・須恵器・85
第 76 図　土製品・鉄製品・石製品・・・・・・・・・87
第 77 図　中世の土器・・・・・・・・・・・・・・・87
第 78 図　重鉱物組成および火山ガラス比・・・・・102
第 79 図　火山ガラスおよび斜方輝石の屈曲率・・・102
第 80 図　重鉱物・火山ガラス・・・・・・・・・・・103
第 81 図　暦年較正結果・・・・・・・・・・・・・・105
第 82 図　植物珪酸体含有量密度の層位分布・・・・107
第 83 図　較正曲線・・・・・・・・・・・・・・・・109
第 84 図　南九州の火山灰と
第四紀後期の主なテフラ・・・・111
第 85 図　底部編み方圧痕類別・・・・・・・・・・113

表目次

第 1 表　周辺遺跡一覧表・・・・・・・・・・・・8・9
第 2 表　大崎 IC（仮）付近～鹿屋串良 JCT. 間の遺跡 10
第 3 表　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・16
第 4 表　縄文時代早期土器観察表・・・・・・・・・88
第 5 表　縄文時代前期土器観察表・・・・・・・・・88
第 6 表　縄文時代後期土器観察表・・・・・・・88・89
第 7 表　縄文時代晩期土器観察表・・・・・・89 ～ 92
第 8 表　縄文時代石器観察表・・・・・・・・・93・94
第 9 表　土坑 1 号出土弥生時代土器観察表・・・・・94
第 10 表　弥生時代土器観察表・・・・・・・・94・95
第 11 表　弥生時代石器観察表・・・・・・・・・・95
第 12 表　古墳時代土器観察表・・・・・・・・・・95
第 13 表　古墳時代須恵器観察表・・・・・・・・・96
第 14 表　掘立柱建物跡 3 号出土土器観察表・・・・96
第 15 表　掘立柱建物跡 4 号出土土器観察表・・・・96
第 16 表　古代土師器坏，埦，皿，鉢類観察表・96・97
第 17 表　古代土師器甕観察表・・・・・・・・97・98
第 18 表　似非土師器・焼塩土器観察表・・・・・・98
第 19 表　黒色・赤色・墨書土器観察表・・・・98・99
第 20 表　古代須恵器観察表・・・・・・・・・・・99
第 21 表　紡錘車・ふいごの羽口観察表・・・・・・99
第 22 表　古代鉄製品観察表・・・・・・・・・・・99
第 23 表　古代石製品観察表・・・・・・・・・・・99
第 24 表　中世土器観察表・・・・・・・・・・・・99
第 25 表　テフラ組成分析結果・・・・・・・・・・102
第 26 表　出土土器付着物の放射性炭素年代測定
および暦年較正結果・・・104
第 27 表　植物珪酸体分析結果・・・・・・・・・・106
第 28 表　試料採取箇所等・・・・・・・・・・・・108
第 29 表　放射性炭素年代
および暦年代（較正年代）測定結果・・108
第 30 表　永吉天神段遺跡における種実同定結果・・110
第 31 表　編み方分類・・・・・・・・・・・・・・113
第 32 表　永吉天神段遺跡網代底一覧・・・・・・・113
第 33 表　網目圧痕一覧表・・・・・・・・・・・・113
第 34 表　編布圧痕一覧表・・・・・・・・・・・・113

図版目次

巻頭図版 1　遺跡遠景
巻頭図版 2　遺跡調査範囲
巻頭図版 3　縄文土器・縄文晩期の組織痕のある鉢
工事の進む永吉天神段遺跡
本文中写真 1　おおさきっこ歴史探検隊発掘体験・・3
本文中写真 2　発掘調査の様子・・・・・・・・・・3
本文中写真 3　第 1 地点の土層・・・・・・・・・・17
本文中写真 4　縄文時代早期の液状化現象・・・・・21
本文中写真 5　墨書（土器赤外線写真）・・・・・・85
本文中写真 6　植物珪酸・・・・・・・・・・・・107
本文中写真 7　種実写真・・・・・・・・・・・・110
図版 1　東半部全景・遺物出土状況
図版 2　西半部全景・遺物出土状況
図版 3　液状化現象・縄文時代の土器出土状況

図版 4　縄文時代晩期の竪穴住居跡
図版 5　縄文・弥生時代の土坑と古代の溝状遺構
図版 6　古代の掘立柱建物跡
図版 7　古代の土坑・紡錘車出土状況
図版 8　縄文時代早期・前期の土器
図版 9　縄文時代前期の土器
図版 10　縄文時代後期の土器（1）
図版 11　縄文時代後期の土器（2）
図版 12　縄文時代晩期の土器（1）
図版 13　縄文時代晩期の土器（2）
図版 14　縄文時代晩期の土器（3）
図版 15　縄文時代晩期の土器（4）
図版 16　縄文時代晩期の土器（5）
図版 17　縄文時代晩期の土器（6）
図版 18　縄文時代晩期の土器（7）
図版 19　縄文時代晩期の土器（8）
図版 20　縄文時代晩期の土器（9）
図版 21　縄文時代晩期の土器（10）
図版 22　縄文時代晩期の土器（11）
図版 23　弥生時代の土器（1）
図版 24　弥生時代の土器（2）
図版 25　弥生時代の土器（3）・古墳時代の土器（1）
図版 26　古墳時代の土器（2）
図版 27　古墳時代の須恵器（表）
図版 28　古墳時代の須恵器（裏）
図版 29　古代の土師器（1）・須恵器
図版 30　古代の土師器（2）・鉄製品・鉄滓
図版 31　古代の土師器（3）
図版 32　古代の土師器（4）
図版 33　古代の土師器（5）
図版 34　墨書土器・瓦器・黒色、赤色土器・須恵器
図版 35　焼塩土器・紡錘車・ふいごの羽口
図版 36　古代の須恵器・常滑焼
図版 37　石器（1）
図版 38　石器（2）
図版 39　石器（3）
図版 40　石器（4）

工事の進む永吉天神段遺跡（平成 27 年 8 月・南西から）

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は，東九州自動車道の建設を計画し，志布志ＩＣ～末吉財部ＩＣ区間の事業に先立って，事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育委員会に照会した。

この計画に伴い鹿児島県教育庁文化財課（以下，県文化財課）は，平成 11 年１月に鹿屋串良ＪＣＴ．～末吉財部ＩＣ間を，平成 12 年２月には志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ．間の埋蔵文化財の分布調査を実施し，50 か所の遺跡（調査対象表面積 854,100 ㎡）が存在することが明らかとなった。

この結果をもとに，事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室，県文化財課，県立埋蔵文化財センター（以下，埋文センター）の４者で協議を重ね対応を検討してきた。

その後，日本道路公団民営化の政府方針が提起され，事業の見直しと建設コストの削減を検討することとなった。このような社会情勢の変化に伴い，遺跡の厳密な把握が要求されることとなり，埋蔵文化財の詳細分布調査や確認調査が実施されることとなった。

そこで，県文化財課は，まず平成 13 年１月 29 日から２月６日に調査の利便性や面積等を考慮して，宮ヶ原遺跡，加治木堀遺跡，石綰遺跡，十三塚遺跡の試掘調査を実施した。さらに平成 13 年７月 10 日から７月 26 日に鹿屋串良～末吉財部ＩＣ間の工事計画図をもとに 33 の遺跡について詳細分布調査を実施し，同年９月 17 日～ 10 月 26 日及び 12 月３日～ 12 月 25 日の２期間にわたり各遺跡の調査範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

これらの詳細分布調査や試掘調査に加えて，既に合意されていた本線工事用道路及び側道部分の確認調査も実施することとなり，関山西遺跡，関山遺跡，狩俣遺跡の３遺跡を対象に平成 13 年 10 月１日から平成 14 年３月 22 日にかけて確認調査を実施した。

平成 14 年４月には，志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ．間の遺跡について再度分布調査を実施した結果，遺跡の調査対象範囲が 678,700 ㎡となった。

その後，日本道路公団民営化の閣議決定と，新直轄方式に基づく道路建設の確定，平成 15 年 11 月に暫定２車線施行に伴う議事確認書締結，同年 12 月に大隅ＩＣ（平成 21 年４月 28 日，「曽於弥五郎ＩＣ」へ名称変更）から末吉財部ＩＣ間の発掘調査協定書締結，平成 16 年３月に国土交通省九州地方整備局長，日本道路公団九州支社長，鹿児島県知事の間で新直轄方式施行に伴う確認書が締結され，工事は日本道路公団が国土交通省から受託し，発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に再委託することとなり，これまでの確認書，協定書はそのまま継続されることになった。

また，日本道路公団からの委託業務は曽於弥五郎ＩＣまでで終了し，曽於弥五郎ＩＣからの先線部は国土交通省からの受託事業となった。

第２節　確認調査

永吉天神段遺跡の確認調査は，県内遺跡事前調査事業で平成 23 年７月１日から同年９月 28 日に実施した。

１　調査体制

事業主体	鹿児島県教育委員会	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	県立埋蔵文化財センター	
	所長	寺田　仁志
調査企画	次長兼総務課長	田中　明成
	次長兼南の縄文の森調査室長	井ノ上秀文
	調査第一課長	堂込　秀人
	調査第一課第二調査係長	大久保浩二
調査担当	文化財主事	馬籠　亮道

２　調査の経過

調査の経過については，日誌抄を月ごとに集約して記載した。写真撮影は適宜行っているので記述を省略した。なお，第１地点のトレンチは 29 ～ 31 である。

平成 23 年７月

調査開始。調査施設設営及び環境整備。１～ 31 トレンチ（以下，Ｔ）を設定・掘削。

平成 23 年８月

トレンチ調査。遺物取上げ。１Ｔ：旧石器時代剥片・縄文時代早期被熱破砕礫出土。２Ｔ：方形竪穴住居跡検出。弥生土器･石剣出土。４Ｔ:柱穴検出。下剥峯式土器･被熱破砕礫出土。８Ｔ:柱穴検出。磨製石鏃出土。15 Ｔ:縄文時代早期土器片出土。16 Ｔ：Ⅱ層遺物集中部下部硬化面検出。23 Ｔ：Ⅱ層土器片及び柱穴検出。Ⅴ層被熱破砕礫検出。24 Ｔ：柱穴検出。隣接地の民家敷地から古銭を多量に採取。27 Ｔ：Ⅱ・Ⅲ層土器片が密集して出土。Ⅶ層（サツマ層上面）柱穴検出。30 Ｔ：Ⅱ層土師器出土。Ⅲ層縄文時代後期土器片出土。

平成 23 年９月

29･30･31 トレンチ調査。遺物取上げ。埋め戻し。16 Ｔ：硬化面を竪穴住居跡と判断。６・15・18 Ｔ：縄文時代早期土器片（石坂式土器）出土。12・13・16・21・27 Ｔ：弥生時代～古墳時代土器片（山ノ口式土器・東原～辻堂原式土器）出土。30・31 Ｔ：縄文時代晩期土器片（組織痕土器）出土。文化庁林調査官来跡（14 日）。

第３節　本調査（第１地点のみ記載）

確認調査の結果，遺物の集中は調査対象地の広い範囲で確認され，主に中世～古代，古墳時代～弥生時代，縄文時代晩期，縄文時代早期，旧石器時代の包含層が確認された。調査対象範囲が広大であり，各地点で存在する包含層の時期や内容には差があるが，調査対象表面積 37,100 ㎡，調査対象延面積 87,588 ㎡とした。

確認調査の結果を踏まえ，改めて遺跡の取り扱いについて県文化財課，国土交通省，埋文センターの三者で協議し，遺跡の現地保存は困難であることから，埋文センターが本調査を実施することとなった。平成 24 年度は埋文センターが本調査を実施し，「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査（民間委託）実施要項」に基づき，株式会社パスコへ発掘調査業務の委託を行った。

平成 25 年度からは，東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を含めた国事業関係を円滑に進めるために，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下，埋文調査センター）が発足し，県から受託して発掘調査を進めることになった。

平成 27 年度の整理作業・報告書作成作成業務は，「公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター埋蔵文化財整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託実施要綱」に基づき，株式会社パスコへ整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託を行い実施した。

本調査は，第２地点と併せ，平成 24 年７月２日から平成 25 年１月 28 日までの期間実施した。調査組織については，以下のとおりである。

１　調査体制

事業主体	国土交通省九州地方整備局	
	大隅河川国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	県立埋蔵文化財センター	
	所長	寺田　仁志
調査企画	次長兼総務課長	新小田　穣
	次長兼南の縄文調査室長	井ノ上秀文
	調査第二課長	冨田　逸郎
	調査第二課第一調査係長	八木澤一郎
調査担当	文化財主事	川口　雅之
調査事務	主幹兼総務係長	大園　祥子
	主査	岡村　信吾
現地指導	鹿児島大学大学院理工学研究科准教授	
		井村　隆介
	福岡大学人文学部教授	武末　純一

２　発掘調査の民間委託

発掘調査の実施にあたり，埋文センターは「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査（民間委託）実施要項」に基づき，株式会社パスコへ発掘調査の委託を行った。

埋文センター職員１名が常駐監理して，統括，指揮及び運営を行った。委託内容は以下のとおりである。

委託先	株式会社パスコ	
契約期間	平成 24 年６月８日～平成 25 年２月 22 日	
委託内容	発掘調査業務	１式
	測量業務	１式
	土工業務	１式
担当者	主任技術者	新川　浩
	主任調査員	池畑　耕一
	調査員	西田　茂
	調査員	丸山　清志
	調査員	黒沢　聖子
	測量主任技師	小林　進哉
検　　査	中間検査　平成 24 年 10 月 18 日（木）	
	完成検査	
	平成 25 年２月 13 日（実地検査）	
	平成 25 年２月 15 日（成果物検査）	

３　調査の経過

平成 24 年度は，第１地点に関わる部分のみを記載している。

平成 24 年７月

２日調査開始。Ｅ～Ｈ－ 57 ～ 59 区表土剥ぎ。４日作業員を入れての調査開始。新規入場者教育。環境整備。Ⅱｂ層掘り下げ。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

平成 24 年８月

Ｅ～Ｈ－ 57 ～ 59 区Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。Ｆ－ 57・58 区Ⅴ層確認Ｔ調査。３日おおさきっこ歴史探検隊発掘体験。

平成 24 年９月

Ｆ～Ｈ－ 57・58 区液状化現象（噴砂）調査。Ｆ～Ｉ－ 57 ～ 61 区表土剥ぎ。Ⅱ～Ⅲ層掘り下げ。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。５日鹿児島大学井村隆介准教授調査指導。13 日南日本新聞社液状化現象取材。

平成 24 年 10 月

Ｆ・Ｇ－ 58・59 区Ⅳ層掘り下げ。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。埋め戻し。第１地点調査終了。24 日南日本新聞社取材。

※ 11 月～１月は，第２地点の調査のため，本報告書には記載していない。

第４節　整理・報告書作成

１　整理・報告書作成作業の組織

本報告書に伴う整理・報告書作成作業は，県から受託を受けた（公財）県文化振興財団（埋文調査センター）が平成 27 年度に実施した。その期間は，平成 27 年４月～平成 28 年３月までで，永吉天神段遺跡整理作業場を中心に行った。なお，平成 25 年度は，発掘調査の一部にて基礎的整理作業（水洗い・注記）を行った。

整理・報告書作成作業に係る組織は以下のとおりである。

平成 27 年度（平成 27 年４月～平成 28 年３月）

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
作成主体　鹿児島県教育委員会
作成統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　センター長　　堂込　秀人
作成企画　総務課長兼総務係長　　有村　貢
　　調査課長　　八木澤一郎
　　調査第一係長　　中村　和美
作成担当　文化財専門員　　湯場﨑辰巳
　　文化財専門員　　隈元　俊一
事務担当　主査　　荒瀬　勝己
報告書作成指導委員会
　　平成 27 年６月８日　センター長ほか　５名
　　平成 27 年８月 18 日　センター長ほか　５名
　　平成 27 年 11 月９日　センター長ほか　５名
　　平成 27 年 11 月 26 日　センター長ほか　５名

２　整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託

整理作業・報告書作成作業の実施にあたり，埋文調査センターは「公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター埋蔵文化財整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託実施要項」に基づき，株式会社パスコへ整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託を行った。委託内容は以下のとおりである。

委託先　株式会社パスコ
契約期間　平成 27 年４月 13 日～平成 28 年３月 11 日
作業期間　平成 27 年５月 11 日～平成 28 年１月 28 日
委託内容　報告書作成作業支援業務　１式
　　整理作業支援業務　１式
　　印刷製本業務　１式
担当者　主任調査支援員　池畑　耕一
　　調査支援員　黒沢　聖子
　　調査支援員　関口　真由美
　　調査支援員　松本　拓
検査　中間検査　平成 27 年 10 月 21 日
　　完成検査　平成 28 年３月

３　整理作業の経過

整理作業の経過は以下のとおりである。

平成 27 年４月
　支援業務委託準備，入札，土器分類
平成 27 年５月
　支援業務委託開始，土器再分類・再選別，石器実測準備・実測，遺構図面整理
平成 27 年６月
　土器・石器実測・トレース，遺構図面整理・トレース
平成 27 年７月
　土器・石器実測・トレース，台帳作成，遺構図面整理・トレース・調整，原稿執筆
平成 27 年８月
　土器・石器実測・トレース・確認，台帳作成，遺構図面トレース・調整・確認，原稿執筆
平成 27 年９月
　土器・石器実測・トレース・確認，台帳作成，遺構図面トレース・調整・確認，原稿執筆，観察表作成
平成 27 年 10 月
　土器実測・トレース・確認，台帳作成，挿図作成（スキャニング・トリミング），原稿執筆，観察表作成，　レイアウト，中間検査
平成 27 年 11 月　レイアウト，校正
平成 27 年 12 月　入稿，校正
平成 28 年１月
　校正，成果物収納，支援業務委託作業終了
平成 28 年２月　検査準備
平成 28 年３月
　成果物提出，完成検査，支援業務委託終了

※ 10 月以降は，第２地点の土器・石器実測・トレース等も行ったが割愛している。

写真１
おおさきっこ歴史探検隊発掘体験

写真２
発掘調査の様子

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理・地質的環境

曽於郡大崎町は，鹿児島県の東南部大隅半島の東部に位置する。東は志布志市，南は肝属郡東串良町，西は鹿屋市，北は曽於市と接し，南東は志布志湾に面している。

大隅半島は，南北方向に走る山地，その間の丘陵，台地及び低地などの低地帯から構成され，地質は大部分がシラス，ボラなどの火山灰土壌となっている。

東側の山地は，志布志湾北部から宮崎県に張出した形で北から南へと延びる鰐塚山地である。主峰は宮崎県内の鰐塚山（1,119 m）である。

西側の山地は北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された姶良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈連山へと連なっている。高隈山地は，北部の白鹿岳・荒磯岳など 500 ～ 600 m級の山々と，南部の大箆柄岳（1,236.8 m）を主峰に横岳・御岳など 1,000 m級の山から成る山地で山容は急峻で深い森林に覆われている。

東西の山地は，ともに九州山地の延長上にあり，それらの間は丘陵や台地及び低地帯となっている。これらの山間地を埋めるような形で，洪積世の火山活動による火砕流が堆積し，丘陵や台地が広く分布した典型的なシラス地形となっている。この火砕流は，南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や，湾奥に形成された姶良カルデラの入戸火砕流で，これらの火砕流をはじめとする噴出物の堆積がベースとなっている。噴出物は，堆積後から現在に至るまで大小多くの河川で開析されるが，丘陵状地形や原面はほとんど浸食されず，広大な台地となっている。

一方低地は，高隈山地や鰐塚山地などを水源とする大小の河川が走り，志布志湾，鹿児島湾などに注いでいる。この河川は，上･中流域で狭い谷底平野を形成し，また，幾段かの河岸段丘も認められる。海岸線には砂丘の形成される所もあり，特に東側の志布志湾岸では幅広い。

大崎町の地形は，北部に菱田川とその上流にあたる大鳥川，東部を田原川，中央部を持留川が南流し，志布志湾に注いでいる。大崎町の地勢は概ね２つに分けられ，北端部は大鳥川を中心として河川が溶結凝灰岩を切り開き，起伏の激しい渓谷を構成している。中部から南部地帯は北西から東南の海岸線に向かって，緩やかに傾斜している起伏の少ない平坦な地帯であり，場所によっては志布志湾まで見通せる。これらの河川によって台地は区切られ，西部から永吉台地，仮宿台地，飯隈（中沖）台地に分けられる。永吉台地の西側を串良川，永吉台地と仮宿台地の間を持留川，飯隈台地の東側を菱田川が流れている。台地の大部分は，約 29,000 年前の姶良カルデラ起源のシラス土壌の上に形成された「クロボク」と呼ばれる黒色火山灰土壌が広がっている。

大崎町は，志布志市から東串良町まで約 16 ㎞にわたって続く幅１～ 1.5 ㎞の砂丘海岸のほぼ中央部にあたる。菱田川河口から南西に弧状を描いて，東串良町に至るまで約７㎞の海岸線があり，弥生時代などの遺跡は数ｍにわたって砂に厚く覆われている。

永吉天神段遺跡は，永吉台地の東側縁辺部に位置し，志布志湾から直線距離で約６㎞ある。持留川とその支流に、東側と南西側を挟まれた標高約 35 ｍの河岸段丘及び標高約 50 ｍの舌状台地に立地する。調査前は宅地あるいは畑地であった。持留川の流域沿いには，下堀遺跡や荒園遺跡・麦田下遺跡・高久田Ａ遺跡などがあり，本遺跡同様，旧石器時代～中世の遺構・遺物が確認されている。また，台地の麓には，三所大権現や档ヶ山古石塔群が所在し，付近の民家では多量の古銭が採取されていることから，中・近世においても歴史的に重要な地域であったことがうかがえる。

第２節　歴史的環境

大崎町では，主に田原川，持留川，菱田川，大鳥川を臨む台地の縁辺部に沿って遺跡の分布がみられる。本遺跡の周辺は，これまで本格的な発掘調査がなされていなかったため詳細は不明であったが，近年大隅グリーンロードや東九州自動車道建設などに伴う発掘調査によって，次第に歴史的様相が明らかになりつつある。

旧石器時代

野方の天神段遺跡でナイフ形石器文化期と細石刃文化期の石器製作跡及び石器類が，二子塚Ａ遺跡で剥片が発見されている。永吉天神段遺跡とは持留川を挟んだ位置にある仮宿の荒園遺跡では，細石刃文化期の石器類が発見されている。永吉天神段遺跡では三稜尖頭器やナイフ形石器など，ナイフ形石器文化期の遺物やその製作跡が発見されている。

縄文時代

周辺では，縄文時代の発掘調査例が増えつつある。

早期では，野方の天神段遺跡で、多数の集石･連穴土坑･落とし穴状遺構等と，前平式・桑ノ丸式・石坂式・塞ノ神式・苦浜式土器，石鏃・打製石斧が，二子塚Ａ遺跡で集石と，吉田式・石坂式・塞ノ神式土器，石鏃・石匙などが出土している。井俣では金丸城跡で石坂式土器・石鏃・凹石などが，岡別府の下堀遺跡では集石 13 基や土坑と，前平式・石坂式・桑ノ丸式・平栫式・塞ノ神式土器，石鏃･石錐等が発見されている。平良上Ｃ遺跡では，竪穴住居跡・集石・連穴土坑と，石坂式・下剥峯式土器

が，仮宿の荒園遺跡では，集石や土坑と，前平式・石坂式・桑ノ丸式・平栫式・塞ノ神式土器，石鏃・石匙，耳栓などが出土している。串良川の東側，永吉台地の西端にある有明町益畑遺跡では，前平式土器の時期の竪穴住居跡２軒，連穴土坑 16 基，集石 85 基，土坑 160 基などが検出された。他に前平式・吉田式・石坂式・下剥峯式・辻タイプ・桑ノ丸式・塞ノ神式などの土器をはじめ，石鏃・石皿・磨石・敲石・石斧・ハンマーなどの石器や，黒曜石・チャート・蛋白石などの石材も出土した。

前期では，天神段遺跡で，曽畑式土器に伴い西日本最古となるその時期の石剣や，石鏃・石皿・磨石等の多数の遺物が出土している。野方の立山Ｂ遺跡で，曽畑式土器が出土している。

中期では立山Ｂ遺跡で阿高式土器が出土している。持留の京の塚遺跡では前期末から中期前半の土坑が 150 基以上検出され，その性格などが注目されている。また在地の深浦式土器とともに東海系土器，近畿地方の大歳山式土器，瀬戸内～北部九州系の鷹島式・船元式土器が出土していることから広域な交流を示している。石鏃・石匙など石器の出土数も多く、玦状耳飾りも出土している。

後期では，京の塚遺跡で丸尾式・西辛川式・西平式・中岳Ⅱ式土器，磨石・石皿などが出土している。下堀遺跡では，指宿式・擬似磨消縄文系土器が，細山田段遺跡では，土坑や丸尾式・北久根山式・西平式・御領式土器が確認されている。

晩期では，天神段遺跡で，竪穴住居跡・土坑群とともに，入佐式・黒川式土器，石鏃・打製石斧・磨製石斧・石鏃・砥石が出土している。立山Ｂ遺跡と細山田段遺跡で，黒川式土器が出土している。京の塚遺跡では入佐式・黒川式土器が出土している。永吉天神段遺跡第１地点では突帯文土器の伴う竪穴住居跡や鉢・壺，打製石斧・石鏃・石匙・石皿などが発見されている。第２地点でも同時期の土器などが出土している。

弥生時代

砂丘後背地に立地する益丸の沢目遺跡は，砂丘に埋没した中期から終末期にかけての遺跡である。平成 11 年に行われた発掘調査で，竪穴住居跡 53 軒・土坑約 20 基・柱穴約 180 基が発見され，入来Ⅰ式・入来Ⅱ式・山ノ口Ⅰ式・山ノ口Ⅱ式・須玖式土器，鉄製品・軽石製加工品が出土している。近くの砂丘では戦前に人骨が発見されており，河口付近の横瀬では甕棺破片も採集されているので，埋葬遺構の可能性もある。岡別府の下堀遺跡では，山ノ口式土器や須玖式土器を伴った直径８ｍの円形大型住居跡２軒・掘立柱建物跡５棟などが検出されている。下堀遺跡と同じ台地にある仮宿の荒園遺跡でも吉ヶ崎式・山ノ口式土器を伴う竪穴住居跡が検出されている。下堀遺跡より一段下がった麦田下遺跡では，高付式土器，西南四国系土器，瀬戸内系土器など後期の土器溜まりが検出されている。

田原川・持留川沿いには弥生土器片の散布地が多く点在している。

古墳時代

志布志湾岸沿いは，前方後円墳をはじめとする古墳群があり，畿内との関連をうかがわせる地域とされている。

横瀬古墳は古墳時代中期（５世紀前半頃）の大型前方後円墳で，隣接する東串良町唐仁大塚古墳に次いで県内第２の規模を誇る。墳長 132 m，前方部幅 72 m，前方部長 68 m，後円部径 64 m，くびれ部幅 48 mあり，そのまわりを幅が 12 ～ 23 m，深さが約 1.5 mの壕が巡っているが、さらに周堤帯を挟んで周濠が巡る二重周濠の可能性も考えられている。周濠跡からは伽耶系陶質土器あるいは大阪府陶邑窯産の須恵器や埴輪が出土している。墳丘の高さは，後円部が 10.5 m，前方部が 11.5 mであるが，後円部の頂上部に石室が露呈していることから，本来の後円部は現在より高かったと考えられる。墳丘からは円筒埴輪片，形象埴輪片が採集されている。明治 35 年に盗掘を受け，腐食した直刀や鎧，勾玉類が出土し，石室内は朱塗りであったと伝えられている。

神領古墳群は，前方後円墳４基，円墳９基で構成されている。10 号墳は墳長 54 mの前方後円墳である。主体部は６か所の縄掛突起のある刳抜式舟形石棺を軽石で覆った礫槨で，周辺から管玉・勾玉，鉄剣，短甲の一部，鉄鏃束などが出土している。周溝からは盾持人埴輪や朝顔形埴輪などの埴輪や，愛媛県市場南組窯産などの初期須恵器・土師器高坏・製塩土器などを含む大量の祭祀土器群が出土している。５世紀前半のものである。まわりには４基の地下式横穴墓が発見されている。６号墳（天子ヶ丘古墳）は墳長 43 m，後円部の径 19 m，高さ３m，前方部の幅 16 m，高さ２mの前方後円墳で，後円部に花崗岩質板石を使用した組合せ箱形石棺があった。日光鏡・仿製獣帯鏡各１面が採集され，石棺内から，鉄剣・鉄刀・鏡等の副葬品が出土した。神領古墳群では他に地下式横穴墓も８基検出されている。１号は，長方形家形の玄室，妻入りの羨道部取り付けで，軽石製箱形石棺内から鉄剣・イモガイ製貝釧・仿製内行花文鏡・骨製簪などの副葬品が出土した。５号からも，イモガイ製貝釧が出土した。６号の玄室内では南側に歯が数本，北側に大腿骨が残存しており，副葬品はなかった。５・６世紀のものである。

海岸から離れた所にも高塚古墳は広がり，田原川の東に位置する仮宿台地の縁辺部に立地する原田古墳群には，周囲 125 mの円墳が現存する。また，軽石製組み合わせ石棺をもつ地下式横穴墓は，玄室が家形をなし，羨道部の取り付けが妻入りである。石棺内には，女性の人骨が残っており，刀子が副葬されていた。

町内では他に，飯隈台地に飯隈古墳群（円墳９基，地

下式横穴墓 21 基）・仮宿台地に田中古墳群（円墳３基）・後迫古墳群・鷲塚地下式横穴墓群・下堀遺跡（地下式横穴墓７基）が知られている。

集落遺跡として，原田古墳群と同じ台地の北側には長田遺跡があり，竪穴住居跡３軒が検出されている。野方の二子塚Ａ遺跡では，竪穴住居跡３軒，土坑１基が検出され，４～５世紀代の在地の成川式土器や，宮崎平野の影響を受けたと考えられる土師器が出土している，沢目遺跡では，古墳時代初頭の竪穴住居跡５軒があり，住居内から成川式土器，土師器が意図的に並べられた状態で出土した。遺物には，布留式土器をまねて作られた土師器等が出土している。岡別府の下堀遺跡では，竪穴住居跡７軒・溝状遺構が，仮宿の荒園遺跡では，笹貫式土器とともに竪穴住居跡が検出され，そのうちの１軒は焼失住居跡である。永吉の高久田Ａ遺跡では１軒，永吉天神段遺跡では４軒の竪穴住居跡が見つかっている。これらに続く永吉台地の西端にある鹿屋市串良町細山田小牧遺跡でも花弁状を呈する竪穴住居跡などが検出されている。また，大崎町の二子塚で採集されたと伝わっている朝鮮半島製の鋳造鉄斧もある。

古代

古代の大崎は日向国諸県郡に属し，その南端にあったと思われるが郡境は定かでなく、西隅・南隅とも不明である。この周辺の古代の考古学的様相も今のところ出土例が少なく定かでない。

古代の遺跡としては，天神段遺跡で掘立柱建物跡・竪穴建物跡・土坑・炉跡・土師器・墨書土器・刻書土器・鍛造剥片が確認されている。

永吉天神段遺跡の第１地点では７棟の掘立柱建物跡や墨書土器・刻書土器・須恵器・焼塩土器・鉄製刀子・砥石などが発見されている。

中世

中世には各地で山城が造られ，大崎城跡・胡摩ヶ崎城跡・野卸城跡・竜相城跡・金丸城跡・榕谷城跡・遠見ヶ丘などがある。金丸城跡では，溝状遺構・土坑が検出され，青磁・白磁・青花・東播系こね鉢・瓦質土器・備前焼擂鉢・天目碗など 14 世紀半ばから 15 世紀の遺物が出土している。また，近年の発掘調査では村落跡も各地で確認されている。天神段遺跡では，多くの掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑墓が検出され，中でも土坑墓１号からは，同安窯系青磁６点・青磁１点・青白磁１点・銅鏡１点・滑石製石鍋２点・鉄製品・木製品・土師器などの豊富な副葬品が出土している。下堀遺跡では，溝状遺構・畝跡とともに，青磁・青花・中国陶器などが発見されている。永吉天神段遺跡でも，湖州六花鏡・白磁碗・羽釜のミニチュア土器や土師器皿・坏の副葬された土坑墓等が検出され，青磁・白磁・陶器壺などの輸入陶磁器や，東播系こね鉢・常滑焼・備前焼などの国内産陶器，楠葉型瓦器埦，滑石製石鍋，茶臼など多くの遺物が出土している。

近世

井俣の金丸城跡は中世から近世にかけての遺跡だが，17 世紀前半を主体とする陶磁器が多く出土している。多くの柱穴とともに，掘立柱建物跡７棟や水溜土坑（大型６基・小型２基），炉跡 16 基，溝状遺構，墓などが検出されている。炉跡はいずれも意図的に壊され，炉周辺に炉壁を構成していたと思われる軽石や熱変粘土片が集中している場所も確認された。周辺で椀形鉄滓が出土していることから，この炉については鉄生産に関連する可能性も考えられる。肥前染付・瓦器・中国製陶磁器・龍門司窯および苗代川窯産の薩摩焼・鉄製品・鉄滓など多くの遺物も出土している。野方の天神段遺跡では，安永ボラ（1779 年）を埋土とする畠畝状遺構や薩摩焼などが発見されている。持留の京の塚遺跡では近代まで続く溝状遺構や古道が検出されている。永吉天神段遺跡でも薩摩焼や肥前系染付などが出土し，道跡や寛永通宝を副葬した墓坑５基が検出されている。

（参考・引用文献）

大崎町教育委員会 2001「立山Ｂ遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書 (3)

大崎町教育委員会 2005「金丸城跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書 (4)

大崎町教育委員会 2005「下堀遺跡・大崎細山田段遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書 (5)

大崎町教育委員会 2006「美堂Ａ遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書 (6)

大崎町教育委員会 2014「麦田下遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書 (7)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010「加治木堀遺跡・宮ノ本遺跡・椿山遺跡・柿木段遺跡・野方前段遺跡Ａ地点」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (154)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012「宮ヶ原遺跡・野方前段遺跡Ｂ地点・柿木段遺跡２」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (173)

鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2015「天神段遺跡１」公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (3)

橋本達也 2010「古墳築造南限域の前方後円墳－鹿児島県神領 10 号墳の発掘調査とその意義」『考古学雑誌』第 94 巻第３号

第２図　周辺遺跡位置図 (1:25,000)

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所在地	地形	種類	時代	遺物等	備考
1	468	116	佐土原	曽於郡大崎町野方 佐土原	台地	散布地	縄文，古墳	土器	平成 12 年：農政分布調査
2	468	115	大久保Ｂ	曽於郡大崎町持留 大久保	台地	散布地	縄文	土器	平成 12 年：農政分布調査
3	468	3	大久保Ａ	曽於郡大崎町持留 大久保	台地	散布地	縄文（後）	指宿式・市来式土器・打製石斧	
4	468	99	赤野原	曽於郡大崎町持留 赤野原	台地	散布地	弥生，古墳	土器	平成 11 年：農政分布調査
5	468	2	川上神社	曽於郡大崎町持留 中持留	扇状地	散布地	縄文（後）	指宿式・市来式土器	
6	468	67	持留牧	曽於郡大崎町持留 持留牧，東尾ノ花	台地	散布地	縄文，古墳	磨製石斧，成川式土器	平成 9 年：農政分布調査
7	468	135	西ノ上	曽於郡大崎町永吉 西ノ上	台地	散布地	弥生		平成 18 年 7 月 :NTT ドコモ九州の電話基地局建設に伴う分布調査
8	468	100	杪木段	曽於郡大崎町永吉 杪木段	台地	散布地	弥生，古墳	土器	平成 11 年：農政分布調査
9	468	101	永迫	曽於郡大崎町永吉永迫	台地	散布地	縄文， 弥生，古墳	土器	平成 11 年：農政分布調査
10	468	127	高久田Ｂ	曽於郡大崎町永吉 高久田	沖積地	集落	弥生（前・末）， 古墳	弥生終末～古墳住居跡	平成 21 年：県営農総事業に伴い 発掘調査
11	468	97	坂本原	曽於郡大崎町岡別府 坂本原	台地	散布地	弥生，古墳		平成 11 年：農政分布調査
12	468	96	五鳴	曽於郡大崎町岡別府 五鳴	台地	散布地	弥生，古墳		平成 11 年：農政分布調査
13	468	98	早馬	曽於郡大崎町岡別府 早馬	台地	散布地	弥生，古墳		平成 11 年：農政分布調査
14	468	128	小柳	曽於郡大崎町岡別府 小柳	沖積地	散布地	弥生，古墳		平成 18 年：確認調査
15	468	137	麦田下	曽於郡大崎町岡別府 麦田下	台地	散布地	弥生（後），古墳， 古代	土器溜まり，高付式・西南四国系・瀬戸内系土器，勾玉，砥石，成川式土器，墨書土器	大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（7）
16	468	129	宮田	曽於郡大崎町岡別府 宮田	沖積地	散布地	弥生，古墳	弥生土器	平成 18 年：確認調査
17	468	130	高久田Ａ	曽於郡大崎町永吉 高久田・尾ノ迫	台地	集落	縄文（晩）， 弥生（前～終末）， 古墳，古代～近代	竪穴住居跡・掘立柱建物・土坑・溝状遺構，黒川式・入佐式・刻目突帯文・山ノ口式・中津野式・東原式土器，磨製石鏃・石錐・ガラス玉・青磁・古銭	大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（8）
18	468	102	船迫	曽於郡大崎町永吉船迫	台地	散布地	縄文，弥生，古墳		平成 11 年：農政分布調査
19	468	103	下原	曽於郡大崎町持留下原	台地	散布地	縄文（後），弥生， 古墳	指宿式・市来式土器・弥生土器・土師器・磨製石斧	平成 11 年：農政分布調査
20	468	134	椎木段	曽於郡大崎町永吉 椎木段	台地	散布地	縄文，古墳，中世	磨製石斧，成川式土器	平成 18 年：分布調査
21	468	104	永吉天神段 （本報告書）	曽於郡大崎町永吉天神	河岸段丘・台地	集落 墓	旧石器，縄文， 弥生，古墳， 古代，中世・近世	ナイフ形石器，尖頭器，縄文土器，弥生土器，成川式土器，土師器，銅鏡，古銭	平成 24 ～ 27 年度：発掘調査
22	468	53	下堀	曽於郡大崎町岡別府 下堀	台地	集落 地下式横穴墓	縄文（早・後）， 弥生（中），古墳， 古代，中世，近世	集石遺構，大型住居跡，土坑を伴う掘立柱建物跡，地下式横穴墓等	大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）
23	468	90	干浅	曽於郡大崎町井俣干浅	台地	散布地	弥生，古墳		平成 11 年：農政分布調査
24	468	30	金丸城跡	曽於郡大崎町井俣 小牧・金丸	台地・沖積地	城館跡	縄文（早），古墳， 古代，中世，近世	掘立柱建物・土坑・溝・石坂式土器・石鏃・凹石・土師器・須恵器・青磁・白磁・青花・備前焼・砥石・硯・鉄製品等	救仁郷氏築城と言われているが，調査でも不明 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
25	468	86	井俣牧	曽於郡大崎町井俣 井俣牧	台地	散布地	弥生，古墳		平成 11 年：農政分布調査

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所在地	地形	種類	時代	遺物等	備考
26	468	122	井俣和田	曽於郡大崎町井俣和田	沖積地	散布地	古墳	成川式土器	平成 18 年：確認調査
27	468	88	宮脇	曽於郡大崎町井俣宮脇	台地	散布地	縄文（早），古墳，古代	縄文土器	平成 27 年：発掘調査
28	468	89	堂園堀	曽於郡大崎町井俣堂園堀	台地	散布地	弥生，古墳		平成 23 年：確認調査
29	468	87	坂上	曽於郡大崎町井俣坂上	台地	散布地	弥生，古墳		平成 11 年：農政分布調査
30	468	95	荒園	曽於郡大崎町仮宿荒園	台地	散布地	旧石器，縄文（早），弥生（中），古墳，中世，近世	細石刃核，細石刃，集石，前平式・平栫式・塞ノ神式土器，竪穴住居跡，山ノ口式・成川式土器・東播系・備前焼	平成 24 ～ 26 年度：東九州自動車道建設に伴う発掘調査
31	468	49	美堂Ａ	曽於郡大崎町仮宿美堂	台地	散布地	古墳，中世，近世	古道・土坑，成川式土器・土師器・青白磁・備前焼・常滑焼	大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（6）
32	468	50	美堂Ｂ	曽於郡大崎町仮宿胡摩	台地	散布地	古墳		平成 7 年：農政分布調査
33	468	34	大崎城跡	曽於郡大崎町仮宿城内ほか	台地	城館跡	中世（室町），近世		
34	468	33	胡摩ヶ崎城跡	曽於郡大崎町仮宿古城	台地	城館跡	中世（室町）		楡井氏の城
35	468	51	小園	曽於郡大崎町永吉小園	沖積地	散布地	古墳		平成 14 年：確認調査
36	468	29	野卸城跡	曽於郡大崎町永吉前岡・深坂	台地	城館跡	古代，中世		平安時代末（1190 年）築城 シラス採取で半壊
37	468	106	外園	曽於郡大崎町永吉外園	台地	散布地	弥生，古墳		平成 11 年：農政分布調査
38	468	126	牧谷・白山	曽於郡大崎町永吉牧谷・白山	沖積地	散布地	中世	野卸城の堀の可能性有り	平成 17 年：農政分布調査
39	468	105	大迫	曽於郡大崎町永吉大迫	台地	散布地	弥生，古墳	土器	平成 11 年：農政分布調査
40	468	17	高井田	曽於郡大崎町井俣高井田（飛地）	台地	散布地	弥生（中）	弥生土器	平成 17 年：農政分布調査
41	221	449	五色	志布志市有明町野神五色，風穴	台地	散布地	古墳		平成 10 年：農政分布調査
42	221	450	西ノ堀	志布志市有明町原田西ノ堀，下五敷	台地	散布地	古墳		平成 10 年：農政分布調査
43	221	407	坂ノ上	志布志市有明町原田坂ノ上，前田，西原	台地	散布地	弥生，古墳		平成 11 年：農政分布調査 旧遺跡名：坂ノ下
44	221	352	清水	志布志市有明町原田清水	台地	散布地	弥生（中）	磨製石斧・打製石斧	大隅地区埋蔵文化財分布調査：旧遺跡名：平田，原田，元宮の下，永田
45	221	439	東中原	志布志市有明町原田東中原，大塚，藤原，中須	台地	散布地	古墳		平成 10 年：農政分布調査 旧遺跡名：中須
46	221	504	大塚	志布志市有明町原田大塚，出口，有本，竹塚	台地	散布地	縄文，古墳		平成 8・10 年：農政分布調査
47	221	386	原田古墳群	志布志市有明町原田大塚，竹塚	台地	円墳 地下式横穴墓	古墳	原田古墳（円墳直径 40m 高さ 5.6m 石棺露出）大塚Ａ古墳（円墳直径 20m 高さ 4.5m 石棺露出）大塚Ｂ古墳（円墳直径 10m 高さ 1.3m）坂ノ上 1･2 号古墳（小円墳）・地下式横穴墓（妻入型，軽石石棺，鉇，成人女性，刀子）	県埋文発掘調査報告書（13） 旧遺跡名：大塚殿，大塚古墳群，大塚Ａ古墳・大塚Ｂ古墳，坂ノ上１号古墳，坂ノ上２号古墳・大塚 平成 26 年：鹿児島国際大学発掘調査
48	221	366	長田	志布志市有明町原田長田，牧，春日免	台地	集落 散布地	縄文，弥生（中），古墳，中世	山ノ口式土器，成川式土器，白磁，竪穴住居跡（弥生 4・古墳 3）土坑墓（中世）掘立柱建物（弥生 3･古墳 4･中世 4）	有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）
49	482	9	上市ノ園古墳群	肝属郡東串良町岩弘	台地	古墳	古墳	古墳群１～５号	

第3節　大崎IC（仮）付近～鹿屋串良JCT．間の遺跡

東九州自動車道の志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ．間には 23 の遺跡が存在する。報告書が刊行されていない遺跡もあるが，ここでは第２表に示す大崎ＩＣ（仮）付近～鹿屋串良ＪＣＴ．間の 14 の遺跡について概要を記載する。詳細については報告書を参照していただきたい。

第２表　大崎ＩＣ（仮）付近～鹿屋串良ＪＣＴ．間の遺跡

	遺跡名	発掘調査	整理作業
1	平良上Ｃ遺跡	終了	作業中
2	宮脇遺跡 （一部大崎ＩＣ（仮））	調査中	
3	堂園堀遺跡 （大崎ＩＣ（仮））	包含層 ナシ	―
4	荒園遺跡	調査中	作業中
5	永吉天神段遺跡	調査中	第１地点は本報告書 第２地点整理作業中
6	京の塚遺跡	終了	作業中
7	小牧遺跡	調査中	
8	川久保遺跡	調査中	作業中
9	町田堀遺跡	調査中	平成 25・26 年度調査分 平成 27 年度刊行予定
10	牧山遺跡	調査中	作業中
11	田原迫ノ上遺跡	調査中	縄文時代前期以降 平成 27 年度刊行予定
12	立小野堀遺跡	調査中	作業中
13	十三塚遺跡 （鹿屋串良ＪＣＴ．）	終了	埋文調査報告書（164） 平成 23 年度刊行
14	石綜遺跡 （鹿屋串良ＪＣＴ．）	終了	

１　平良上Ｃ遺跡

大崎町井俣に所在し，田原川と菱田川に挟まれた標高約 40 ｍのシラス台地の最西端に位置する。平成 26 年度の調査の結果，縄文時代早期の竪穴住居跡・連穴土坑・集石・土坑が検出されている。遺物は，縄文時代早期の土器・石鏃・石匙・打製石斧・磨製石斧等が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。

２　宮脇遺跡

大崎町井俣に所在し，標高約 50 ｍのシラス台地の中央部に位置している。試掘調査の結果，縄文時代早期の遺物包含層が確認されている。平成 27 年度に本調査を行っている。

３　堂園堀遺跡

大崎町井俣に所在し，標高約 50 ｍのシラス台地の中央部に位置している。東九州自動車道建設に伴う確認調査では，遺物包含層・遺構は確認されていない。

４　荒園遺跡

大崎町仮宿に所在し，標高約 50 ｍのシラス台地の縁辺部に位置している。平成 24 ～ 26 年度の調査の結果，縄文時代早期の集石，弥生時代中期の竪穴住居跡，古墳時代の竪穴住居跡，中世の溝状遺構などが検出されている。また，時期不明であるが，片薬研掘りの堀が検出されている。この埋土中に厚さ約 10 ㎝の火山灰が堆積しており，分析の結果，紫ゴラ（Ａ．Ｄ 874 年）に比定されている。遺物は，旧石器時代の細石刃核（畦原型）・細石刃・黒曜石と水晶の剥片やチップ，縄文時代早期の土器・石器，弥生時代中期の土器・石器，古墳時代の土器，中世の東播系須恵器・備前焼が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。

５　永吉天神段遺跡

大崎町永吉に所在し，標高約 30 ｍの河岸段丘と標高約 50 ｍのシラス台地の縁辺部に位置している。平成 24 ～ 26 年度の調査の結果，遺構は，旧石器時代の石器製作跡・礫群，縄文時代早期の集石・埋設土器，縄文時代晩期の竪穴住居跡，落とし穴・土坑，弥生時代中期の竪穴住居跡・円形周溝墓を中心とする土坑墓群・土坑・掘立柱建物跡，古墳時代の竪穴住居跡・土坑・埋設土器，古代の掘立柱建物跡・土坑，中世の掘立柱建物跡・土坑墓・大型土坑・土坑・溝状遺構，近世の土坑墓が検出されている。遺物は，旧石器時代の尖頭器・ナイフ形石器等，縄文時代早・前期の土器・石鏃・打製石斧・磨石・敲石・石皿等，縄文時代晩期の土器・石器，弥生時代中期の土器・鉄鏃・磨製石鏃・打製石斧・磨製石斧等，古墳時代の土器，古代の須恵器・土師器等，中世の土師器・白磁・青磁・東播系須恵器・瓦質土器・備前焼・常滑焼・石塔・滑石製石鍋等，近世の陶磁器・寛永通宝等が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。

６　京の塚遺跡

大崎町持留に所在し，串良川左岸に形成された標高約 90 ～ 100 ｍのシラス台地上に位置する。平成 25・26 年度の調査の結果，遺構は，縄文時代早期の集石，縄文時代前期末から中期前半の土坑約 150 基，近世～近代の溝状遺構・古道が検出されている。遺物は，縄文時代早期の土器・石器，縄文時代前期の曽畑式土器，縄文時代前期末から中期前半の在地系土器の深浦式土器・近畿地方の大歳山式土器や鷹島式土器・瀬戸内地方の船元式土器，石鏃・石匙・磨石・敲石・石皿・有溝砥石等，縄文時代後期から晩期の土器・石器が出土している。特に，縄文時代前期末から中期前半の土坑群は南九州でも極めて希少な例であり，在地系土器に他地域の土器が共伴していることから，広域な交流があったことを示す良好な資料である。

7　小牧遺跡

鹿屋市串良町細山田に所在し，串良川左岸にある標高60 mのシラス台地に位置する。平成25年度の確認調査の結果，縄文時代早期・後晩期・古墳時代の遺物包含層が確認されている。平成27年度に本調査を行っている。

8　川久保遺跡

鹿屋市串良町細山田に所在し，串良川右岸にある標高約30 ～ 40 mの縁辺部に位置している。平成26年度の調査の結果，縄文時代前期の集石，弥生時代の竪穴住居跡，古墳時代の竪穴住居跡・鍛冶関連遺構，古代の掘立柱建物跡，中世の掘立柱建物跡・竪穴建物跡・土坑墓等が検出されている。遺物は，縄文時代前期の土器･石器，縄文時代晩期の土器・石器・垂飾品，弥生時代の土器，古墳時代の成川式土器・勾玉・垂飾品・管玉・金床石・鞴の羽口・鉄滓・鍛造剥片，古代の須恵器・土師器，中世の土師器・白磁・青磁・瓦器埦（楠葉型）・東播系須恵器，近世の薩摩焼・寛永通宝が出土している。古墳時代の鍛冶関連遺構やそれに伴う専用の鞴の羽口が発見される例は南九州では他になく，当時の鉄製品の生産過程を明らかにする良好な資料である。平成27年度も本調査中である。

9　町田堀遺跡

鹿屋市串良町細山田に所在し，標高約90 mのシラス台地である笠野原台地の北東端に位置する。平成25・26年度の調査の結果，遺構は，縄文時代早期の集石，縄文時代後期の竪穴住居跡・埋設土器・落とし穴等，弥生時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑，古墳時代の地下式横穴墓（円形周溝及び弧状遺構含む）・溝状遺構が検出されている。地下式横穴墓からは、副葬品とともに人骨も発見されている。遺物は,縄文時代早期の土器･石器，縄文時代後期の中岳Ⅱ式土器･垂飾品･丸玉･勾玉･小玉･打製石斧･磨製石斧･磨石･石皿，弥生時代の土器･石器，古墳時代の土師器・鉄器（剣・鏃・大型異形鏃）・貝釧･赤色顔料,古代の土師器･墨書土器が出土している。なお，88基にもなる古墳時代の地下式横穴墓の検出は，立小野堀遺跡や，古墳時代の集落跡が検出されている川久保遺跡が近くにあり，その関係性が検討される良好な資料である。

10　牧山遺跡

鹿屋市串良町細山田に所在し，標高約120 mのシラス台地である笠野原台地の北縁辺部に位置している。平成25･26年度の調査の結果，遺構は，縄文時代早期の集石･石器製作跡・石器集中部，縄文時代前期の埋設土器（轟式土器），縄文時代後期の土坑・土器集中部，縄文時代晩期の土坑・柱穴，弥生時代の土坑・柱穴，中世の古道跡が検出されている。遺物は，旧石器時代の剥片，縄文時代早期の土器・石器，縄文時代後期の土器・石器，縄文時代晩期の土器・石器，弥生時代の土器・石器，中世の青磁が出土している。

11　田原迫ノ上遺跡

鹿屋市串良町細山田に所在し，標高約120 mのシラス台地である笠野原台地の北縁辺部に位置している。平成22 ～ 26年度の調査の結果，縄文時代早期の竪穴住居跡･連穴土坑・落とし穴・土坑・集石・石器製作跡，縄文時代後期の礫集積，弥生時代中期の竪穴住居跡・大型建物跡・掘立柱建物跡・円形周溝・方形周溝等，古墳時代以降と考えられる溝状遺構・畝状遺構群，近世の溝状遺構が検出されている。遺物は，縄文時代早期の土器･石器，縄文時代後期の土器・石器，縄文時代晩期の土器，弥生時代中期の土器・石器・土製勾玉・鉄器片等が出土している。縄文時代早期と弥生時代中期を中心に，多種多様な遺構・遺物が発見され，笠野原台地上における遺跡内外の生活を知る上で貴重な資料である。

12　立小野堀遺跡

鹿屋市串良町細山田に所在し，標高約125 mのシラス台地である笠野原台地の北縁辺部に位置している。平成22 ～ 24年度・平成26年度の調査の結果，遺構は，古墳時代の地下式横穴墓（190基）・土坑墓（５基）・溝状遺構が検出されている。地下式横穴墓からは副葬品とともに人骨も発見されている。遺物は，縄文時代後期の市来式土器，古墳時代の土師器･初期須恵器･鉄器（剣･刀･刀子・鏃・蛇行剣）・青銅製鈴・赤色顔料等が出土している。190基もの多くの地下式横穴墓が調査された例はなく，町田堀遺跡を含め，古墳時代における南九州の墓制を考える上で大変重要な遺跡である。

13　十三塚遺跡

鹿屋市串良町細山田に所在し，標高約140 mの台地上に立地している。調査の結果，弥生時代中期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・古道跡，近世以降の溝状遺構等が検出された。遺物は縄文時代早期･後期･晩期の土器，弥生時代中期の土器・土製勾玉・石器・鉄製品，近世の古銭等が出土した。弥生時代中期の竪穴住居跡は，同遺跡に比較的近い鹿屋市王子町の王子遺跡や鹿屋市串良町の田原迫ノ上遺跡でも確認されており，当時の南九州の集落形成の在り方を解明する上で貴重な資料である。

14　石綴遺跡

鹿屋市串良町細山田に所在し，標高約140 mの台地の縁辺部に立地している。また，十三塚遺跡とは隣接しており，十三塚遺跡とともに鹿屋串良ＪＣＴ．地内に立地している。調査の結果，縄文時代早期の集石遺構・土坑が検出された。遺物は縄文時代早期と弥生時代の土器や石器が出土した。

第３図　東九州自動車道建設に伴う遺跡（1：50,000）

第３章　調査の方法と層序

第１節　調査の方法

本節では，発掘調査の方法，遺構の認定と検出方法，整理作業・報告書作成作業の方法について記す。

１　発掘調査の方法

永吉天神段遺跡第１地点の発掘調査は，平成 23 年度に確認調査，平成 24 年度に本調査を実施した。調査対象表面積は 984 ㎡，調査対象延面積は 2,262 ㎡である。

本遺跡の調査区割り（グリッド）は，平成 23 年度の確認調査時において工事用基準杭「ＳＴＡ 113」と「ＳＴＡ 105」の延長線を中心に，10 ｍ間隔で西から東に向かって１・２・３…，北から南に向かってＡ・Ｂ・Ｃ…と設定した。

このグリッドを基にして，Ｍ－１区の左下を原点（０，０）、縦軸をＸ，横軸をＹとし，遺構・遺物の測量作業を行うこととした。また，トータルステーションで測量作業を行う場合，公共座標に基づき基準点を設定した。

発掘調査は，基本的に重機で表土を除去した後，確認調査の結果に基づき，遺物包含層については人力で掘り下げを行った。無遺物層，火山灰の一次堆積層は，一部重機を用いて慎重に掘り下げた。遺構は，移植ごて等の遺構掘削に適した道具を用いて慎重に調査し，実測，写真撮影等を行い，遺物は，トータルステーションを使用して取り上げを行った。

各年度の発掘調査の方法及び概要（詳細は，第１章に掲載）は，以下のとおりである。

平成 23 年度

確認調査は荒園遺跡と同時に実施し，その結果，永吉天神段遺跡の調査延面積は 87,588 ㎡となった。

平成 23 年７月１日から９月 28 日までの約３か月間，調査対象地域にグリッドに沿ってトレンチを 31 箇所設定し，調査区全体の包含層の有無について調査した。トレンチの形状は１×８ｍの長方形を基本とし，必要に応じて拡張した。表面を覆う雑草の除去・雑木の伐採を人力で行った後，重機及び人力により徐々に包含層を掘り下げた。遺物・遺構を発見した場合には、重機による掘り下げを即時中止し，山鍬・鋤簾等による人力掘削で遺構・遺物の検出を行った。検出した遺構については，写真撮影，実測を行った。出土遺物はトータルステーションで取り上げた後，掘り下げを続けた。いくつかのトレンチでは，遺構に影響のない部分について，安全対策を施しながら下層確認トレンチを設定し，Ⅺ層（シラス）上面まで調査を実施した。しかしながらⅦ層（薩摩火山灰）より下位の旧石器時代相当層については，上層の包含層が厚く十分な調査面積を確保することができなかったため，本調査にて範囲を確定させることとなった。

平成 24 年度

隣接する第２地点と並行して調査を実施した。調査期間は平成 24 年７月２日～平成 25 年１月 28 日で，調査延面積は第１地点が 2,262 ㎡・第２地点が 4,449 ㎡であった。第１地点の調査区は，本遺跡の東側に位置しており，標高約 35 ｍに位置するＥ～Ｉ－ 57 ～ 62 区の河岸段丘の平坦面であった。Ⅱａ～Ⅴａ層上面まで調査を実施した。Ｆ～Ｈ－ 57 ～ 59 区にトレンチを６本設定し，約 40 ㎡で縄文時代早期の下層確認調査を行い，調査終了後，埋め戻しを行った。

調査は重機で表土を除去した後，基本的には山鍬・鋤簾等による人力にて掘り下げを行った。縄文時代晩期が主体になることから，当初Ⅳ層上面の地形測量を行う予定であったが，古代の遺構・遺物が全面に確認されたため，まず，Ⅲ層上面での地形測量を行った。また，鬼界カルデラに伴う液状化現象（噴砂）の見られたトレンチでは，土層断面の記録保存調査を行った。

遺物包含層が残存している場合は，小破片はグリッドごとに一括して取り上げ，それ以外の遺物は，必要に応じて写真撮影を実施した後にトータルステーションを用いて取り上げを行った。

なお，遺構実測や遺物取り上げは，調査担当者の指揮・監督の下，発掘調査支援業務委託業者（株）パスコの測量士及び調査員と発掘作業員で実施した。

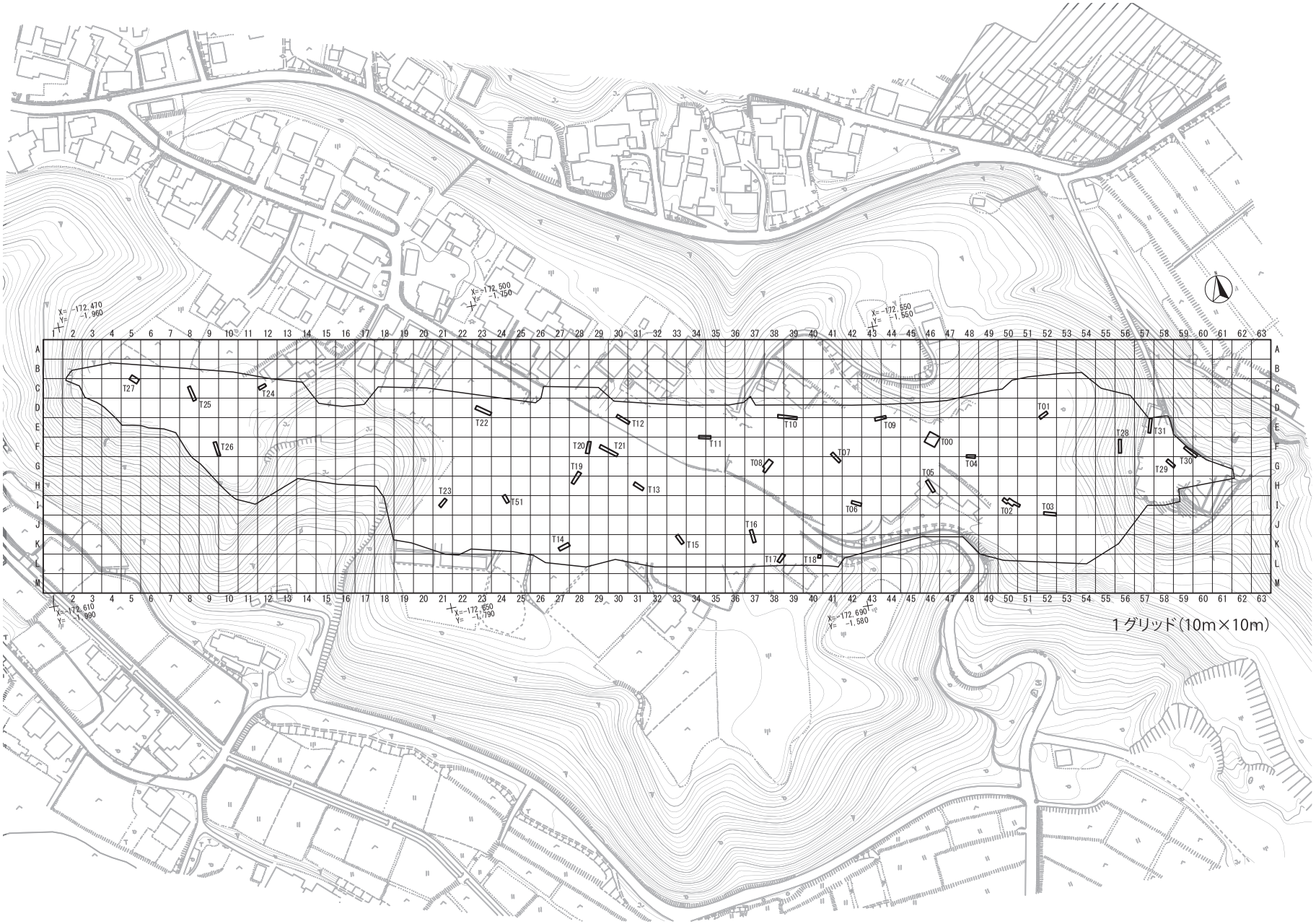
２　遺構の認定と検出方法

検出された遺構の認定と検出方法については，以下のとおりである。

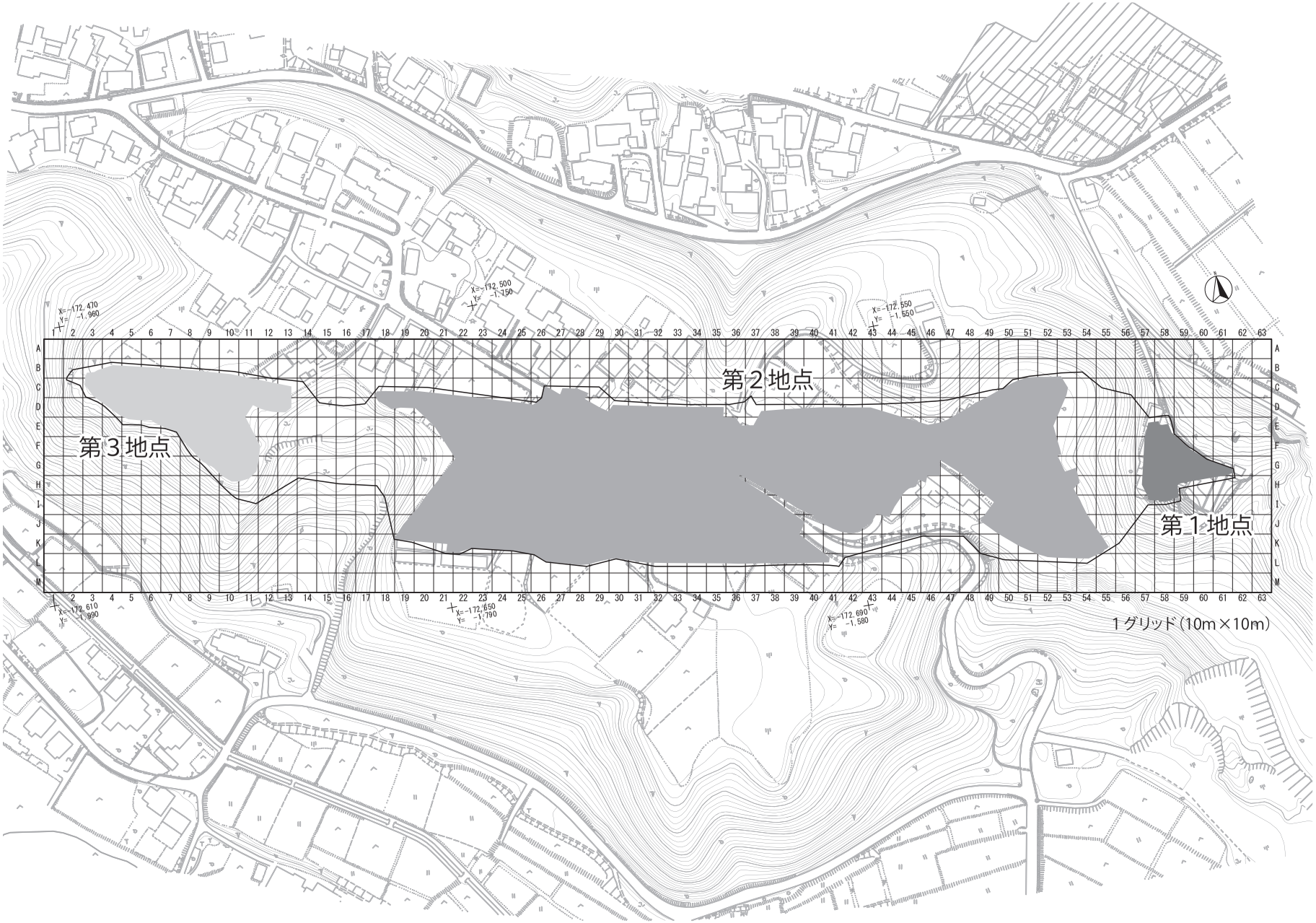
（１）遺構の認定

検出面，埋土状況，規模等を総合的に判断し，調査担当者で検討したうえで遺構の認定を行った。本編掲載の主な遺構の認定は以下のとおりである。

竪穴住居跡は，埋土や形状，床面の有無，遺物の出土など総合的に判断し，検出された順にＳＩの略記号を用いた。溝状遺構は，底面に硬化面を有するもの，硬化面はないが溝状に明らかな掘り込みをもつものを，検出された順にＳＤの略記号を用いた。土坑及びピットについては，埋土や形状，床面の有無，遺物の出土など総合的に判断し，検出した順に土坑はＳＫ・ピットはＰの略記号を用いた。検出面や埋土の状況で大まかな時期の判断はできたが，埋土の色調の違いや時期の違う遺物が混在するものについては，詳細な時期判定ができなかった。また，掘立柱建物跡の時期認定は，埋土の状況や出土遺物の状況を総合的に検討し，検出した順にＳＢの略記号を用いた。



第４図　確認調査トレンチ位置図


第3地点
第2地点
第1地点
X=-172,470
Y=-1,960
X=-172,500
Y=-1,750
X=-172,550
Y=-1,550
X=-172,610
Y=-1,990
X=-172,650
Y=-1,790
X=-172,690
Y=-1,580
1グリッド（10m×10m）

第５図　調査範囲図

（２）遺構の検出方法

遺構の検出及び調査方法として，当時の掘り込み面に限りなく近い位置での検出を目指して調査を進めたが，判別のしやすい地層上面での検出が多くなったのは否めない。特に，黒色土に掘り込まれた遺構埋土が黒色系になることが多い古代の遺構については，掘り過ぎるものもあり「検出面からの深さ」にばらつきがあったので，調査のあり方を再検討し，今後の調査に生かしたい。

また，住宅や雑木林があった箇所の調査では，撹乱を受けている箇所があり，遺構の検出をはじめ調査が難しかった。この場合，ミニトレンチの設定，撹乱部分の埋土除去等最善の調査方法を調査担当で検討し，遺構の推定ラインも含め残存部の記録保存に努めた。

３　整理作業・報告書作成作業の方法及び内容

平成 25 年度の発掘調査支援業務において，発掘調査と並行して第１地点の遺物の水洗い・注記を行った。

水洗作業の方法は，土器や石器の一部に関しては，ブラシを用いたが，黒曜石や剥片石器は超音波洗浄機を用いて進めた。

注記は，水洗い終了後順次行った。注記を行う際，薬品を使用するため換気に注意しながら手作業で進めた。これまでに刊行された遺跡の記号と重複しないようにデータを管理している南の縄文調査室に確認をとり，遺跡名を表す記号を「ＮＴＪ」とした。その後に出土区，層，取り上げ番号等が記してある。

平成 27 年度の整理作業及び報告書作成作業支援業務で分類・接合から作業を行った。遺構内遺物と包含層遺物に分けた後，包含層出土土器については，土器の胎土や文様等で時期ごとに分別し，接合する方法をとった。石器については，剥片石器と礫石器に分けた後，器種及び石材別に分類した。作業の効率化を図るため，整理作業及び報告書作成作業支援業務委託先である（株）パスコで出土土器・石器の実測を行った。

遺物出土分布図は，トータルステーションで取り上げたデータを統合し，図化ソフトを使用して作成した。

遺構の認定・分類は，実測図や写真等を用いて，発掘調査担当者と連携を取りながら再検討し確定した。

土層断面や遺構の原図データの点検・修正後，デジタルトレースを行った。

原稿を執筆し，本報告書作成作業・印刷・製本を行った。同時に，第２地点の一部についても分類・接合・実測などの整理作業を行った。

第２節　層序

永吉天神段遺跡第１地点は，住宅地であったことや長年の耕作の影響等で，一部に削平・盛土・撹乱等の影響が見られたが，表土が厚くⅡ層以下の残存状況は比較的良好であった。包含層や遺構や遺物の年代を把握する手掛かりの１つとなる火山灰等の詳細については，以下のとおりである。

Ⅰ層：表土（造成土及び旧表土）である。２層に分かれる所もある。

Ⅱａ層：暗褐色砂質土である。

Ⅱｂ層:黒色砂質土で,古代･中世の遺物包含層である。

Ⅲ層：にぶい黄褐色砂質土で，縄文時代晩期～古墳時代の遺物包含層である。

Ⅳａ層：褐色砂質土で，縄文時代晩期～弥生時代前期の遺物包含層である。

Ⅳｂ層：淡黄褐色砂質土で，池田火山灰（約 6,300 年前の池田カルデラ起源の噴出物）を含み，縄文時代前期の遺物包含層である。

Ⅴａ層：橙色土で，アカホヤ火山灰（約 7,300 年前の鬼界カルデラ起源の噴出物）の堆積層。無遺物層である。

Ⅴｂ層：灰白色砂質土で，噴砂に伴う堆積層（鬼界カルデラ火砕流噴火時の地震による液状化現象）無遺物層である。

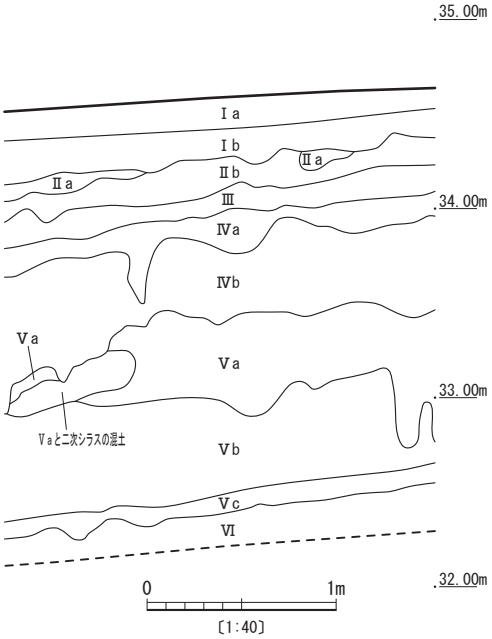
Ⅴｃ層：にぶい黄橙色土で，アカホヤ一次降下軽石（幸屋降下軽石）無遺物層である。

Ⅵ層：灰黄褐色粘質土である。

第３表　基本土層

層位	色　調　等	平均厚
Ⅰ層	表土	100 ㎝
Ⅱａ層	暗褐色砂質土	30 ㎝
Ⅱｂ層	黒色砂質土	30 ㎝
Ⅲ層	にぶい黄褐色砂質土	10 ㎝
Ⅳａ層	褐色砂質土	20 ㎝
Ⅳｂ層	淡黄褐色砂質土（池田火山灰含む）	30 ㎝
Ⅴａ層	橙色土（アカホヤ火山灰）	30 ㎝
Ⅴｂ層	灰白色砂質土（噴砂に伴う堆積層）	30 ㎝
Ⅴｃ層	にぶい黄橙色土 （アカホヤ火山灰一次降下軽石：幸屋降下軽石）	5 ㎝
Ⅵ層	灰黄褐色粘質土	15 ㎝

※火山灰の年代については，町田洋　新井房夫著東京大学出版会　2003 『新編火山灰アトラスー日本列島とその周辺－』(p108 ～ 110）から引用した。なお，年代は放射性炭素年代測定法で算出され，暦年較正した年代である。



第６図　基本土層図

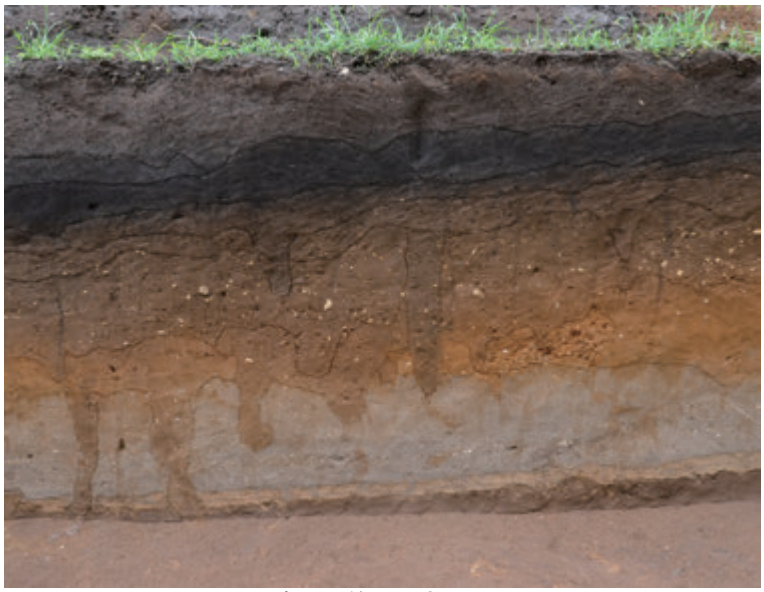
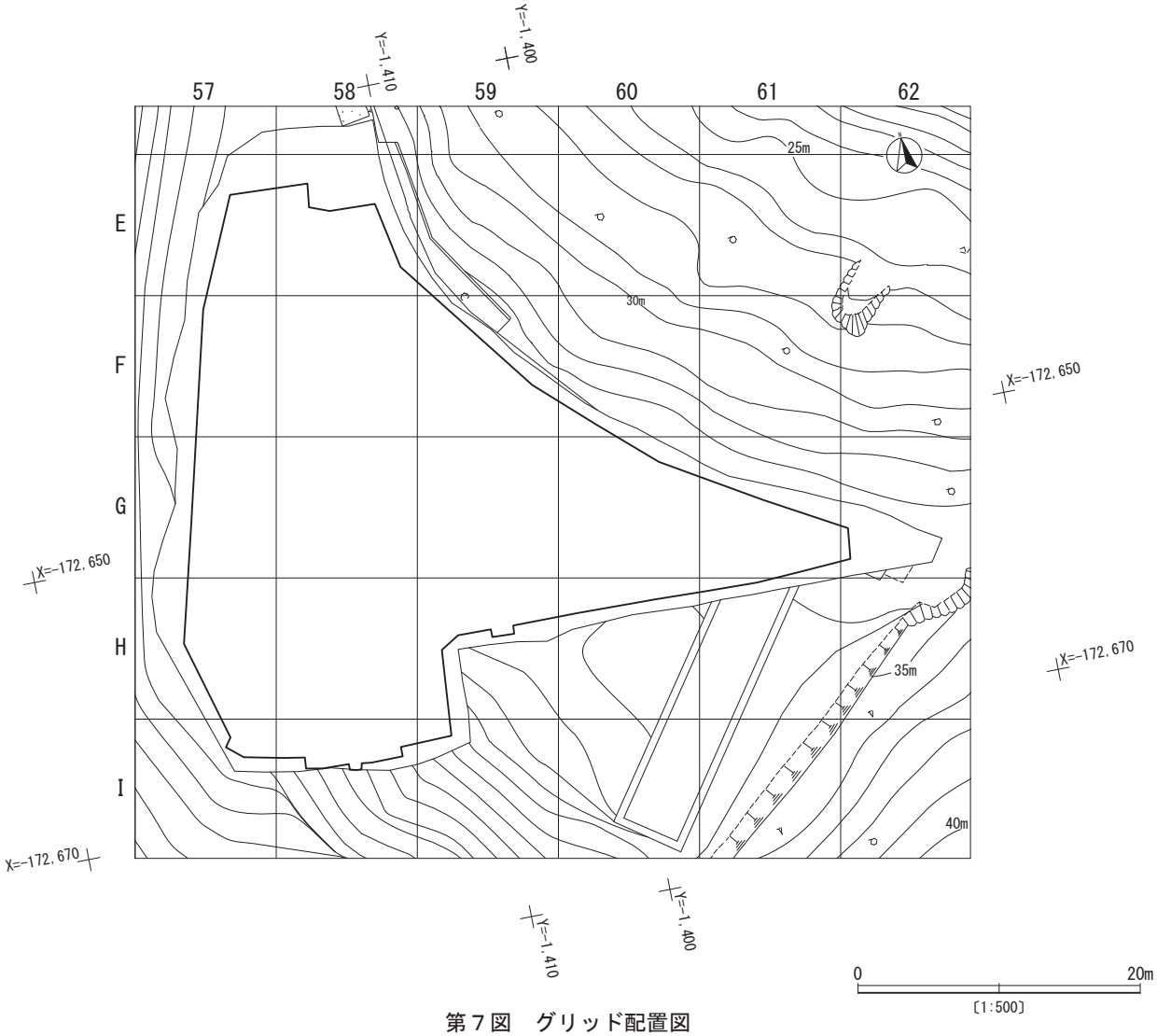
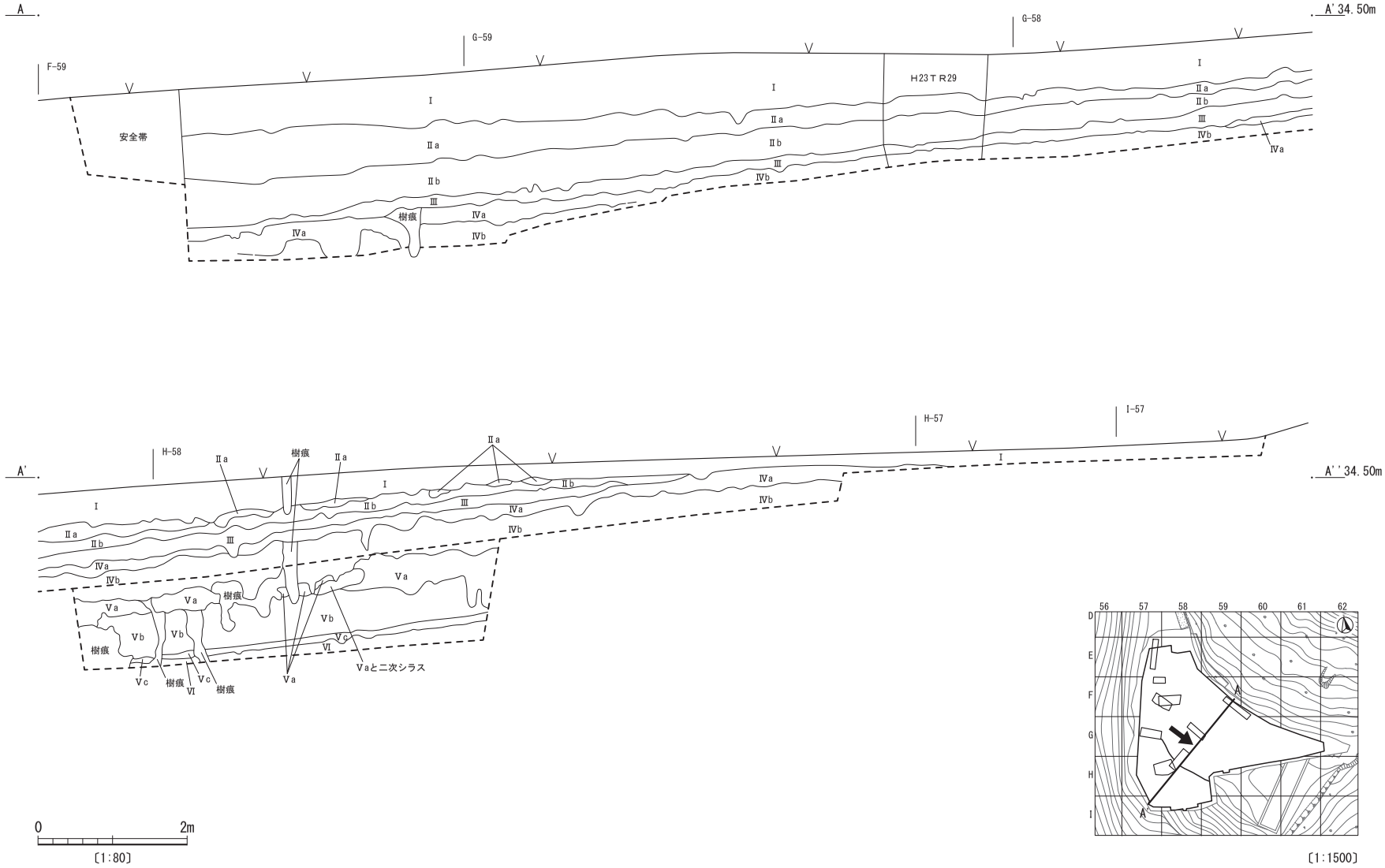


写真３　第１地点の土層



第７図　グリッド配置図


A
A'34.50m
F-59
G-59
G-58
H23TR29
安全帯
樹痕
A'
H-58
H-57
I-57
A''34.50m
Va
Vb
Vc
VI
Vaと二次シラス
0
2m
〔1:80〕
56
57
58
59
60
61
62
D
E
F
G
H
I
〔1:1500〕

第８図　土層断面図

第４章　調査の成果

第１節　縄文時代早期の調査

１　調査の概要

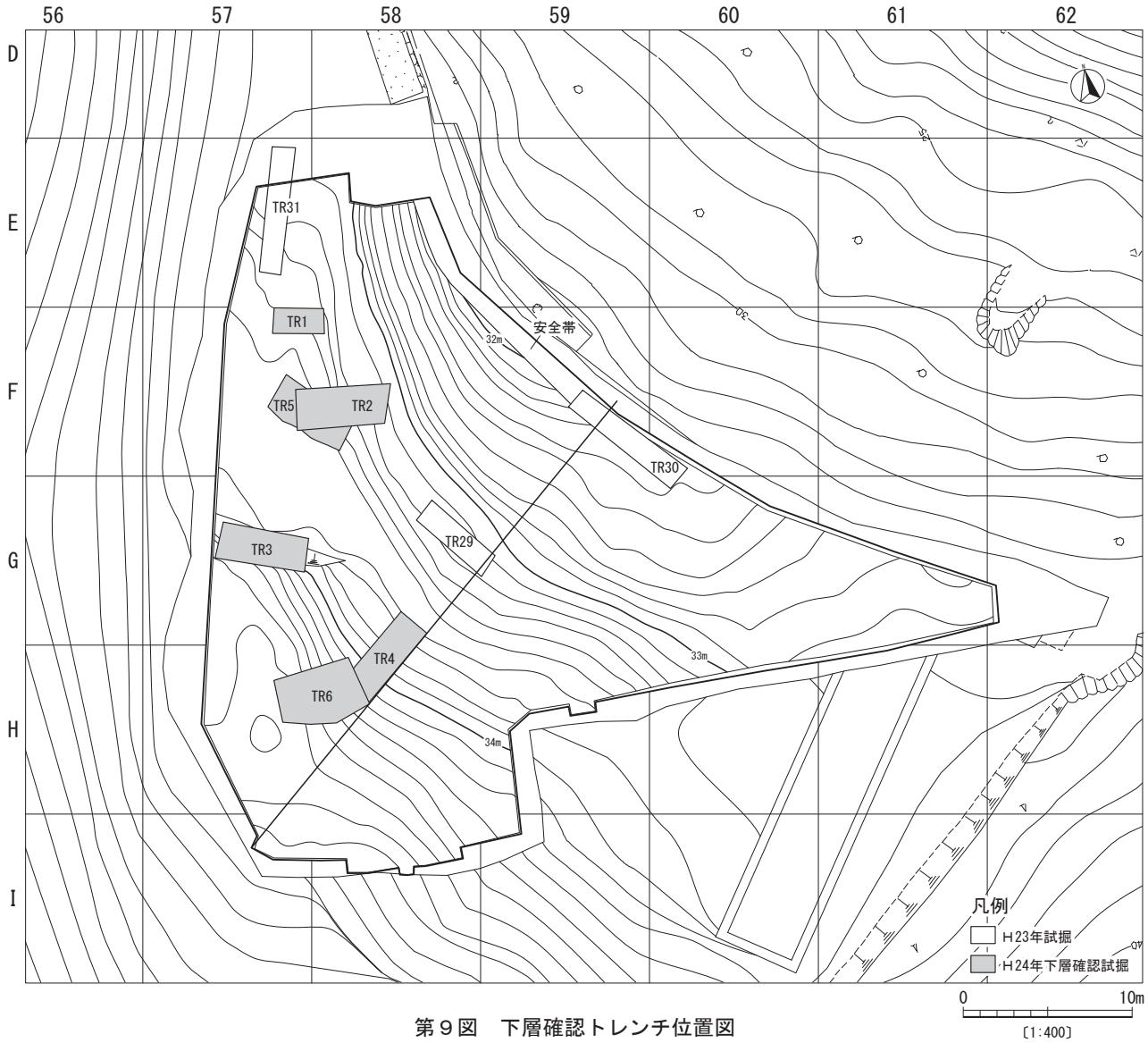
重機で表土を剥いだ後，Ｖ層（アカホヤ火山灰）上面まで人力による掘り下げを行い，中世・古代から縄文時代前期までの調査を行った。調査の過程で，調査区西側で溝状の砂層が南北に連なって検出された。縄文時代前期までの調査終了後，下層確認とともに，調査区西側で確認された砂脈の性格を追求するため，６本のトレンチを設定した。トレンチは，Ｖ層（アカホヤ火山灰）を重機で剥いだ後，Ⅶ層上面まで人力により掘り下げるという方法で調査を行った。

下層確認の結果，縄文時代早期の遺構・遺物は発見できなかった。ただ，トレンチ（ＴＲ）１・２・３・５の断面で砂質土層の砂脈と地層が観察されたため，人力にて 11・12 層まで掘り下げを継続し，砂脈を断面と平面で観察した。なお、層のアルファベットは基本層位，数字は第 10・11 図の層位である。

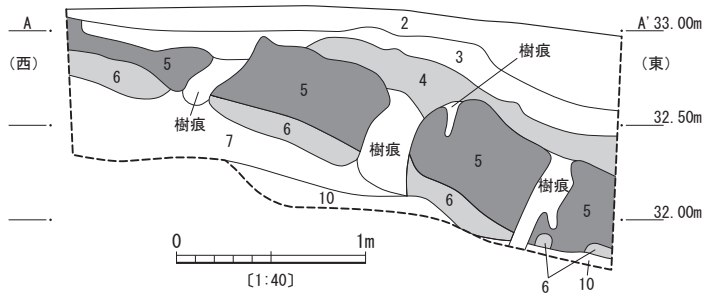
２　液状化現象（噴砂跡）

第１地点は，その北側を流れる持留川の古い河岸段丘の上にあり，約２万 9,000 年前に姶良カルデラから噴出した入戸火砕流とその二次堆積層の上にあると考えられる。持留川との比高差は約 20 ｍである。第１地点の地形は，西側が高く，東側が低くなっており，西から東へ緩やかに傾斜している。

４本のトレンチでは，概ねＶｃ層（幸屋降下軽石）～ 11 層のローム層を液状化に伴う噴砂と判断される幅約 15 ㎝の砂脈が貫き，基本層位Ｖａ層（アカホヤ火山灰）と基本層位Ｖｃ層（幸屋降下軽石）の間に噴砂の層堆積（基本層位Ｖｂ層：シラス）が堆積していた。なお，大隅半島南部における約 7,300 年前の鬼界カルデラ噴出物の層序は，下位より幸屋降下軽石，幸屋火砕流，降下火山灰（アカホヤ火山灰）である。本遺跡では，幸屋火砕流堆積物は確認できなかった。４本のトレンチのうち，３本のトレンチ（ＴＲ１・２・５）を図化した。

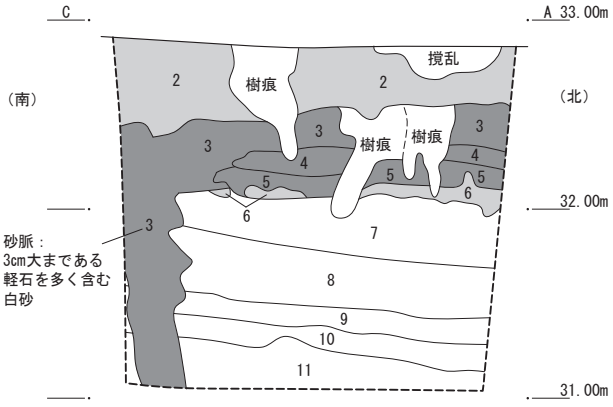


第９図　下層確認トレンチ位置図



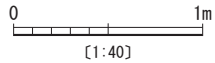
トレンチ１（北側）

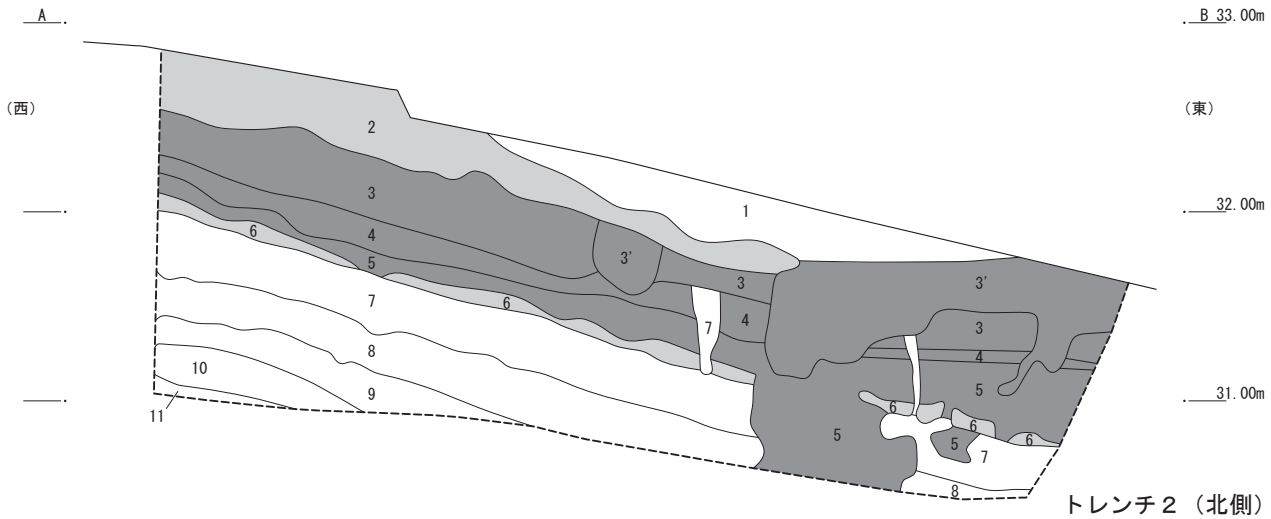
1　表土　（Ⅰ層）
2　褐色砂質土　（Ⅳa層該当層）
3　淡黄褐色砂質土　（池田火山灰含む・Ⅳb層該当層）
4　橙色土　（アカホヤ火山灰・Ⅴa層該当層）
5　灰白色砂質土　噴砂（シラス主体・Ⅴb層該当層）
6　にぶい黄橙色土　幸屋降下軽石（Ⅴc層該当層）
7　灰黄褐色粘質土　（Ⅵ層該当層）
8　灰黄褐色粘質土　7より円形ブロック少ない
9　灰黄褐色粘質土　Ⅵ層より色調暗く、ブロック含まない
10　黒褐色粘質土
11　灰褐色粘質土　薩摩火山灰含む
12　褐色粘質土　灰色不定形ブロック含む。粘性なし



トレンチ２（西側）

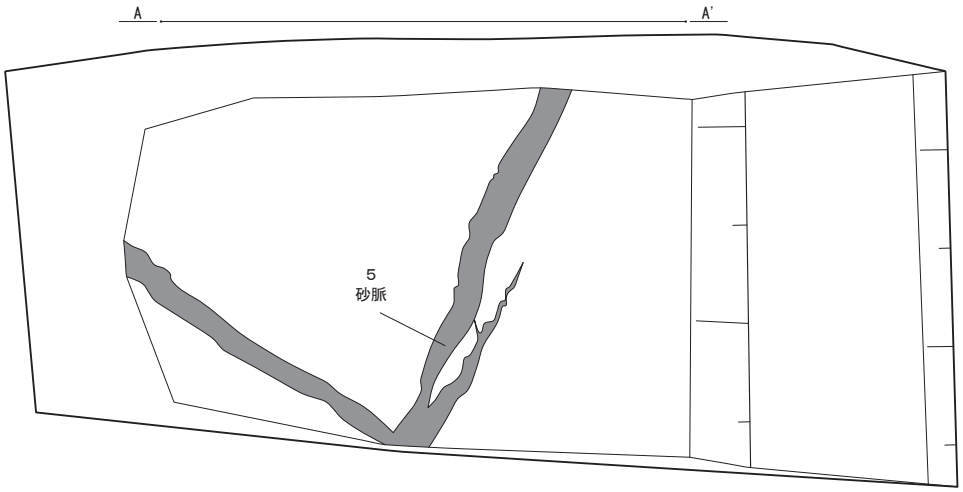
1　暗茶褐色土　2cm大までの軽石を含む（Ⅳb層該当層）
2　明茶褐色砂質土　アカホヤ火山灰・細かな砂質層に2cm大程度の軽石を含む（Ⅴa層該当層）
3　白色砂質土　細かな砂質層に2～4cm大のシラス・軽石を含む，上部にはアカホヤのシミあり
3'　にごった明茶褐色細砂質土
4　白灰色砂質土　粗い砂質層に5mm大の軽石を多く含む
5　灰褐色砂質土　粗い砂質層に軽石粒を多く含む
※ 3～5は，噴砂・Ⅴb層該当層
6　にぶい黄褐色土　幸屋降下軽石（Ⅴc層該当層）
7　茶褐色砂質土　（Ⅵ層該当層）
8　暗褐色砂質土
9　黒みがかった暗茶褐色土
10　暗茶褐色土
11　黒褐色土　粘性あり。



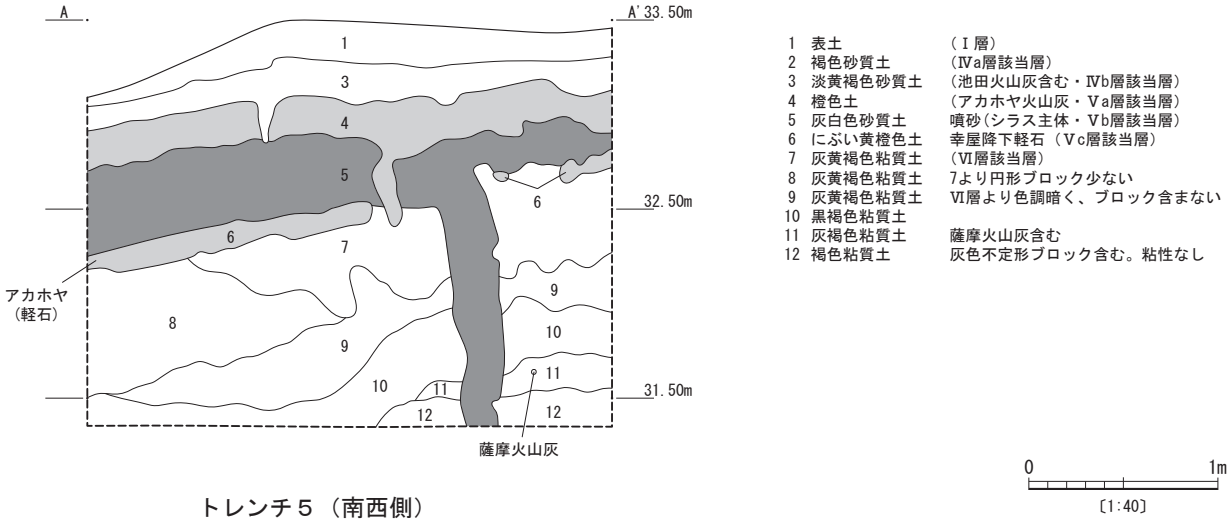


トレンチ２（北側）

第 10 図　縄文時代早期の液状化現象（１）



トレンチ５（平面図）

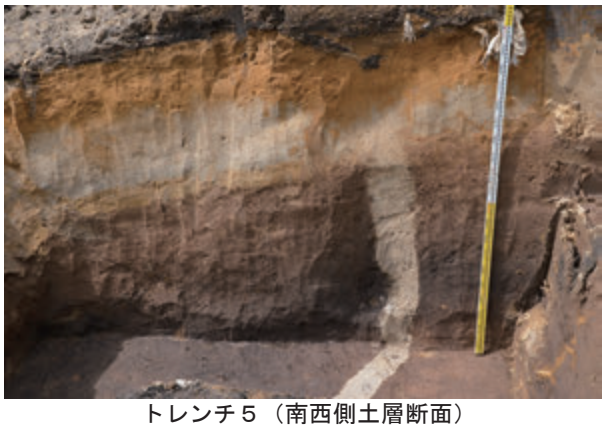


1	表土	（Ⅰ層）
2	褐色砂質土	（Ⅳa層該当層）
3	淡黄褐色砂質土	（池田火山灰含む・Ⅳb層該当層）
4	橙色土	（アカホヤ火山灰・Ⅴa層該当層）
5	灰白色砂質土	噴砂（シラス主体・Ⅴb層該当層）
6	にぶい黄橙色土	幸屋降下軽石（Ⅴc層該当層）
7	灰黄褐色粘質土	（Ⅵ層該当層）
8	灰黄褐色粘質土	7より円形ブロック少ない
9	灰黄褐色粘質土	Ⅵ層より色調暗く、ブロック含まない
10	黒褐色粘質土	
11	灰褐色粘質土	薩摩火山灰含む
12	褐色粘質土	灰色不定形ブロック含む。粘性なし

トレンチ５（南西側）

第 11 図　縄文時代早期の液状化現象（２）

トレンチ５（平面）



トレンチ５（南西側土層断面）

写真４　縄文時代早期の液状化現象

（１）　トレンチ１（ＴＲ１：第 10 図）

Ｆ -57・58 区に設定した 2.8 × 1.6 ｍのトレンチで，液状化現象による５層（噴砂層：基本層位Ｖｂ層）が見られた。地形に直交した北側断面は，層全体は西から東へ向かって下降傾斜し，各層とも東側が厚く堆積している。

４層は基本層位Ｖａ層（アカホヤ火山灰）に該当し，橙色を呈した粗粒ガラス質細砂粒の火山灰が厚さ約 20 ㎝程度あり，西側には堆積が見られなかった。５層は基本層位Ｖｂ層（噴砂層）に該当し，主として細粒の軽石及び粗粒のガラス質の火山灰からなり，径が５㎝程度の白色・明灰色の軽石を含んでいる。西側は 16 ㎝程度，東側は厚いところで 60 ㎝程度の層をなしている。６層は基本層位Ｖｃ層（幸屋降下軽石）に該当し，径 0.5 ㎜程度の淡黄色軽石からなる厚さ約５㎝（厚い部分では約 15㎝）の降下軽石層であり，上部には，径１㎝程度の火山豆石が多く含まれている。下層から吹き上がった砂脈痕は見られない。

（２）トレンチ２（ＴＲ２：第 10 図）

Ｆ -57・58 区に設定した 5.0 × 2.0 ｍのトレンチで 11 層上面で噴砂の砂脈痕が見られ，西側・北側・南側断面に砂脈から噴き上がった３～５層（噴砂層：基本層位Ｖｂ層）が見られた。噴砂層が明瞭に確認できた西側と北側断面を図化した。

西側土層断面は，地形に並行しており，高低差がほとんどないため，各層とも水平堆積をしている。砂脈は，幅約 28 ㎝・検出した高さ 1.35 ｍ・３㎝大の軽石を多く含む白色砂質土で，３つに分層でき，噴砂層を形成する。２層は基本層位Ｖａ層（アカホヤ火山灰）に該当し，厚さ約 40 ㎝で細かな砂質土に２㎝大の軽石を含んでいる。３～５層は基本層位のＶｂ層（噴砂層）に該当し，色調や含まれる軽石の大きさから，３つに細分した。３層は厚さ 19 ～ 38 ㎝　で，白色の砂質土に２～４㎝大の軽石を含み，上部には２層（アカホヤ火山灰）のしみ込みが見られる。４層は厚さ約 10 ㎝で，白色の粗い砂質土に５㎜大の軽石を含む。５層は厚さ約 13 ㎝の灰褐色の粗い砂質土で，細かい軽石を含む。６層は基本層位Ｖｃ層（幸屋降下軽石）に該当し，厚さ約８㎝で，にぶい黄褐色土である。

北側土層断面は，地形に直交しており，西から東へ向かってゆるやかに下降傾斜して，東側は各層とも厚く堆積している。

砂脈層は，幅約 70 ㎝・高さ 60 ㎝で，粗い砂質土で細かい軽石を含む５層からなる。噴砂層は４つに分層でき，層位は西側断面とほぼ同じであるが，３層途中及び東側に３’層がある。３’層は厚さ約 40 ㎝で，にごった明茶褐色の細かい砂質土で，色調以外は３層に類似する。

噴砂層を３～５層に細分しているが，下層はシラスであり，液状化現象の強弱や水性作用により，色調等の変化があったと考えられる。

（３）　トレンチ５（ＴＲ５：第 11 図）

トレンチ２で見られた砂脈を下層で確認するため，地形に並行するように拡張して調査を行った。深さが２ｍ近くとなったため，安全を考慮して 12 層途中で調査を終えた。

平面では，砂脈は，トレンチ東側の 12 層中で２つに分かれ，ほぼ直線状に東西及び南北方向に，砂脈が走っている。幅は約８～ 20 ㎝で，灰白色の砂質土で，基本層位のＶｂ層に該当する。

東西の砂脈は，南西側断面に続き，幅 28 ㎝・高さ約 1.4 ｍで，厚さ 40 ㎝の５層（噴砂層）を形成している。

なお，砂脈は下層のシラスまで連続していると判断される。また，調査中にＧ -59 区付近で，数ｍ下には高さ２ｍ以上ある巨大な空洞が南北方向のトンネル状に連続している状況が見られた。陥没が広がる可能性があったため，詳細を確認できないまま埋め戻したが，この空洞部のシラスが噴火時に表土上に噴き上がった可能性がある。また，台地上（第２地点）では，縄文時代早期の該当層である上面に密な亀裂痕が見られた。鬼界カルデラ噴火時に地表面に亀裂が生じるほどの大地震が生じた痕跡と考えることもできる。

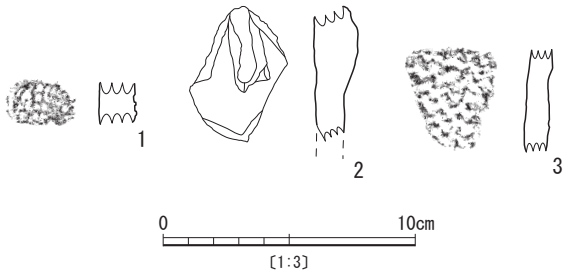
第５章第２節に，Ｖ層の自然科学分析（テフラ分析）を行っているので参照して欲しい。

３　遺物（第 12 図１～３）

Ⅱ・Ⅲ層から３点の土器が出土している。

１・２は，下剥峯式土器と判断される。１は貝殻刺突文を横位に施している。２は胴部の小片である。瘤状の突起を施してあり，突起の両側はナデによって貼り付けてある。シャープさはなく，楕円形状をしている。。胎土は，１㎜大の石英・金雲母・灰石の鉱物を多く含む。小片のため，上下逆の可能性もある。３は山形押型文土器で，１㎜大の灰白色石を多く含む胎土である。

なお，西側にある台地の縁辺部に位置している標高 50 ｍ（第１地点との比高差約 20 ｍ）の第２地点では，縄文時代早期の集石 58 基などの遺構・遺物が確認されている。そのため，これらの遺物は，第２地点より流れ込んだ可能性もある。



第 12 図　縄文時代早期の土器

第２節　縄文時代前期の調査

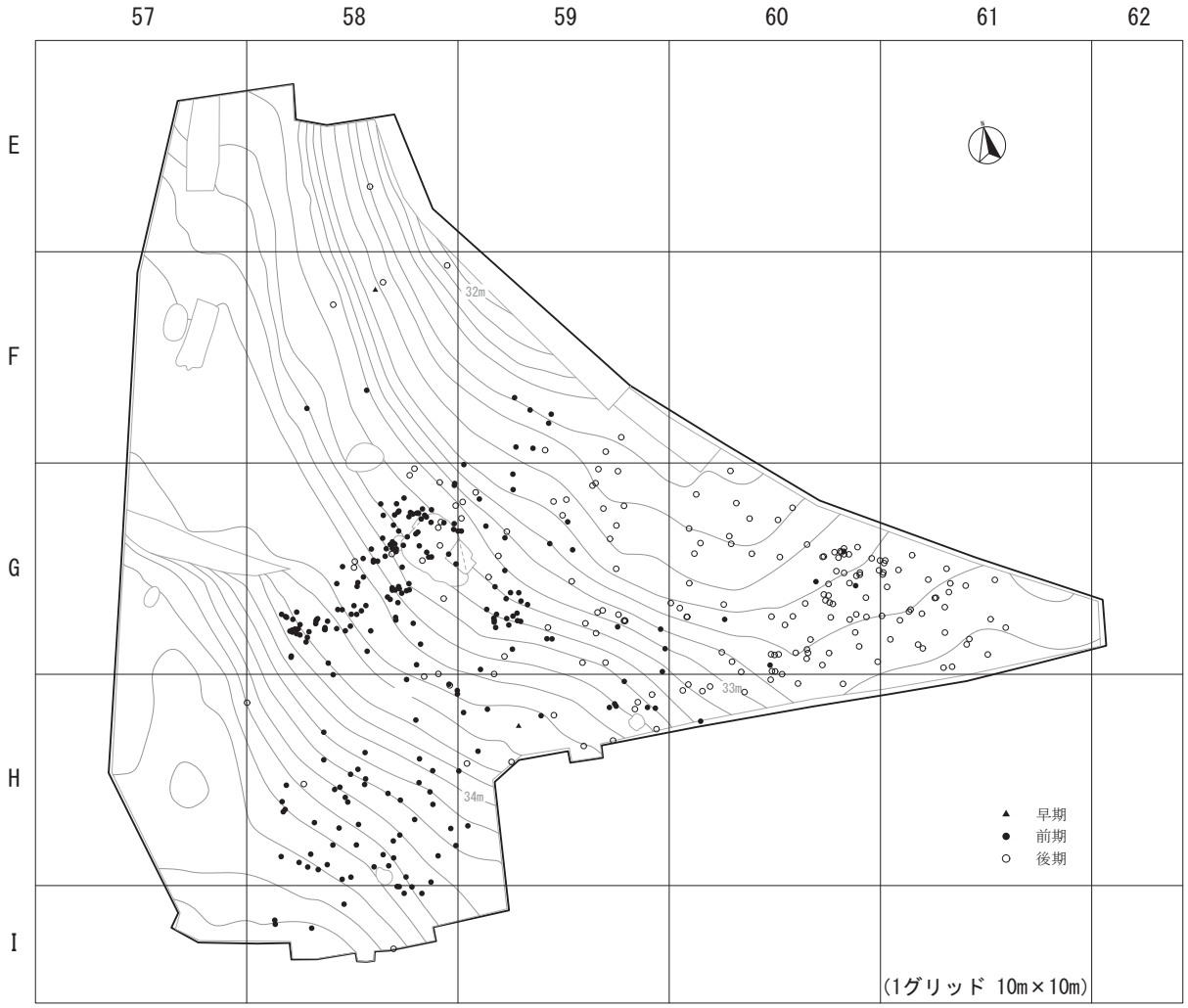
１　調査の概要

遺構は，縄文時代前期と判断できるものは検出できなかった。遺物については，表土～Ⅳ層出土の土器が混在している状況であったため，型式的に該当時期と判断したものを取り上げることとした。当該時期の土器出土分布は，G・H -58・59 区のやや高い地点に集中しており，調査区の傾斜面に沿い，北東方向への広がりが見られた（第 13 図）。なお，分類・接合作業を経て，当該時期の土器と判断したものは 95 点あり，そのうち 11 点を図化した。

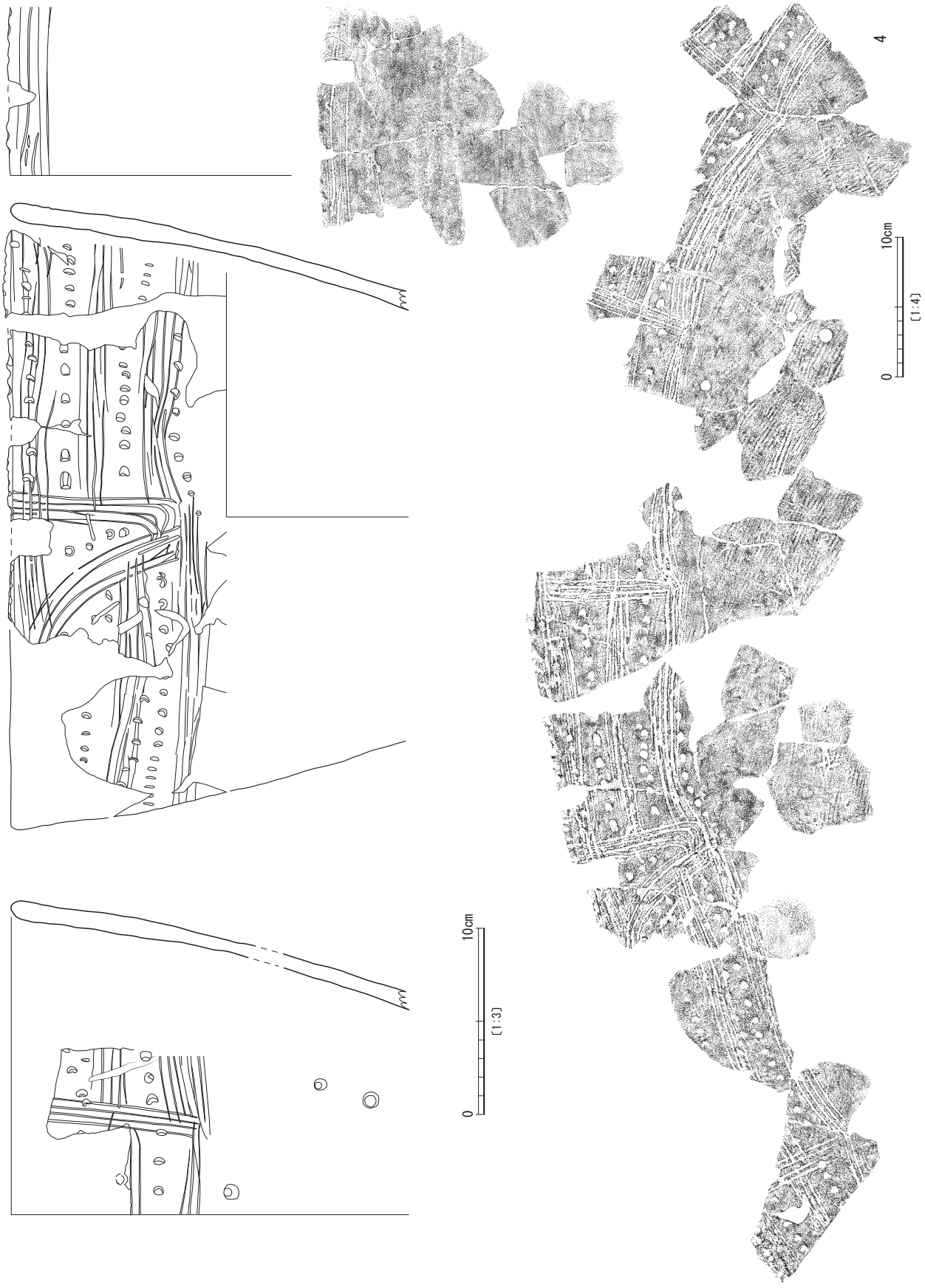
２　遺物（第 14 図・第 15 図・第 17 図～第 19 図）

４は底部から口縁部に向かって，開きながらまっすぐ伸びる器形である。口径 33.6 ㎝で，口唇部は丸みをおび，巻貝押圧による刻みがある。内外面とも二枚貝条痕のあと，丁寧なナデ調整で仕上げている。外面には巻貝殻頂部による沈線文様が描かれている。まず，縦方向沈線によって５分割される。４か所は４条の直線だが，１か所だけ鈎状沈線と弧状沈線が組み合わされ，U字状を呈している。縦線のあと，３段の横方向沈線が引かれている。上段が４条，中段が５条，下段が６条となっているが，雑に引かれているため，重なったりしている。沈線の間には巻貝殻頂による押圧文が見られる。内面の口縁端部近くに４～５条の雑な横方向沈線が引かれている。胴部に５つの補修孔がある。焼成は良好で，色調は内外面とも黒褐色をしている。胎土は白色石・黒色石・輝石を含んでいる。G -58 区を中心に調査区の傾斜面に沿い，比較的まとまって出土している（第 16 図上段）。

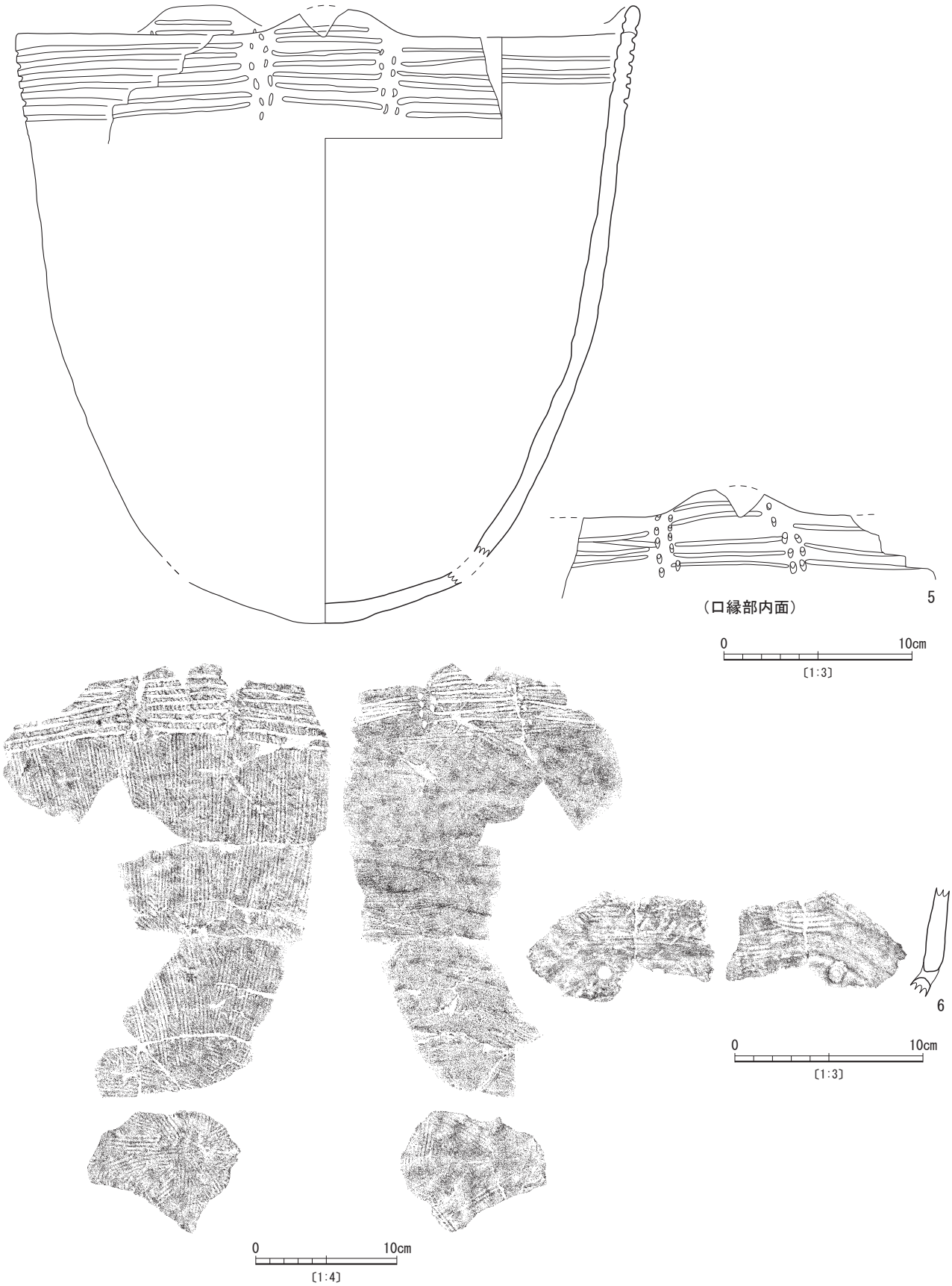
５は口径 33 ㎝，推定器高 33 ㎝である。外面は縦位の



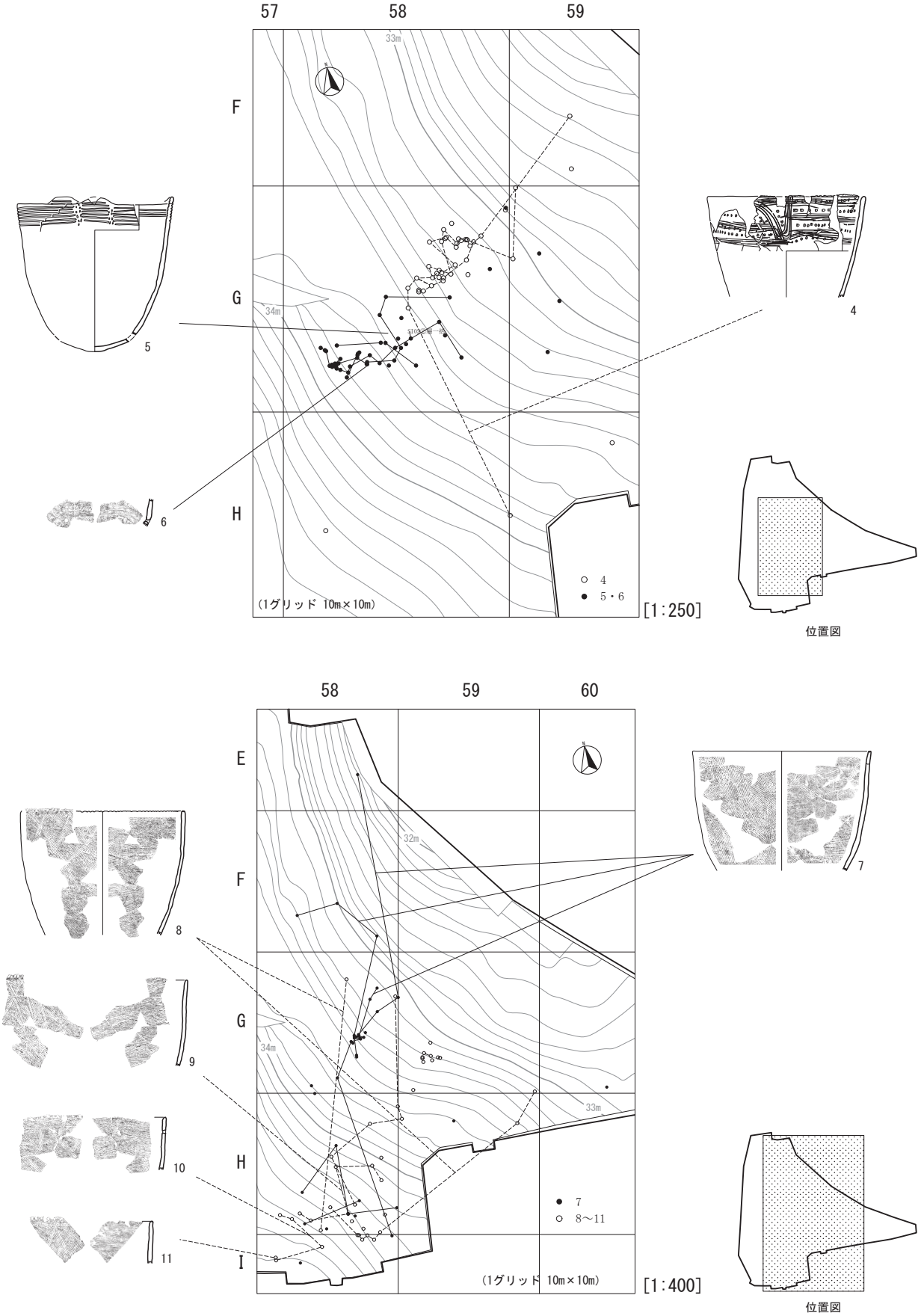
第13図　縄文時代早～後期の土器出土分布図［1:350］



第 14 図　縄文時代前期の土器（1）



第 15 図　縄文時代前期の土器（２）



第16図　縄文時代前期の土器接合図

貝殻条痕で，内面は横位の貝殻条痕のあと，ナデ調整で整形している。口縁部に山形の突起があり，２か所は確認できるが，突起の間隔から５か所の可能性がある（図上では２か所だけ復元している）。口縁部近くの外面に６条・内面に３条の巻貝殻頂による凹線があるが．これは連続するものと途切れるものとがある。突起部分は両脇に５個の縦方向巻貝刺突文が２列ずつあり，その外面には７条,内面が６条の横方向短絡凹線が引かれている。底部は接合できないが,胎土･色調･焼成度などからして，同一個体と思われる。内外面とも貝殻条痕があり，外面はススのため黒色化している。焼成は比較的良好で，内面は赤褐色を呈している。胎土には，白色石･黄白色石･灰色石・輝石を含む。

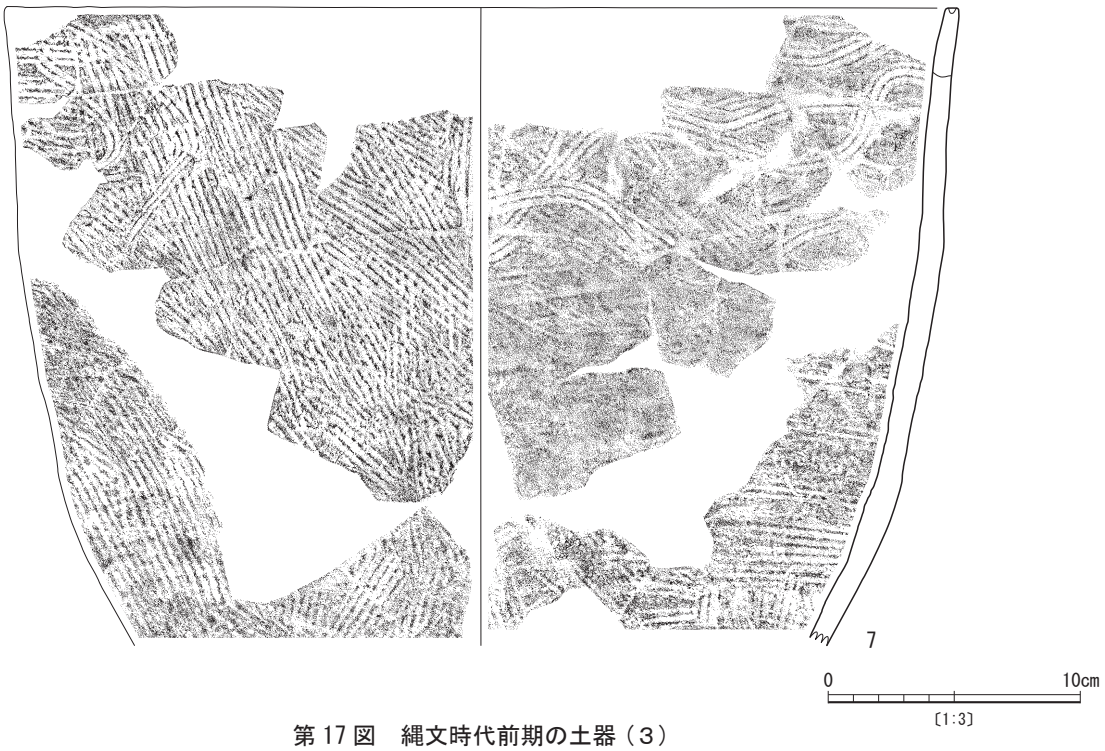
６は接合できないが，胎土・色調・焼成度からして，５と同一個体の可能性が高いと判断し,ここで記載する。底部近くの破片で，補修孔が見られる。G -58 区を中心に，調査区の傾斜面に沿い，比較的まとまって出土している（第 16 図上段）。

７は口縁部から胴部で，口径 37.8 ㎝で，底部から口縁部にかけてやや広がり気味にまっすぐ立ち上がる器形である。口唇部に巻貝刺突文があり，内外面とも貝殻条痕で調整している。口縁部内面は二枚貝腹縁で波状に交差させ文様を作り出している。胴下部に補修孔が１か所ある。焼成は良好で,内外面ともにぶい橙色をしている。胎土には，白色石・角閃石を含む。Ｅ～Ｉ -58・59 区の傾斜面に沿い，調査区北東部に広く出土している（第 16 図下段）。

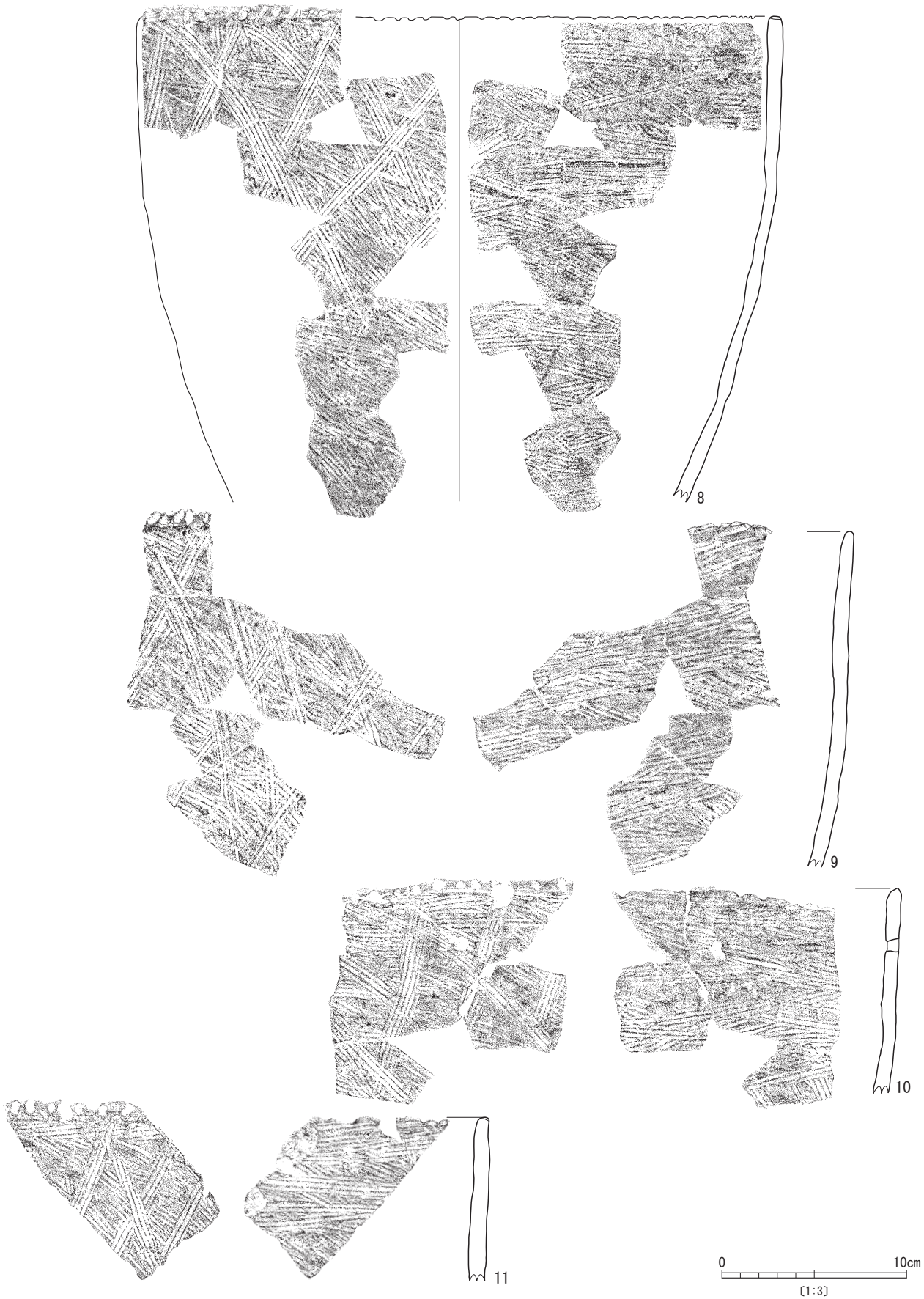
８～ 11 は同一個体の口縁部である。口径 35 ㎝で，口唇部には２枚貝腹縁の押圧による刻目を施している。外面は貝殻条痕の調整の後に，斜位の右下がり，左下がりの順に施文を行い，４～６条の斜格子状条痕を呈している。内面は横位又は斜位の貝殻条痕で調整している。８は口縁部から胴部で，胴部下半の外面は横位・斜位の貝殻条痕で調整を行い，ススが付着している。10 は口縁部で，口縁端部の下に径が 0.8 ㎝の補修孔が開けられている。補修孔の間隔は約３㎝である。焼成は良好で，色調は内外面とも灰褐色・赤褐色をしている。G～Ｉ -58・59 区の傾斜面に沿い，調査区北東部に広く出土している（第 16 図下段）。

12 ～ 14 は口縁部である。

12 は口唇部に巻貝刺突があり，外側直下はわずかに膨らみをもたせている。外面は斜位，内面は横位の貝殻条痕で仕上げている。焼成は普通で,色調は内外面とも，黒褐色をしている。胎土は白色石・黄白色石・輝石を含む。13・14 は接合できないが，胎土・色調・焼成度からして同一個体と思われる。口縁部に突起を施し，内面は粘土貼り付けで膨らんでいる。口唇部直下はわずかに膨らみ,13 には沈線を縦位に施してある。焼成は良好で，



第 17 図　縄文時代前期の土器（３）



第 18 図　縄文時代前期の土器（４）

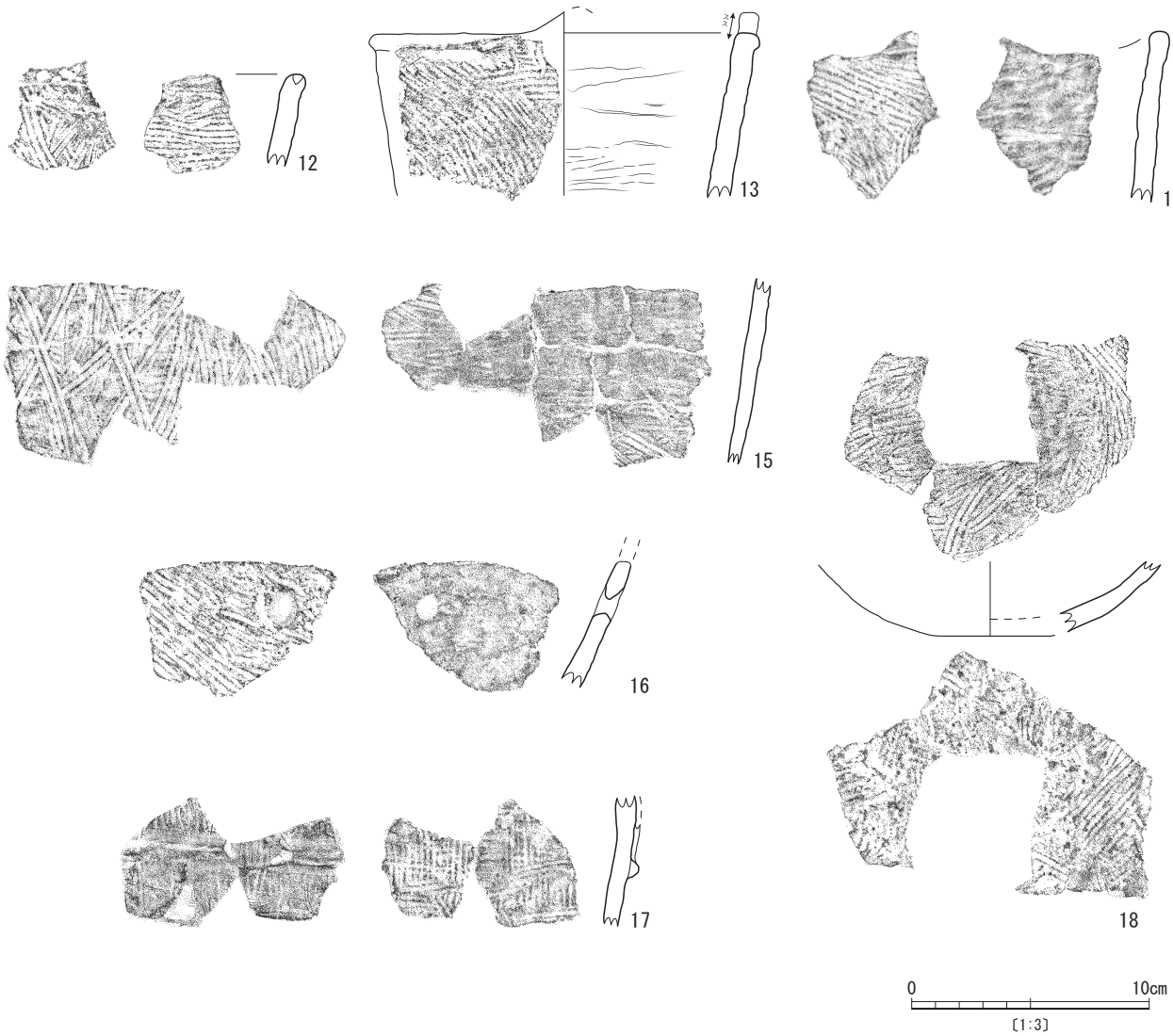
色調は外面はにぶい褐色で，内面は黒褐色である。胎土には，白色石・黄白色石・金雲母・石英などを含む。

15・16 は胴部である。

15 の外面は横位の貝殻条痕後，斜位の条痕を施し２～４条の斜格子条痕を呈している。焼成は良好で，色調は外面が黒褐色で，内面が灰黄褐色をしている。胎土には，白色石・黄白色石・茶色石・石英を含む。16 は貝殻条痕で仕上げ，焼成後，両面から穿孔された径が 0.8 ㎝の補修孔がある。焼成は普通で，色調は内外面ともにぶい黄褐色・褐灰色をしている。胎土に白色石・黄白色石・石英を含む。

17 は内外面とも貝殻条痕で調整した胴上半部である。条痕は内外面とも，横→縦→横の順に施している。やや丸味をおびた三角突帯が巡り，その後，部分的に縦方向の三角突帯を貼り付けている。２条の突帯の間を縦方向の突帯でつないでいると思われる。焼成は普通で，色調は内外面ともにぶい褐色をしている。胎土には茶色石・黄白色石・角閃石を含む。当該時期の他の土器とは，文様・調整等が異質なため，検討が必要な資料である。

18 は丸底の底部である。内外面とも貝殻条痕で仕上げてある。底面には白色粘土が付着している。焼成は良好で，内外面とも明赤褐色をしている。胎土には，白色石・黄白色石・石英を含む。



第 19 図　縄文時代前期の土器（５）

第３節　縄文時代後期の調査

１　調査の概要

縄文時代後期の遺構は検出されなかった。表土からⅣ層出土の土器が混在しているため，型式的に該当時期と判断したものを取り上げることとした。遺物は，調査区の東側の比較的低い所へ傾斜地に広がるように出土している（第 13 図）。なお，後期の土器は 209 点出土し，そのうち 50 点を図化した。

２　土器（第 20 図～第 22 図）

縄文時代後期の土器は，いずれも深鉢形土器である。

19 ～ 21 は口縁部を若干肥厚させ，やや太めの凹線を施すものである。内外面とも二枚貝条痕で仕上げている。焼成は良好で，金雲母・石英・白色砂粒を含む。19 は口唇部を工具によって押圧している。口縁部には粘土板を貼り付け，縦位の幅広短凹線を施文し，波形を呈している。その下には，沈線が巡っている。内面には明瞭に貝殻条痕が残る。ススが微量に付着している。20・21 は色調・調整・文様など共通点が多く，同一個体と思われる。20 は胴部上半で，外面にＶ字状またはＵ字状の幅広で浅い凹線が施してあり，内面は条痕による調整の後，指押さえの跡が明瞭に残る。21 は斜位に幅広で浅い凹線が施され，若干横位にも伸びている。

22 ～ 38 は細い凹線を施した口縁部である。22 ～ 26 は口縁部直下に横位の並行凹線を施し，内外面とも貝殻条痕後に粗いナデを行うものである。22 は 3 条の凹線を施し，外面にススが付着する。23 は横位の凹線を施し，口唇部上面は平面整形を意識しているが，内外面の貝殻条痕あとのナデ調整のために凹みが見られる。24 は横位の２条の凹線を施し，凹線内には施文具の繊維による細かい凹凸が確認できる。焼成は良好である。25 は横・縦・斜位の凹線が施され，上２条の凹線内には，施文具繊維による細かい凹凸が確認できる。なお，凹線の太さが類似するので，施文箇所により，同一の施文具で使用部位を変えている可能性がある。26 は胴部であるが，口縁部下と考えられ，横位の浅めの３条凹線があり，施文具の凹凸がある。その下位には，斜位に貝殻条痕による調整痕がある。焼成は良好である。

27 ～ 31 は口縁部直下に凹線を施文し，口唇部に刻み目を施すものである。27 と 28 は口唇部に指押さえによる刻み目を施しており，長楕円形状に凹線を施文する。29 は横位・斜位の凹線を施し，工具により口唇部に深い刻み目を行い山形を呈する。胴部には横位・斜位の凹線を施文する。30 は胴部片のみだが，27 と 28 に類似するため，口縁部の一部と考え記載した。コの字状に凹線を施し，その間に浅い凹線を施文している。内面は凹線による盛り上がりはなく，丁寧な横位のナデである。31 は口唇部に粘土を貼り付けた後，棒状施文具で刻み目を入れ，鋸歯状の突起を呈している。胴部には，口縁部から斜位に短い凹線と２条の凹線を行い，その下に縦位の凹線と八の字状の凹線を施文する。ナデ調整を行っている。

32 は口唇部に刻み目を施し，下位の施文が特殊なものである。口唇部に工具による押圧によって刻み目を施す。その直下３㎝程度は右下がり沈線と左下がりの刺突文または沈線文により，蓮弁文状に文様が施されており，口唇部の波状整形と関連すると考えられる。外面はススの付着が多い。

33 ～ 35 は内外面を貝殻条痕で調整し，口唇部直下に縦位の短い凹線（２㎝程度）を施し，その下位に横位の凹線を施文している。33 は焼成が良好で，胎土に金雲母が多い。34 は縦位の凹線と，下位に４本の横位の凹線がある。上から２条目は，施文による盛り上がりを平たくしたため凹線が潰れ気味である。外面は貝殻条痕のあとナデ調整を行い，内面は貝殻条痕が残る。35 は胴部であるが，33 と 34 に類似しており，口縁部近くの破片である。外面は貝殻条痕のあとナデ調整を行い，内面は貝殻条痕が残る。

36 は口縁部直下に，縦位の凹点文を施文し，その下に横位の凹線を施す。凹点文と凹線が同一の施文具かは，不明である。

37 は口唇部に「W」字形を呈する粘土紐の貼り付けを行い，頂部に巻貝による刺突を施している。口唇部直下には縦位の浅く短い凹点文を行い，その下位には３条の浅い凹線が施文されている。貝殻条痕のあとナデ調整を行う。

38 は口縁端部に２列の竹管文を施し，下位には同じ施文具で縦位に凹線を施文する。２列の竹管文の間には，横位の凹線がみられる。凹線には，施文具の繊維による細かい凹凸が確認できる。内面はナデ調整を行う。

39 ～ 46 は胴部である。39・40 は縦位・斜位の凹線がみられ，縦位に凹線と同じ巻貝による押圧が施文してある。外面はにぶい赤褐色，内面はにぶい橙色であり，胎土に石英・白色石・黒色石・６㎜大の赤色石を含む。40 は山形の凹線もある。41 ～ 43 は磨消擬縄文風で外面を横位の凹線で鉤形文に施文する。貝殻条痕のあとナデ調整を行う。胎土に金雲母を多く含む。41 は内面に貝殻条痕が残る。44 ～ 46 は内外面に貝殻条痕による調整が行われている。44 は上部の破損部に凹線がある。45 は焼成が良好で，内面の黒色が強い。46 は内外面とも上部が貝殻条痕による調整で，下部がナデ調整を施してあり，底部に近いと考えられる。

47 と 48 は胴部から底部にかけての資料で，内外面とも貝殻条痕のあと，粗いナデ調整が行われている。47 は底部から緩やかに立ち上がり外へ開いていく。いびつな形状をしており，器壁は薄いが均一性がない。内外面とも貝殻条痕による調整が明瞭に残る。底部付近はナデ

調整が行われている。外面は上部が黒褐色，下部がにぶい黄橙色で，内面は黒褐色である。48 は底部から滑らかに屈曲しながら立ち上がり，胴部は外に開いていく。胴部の器壁は薄く均一であり，底部は平底で厚い。無文で，調整は胴部が斜位に底部が横位に条痕が行われている。底部径は 9.6 ㎝で外側は面取りが行われ，中心部にかけて若干凹んでいる。底面には,網代痕等は見られず,白色土の付着もない。外面の胴部は灰褐色・底部は橙色で，内面は褐灰色である。底部の内面中央部は，表面が剥落している。

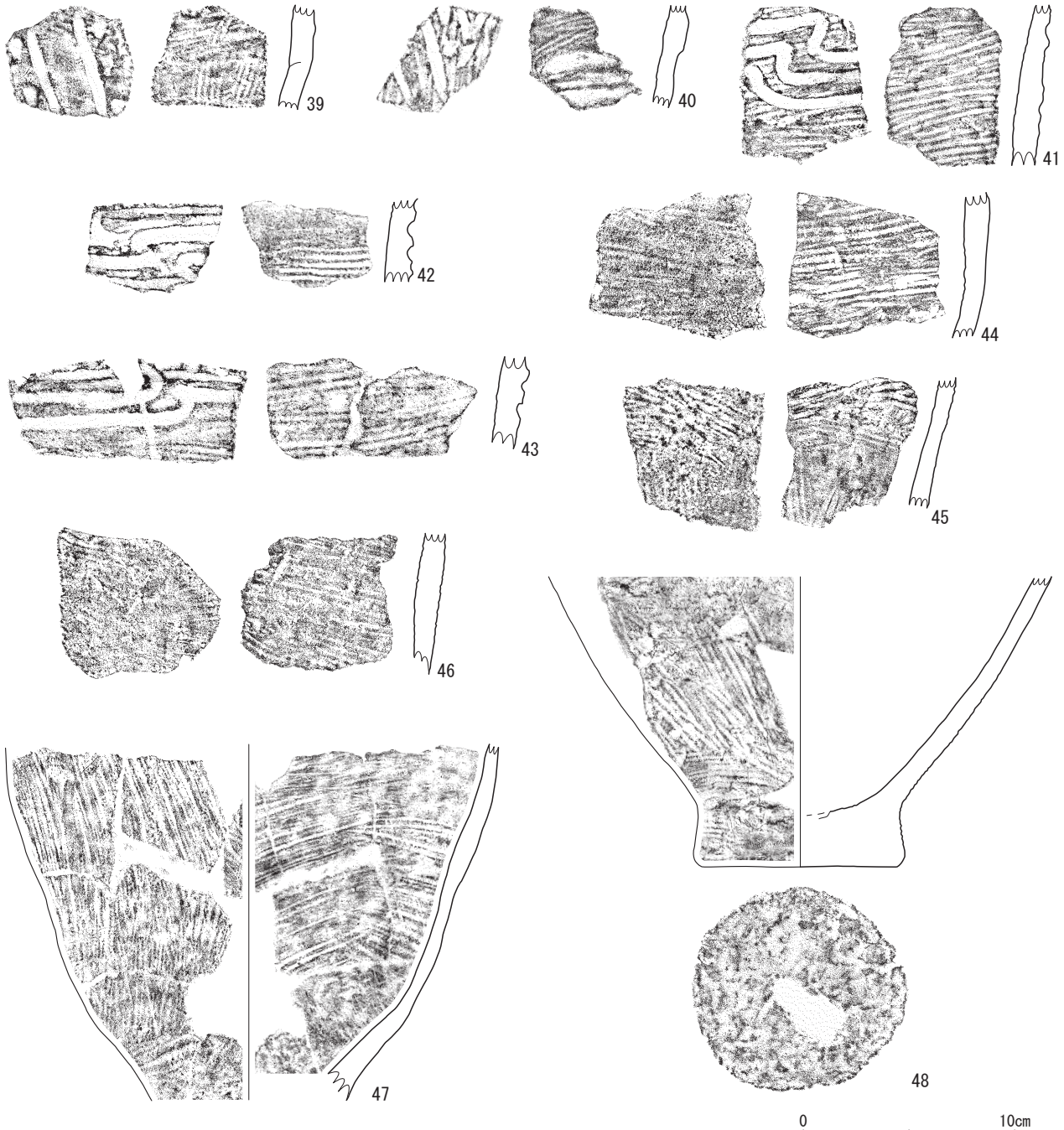
49 ～ 64 は底部である。器形及び胎土・底部圧痕からここで記載した。

第 20 図　縄文時代後期の土器（１）

49 ～ 52 は平底であり，胴部下位から底部近くに縦位の凹線を施文するものである。49 は凹線を連続に施す。50 は凹線の幅が狭く，沈線状に連続する。51 は底径約 11 ㎝で，底面には格子状の網代痕が明瞭に残る。貝殻条痕のあとナデ調整を行う。52 は底径 6 ㎝で，内外面に斜位の凹線状の条痕が明瞭にあり，49 ～ 51 とは文様に違いが見られる。

53 ～ 58 は平底であり，底部から胴部は貝殻条痕後のナデによる調整のみで無文である。53 は底径 13 ㎝の上げ底気味で，内側の底部から胴部の屈曲が明瞭である。底面に網代痕がナデ消してあり，白色土が付着している。外面は丁寧な横位のナデである。54 は底面に，網代痕が残り，置き換えている。白色土が付着している。55 は網代痕が残り，白色土が付着している。56 は底面に格子状の網代痕がナデ消してあり，白色土が付着している。57 は底径 11.6 ㎝で，網代痕が残り，白色土が付着している。58 は底径 8.4 ㎝で 胎土の色調が黄灰色をしており，軟質である。底面には網代痕が残り，白色土が付着している。

59 ～ 61 は焼成良好な平底で，外面は粗いナデを行っている。59 の内面は貝殻条痕が残る。底面は網代痕が残り，白色土が付着する。60 は網代痕が残る。61 は小



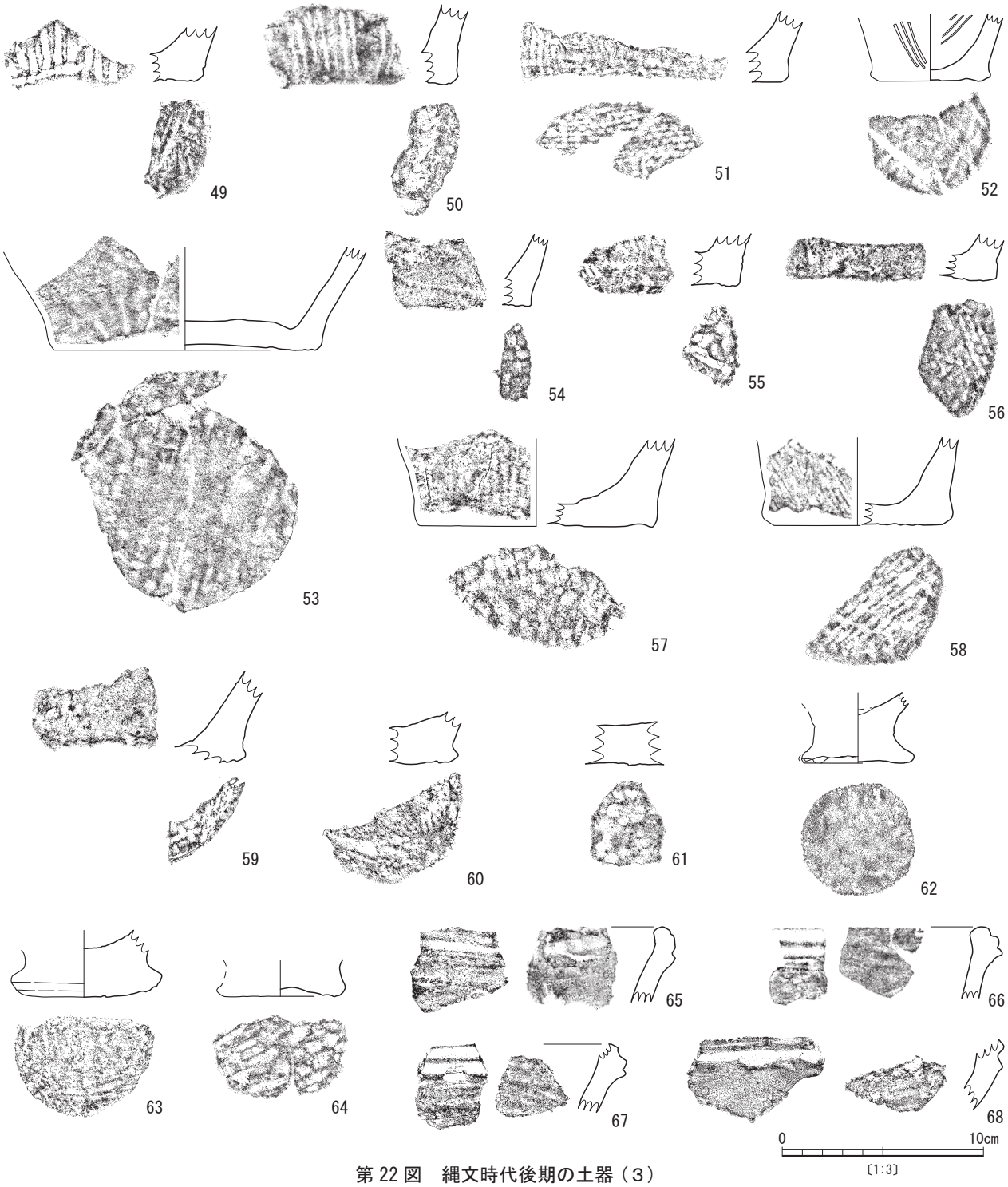
第 21 図　縄文時代後期の土器（2）

片のため明確でないが，器壁の厚さから底部と考え，ここで記載した。

62 ～ 64 は低い脚となっている。62 は底径 5.6 ㎝の若干高めの脚で，色調は赤褐色を呈する。底部の中では小さく小型の鉢と考えられる。底部の内面中央部は剥落している。63 は底径 7.6 ㎝で，底部側面を面取りして曲線状に屈曲したのち胴部へと続く。底面は丸みを帯びており，網代痕は見られず，ナデで調整し，白色土が付着している。64 は底径 6.4 ㎝で，ユビナデである。底の端部が丸味を帯び，底面はわずかに上げ底である。底面は網代痕が残り，白色土が付着している。

65 ～ 67 は口縁部である。口縁端部近くでわずかに外反し，口縁端部は丸く肥厚し，内面は口縁端部近くでわずかに内弯する。口唇部は矩形に近い。外面に横位の２条の凹線があり，内外面ともナデによる調整を行う。焼成は良好で，胎土には石英・白色石・黒色石を含む。

68 は胴部の上半で屈曲部の上部に凹線と２か所の押圧痕が見られる。



第 22 図　縄文時代後期の土器（３）

第４節　縄文時代晩期の調査

１　調査の概要

遺構は，竪穴住居跡，土坑が検出された。

遺物は，竪穴住居跡１号周辺に比較的多く出土しており，調査区の地形の傾斜に添い北側から東側に広がっている（第 27 図）。遺物は，表土からⅣ層出土のものが混在しているため，型式的に該当時期と判断したものを取り上げることとした。なお、晩期の土器は、1,077 点出土し、そのうち 120 点を図化した。

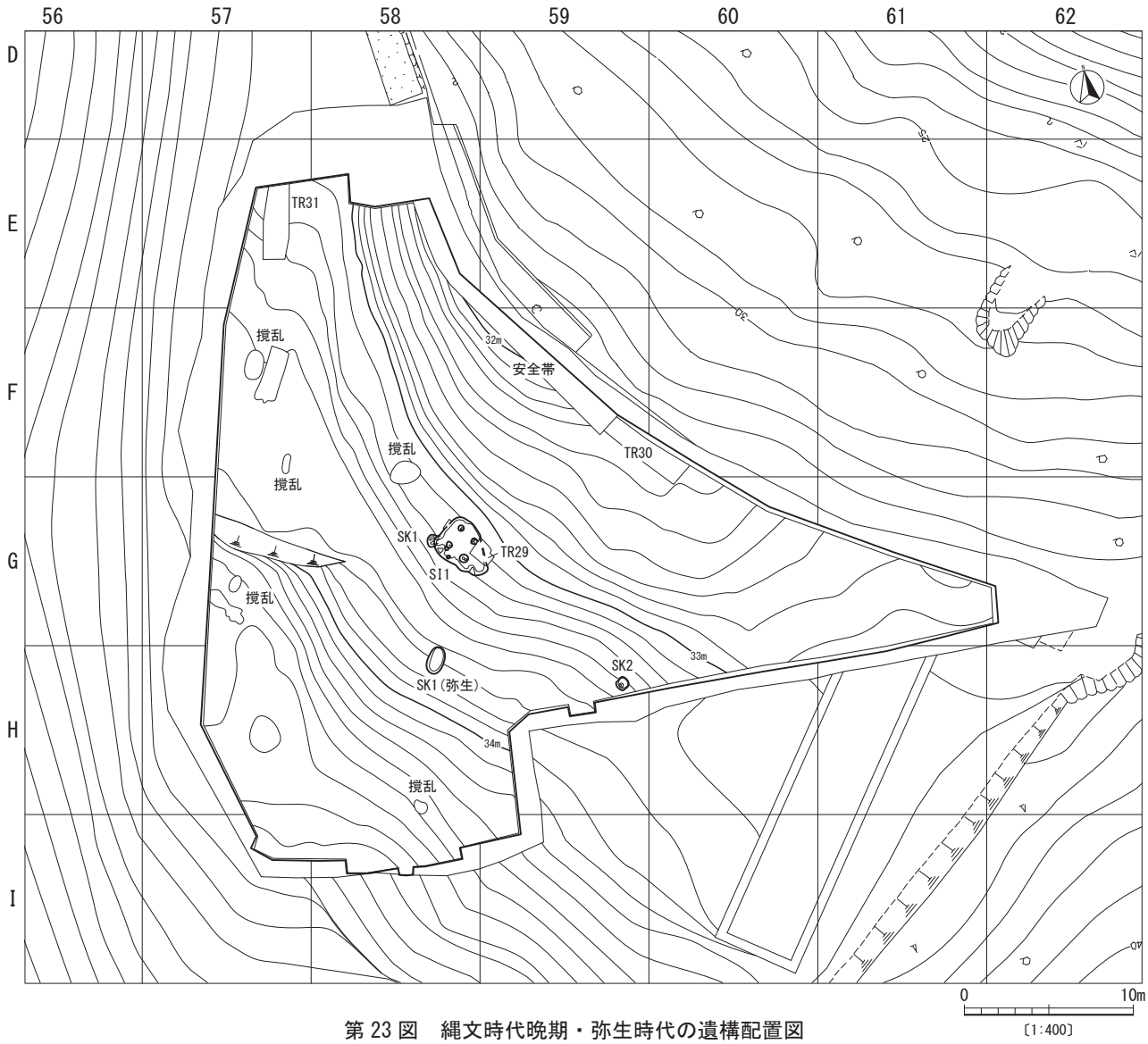
２　遺構

第 23 図の遺構配置図に示したように，竪穴住居跡１軒，土坑２基が検出された。

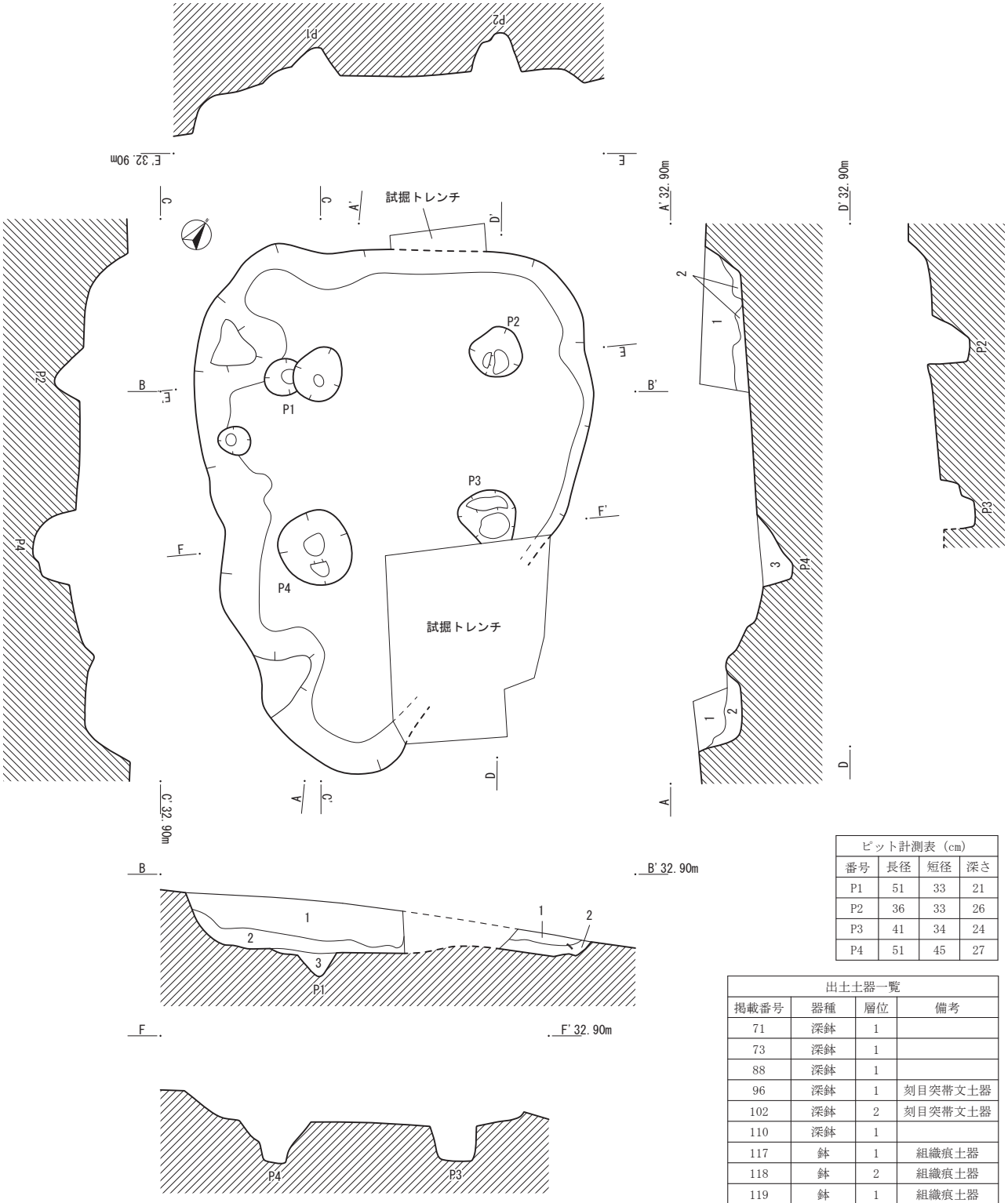
（１）　竪穴住居跡１号（ＳＩ，第 24 図）

Ｇ -58・59 区で検出された。遺構北側は，Ⅳａ層中で池田降下軽石を多く含む埋土が見られた。東側は試掘トレンチで壁面や床面の一部が失われており，傾斜面で掘り込みがⅣｂ層まで達していなかったため，プランがはっきりしなかった。そのため，慎重に掘り下げて，池田降下軽石を多く含む埋土を確認した。また，Ｇ -58・59 区を中心に縄文時代晩期の土器が多く出土しており，遺構内でも当該期の土器が確認できたため，縄文時代晩期の遺構と判断した。しかし土器は，包含層出土の土器と広域に接合したため，遺構内出土として取り扱わなかった。なお遺構内から出土した土器は，図中の表に掲載番号を記載した。

プランは北側は隅丸方形状となるが，南側は幅が狭く不整形で，長軸 352 ㎝・短軸 268 ㎝である。西側壁面がⅣｂ層の地山を残して，３か所内側に突出している。柱穴は４本主柱穴で，柱痕跡は確認できなかった。Ｐ１は西側に浅い掘り込みを伴う。埋土は，にぶい黄褐色土で２つに分層でき，上層に池田降下軽石が多い。柱穴埋土もほぼ同一である。なお，炭化植物片の放射性年代測定を行い，2150 ± 30 年ＢＰの結果を得ている。詳細は，第５章第４節を参照して欲しい。



第 23 図　縄文時代晩期・弥生時代の遺構配置図



ピット計測表（cm）			
番号	長径	短径	深さ
P1	51	33	21
P2	36	33	26
P3	41	34	24
P4	51	45	27

出土土器一覧			
掲載番号	器種	層位	備考
71	深鉢	1	
73	深鉢	1	
88	深鉢	1	
96	深鉢	1	刻目突帯文土器
102	深鉢	2	刻目突帯文土器
110	深鉢	1	
117	鉢	1	組織痕土器
118	鉢	2	組織痕土器
119	鉢	1	組織痕土器
125	鉢	2	組織痕土器
147	鉢	1	組織痕土器
153	浅鉢	1	
154	浅鉢	1	
180	浅鉢	1	
188	小型浅鉢	1	
197	壺	1・2	把手有り
198	壺	1	

1 にぶい黄褐色砂質土 池田降下軽石多量含む，Ⅳa層に該当。
2 にぶい黄褐色砂質土 池田降下軽石少量含む。
3 にぶい黄褐色土 池田降下軽石含む。

第 24 図　縄文時代晩期の竪穴住居跡 1 号

（２） 土坑（ＳＫ，第 25 図）

ア　土坑１号

Ｇ -58 区のⅣｂ層上面で検出した。竪穴住居跡１号に切られており，プランははっきりとしない。残存部分は，長軸 69 ㎝・短軸 50 ㎝で，検出面からの深さが 31 ㎝である。埋土は茶褐色砂質土で，池田降下軽石をわずかに含む。遺物は出土しなかった。

イ　土坑２号

Ｈ -59 区のⅣｂ層上面で検出した。プランは不整形を呈し，長軸 72 ㎝・短軸 68 ㎝で，検出面からの深さ 23 ㎝である。遺構南西部に掘り込みが見られる。埋土は暗褐色砂質土で，大きめの池田降下軽石を含む。遺物は出土しなかった。

（３） 土器

深鉢・鉢・浅鉢・壺・マリ・小型浅鉢がある。73・152（第 31 図），96・97（第 32 図），117 ～ 119（第 36 図）は，土器の接合状況を図化した。概ね地形の傾斜に沿い調査区の北側から東側へ広がり，Ｇ・Ｈ -58・59 区を中心に出土している。

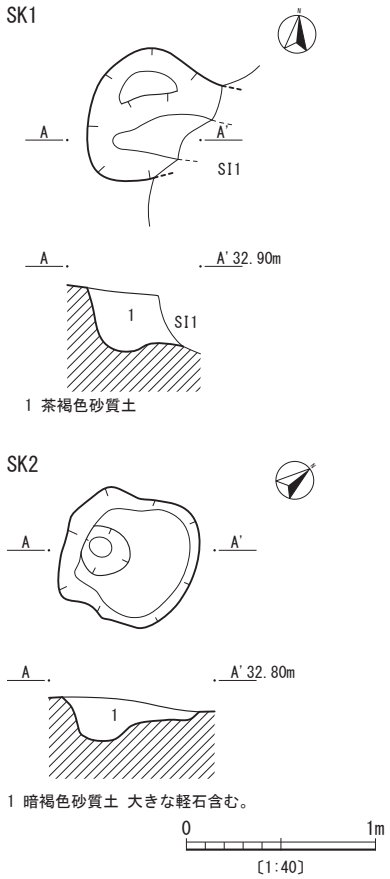
ア　深鉢（第 26 図・第 28 図～ 30 図・第 33・34 図 69 ～ 114）

69 ～ 73 は，口縁部から胴部である。口縁部から胴部にかけ段をもつ。肩部から口縁部にかけ，わずかに内弯またはまっすぐに伸び，口径は胴径を上回らない。69 は口縁部がわずかに肥厚する。内外面ともハケ様のナデである。71 は口径 26 ㎝で，波状口縁を呈し，波状部分はわずかに肥厚する。内外面ともヘラナデである。72 は口径 31.5 ㎝で，口唇部がわずかに膨らみ，山形口縁の可能性もある。内外面とも貝殻条痕のあとにナデ整形を施してある。73 は口径 29 ㎝で，口縁端は凹凸している。肩部の段は盛り上がり，突起のような形状をしている。内面はケズリである。炭化物の放射性年代測定を行い 2,560 ± 30 ＢＰという結果を得られている。詳細は第５章第３節を参照して欲しい。

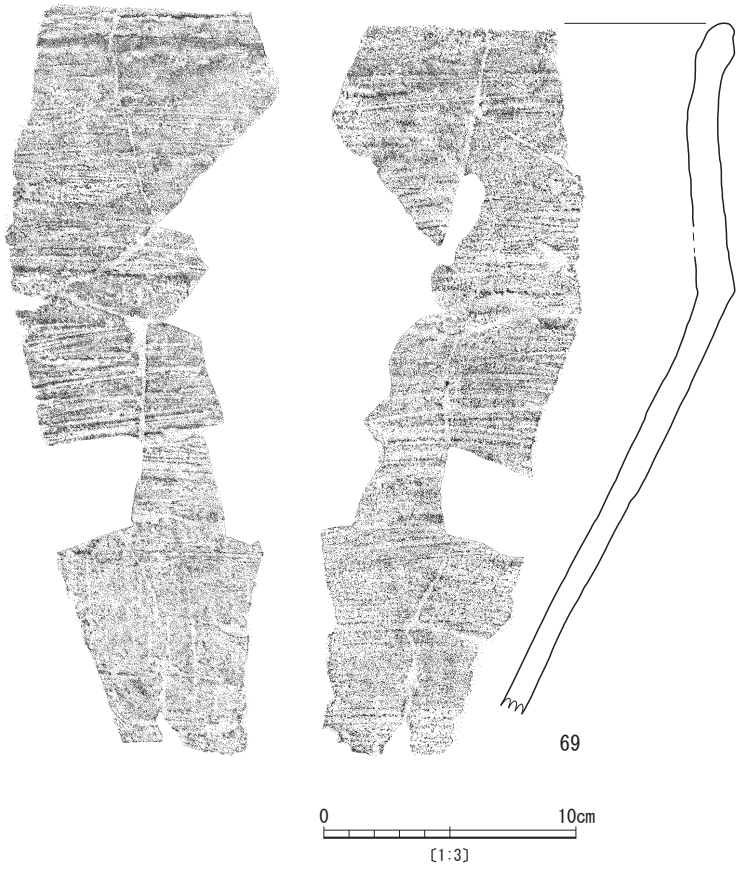
74 ～ 95 は口縁部である。74 と 75 は口縁部が外反する。74 の外面は貝殻条痕のあとにヘラナデ，内面は口縁部に貝殻条痕が残る。75 は内外面とも横位のミガキである。76 ～ 85 は口縁部がまっすぐ伸び，条痕を残すものやそのあとに，ナデ調整を行うものである。84 は口縁から胴部で，口径 24 ㎝である。器形はまっすぐ伸びるが，段を作り出すような凹凸が著しい。内外面とも，横位のヘラナデである。

86 と 87 は波状口縁である。86 は口縁部が矩形突起状に肥厚し，内外面とも横位の条痕である。87 は粗いナデで，器壁が厚い。

88 ～ 91 は口縁部が矩形突起状に肥厚し，ナデ調整である。



第 25 図　縄文時代晩期の土坑１号・２号



第 26 図　縄文時代晩期の土器（１）

92 は口縁部を丸みを帯びた矩形突起状に肥厚させ，口唇頂部に巻貝による押圧がある。

93 は無文土器風に口縁端部を貼り付け，わずかに外反させる。外面は横位の二枚貝による条痕のあとナデ，内面は横位のナデである。

94 と 95 は口縁部から胴部である。94 は肩部に稜をもち，口縁部は外反する。内外面ともヘラナデである。95 は口径が 31 ㎝の波状口縁で５か所の突起をもつ。補修孔があり，孔は両側からすり切り穿孔され，欠損部近くに対となる穿孔の端部が見える。内外面ともヘラナデである。

96 ～ 103 は口縁部や胴部に刻目のある突帯を施し，胴部に屈曲をもつ屈曲形で，いわゆる刻目突帯文土器である。

96 と 97 は口縁部から底部近くまで復元できた資料である。96 は口径 40.8 ㎝で，２条突帯に巻貝押圧の刻みを施し，粗い条痕のあと横位のナデ調整である。施文具は押圧と同一と考えられる。外面にはススが付着する。97 は口径 34 ㎝で，締まりのあるスマートな器形である。屈曲部に半円状の１条突帯があり，ヘラ押圧で刻みを施す。外面の屈曲部上はハケ様ナデ，下はヘラ様ナデで，内面は条痕が残る。

98 と 99 は口縁部近くに突帯があり，巻貝押圧を施す。98 はミガキである。

100 は２条突帯に巻貝の押圧で刻みを施す。

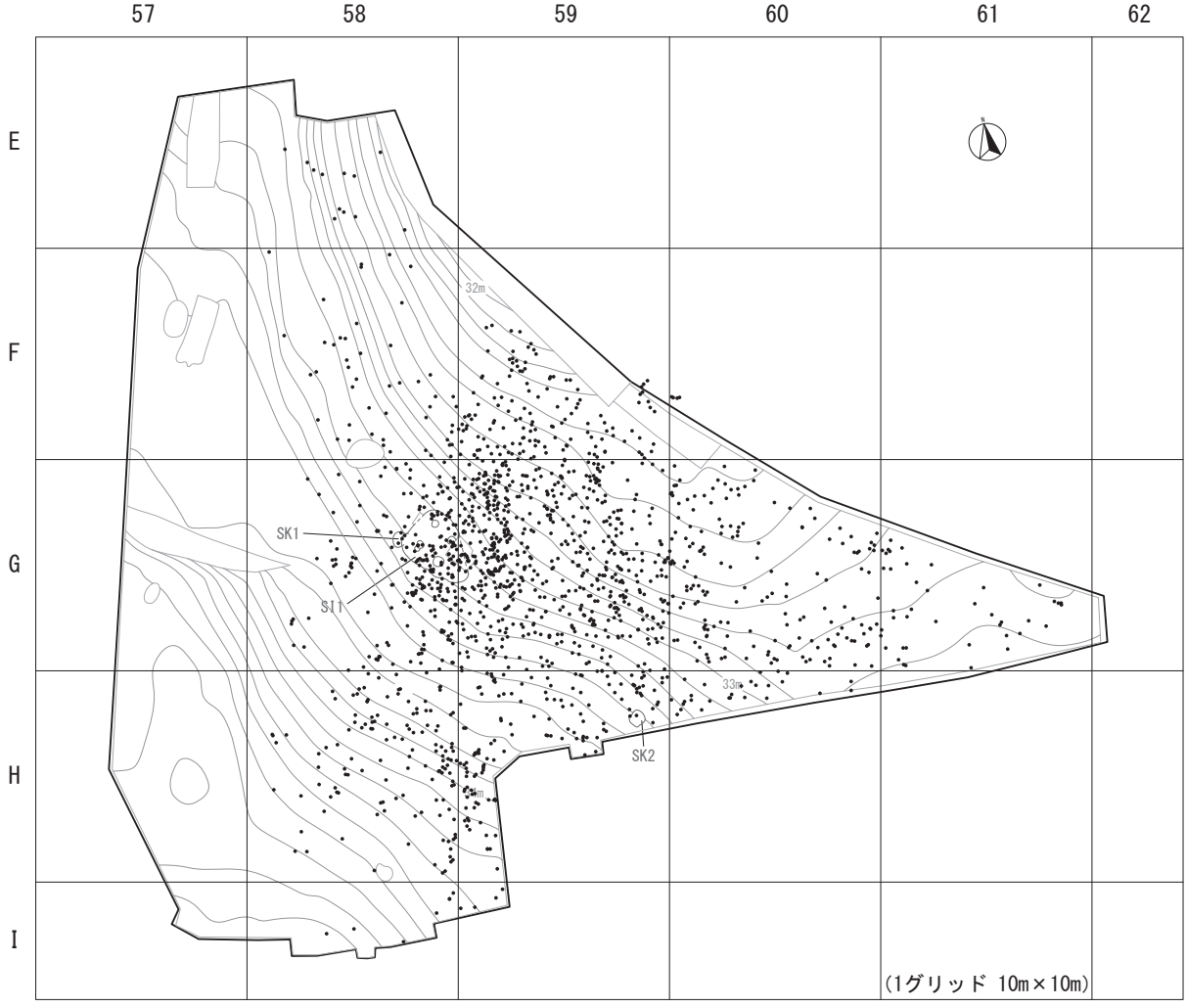
101 は口縁部から底部近くまで復元できた資料である。口径 43.6 ㎝で２条突帯に巻貝の押圧で刻みを施す。二枚貝条痕のあと横位のナデ調整である。

102 と 103 は２条突帯に巻貝押圧による刻みを施す。

104 ～ 106 は突帯はないが，口縁部に刻みを施すことからここで記載した。104 は口縁端に三角突帯があり，ヘラ刻みを施す。105 は口縁端にヘラ押圧，106 は口縁端にヘラ刻みを施す。

107 ～ 109 は胴部である。107 は扁平の突帯に巻貝押圧による刻みを施す。108 は巻貝刻みの三角突帯を施す。内面には丹塗りの痕が見られる。内外面ともヘラナデである。109 は突帯に左向きの三角文状に，左下りと右下がりの刻みがあり，その間に沈線を施してある。内外面とも横位のヘラナデである。

110 ～ 114 は底部である。110 と 111 の外面は横位の



第27図　縄文時代晩期の土器出土分布図［1:350］

ヘラナデ，内面は貝殻条痕のあとナデ調整である。110は底径10㎝で，底面が幅広の高台状を呈する。111はわずかに上げ底状になる。

112～114は平底で，ナデ仕上げである。

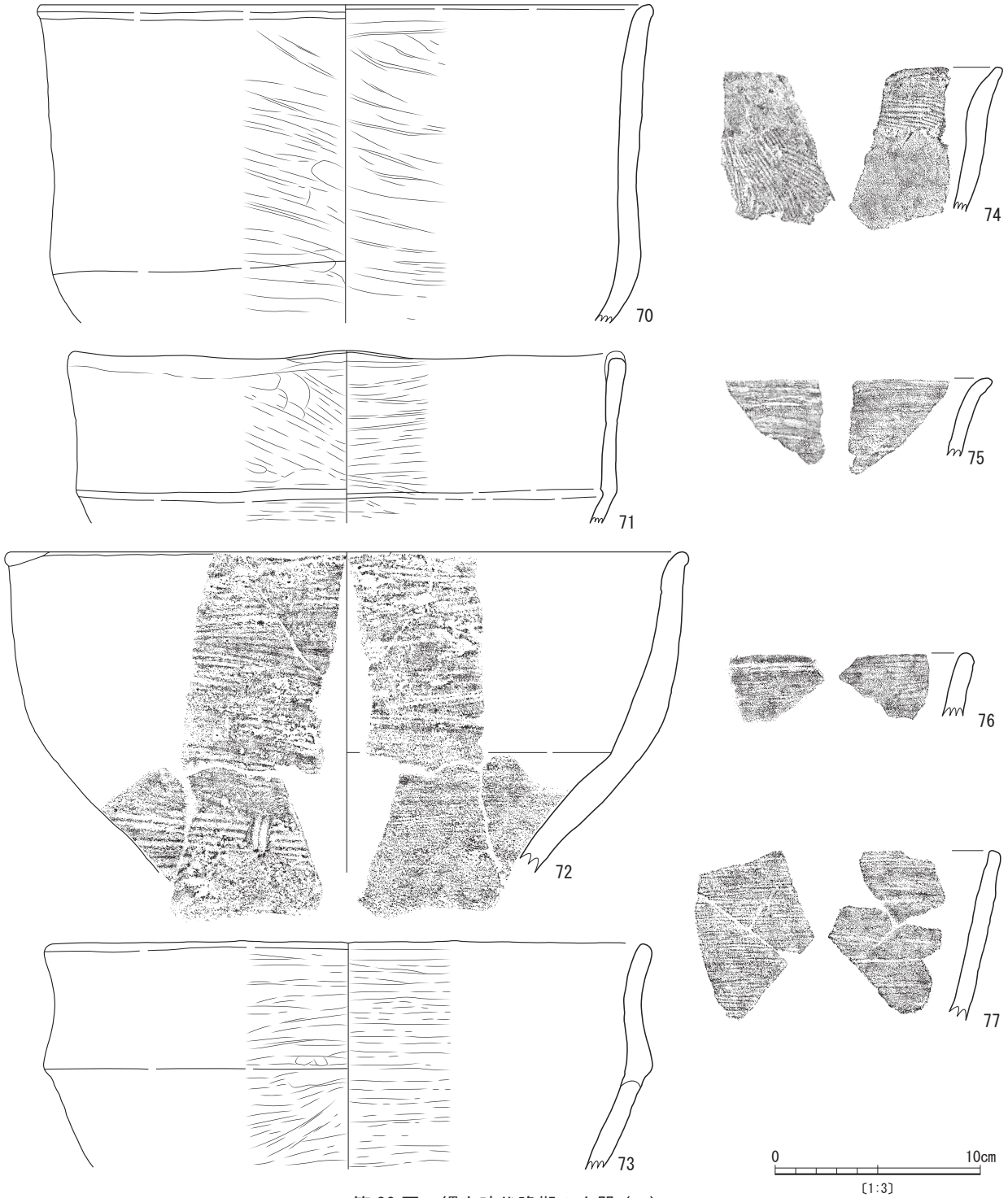
イ　鉢（第34・35・37～39図，115～148）

鉢形土器は口径が25㎝～55㎝ほどの大型の鍋状を呈する器形で，組織痕をもつものが多い。小型のものについては，用途が違うと判断し，別に記載してある。

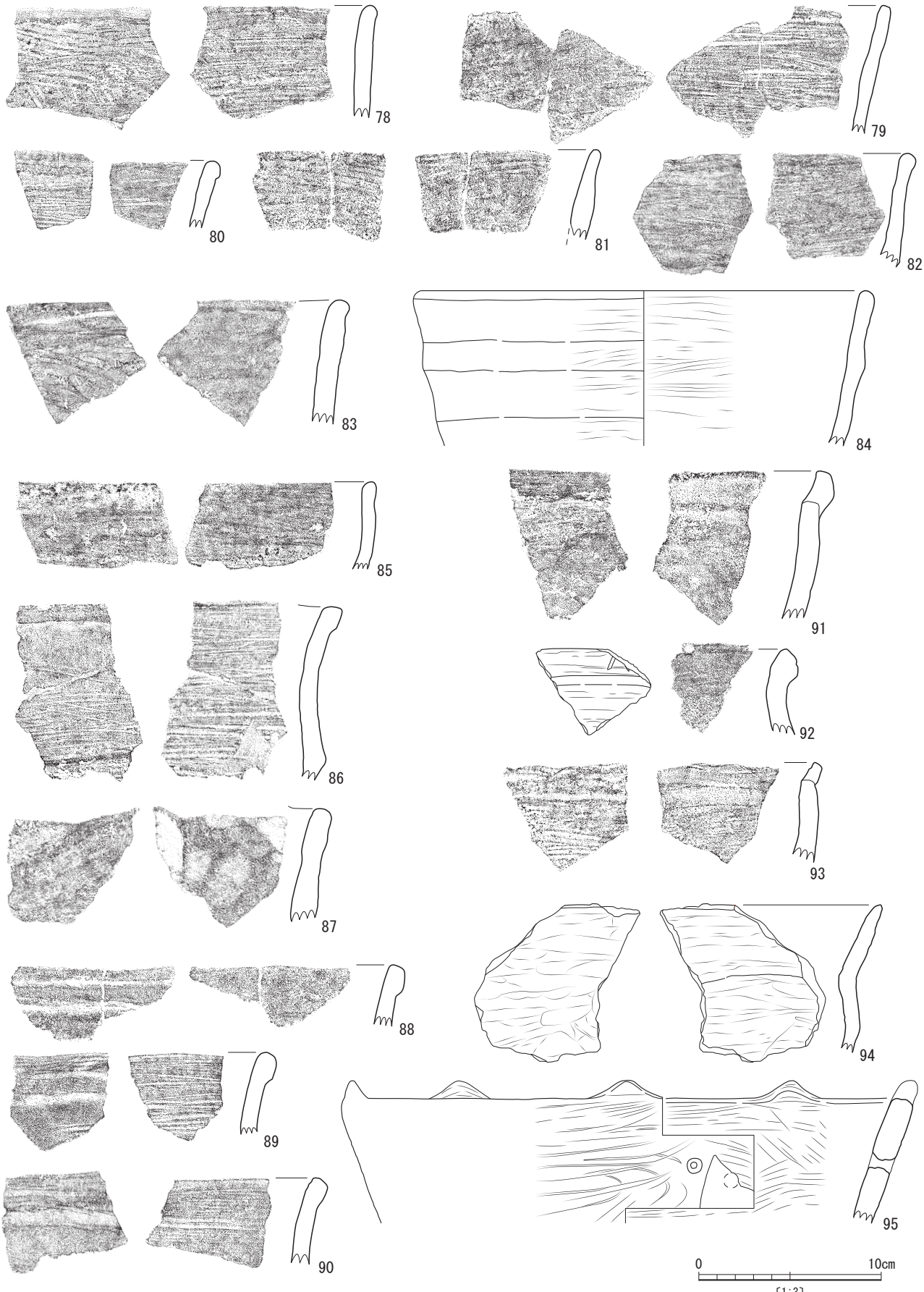
115と116は，口縁部から胴部の大きい破片である。口縁部は丸みを帯びており，外面は条痕のあと横位のナデである。内面は115が条痕のあとミガキ調整，116は丁寧なナデ調整である。薄い作りで硬質に焼けている。

117～148は安定した丸底の鍋状を呈した組織痕土器である。117・118は口縁部から底部までほぼ完形に復元できた資料である。

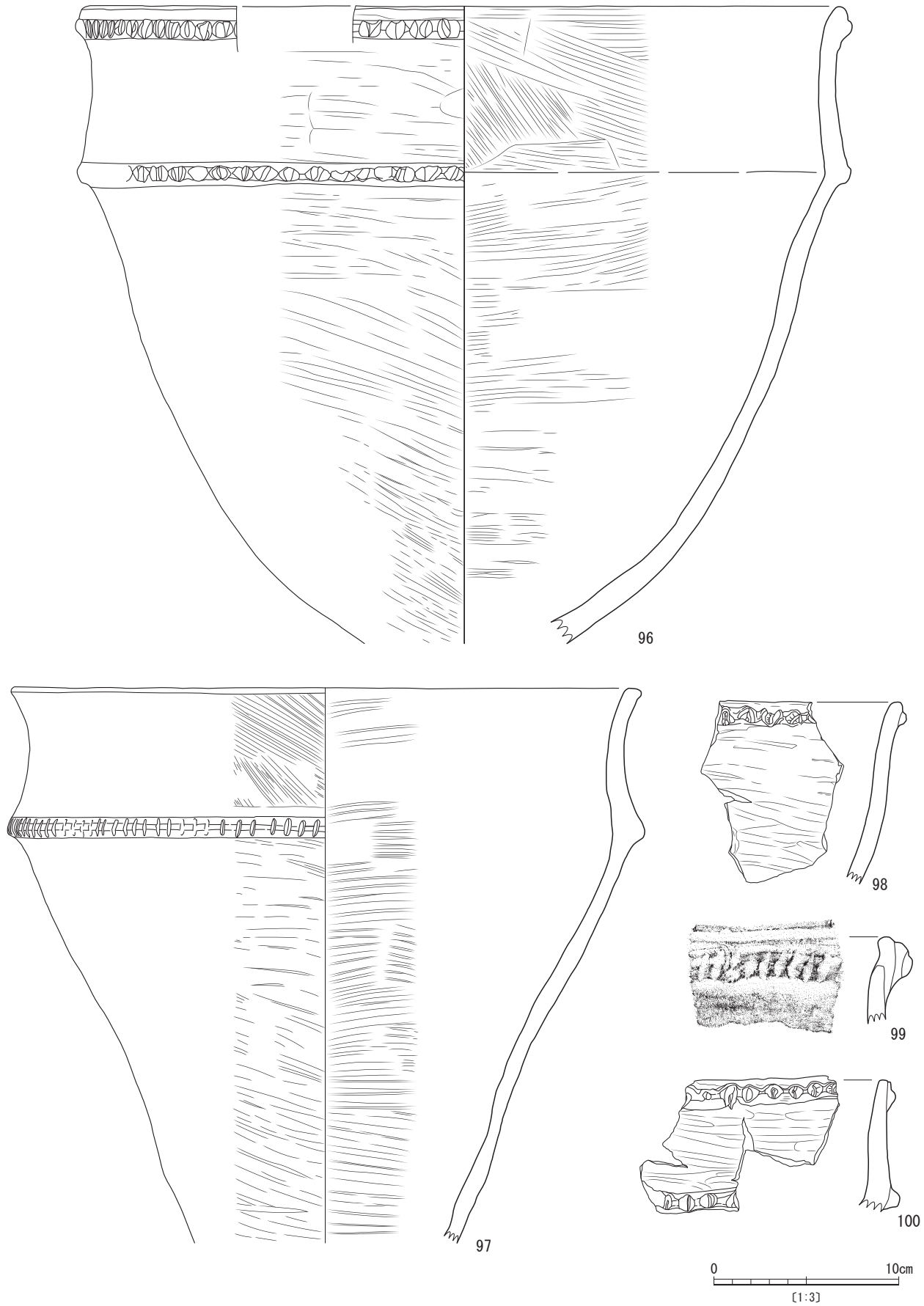
117は口径54㎝，器高16㎝で底から高さ6㎝ほどの胴部下半に編布圧痕が残る。その上から口縁端までの約11㎝幅は横ナデで仕上げ，その途中で段のある箇所も



第28図　縄文時代晩期の土器（2）



第 29 図　縄文時代晩期の土器（３）

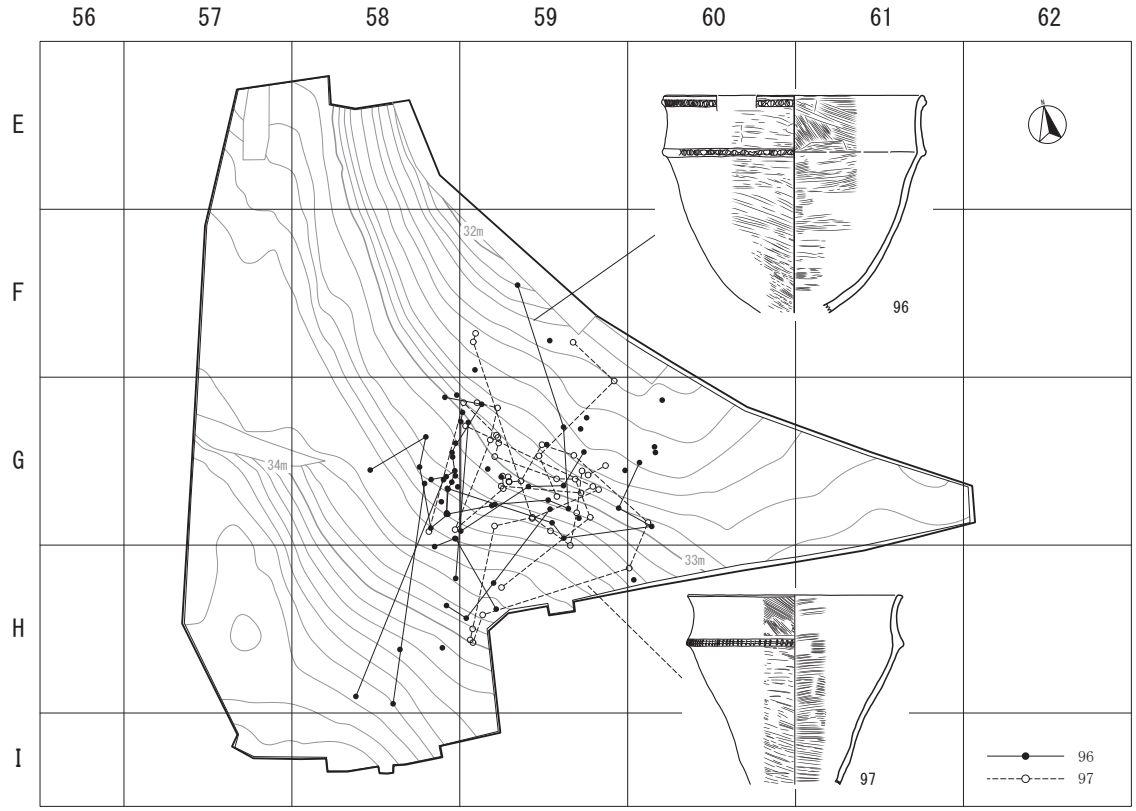


第 30 図　縄文時代晩期の土器（４）

[1:450]

（1グリッド 10m×10m）

第31図　縄文時代晩期の土器接合図（１）



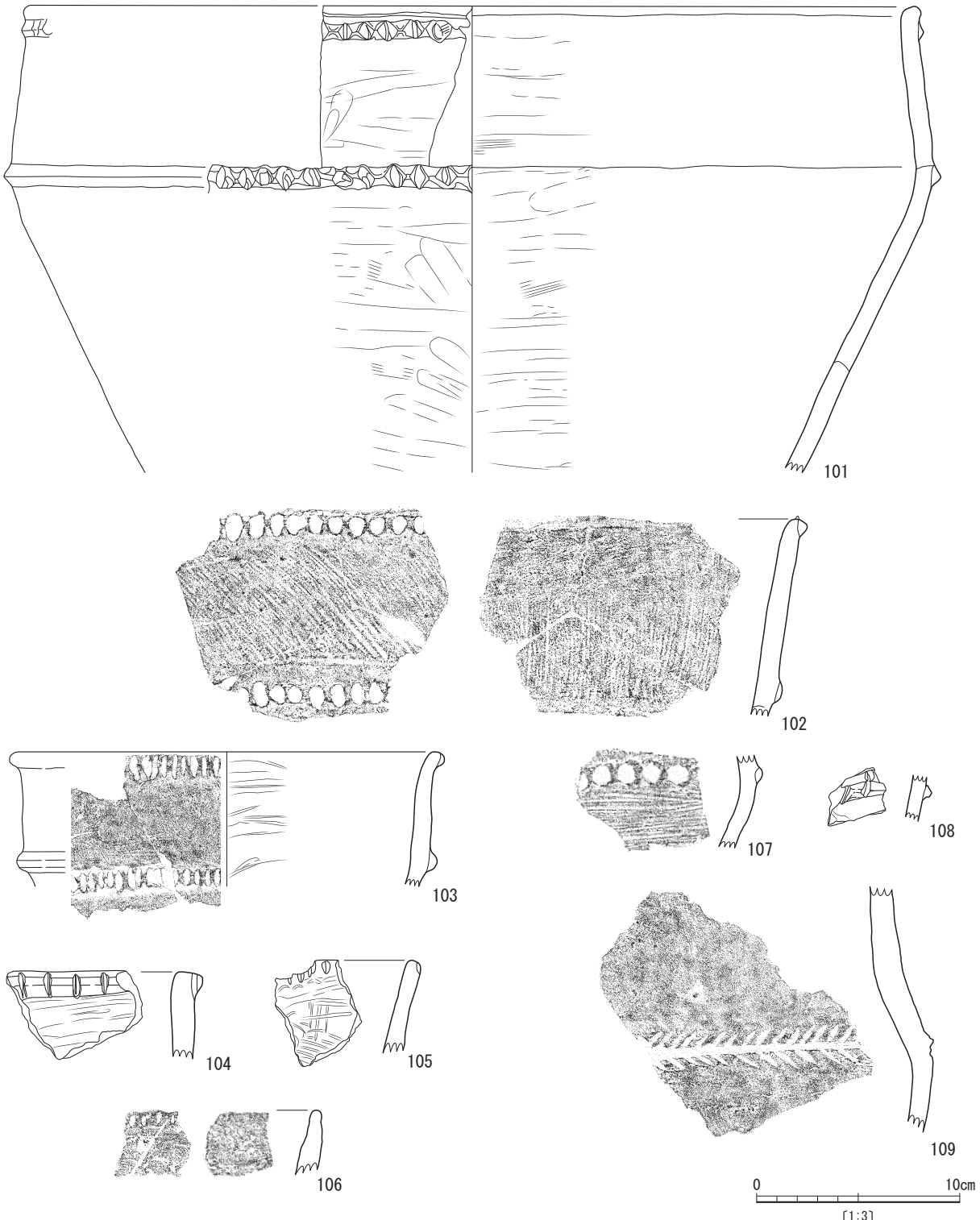
[1:450]

（1グリッド 10m×10m）

第32図　縄文時代晩期の土器接合図（２）

ある。編布は細布と粗な布の2枚をかがって1枚としている。細布は10㎝四方に縦糸16本，横糸105本で，粗い布は縦糸10本，横糸46本である。2枚のかがり部分は細い糸で結んでおり，直線にはなっていない。118にみられるようなよじれ痕跡は目立たないが，器壁の凸凹が目立つ。底は摩耗しており，布痕のみえない部分もある。編布部の上部から口縁にかけてはススが付着している。内面はミガキに近いナデで，押圧痕がある。コゲが付着している。

118は口径40㎝，器高13.8㎝で，胴部下半に編布圧痕が残り底面は摩滅している。編布は10㎝四方の間に横71本，縦11本の糸があり，中央付近にまっすぐ伸びる幅8㎝のかがり痕がある。口縁近くの3か所以上によじれ痕跡がある。口縁端から2.5㎝幅に鉢巻状の突帯が



第33図　縄文時代晩期の土器（5）

貼付けられ，横方向にナデている。底はすり減っておりススは付いていないが，口縁付近から胴上部にはススが密に付いている。内面はミガキに近い丁寧なナデ調整で仕上げている。底部には押圧痕がみられる。底から胴半ばにかけてコゲの痕が残り，口縁部付近には積み上げの痕が見られる。板状粘土帯の積み上げの可能性がある。

119 は口縁部が欠損している。高さ 8 ㎝あたりで，やや狭くなってまっすぐ立ち上がり，横方向にナデている。この部分にはススが付着している。底部近くに，器壁の厚さが 1.2 ㎝の瘤状膨らみが 4 か所あり，胴部下半に深い網目圧痕がある。網目は 10 ㎝四方に縦・横 29 本ずつの糸がある。内面は丁寧な横ナデで押圧痕がみられる。全面コゲが付着している。

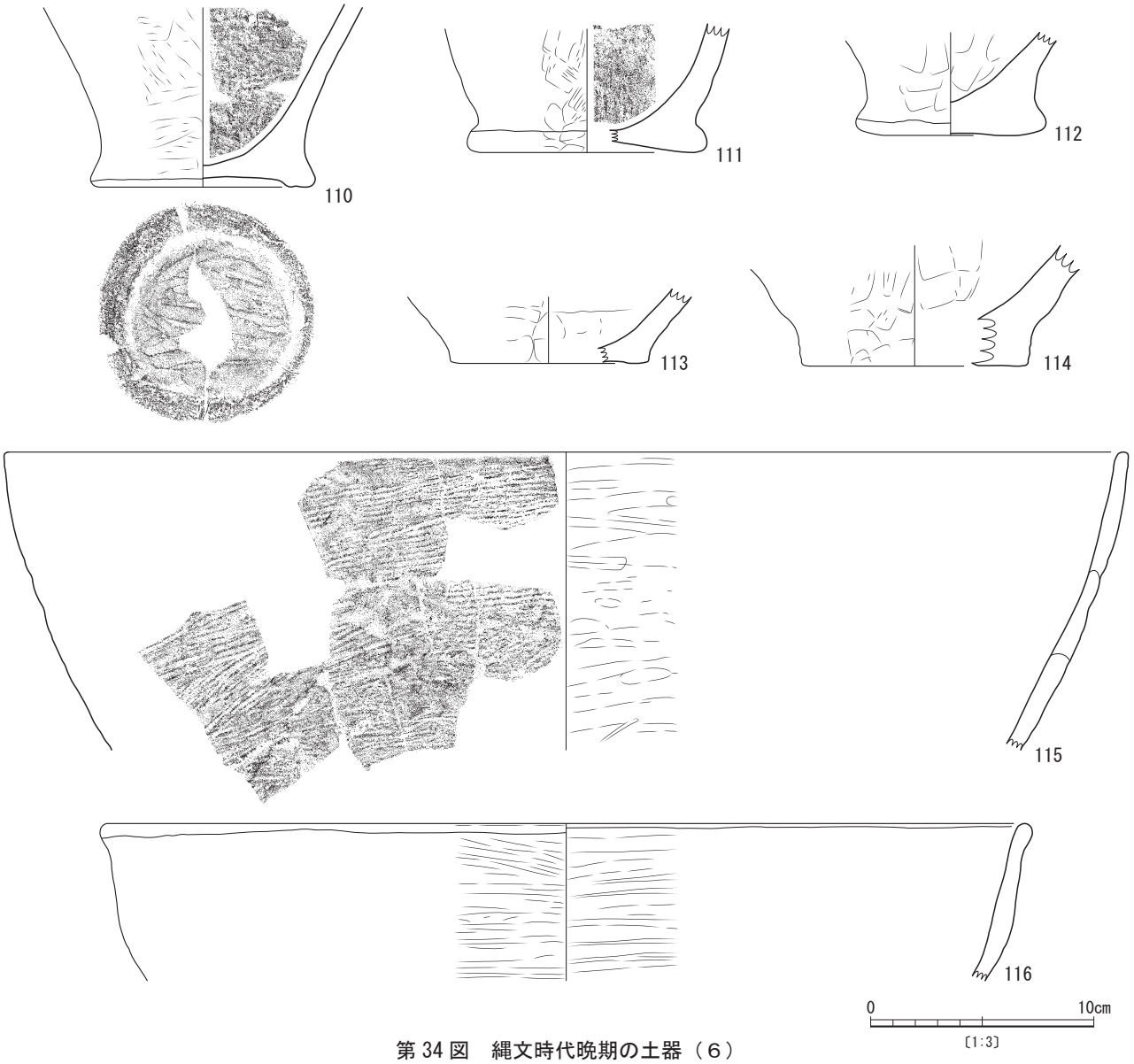
120 ～ 123，124 ～ 129，130 ～ 137，139 と 140，145 と 146，147 と 148 は，組織痕・色調や胎土からそれぞれ同一個体と考えられる土器である。130 ～ 137 と 138 は網目圧痕が残り，それ以外は編布圧痕が残る組織痕土器である。

ウ　浅鉢（第 40・41 図 149 ～ 187）

149 は頸部から外へ広がり，端部が直に立ち上がる。口唇部には沈線がある。玉縁状口縁を呈し，肩部はゆるやかな屈曲である。外面にはススが付着する。

150 も口縁外面に沈線を施す。

151 ～ 156 は口縁部が外反，またはまっすぐに立ち上がり，胴部で屈曲する器形を呈し，おおむね内外面ともヘラミガキである。151 は口径 29 ㎝で，口縁端と屈曲部の距離が短く，屈曲部に積み上げ痕が見られる。152 は口径 35 ㎝で，内外面の口縁部から屈曲部直下にかけて，丹塗りが施される。153 は口径 29.5 ㎝で，口縁部下部の屈曲部に幅 5 ㎜程度の凹線が施される。155 は口径 32.6 ㎝で，口縁部上部と下部に 1 条ずつ沈線があり，破損部に径が 4 ㎜・深さ 3 ㎜の未貫通の補修孔がある。内面は丁寧な横位のヘラナデである。156 は口径 26.5 ㎝で，口縁部から屈曲部にかけて丹塗りが見られる。屈

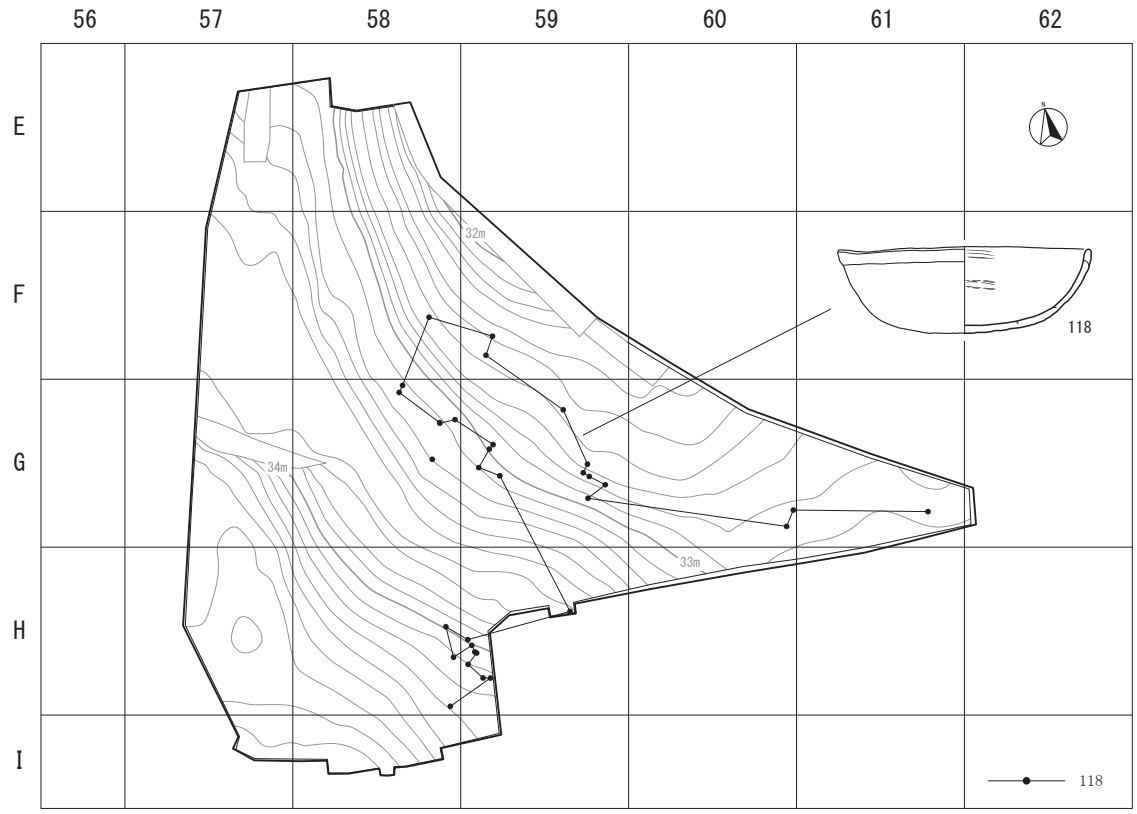


第 34 図　縄文時代晩期の土器（６）

第 35 図　縄文時代晩期の土器（７）

[1:450]

（1グリッド 10m×10m）



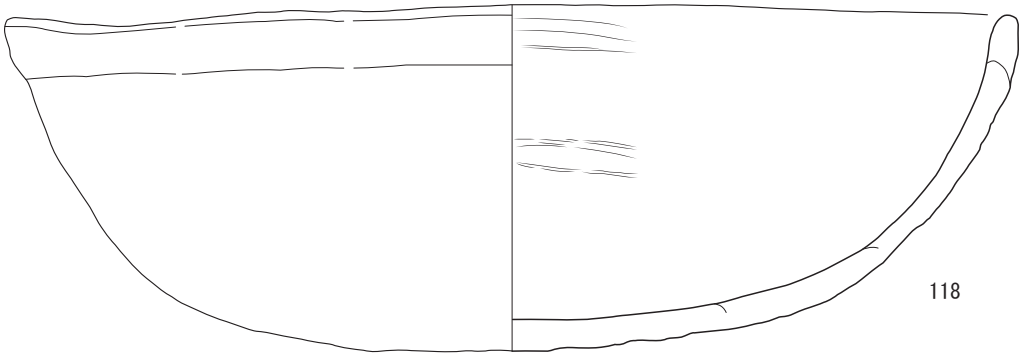
[1:450]

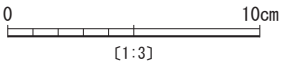
（1グリッド 10m×10m）

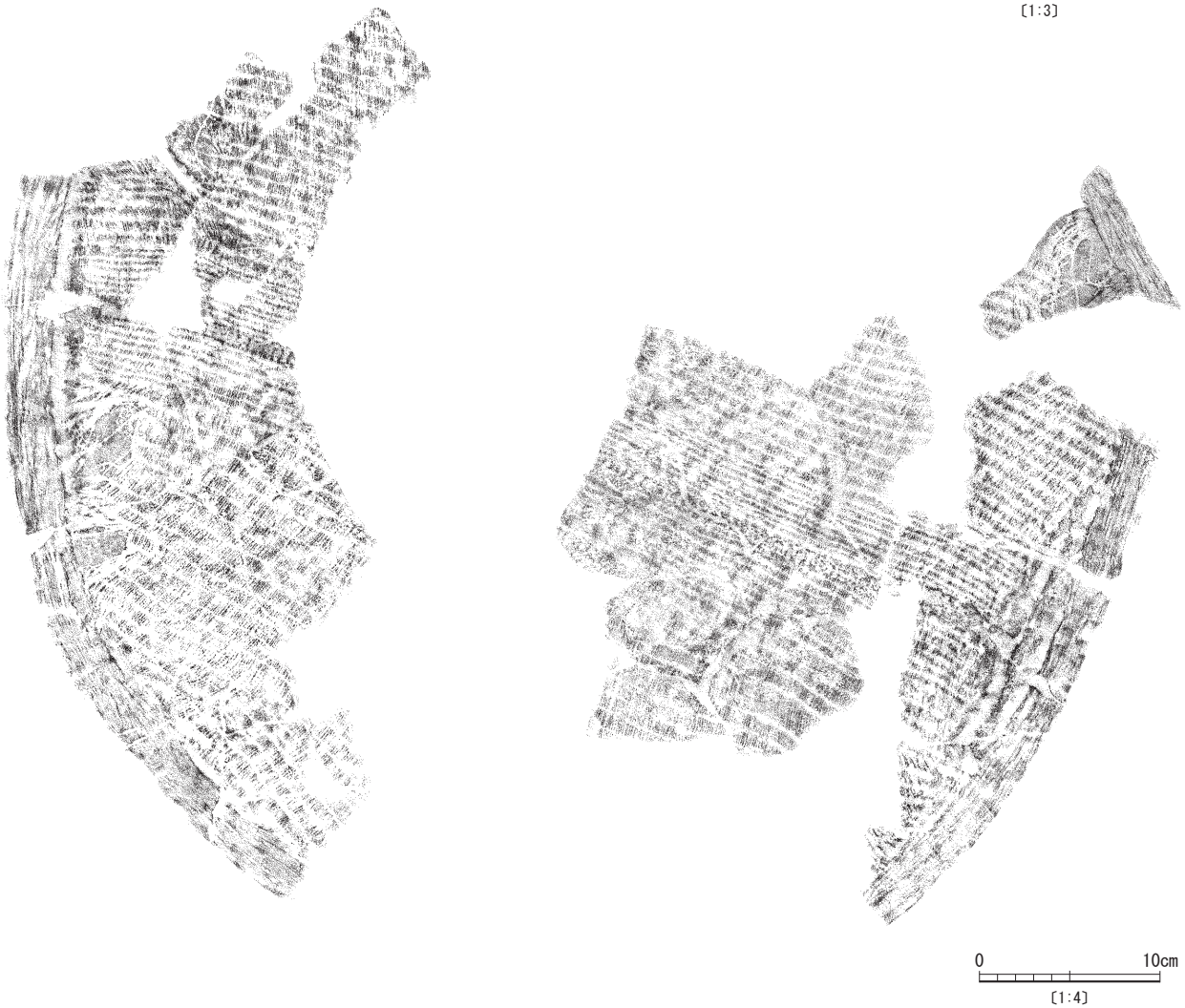
第36図　縄文時代晩期の土器接合図（３）

曲部には沈線が施される。

157 ～ 172 は口縁部で，外反またはまっすぐに立ち上がる。161 の外面は横位のヘラミガキで，内面は横位のヘラナデである。163 と 164 は口唇部が丸みを帯びている。163 の内面は上部はヘラナデのあとヘラミガキで，下部はケズリを行う。166 と 167 は外面に丹塗りが施される。マリの可能性もある。168 の口唇部は玉縁状につまみ出し，外面が貝殻条痕で，内面はナデである。169 は径８㎜の補修孔があり，孔は両側からもみ切り穿孔される。170 は口縁部下部に沈線が見られる。171 は口縁部に鰭状突起がある。172 は口縁部に沈線があり，丹塗りをしている。





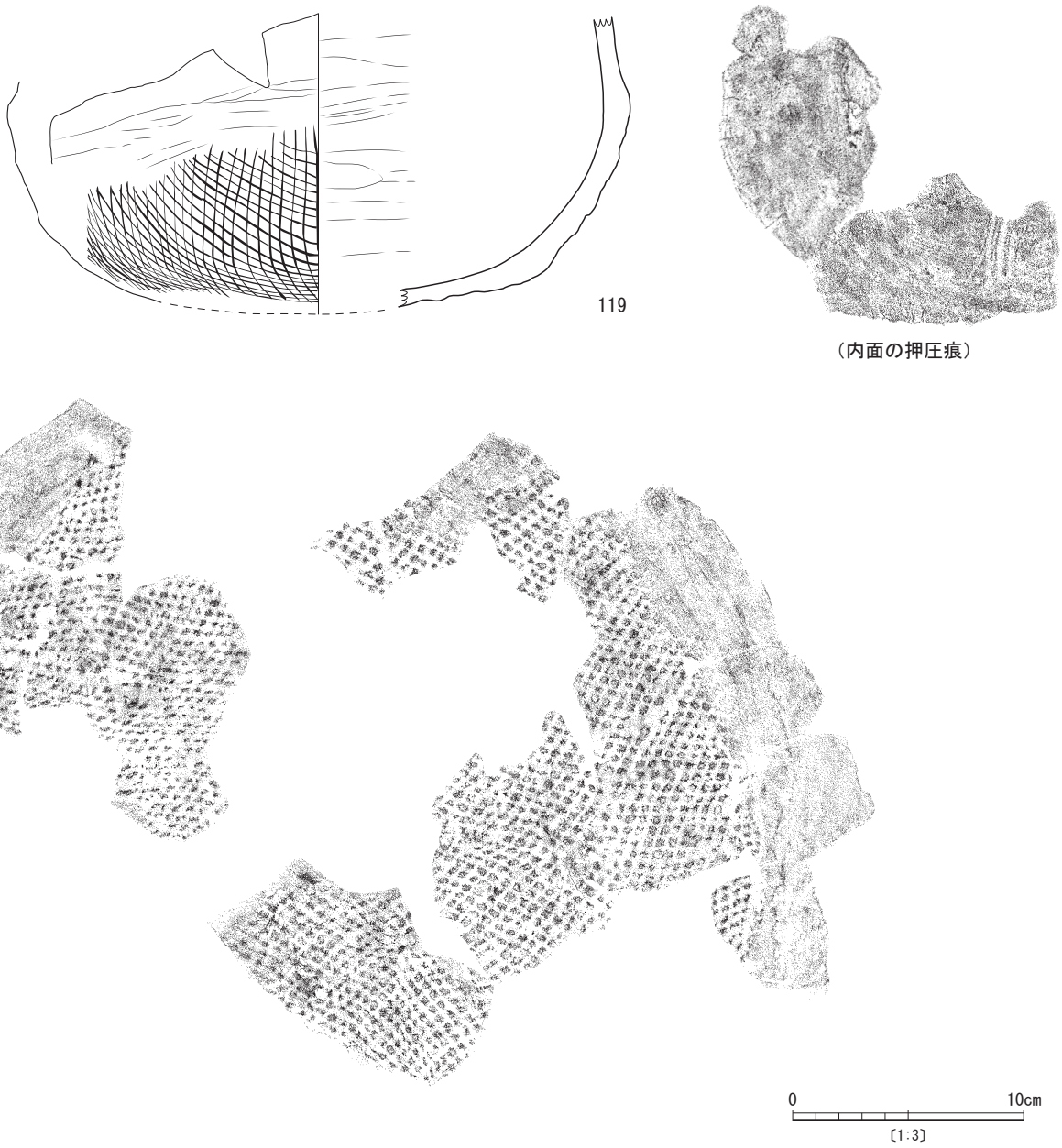


第 37 図　縄文時代晩期の土器（８）

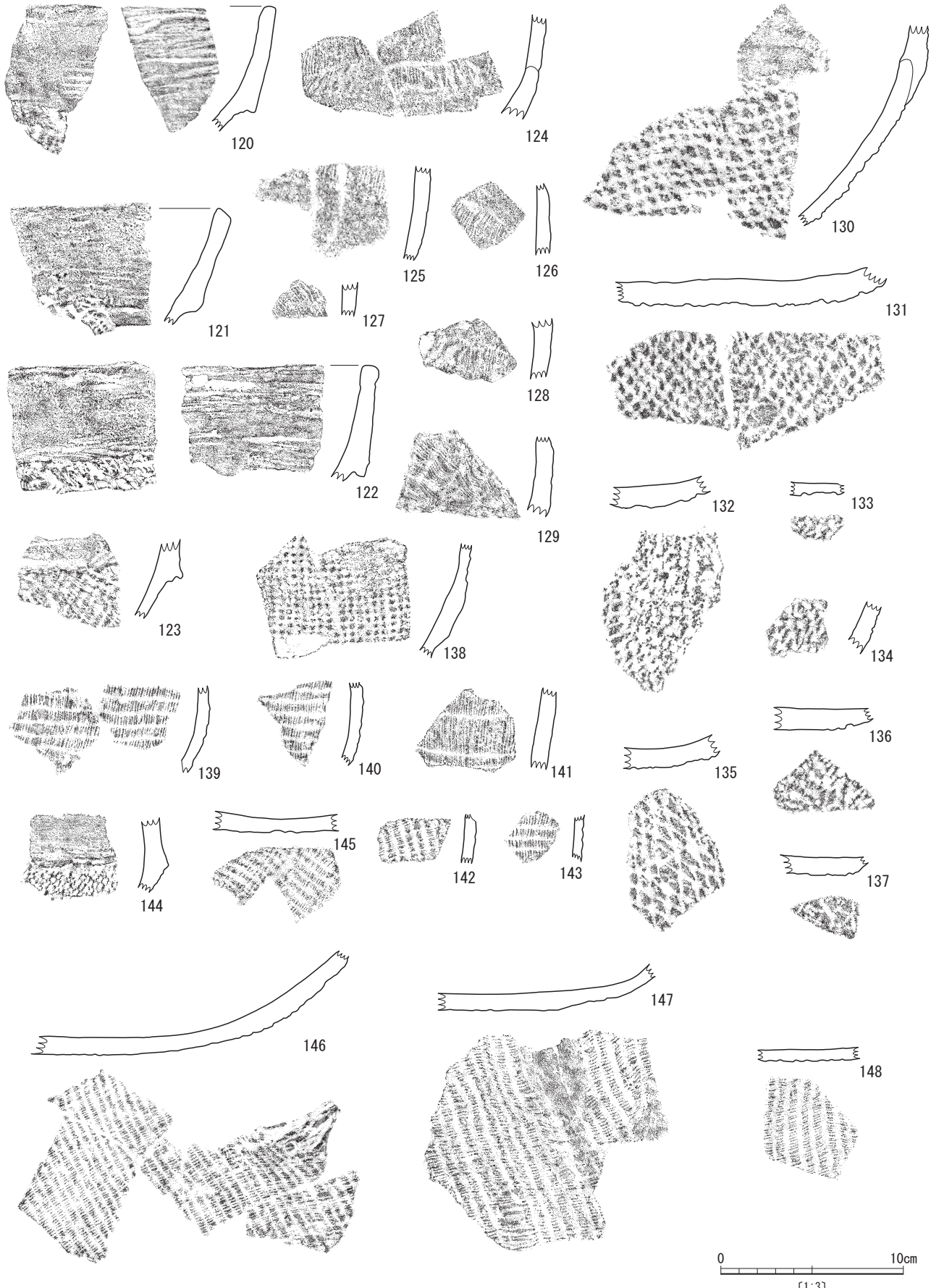
173 と 174 は口径 21 ㎝で，口縁部はわずかに外反し，ヘラミガキである。174 は屈曲部の三角突帯に，巻貝押圧による刻みを施している。

175 ～ 178 は胴部である。175 は屈曲部に 1 条の沈線があり，もう 1 条交叉する部分がある。器壁が厚い。177 は屈曲部に小さな刻みを施す。178 は屈曲部に突帯があり，その上にヘラ刻みを施している。

179 ～ 187 は底部で，底部から胴部が開きながら立ち上がる。179 ～ 182・184・185 は充実高台状になっている。179 の底面はヘラナデである。181 は内外面及び底面にミガキを施す。180 と 184 は 底部近くに 1 条の沈線を施す。182 と 185 は他に比べて，底面の器壁が薄い。187 は外面に丹塗りを施し，高台が付く。畳付けの部分は摩滅しており，丹塗りが剥げている。183・186 は平底である。



第 38 図　縄文時代晩期の土器（９）



第 39 図　縄文時代晩期の土器 (10)

第 40 図　縄文時代晩期の土器 (11)

エ　小型浅鉢（第 41 図 188 ～ 190）

188 は口径 19 ㎝・器高 4.9 ㎝で，外面下に沈線があり，玉縁状の口縁部を強調する作りとなっている。内外面とも丹塗りが施され，底面は剥がれている。

189 は口径 16.3 ㎝で，屈曲部から内弯気味に口縁部が立ち上がる。外面にはススが厚く付着し，内面には焦げ痕が残る。

190 は口縁部が低い玉縁状である。

オ　壺（第 42 図 191 ～ 200）

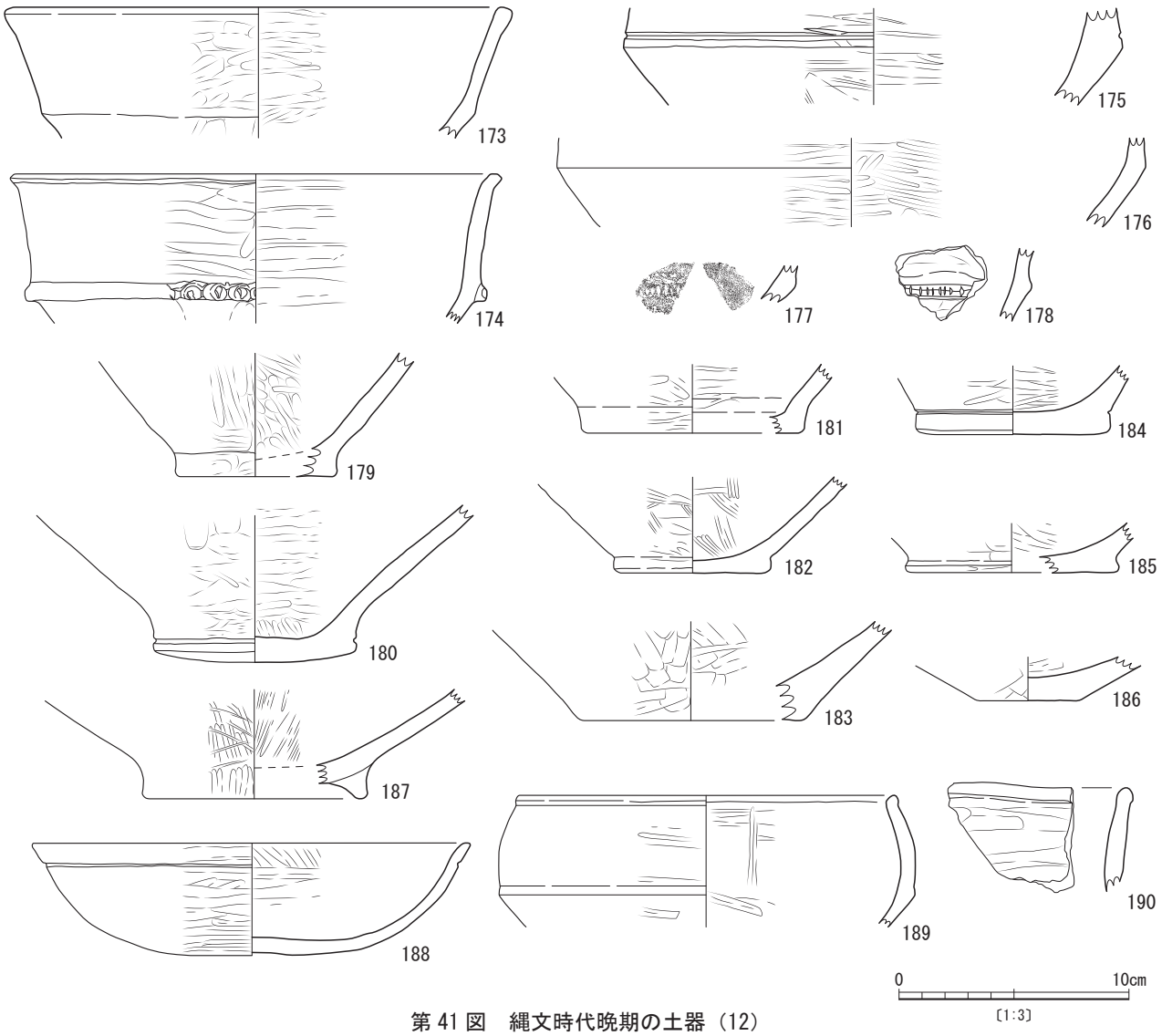
191 は口径が 11.5 ㎝ある。口縁部から胴部下部の破片である。口縁部が締まり，胴部が張りくの字状に屈曲する器形をしている。口縁部に突帯があり，口縁下部に沈線と三叉文が施され，沈線の一部に丹が残っている。胴部の屈曲部には突帯文とその上に 1 か所浮文がある。

192 は肩部から底部で，胴部が張りくの字状に屈曲し，底部は低い高台状になる器形である。頸部に突帯があり，胴部屈曲部に沈線を施す。

193 ～ 195 は口縁部である。193 は内面に丹塗りを施す。195 は口唇部を折り曲げて作り出している。縦横の凹線が見られ，三叉文の可能性もある。

196 は頸部で 1 条の沈線があり，三叉文も見られる。191 と類似する。

197 は胴部で，下部がわずかに膨らみ，上部にかけてやや締まりながら立ち上がり，肩部には 2 か所に把手がある。底部は安定した丸底と推測される。器壁は薄く，外面には，タタキ痕が見られるが，頸部から上部は，縦方向のヘラミガキを行って消している。下部はタタキ痕が残り，条痕風に仕上がっている。内面は当て具痕が残っているが，そのあとナデ調整をしている。なお，タタキでなく，上部はヘラミガキのみ，下部は横位の条痕のあとナデを行っている可能性もある。外面はにぶい褐色，内面は褐灰色で，角閃石・白色石などを含むが，在地土器に見られる金雲母は見られない。焼成は良好で，堅く緻密である。竪穴住居跡 1 号から一部出土しているが，包含層遺物と多くが接合したため，ここで記載した。



第 41 図　縄文時代晩期の土器（12）

198 ～ 200 は胴部で，器形は丸みを帯びており，安定した丸底になると推測される。いずれも無文で，外面はミガキを施している。

カ　マリ（第 42 図 201 ～ 204）

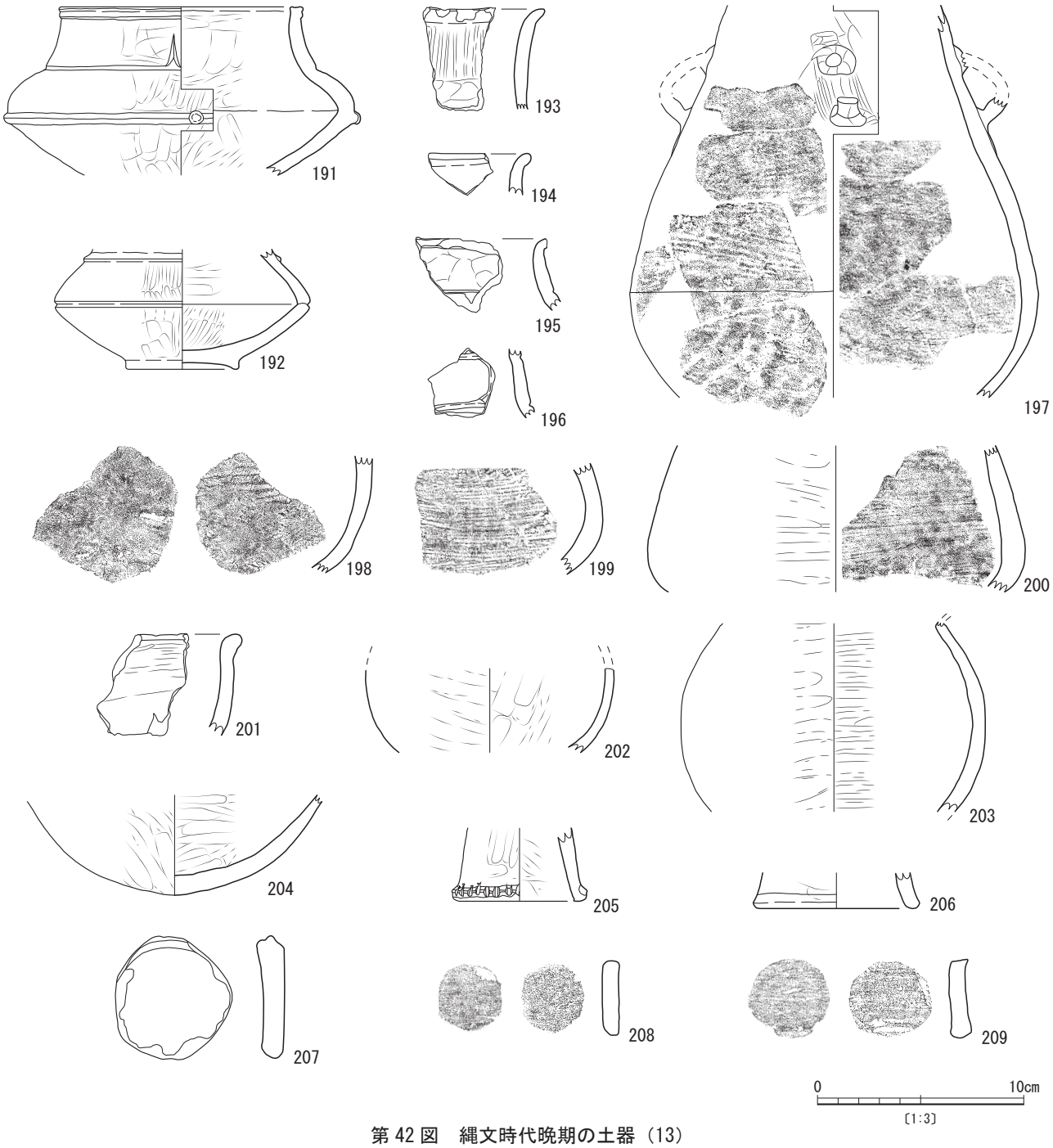
201 ～ 204 はマリである。201 は口縁部から胴上部で，丁寧なヘラナデである。202 は胴下部で最大径 12 ㎝である。外面はヘラミガキで，内面は丁寧な縦位のヘラナデである。最大径の部分の継ぎ目で，きれいに破損している。203 は胴部で最大径 14.8 ㎝である。外面は丁寧な横位のナデで，内面は横位のナデである。204 は胴下部から底部で，内外面とも丁寧なヘラナデである。底面が黒色化している。

キ　台付鉢（第 42 図 205・206）

205・206 は台付鉢の脚台である。205 は脚台端径 6 ㎝で，脚台端近くに突帯があり，その上に巻貝押圧による刻みを施す。206 は脚台端径 8 ㎝である。

ク　円盤状土製品（第 42 図 207 ～ 209）

207 ～ 209 は円盤状土製品である。207 は径が 6 ～ 5.6 ㎝で，土器底部の転用品である。周辺を研磨して成形している。208 は径が 3.4 ～ 3.3 ㎝で，表裏とも丁寧なミガキで，浅鉢の転用品と判断される。周辺を研磨して整形している。209 は径が 4.2 ～ 3.8 ㎝で，表裏とも丁寧な横位ナデで，深鉢形土器の屈曲部の転用品と判断される。周辺はミガキで仕上げている。



第 42 図　縄文時代晩期の土器（13）

（４）石器

第１地点で出土した石器類は総数 305 点である。その器種別の内訳は，打製石鏃 12 点，石錐３点，二次加工剥片２点，削器１点，石匙２点，横刃形石器６点，打製石斧 24 点，磨製石斧８点，敲石３点，磨石類 18 点，石皿 12 点，砥石５点，剥片・砕片等が 209 点である。

調査区西側を除き，全体に散漫な出土状況を示しており集中は見られない（第 43 図）。

包含層と時期は，Ⅰ～Ⅳ層にかけて出土し，Ⅳ層を主体として大多数を占めるが，時期区分が明確ではないため，ここでは縄文時代前期から晩期，及び一部弥生時代に帰属する可能性のある石器を一括して報告する。

剥片・砕片を除き，原形を留めるものをほぼ全点，計 81 点を図示した。なお，石材鑑定は肉眼観察による。

ア　打製石鏃（第 44 図　210 ～ 221）

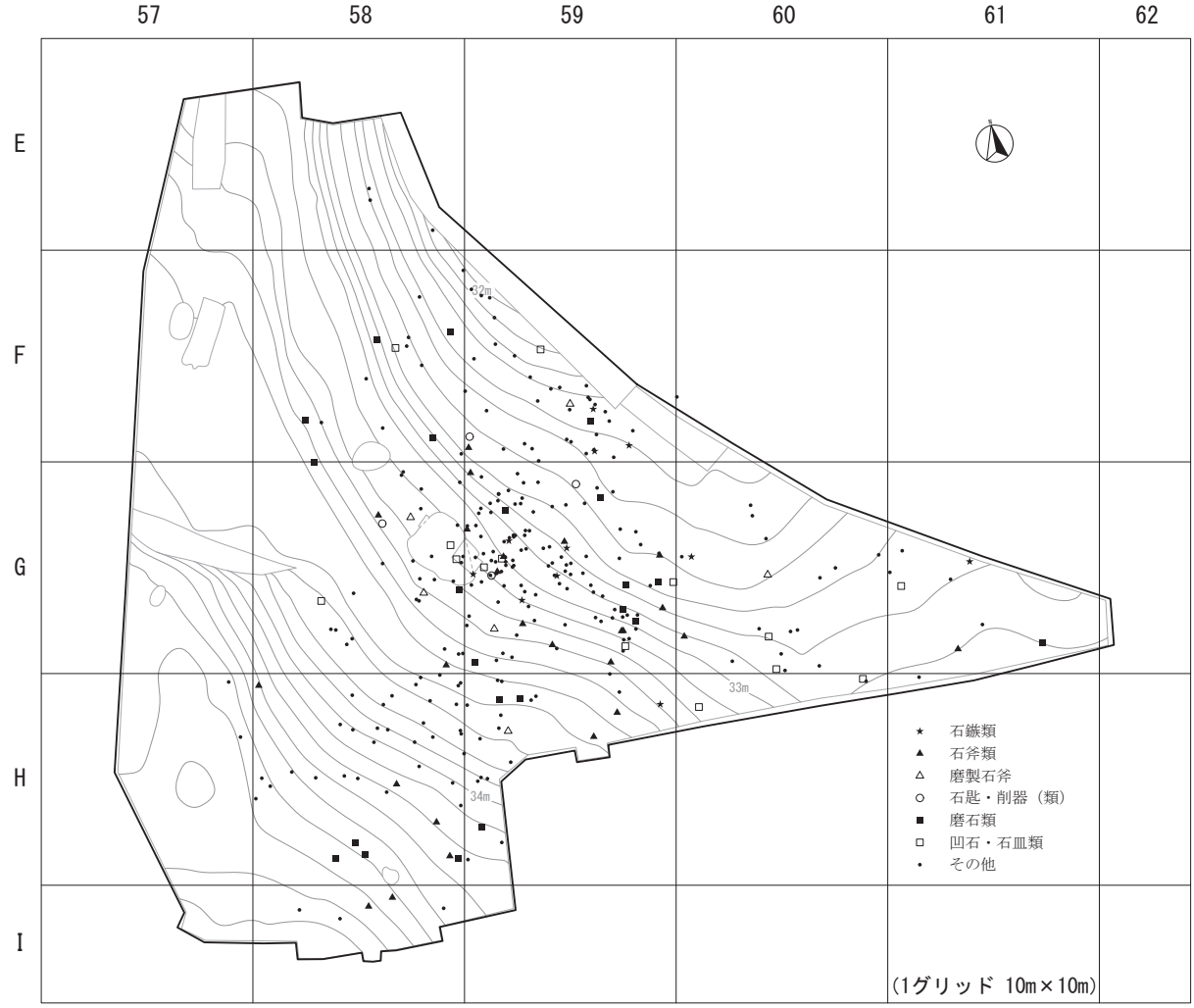
12 点図化した。この内，縦長の長幅比をもつ 210 ～ 212 をⅠ類，ほぼ等しい長幅比をもつ 213 ～ 216 をⅡ類，やや幅広の長幅比をもつ 217 ～ 221 をⅢ類とした。Ⅰ類では，片面に素材の主要剥離面を残した薄みの整形が目立ち，210 は比較的深い抉入をもつ。211・212 は上半部を欠損する。Ⅱ類では，213 にのみ鋸歯状縁が形成されている。213 と片脚部を欠損した 214 にやや深い抉入がみられる他，215・216 は抉入が浅い。Ⅲ類は，いずれも抉入が浅く弧状の側縁を形作る。220・221 には小さく突き出した特徴的な先端部がみられる。217 は全体に細部調整が行届いていない粗雑な作りのものである。218・220・221 は片脚部を，219 は上半部を欠損する。石材は，211・212・214・216 ～ 221 が安山岩，210・215 が頁岩，213 がチャートである。

イ　石錐（第 44 図　222 ～ 224）

３点図化した。222 は全縁に渡る二次加工によって，上半の摘み部がやや膨らんだ長身の細身を呈し，精密な調整剥離による尖鋭な錐先部をもつ。頁岩製。223 は短身にして，やや粗い調整剥離によって形作られ，摘み部に素材面を残置している。チャート製。224 は逆三角形に未調整の摘み部をもつ短身で，錐先側に簡単な調整剥離を加えている。安山岩製。

ウ　二次加工剥片（第 44 図　225・226）

２点図化した。225 は表裏で一方の側縁を調整して均整を図っている。尖った一端をもつことから，石錐であ



第43図　石器出土分布図［1:350］

る可能性がある。黒曜石製。226は弯曲した縦長剥片の側縁を抉入状に用いており，両側縁の表裏面に浅く連続した剥離が形成されている。使用による微小剥離痕を含む。黒曜石製。

エ　削器（第44図　227）

1点図化した。227は蛤形を呈する小型の削器とみられる。打面をもつ幅広剥片の下縁にのみ表裏面から刃部調整を施しており，平坦剥離による鋭く整った刃縁をもつ。安山岩製。

オ　石匙（第44・45図　228・229）

2点図化した。228・229は，ほぼ中軸に摘み部をもつとみられる横型幅広の石匙である。薄手の剥片を素材として，浅い周縁調整で形作られており，下縁刃部を直線的に整えている。どちらも身部に欠損があり，228は左右を欠く。石材はどちらも頁岩である。

カ　横刃形石器（第45・46図　230～235）

6点図化した。230～233は，いずれも下縁の直線的な刃部に対して，浅い調整剥離による背縁部が形成されたものである。素材剥片の鋭い末端ないし側縁を刃部とするが，230は刃部調整ともみられる剥離が連続する。234・235は三角形の形態を呈するものである。234は比較的急傾斜の刃部角をもち，使用痕とみられる小剥離が顕著である。235はやや大型にして弧状の刃部をもつ。厚みのある左側縁に表裏面から調整剥離を施す他，右側縁は薄く刃部ともなり得る。石材は，230・231・233がホルンフェルス，232・234・235が頁岩である。

キ　打製石斧（第46～48図　236～257）

22点図化した。この内，いわゆる有肩打製石斧として，基部幅に比べて刃部幅が広い236～245をⅠ類，基部幅に比べて刃部幅が比較的狭い細身の246～249をⅡ類とし，抉り部の形状が変則的な252～256をⅢ類とした。その他に小型品の257をⅣ類とした。Ⅰ類の内236～239は完形品であるが，237は3点の破片が接合している。236・237は比較的大形で左右非対称の片寄った尖頭状の刃部を有する。また，238の刃部は弧状に丸みを帯び，239は直線状の刃部を有する。この異なる刃部形状は機能的な形態差とみられる。240～245は欠損品であり，240は胴部から刃部側を欠き，242～245は基部ないし胴部から基部側を欠く。242は2点の破片が接合している。これらには238同様の弧状の刃部がみられるが，243は236と似通った尖頭状の刃部であり，刃縁及び表裏面に著しい摩滅が認められる。Ⅱ類では，完形品の246と刃部側を欠損した247に抉り部の浅い作出がみられる。また，246の刃縁及び表裏面には使用による摩滅が認められる。248･249は胴部から基部側を欠損し，248は尖頭状の刃部を有する。250・251はⅠ・Ⅱ類の欠損した基部である。Ⅲ類の内252～254は完形品である。いずれも基部から胴部にかけての片側縁に抉り部を作出しており，253・254は反対側の側縁に再加工を施した折れ面を留める。刃部は丸みを帯びている。255・256は基部から胴部の欠損品である。255の抉り部は小さく，縁辺と一部片面に研磨がみられる。Ⅳ類の小型品は257の欠損品が1点のみ認められた。しかしながら他器種の可能性もある。石材は，236～242・244・245・247～257が頁岩で大半を占め，243・246がホルンフェルスである。

ク　磨製石斧（第49図　258～265）

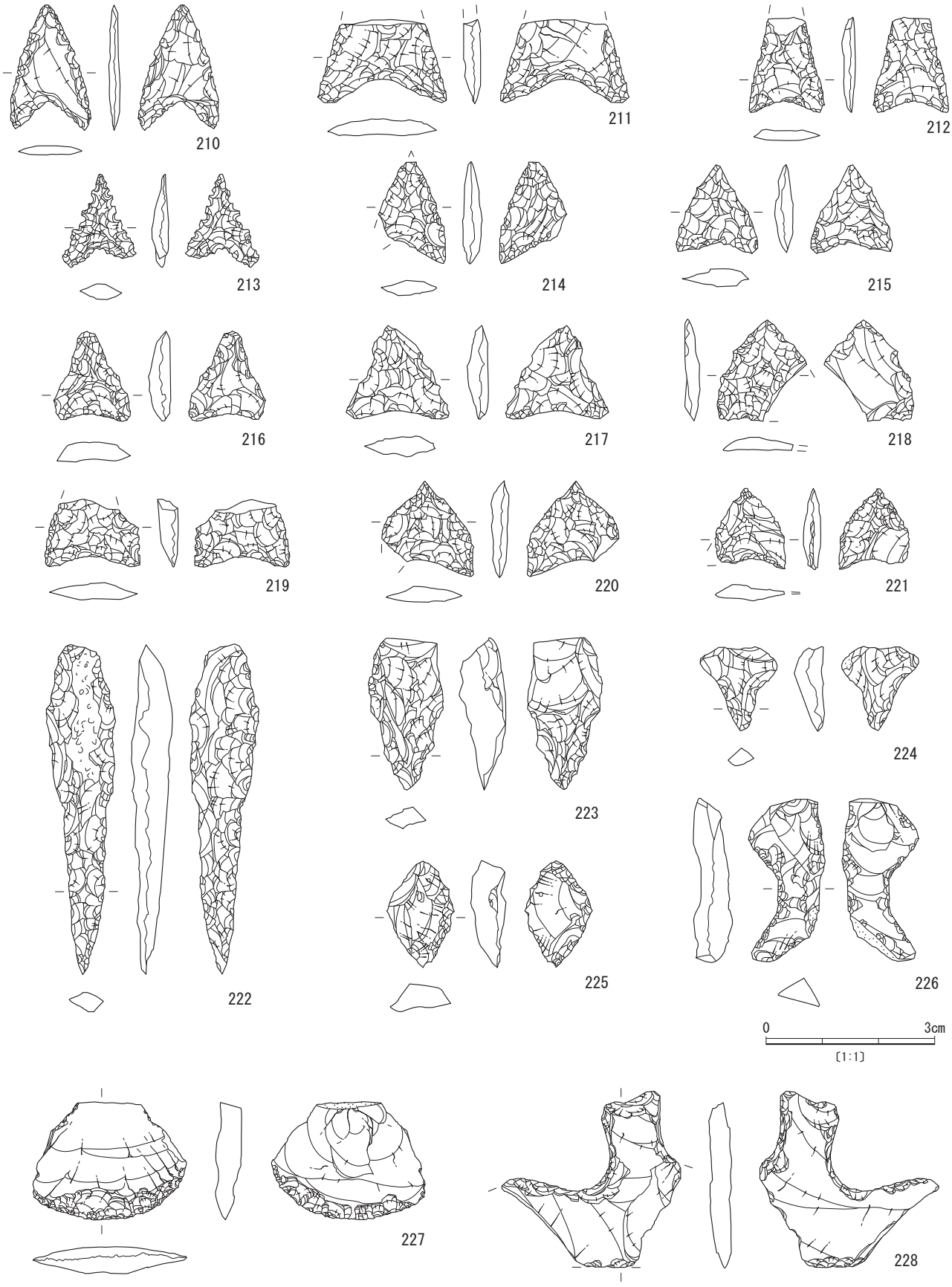
8点図化した。この内，定角式といえる258・259をⅠ類，断面形が凸レンズ形となる扁平な260～263をⅡ類，断面形が楕円形となる乳棒状の264・265をⅢ類とするが，それぞれに個性的である。258は片刃の刃部を上下両端にもつ鑿状を呈し，全体に比較的丁寧な研磨が施されている。双方の刃部には使用痕とみられる剥離が生じている。259は基部側に定角形状の研磨面を留めるものの，刃部から胴部にかけて粗い剥離の再加工が施され，両側縁の稜線に両極打撃による潰れ痕が見受けられる。基部末端を欠損している。260は鑿状を呈する小型品である。上下が欠損し，刃部方向は判断できない。261は片刃の幅広い刃部を有する。表裏に節理面と大きな調整剥離面がみられ，浅い研磨を施している。上半部を欠損する。262は再加工品の欠損した刃部側とみられる。片刃の研磨面を有し，表裏に粗い調整剥離を施している。263は弧状に小さく先細りの刃部を有する。浅い部分的な研磨により調整剥離面を残置している。上半部を欠損する。264は再生加工品である可能性がある。裏面の長軸に使用によって破損した衝撃剥離痕とみられる平坦面を残して，粗い敲打調整を施しており，そのうえ全体に弱い研磨が加えられている。刃部を欠損する。265は基部の欠損品である。入念に形作られており，敲打調整痕が全体にうかがわれ，その後の研磨による縦方向の顕著な擦痕がみられる。頂端部は平たく斜めに整形されている。石材は，258～264が頁岩で大半を占め，265が砂岩である。

ケ　敲石（第50図　266～268）

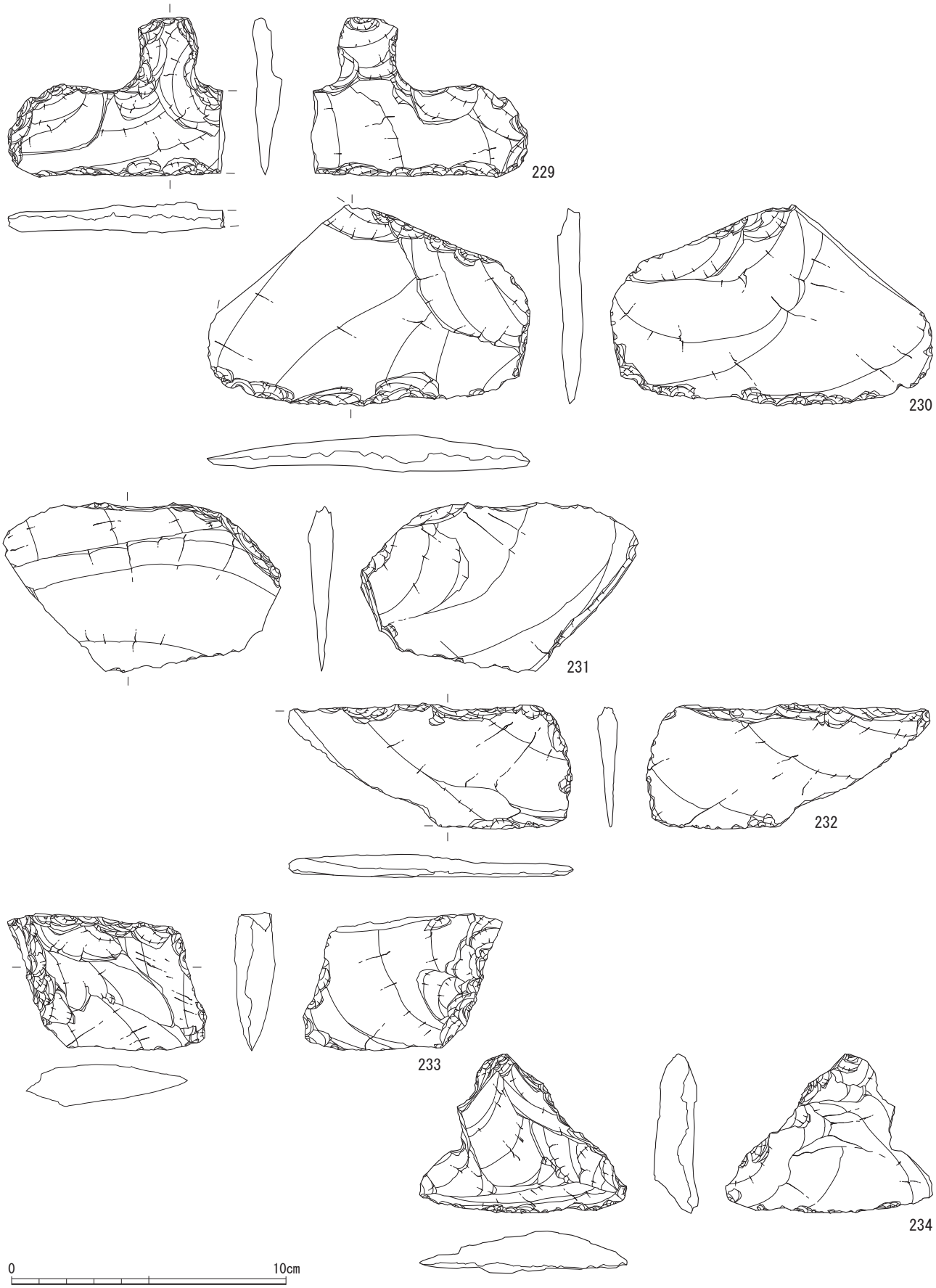
3点図化した。266～268は掌に収まる楕円球状の自然礫を用いたもので，長軸の両端あるいは側面の一部に敲打痕が生じている。268の側面には若干の磨面が認められる。石材はいずれも安山岩である。

コ　磨石類（第50・51図　269～281）

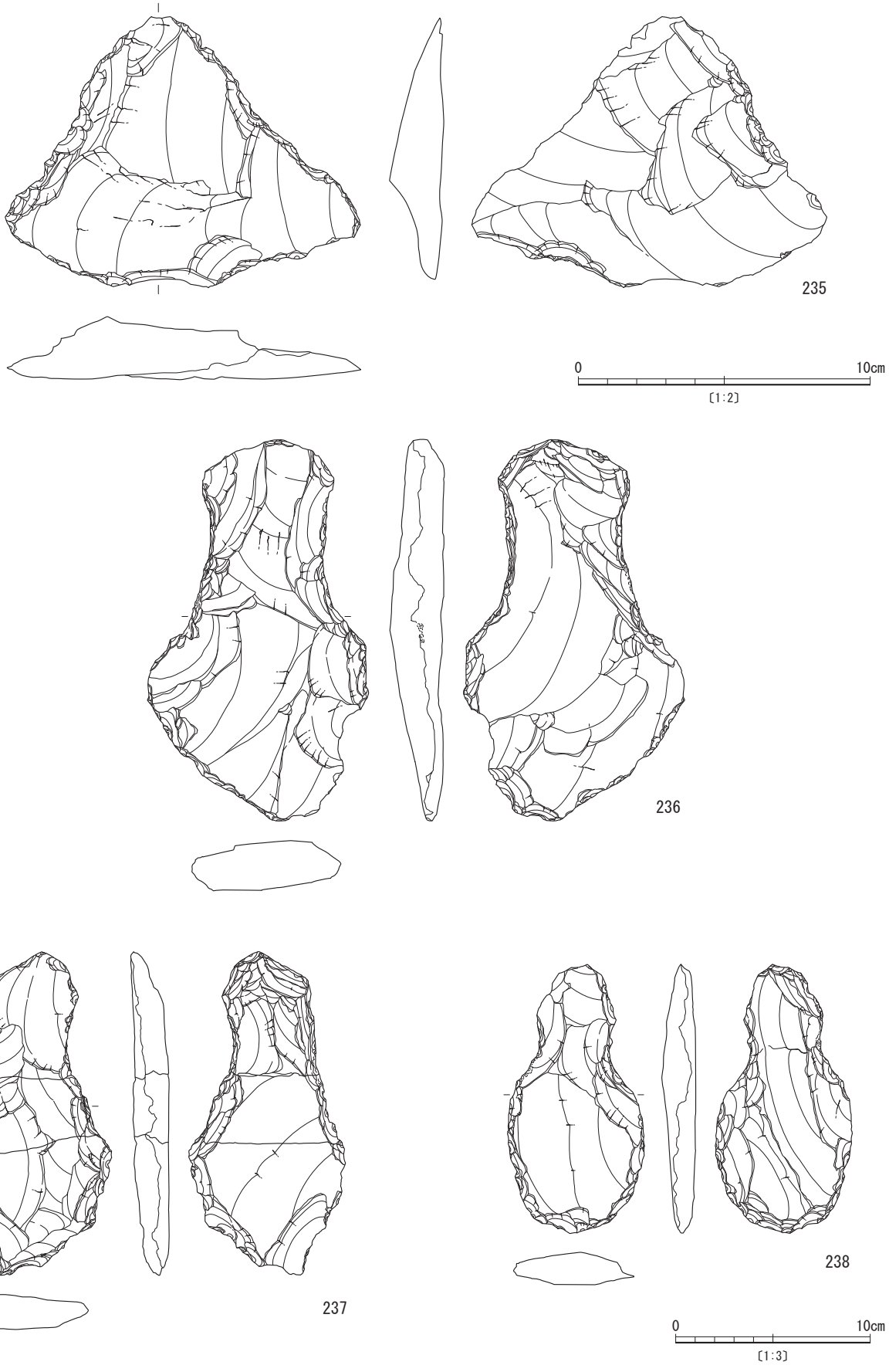
13点図化した。269～281は円形ないし楕円形の平たい礫を用いたものであり，270・273はより小型のものである。これらには，磨り痕・敲打痕・凹痕の各機能を併せ持ったものが見られることから，磨石・敲石・凹石を一括して扱った。いずれも表裏に磨面をもち，269～271は周縁に帯状の顕著な敲打痕が伴う他，271・279は磨面中央部に敲打による若干の凹痕が伴う。



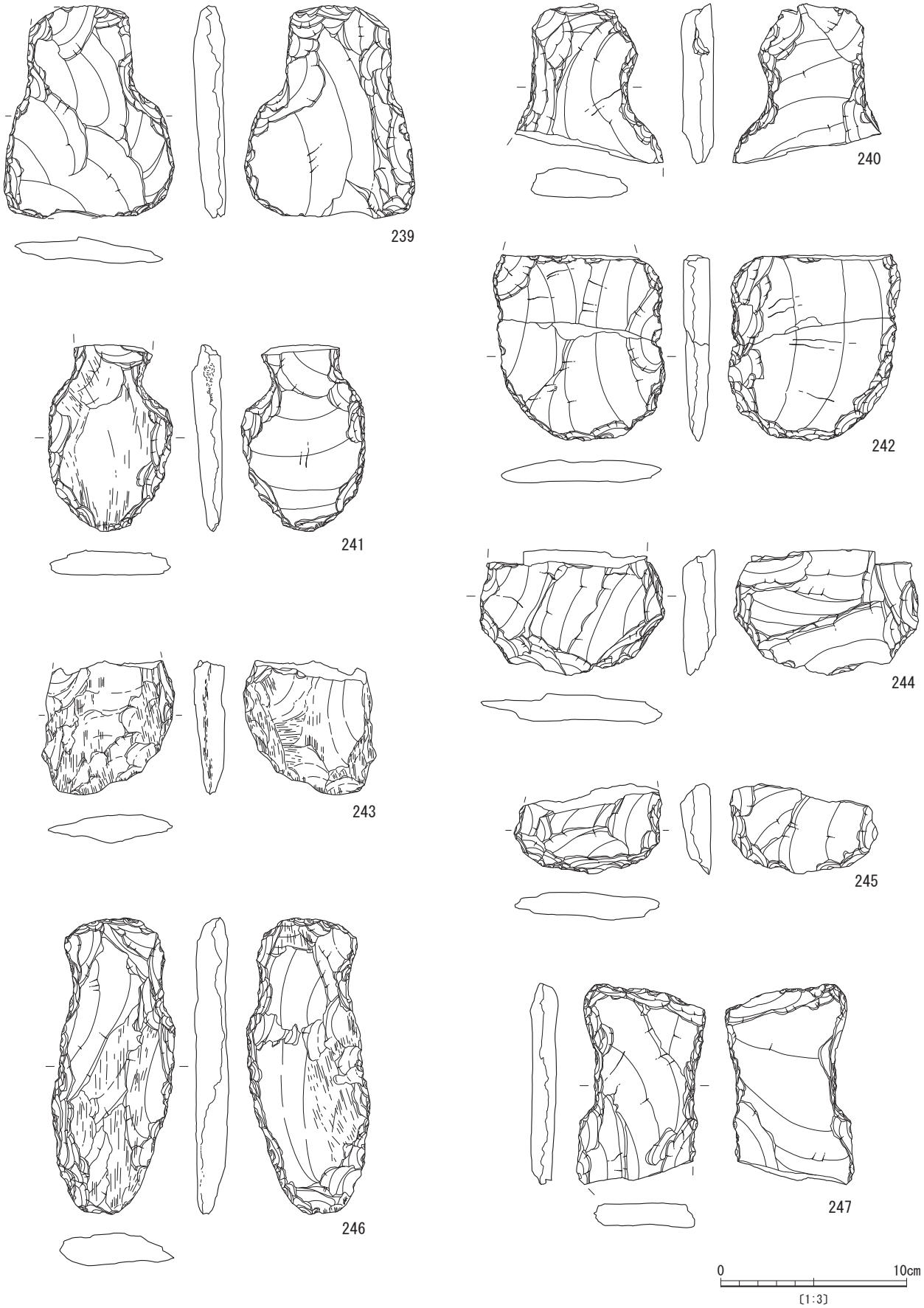
第 44 図　縄文時代の石器（1）



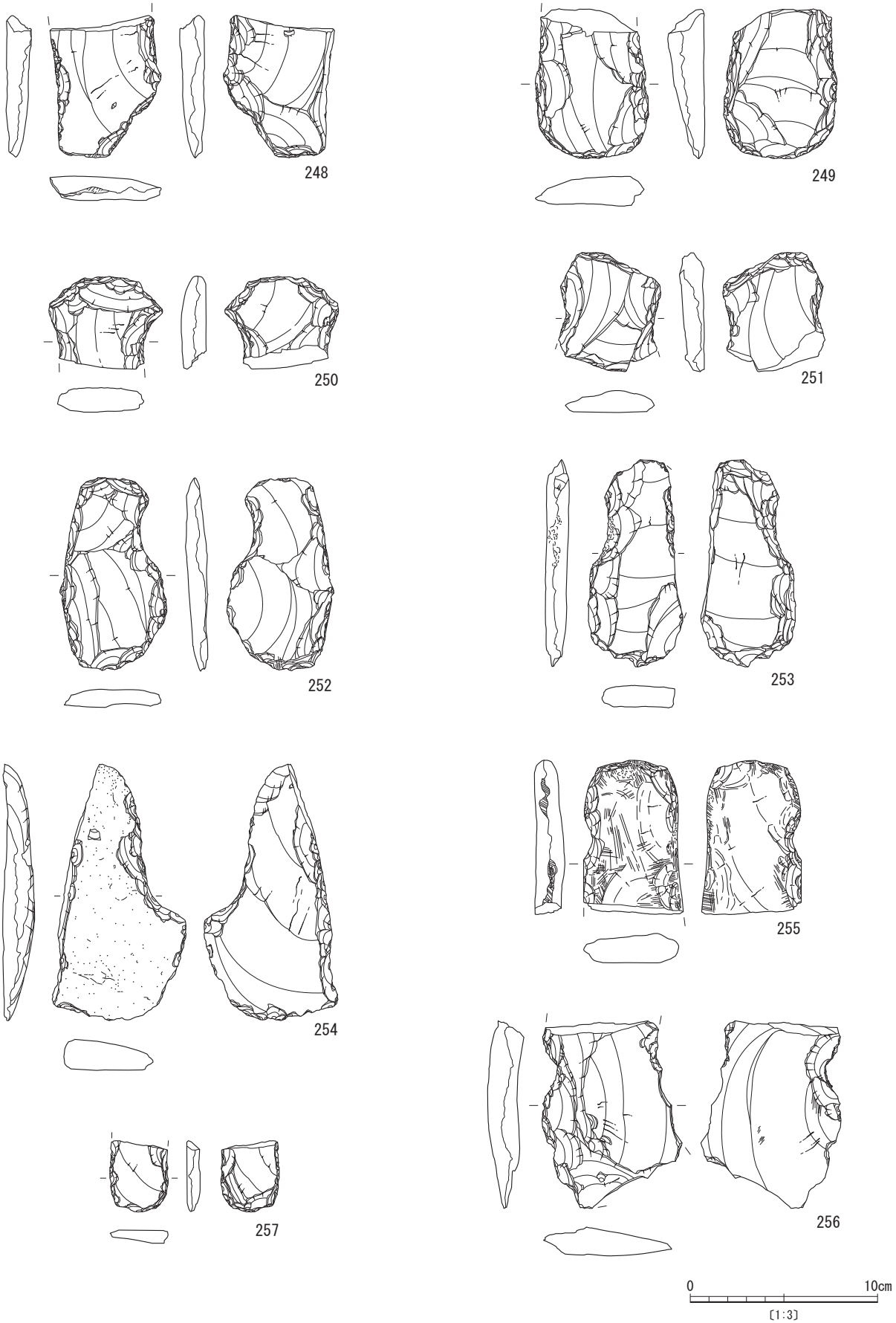
第 45 図　縄文時代の石器（２）



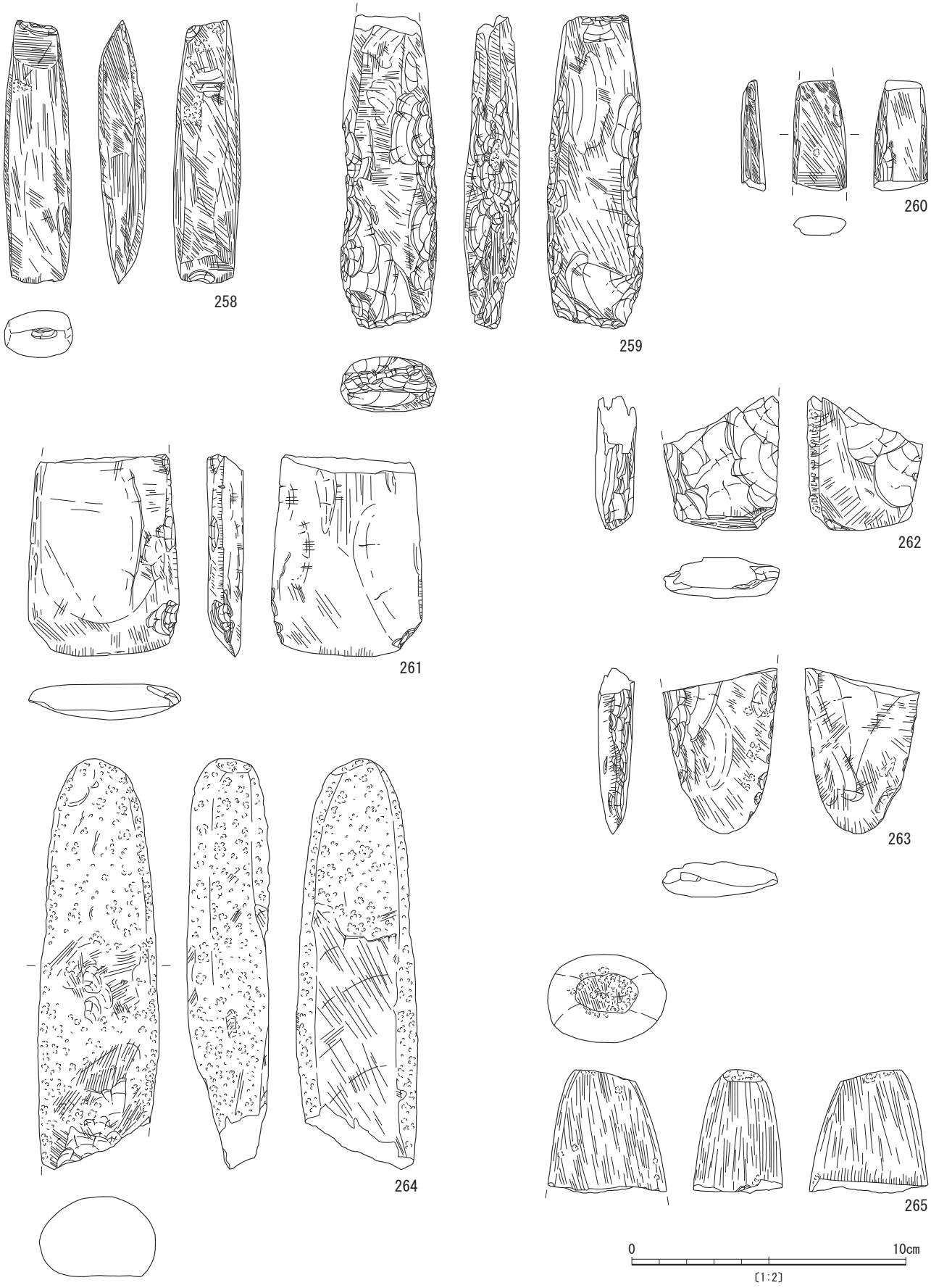
第 46 図　縄文時代の石器（3）



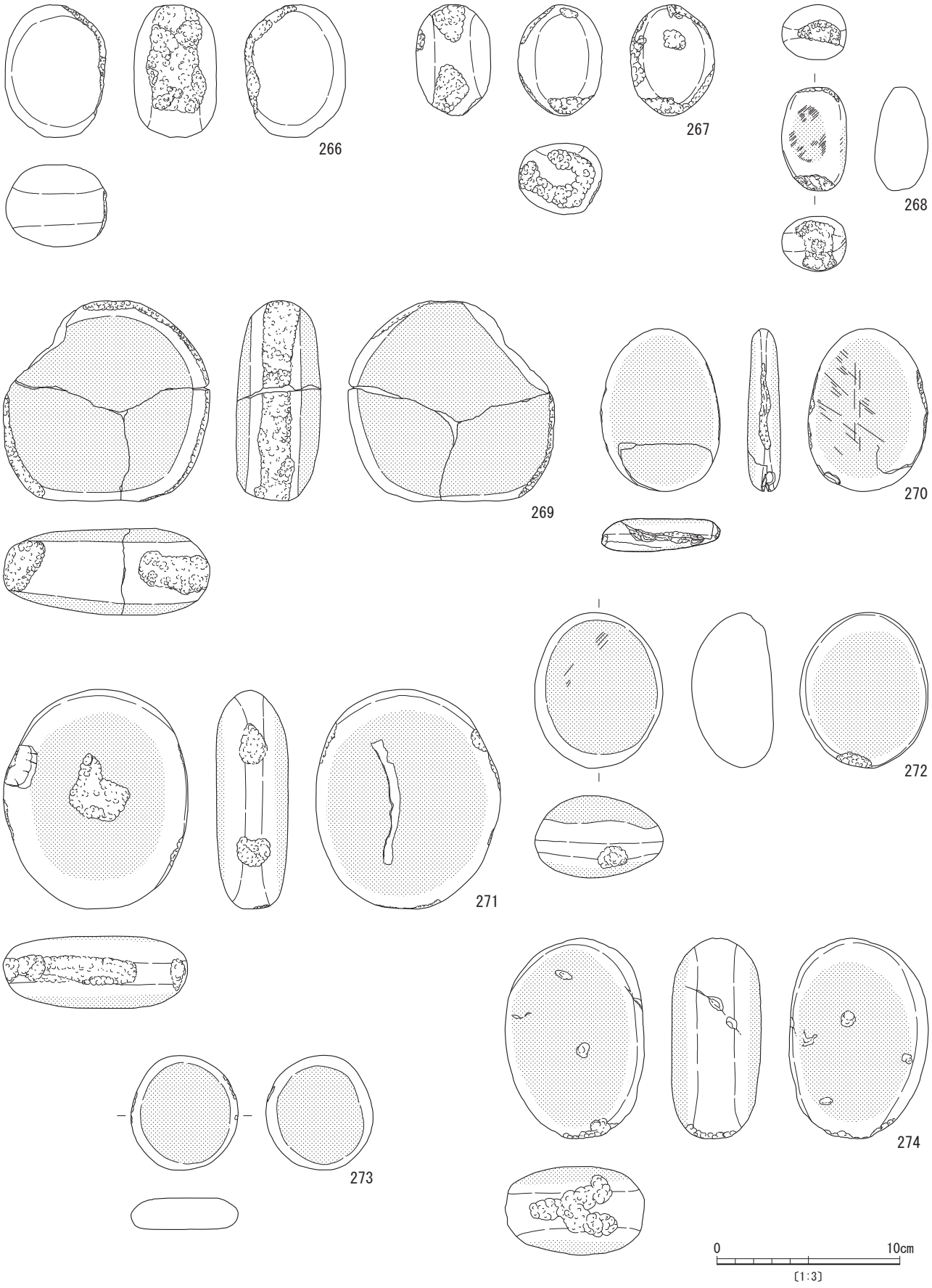
第 47 図　縄文時代の石器（4）



第 48 図　縄文時代の石器（５）



第 49 図　縄文時代の石器（6）

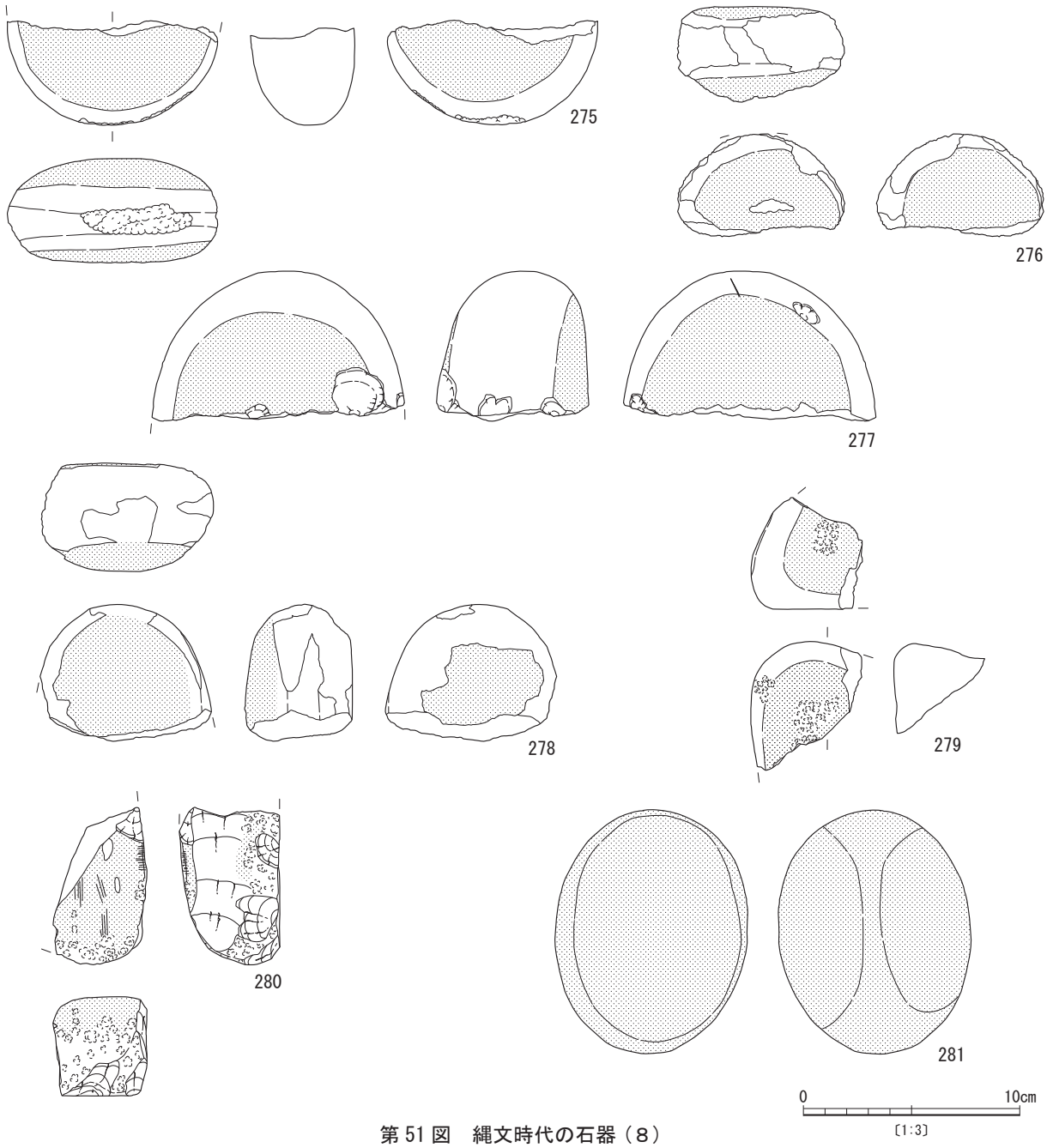


第 50 図　縄文時代の石器（7）

また 270 には斜方向の弱い擦痕がみられる。281 は磨面が全体に及んだ厚みのある器体で，皮なめし等の機能も推定されようか。これらのうち 269・270・275 ～ 280 は欠損品である。269 は 3 点の破片が接合し，270 は下端部の敲打によって剥がれた破片が接合している。271・273 には顕著な被熱赤化がみられる。石材は 269・271・272・274・275・279・281 が安山岩 , 270・273・280 が砂岩，276 ～ 278 が花崗岩である。

サ　石皿（第 52 図　282 ～ 288）

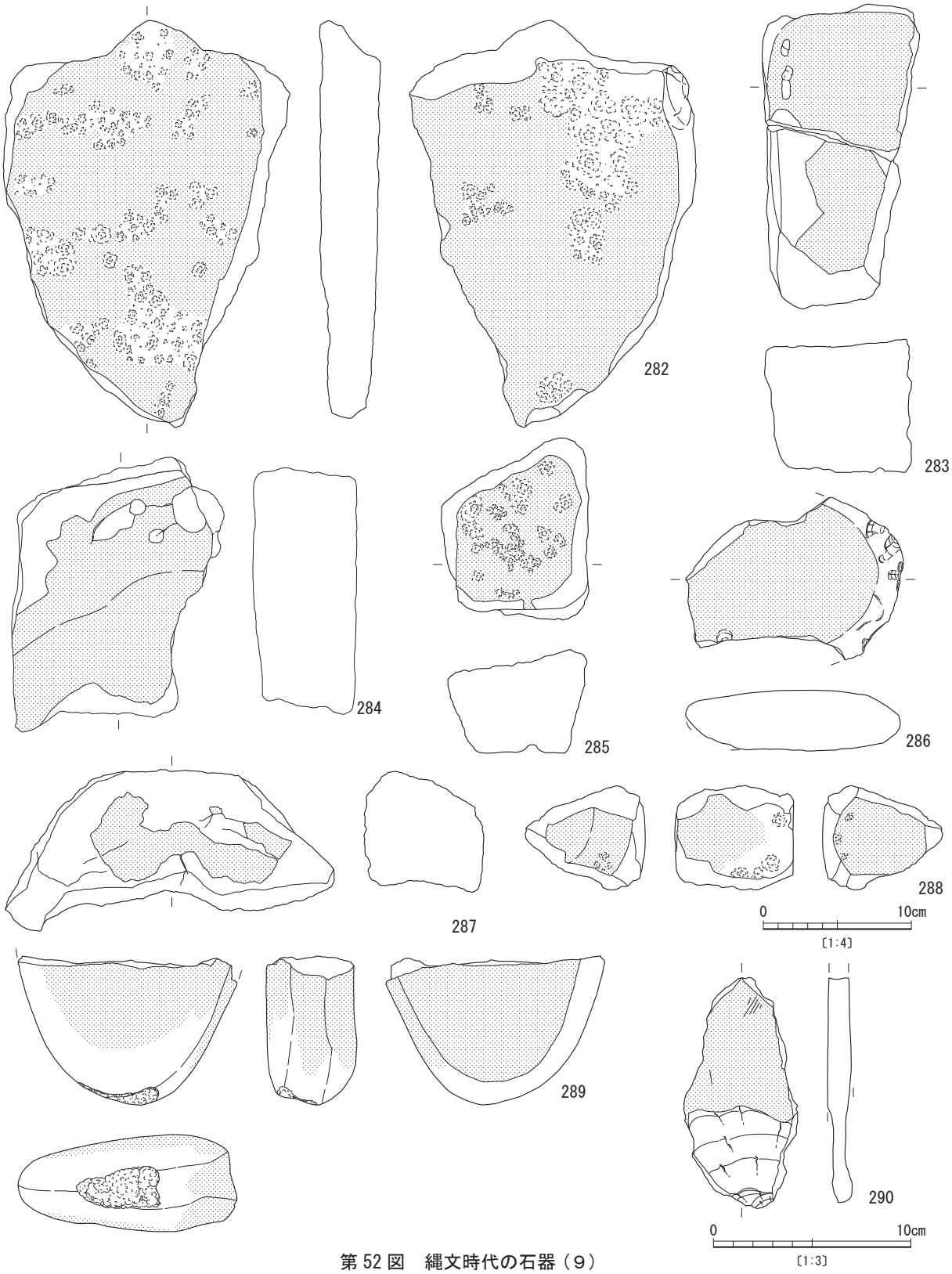
7 点図化した。282 ～ 288 は，いずれも平石を用いた扁平石皿の欠損品であり，使用面に加工としての窪み面が作出されたものはみられていない。282・285 の作業面には敲打痕様の凸凹面が含まれており，作業面の再生といった可能性もある。また 282 には顕著な被熱赤化がみられる。石材は，282 ～ 285・287・288 が花崗岩，286 が砂岩である。



第 51 図　縄文時代の石器（8）

シ　砥石（第 52 図　289・290）

２点図化した。289 は磨石の様に表裏に磨面と，下端に敲打痕がみられるが，厚みのある右側面にも浅い溝状の磨面が形成されている。また，裏側の磨面には光沢が生じており，やや歪に窪んだ面を呈する。欠損して，著しい被熱赤化がみられる。砂岩製。290 も欠損品とみられ，扁平な礫片の片面に滑らかな磨面を有するが，石皿破片である可能性もある。砂岩製。



第 52 図　縄文時代の石器（９）

第５節　弥生時代の調査

１　調査の概要

弥生時代の包含層はⅣａ層であり，中期の遺構・遺物がほとんどである。遺構は，土坑１基が検出されている。

遺物は，調査区北東側の傾斜面，Ｆ・Ｇ－58・59区に多く出土している。Ⅲ層～Ⅳａ層で多くが出土している。Ⅱ層～Ⅳ層出土の土器が混在している状況がみられたため，型式的に該当時期と判断したものを取り上げることとした。

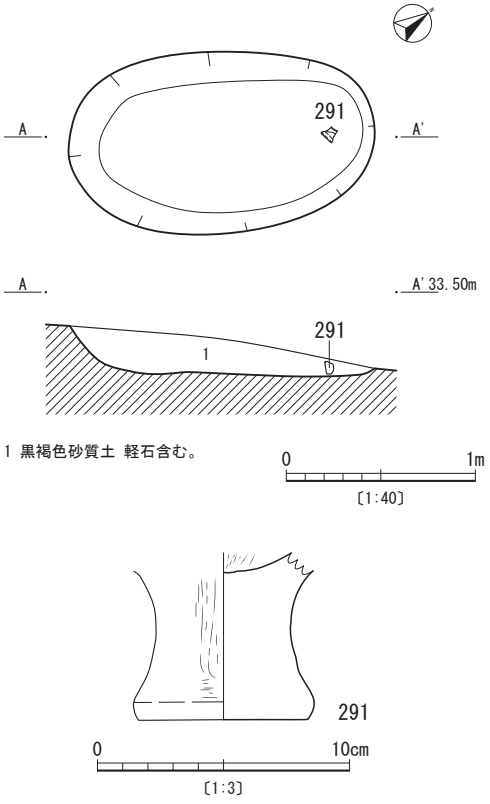
（１）　遺構

弥生時代中期の遺構としては，第23図の縄文時代晩期～弥生時代遺構配置図に示したように，土坑１基が検出された。

土坑１号（第53図）

Ｈ－58区のⅣａ層上面で検出された。平面形は，長径160㎝，短径96㎝の楕円形を呈し，検出面からの深さは20㎝である。床面は平坦で，側面は緩やかに傾斜する。埋土は黒褐色砂質土で，池田降下軽石を少量含む。遺構北側の床面では，弥生土器の脚台が１点出土している。

291は甕形土器の充実脚台で，底径6.8㎝，残存の高さが5.8㎝で比較的長い。脚台の端部は面取りを行い，段をもって終わる。内外面ともヘラナデであり，外面は赤褐色，内面は黒褐色をしている。その他に，弥生時代の甕形土器小片３点も埋土中から出土している。



第53図　弥生時代の土坑及び出土遺物

（２）　遺物

甕形土器・壺形土器・大型甕形土器・蓋形土器・磨製石鏃がある。

ア　甕形土器（第55～56図　292～328）

口縁部は端部に刻みのあるもの，口縁部がＬ字，「く」の字に屈曲するものなどがあり，胴部上部に三角突帯が貼り付けられる。底部は充実脚台である。

292は口縁部が緩やかに外反し，口縁端部に低い三角突帯が貼り付けられ，巻貝による押圧がある。横位のヘラナデで，外面は暗赤褐色，内面は暗赤褐色である。

293・295は断面三角形の口縁部で，口唇部は丸みを帯びている。293は口縁部直下にわずかに凹みがある。

294は口縁部から胴上半部で，口径16.6㎝である。口縁部は逆Ｌ字状を呈し，内側へわずかに突出している。口唇部は丸みを帯びている。胴部はしまりのある器形をしており，１～２条の鋸歯状沈線と４条の横位沈線がみられる。外面は縦位，内面は横位の丁寧なヘラナデである。焼成度は良く硬質である。同一個体と判断した２個体から，復元し図化した。

296は浅い凹線を巡らした逆Ｌ字状の口縁部で，内側へやや突出し，上面にわずかに凹みがある。ヘラナデである。

297・298の口縁部は水平で短く，先端に凹線があり丁寧なヘラナデである。297は口径26.4㎝で，内面には幅0.5㎝の浅い凹線風の凹みがあり，指押さえの痕がみられる。298は口径24㎝で，口縁部が丸みを帯びており，上面に丁寧なヘラナデの線が多数ある。

299は口縁部から胴部上半で，口縁部は逆Ｌ字状に屈曲し，口唇部には浅い凹線がある。肩部には３条の三角突帯がある。内外面は丁寧な横位のヘラナデで，外面はススが付着し，内面は摩滅している。

300は逆Ｌ字状に屈曲した口縁部で，口唇部には浅い凹線があり，肩部に１条の三角突帯がある。

301～303も口縁部で，断面台形状の突帯がわずかに起き上がり，ヘラナデ調整である。301は口径が15.2㎝と小型で，口唇部に凹線はみられない。302は口唇部に浅い凹線があり，外面は摩滅している。303は口唇部に凹線があり，外面は黄褐色で褐灰色ススが付着しいる。焼成度は良く硬質である。

304は上面が浅く凹み，内側に突出している口縁部である。内側がやや下がっている。横位のヘラナデ仕上げで，乳白色～にぶい黄橙色を呈し，角閃石・石英・茶色石などを含む。他の土器と比べ金雲母は含まず，在地の胎土ではない。

305は内側にやや突出した逆Ｌ字状口縁部で，口唇部は丸みを帯びている。全体的に丁寧な調整だが，下面は指押さえによる貼付の痕が明瞭にみられ，雑である。外面は横位，内面は右下がりの丁寧なヘラナデである。

306・307 は「く」の字状に起き上がる口縁部である。306 は口径 30.4 ㎝で口唇部は凹線があり，口縁上面は凹み，内面は丸味を帯びて突出する。307 は細い作りの口縁部で，口径は 30.4 ㎝で，内外面ともヘラナデである。

308 は口縁部から胴部上半分で，口縁部は「く」の字状に屈曲し，口唇部は凹線，上面はくぼんで，反時計周りのヘラナデである。肩部には２条の三角突帯がある。

309 ～ 313 は逆Ｌ字状となる口縁部で，口唇部に凹線がある。309 は口径 32.2 ㎝である。310 は上面がわずかにくぼみ，黒褐色で，胎土に金雲母をほとんど含まない。311 は口縁部の外面下はナデているが，境が明瞭に残り雑な作りで，305 に口縁部の整形が似ている。

314 は破損部から突帯の接合面が明瞭に分かる。

315 は１条の三角突帯があり，内外面とも丁寧な横位のヘラナデである。

316 は「く」の字状に立ち上がる口縁部である。外面は縦位の粗いヘラナデ，内面は横位の丁寧なヘラナデで，にぶい橙色だが，明るい色調である。

317 ～ 319 は肩部である。317・318 は３条の三角突帯があり，317 は厚くススが付着する。319 は頸部下に３条の沈線を施している。外面にはススが付着する。

320 ～ 322 は胴部上半で，２～３条の貼付三角突帯がある。322 は内面が摩滅している。

323 は底部と脚台の境付近で，つなぎ目に１条の三角突帯がある。ヘラナデで，にぶい橙色である。

324 ～ 328 は充実脚台である。324・325 はやや上げ底気味で，端部は丸味を帯びている。324 は底径７㎝で内外面ともヘラナデ，325 は底径７㎝で，外面は縦位のヘラナデである。326 は底径 6.6 ㎝で，脚台端部の面取りを行い１条の沈線を施している。外面と底面は丁寧なヘラナデである。327 は底径 6.4 ㎝で，やや上げ底気味である。脚台端部は面取りを行い１条の沈線を施している。328 は胴部下半から充実脚台である。底径７㎝で，全体的に締まりのある器形で，胴部へ向かって開きながらまっすぐ伸びている。脚台は上げ底気味で，脚台端部は面取りを行い，凹線が施されている。

イ　壺形土器（第 56 図 329 ～ 342）

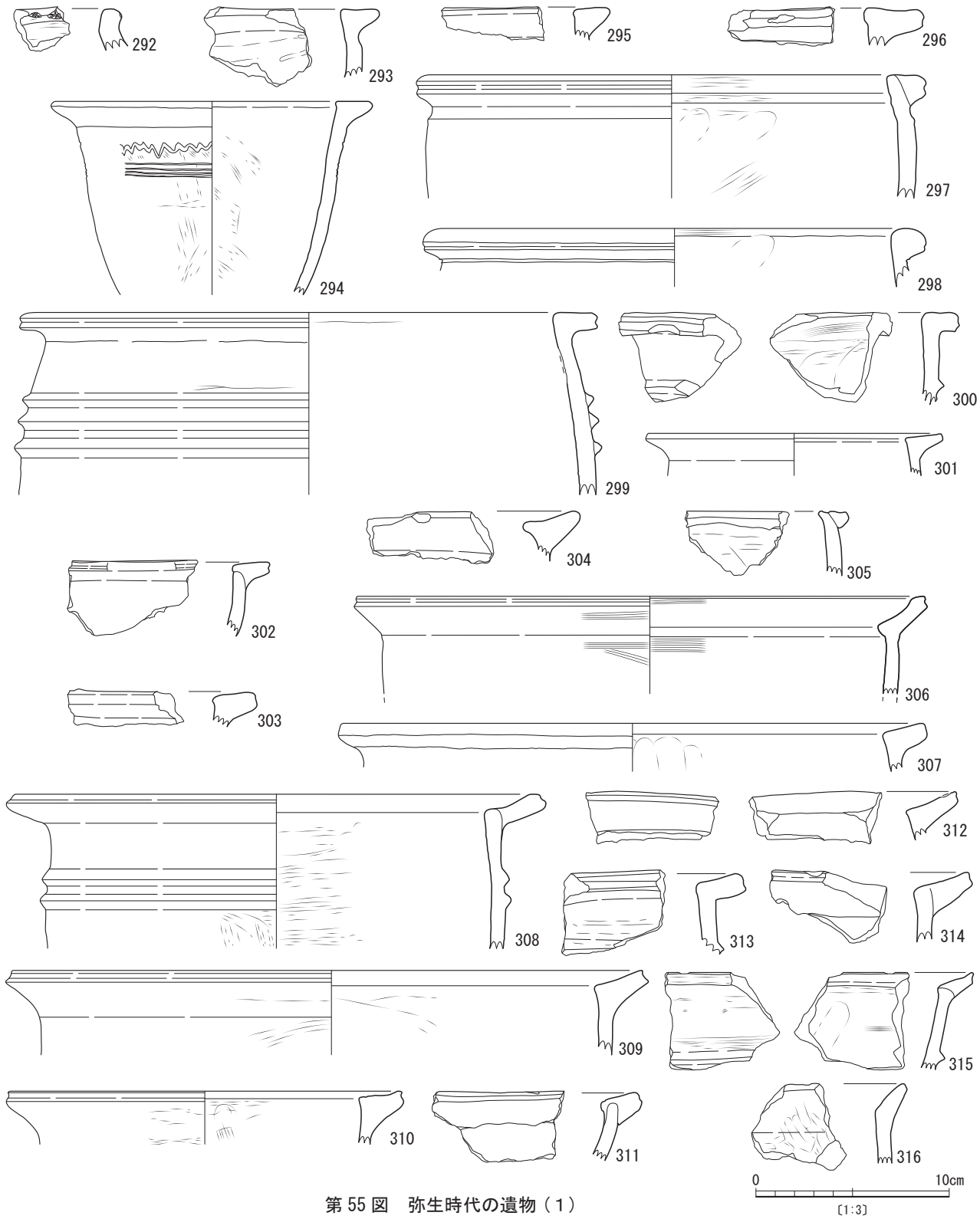
329 ～ 334 は口縁部で，端部が下方へ垂れ下がる。329・330 は分厚い口縁部である。329 は口唇部に凹みがあり，その後，縦位のヘラ短絡沈線を施している。内外

第54図　弥生・古墳時代の遺物出土分布図［1:350］

面とも横位のヘラナデである。330 の口唇部は丸みを帯びており，横位のヘラナデである。331 は口唇部にヘラで施された凹線があり，内外面とも丁寧なヘラナデである。333 は如意状を呈しており，口唇部は丸味を帯びていいる。内面には 1 条の三角突帯がある。334 は口径 19 ㎝で厚みがあり，口唇部に浅い凹線が施されている。口縁端に粘土紐を貼付けて分厚く作っている。

335・336 は内側にやや傾く逆Ｌ字状の口縁部直下に突帯を貼り付け，二叉状口縁となる。内外面とも横位のヘラナデである。335 は口唇部に凹線があり，上面には低い三角突帯がある。

337 ～ 339 は肩部である。337 は 2 条の三角突帯がある。



第 55 図　弥生時代の遺物（1）

外面は横位のヘラナデで仕上げ，にぶい褐色を呈し，内面はナデ仕上げで褐灰色を呈している。338は頸部近くに１条の三角突帯があり，外面は斜位のハケナデ，内面はヘラナデで，灰白色である。339は２条の三角突帯がある。内外面とも横位のヘラナデである。

340～343は平底の底部で，縦位のヘラナデである。340は底径4.4㎝である。341は内面に摩耗が目立ち，器壁が厚い。343は底径5.6㎝で，上げ底気味である。外面は縦位のヘラナデ，内面は丁寧なヘラナデである。

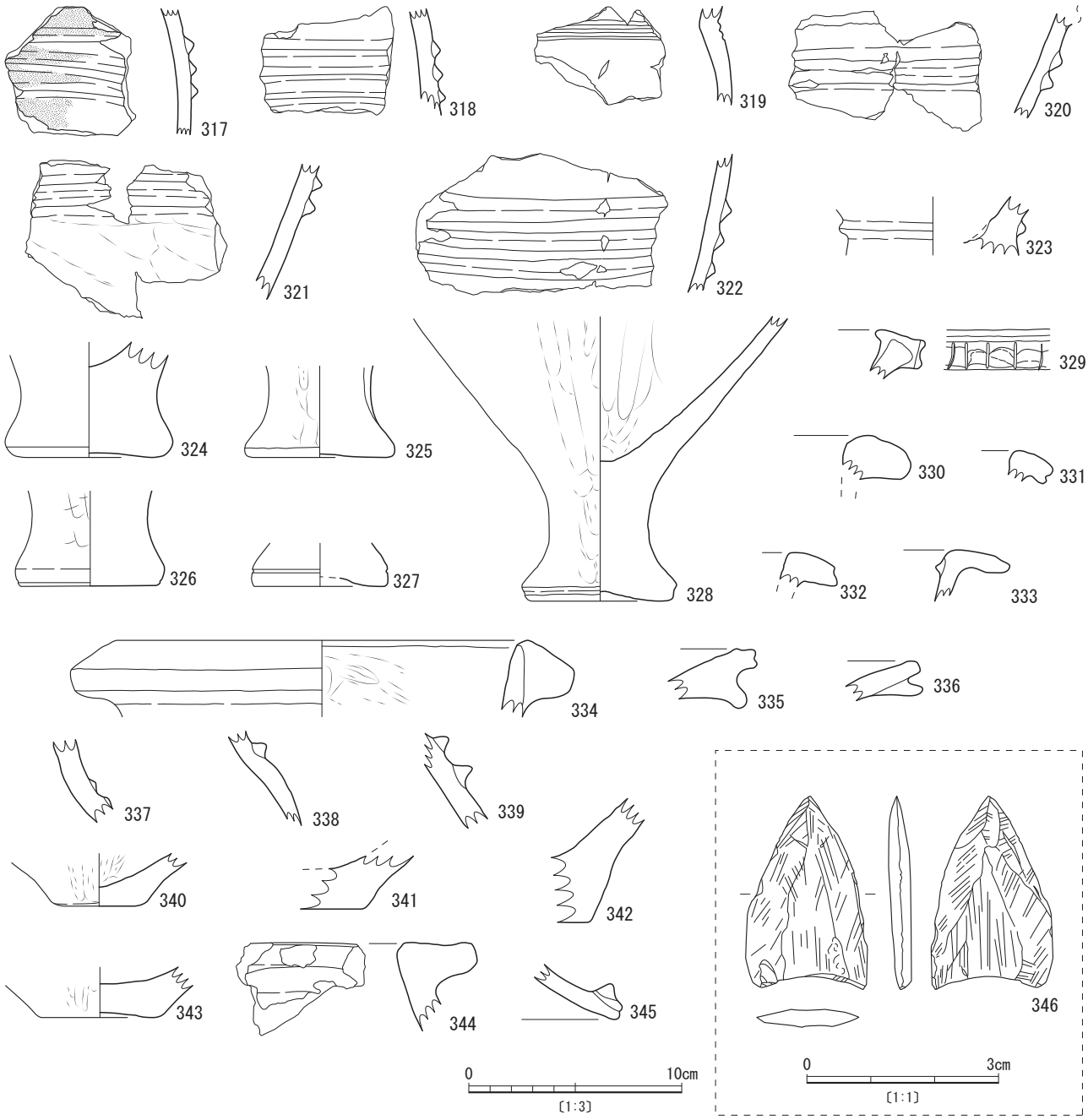
ウ　大型甕形土器・蓋形土器（第56図344・345）

344は大型甕型土器の口縁部である。逆Ｌ字状を呈し，上面には浅いくぼみがみられる。口唇部は丸みを帯びている。

345は口縁部の内面にススの付着がみられ，器壁が薄い蓋形土器である。口唇部に凹線があり，上面には三角突帯が貼り付けられる。

エ　石器（第56図346）

346は磨製石鏃である。粘板岩製で，二等辺三角形を呈しており，基部は弧状に面取りをする意識をもつ。弥生時代の磨製石鏃の特徴を有しているため，ここで記載した。



第56図　弥生時代の遺物（２）

第６節　古墳時代の調査

１　調査の概要

古墳時代と判断できる遺構は検出できなかった。遺物については，表土～Ⅳ層出土の土器が混在している状況がみられたため，型式的に該当時期と判断したものを取り上げることとした。古墳時代の土器には甕形土器・壺形土器・小型丸底壺・鉢形土器・須恵器がある。なお，古墳時代の土器は 315 点出土しており，そのうち 45 点を図化した。

２　遺物

（１）　甕形土器（第 57 図 347 ～ 366）

347 ～ 353 は口縁部である。口縁部が「く」の字状に強く外反するもの，長く緩やかに外反するもの，先端付近が短く外反するものがある。347 は「く」の字状に強く外反する。口唇部に浅い凹みが巡っており，外面は横位・斜位のヘラナデ，内面はナデである。ススが付着する。焼成は良好で，胎土に白色石・長石・石英・黄白色石・金雲母などの細かい石の多い砂質土である。

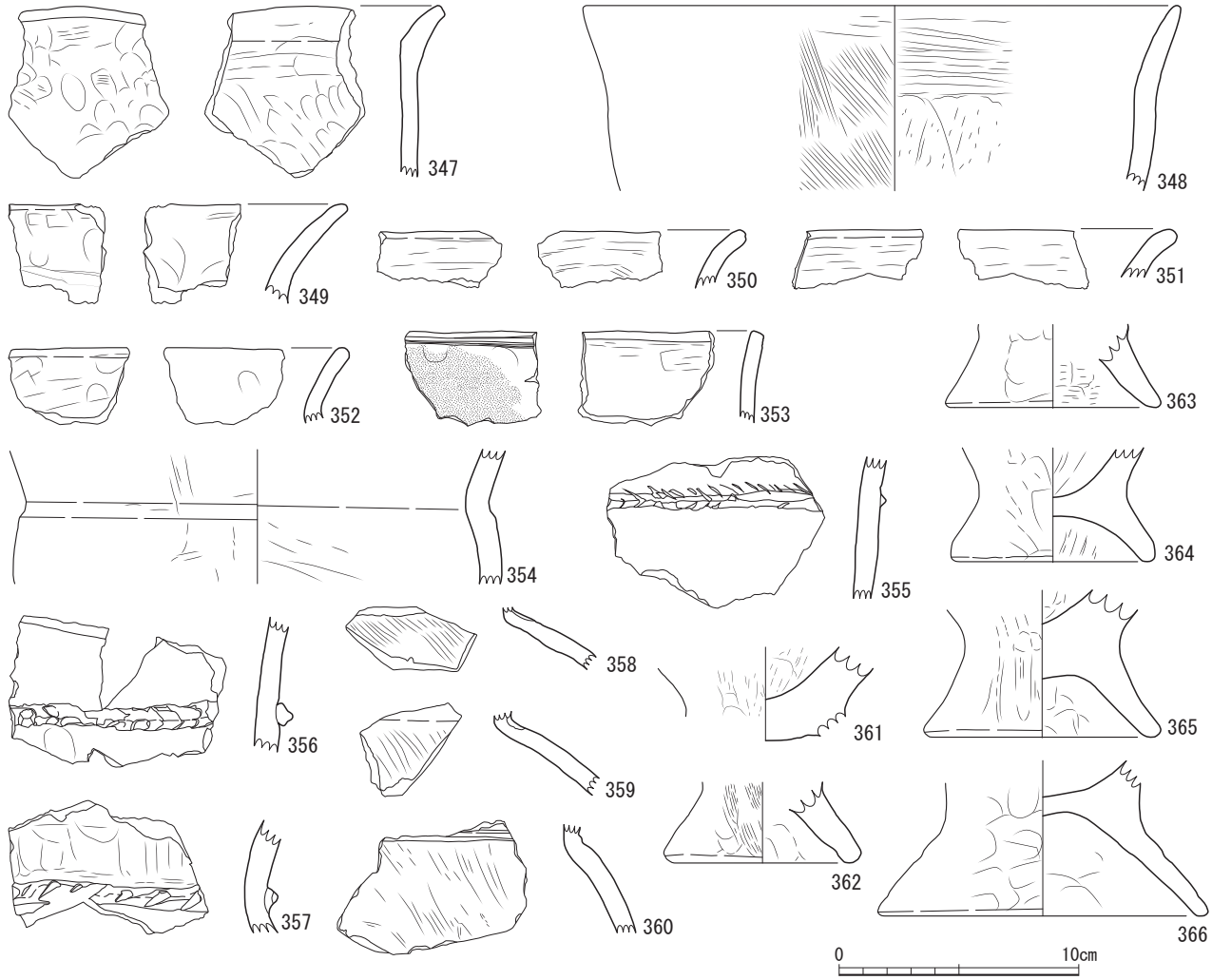
348 ～ 352 は長く緩やかに外反するものである。348 の口径は 24 ㎝である。内外面ともハケナデがみられ，内面の胴部は縦位のヘラナデである。外面全面にススが付着し、内面の一部は黒褐色である。349 ～ 352 は内外面とも横位のヘラナデである。349・350 は口縁部近くと外面に一部ススが付着している。351 は焼成が良い。

353 は先端がかすかに外反するものである。焼成は良く，外面に厚くススが付着する。

354 は頸部で，内外面ともヘラナデである。屈曲が強く，褐灰色をしている。

355 ～ 357 は頸部である。内外面ともヘラナデで，三角貼付突帯がある。355 は突帯が低く，上下からヘラ押しにより刻み目がある。焼成は良好である。356 は１㎝前後の幅で上下からヘラ押しにより刻み目が施される。焼成は良好である。357 は左下り方向にヘラ押しの刻み目がある。

358 と 359 は布留系土師器の肩部である。外面は縦位のハケナデで，内面はヘラケズリである。焼成は良く，4 ㎜大の茶色石・石英・灰色石を含み，浅黄橙色をした胎土である。摩滅が激しい。



第 57 図　古墳時代の遺物（１）

360 も布留系土師器甕の肩部である。屈曲があり凹線が巡ると考える。外面は縦位のヘラナデ・内面は横位のヘラナデである。胎土には，白色石・長石・黄白色石・石英などの細石が多く，褐色である。外面には厚くススが付着している。

361 は底部と脚台の接合部で，縦位のヘラナデ調整である。内外面の表面は黄橙～褐灰色だが，中心部は赤色である。脚台と底部の付け根から欠損しているが，中空で脚台内面の天井は下方に膨らむ。

362 ～ 366 は脚台である。中空で，色調はにぶい黄橙色で，胎土は長石・白色石・灰色石を含む砂質土である。362・363 は外へ真っ直ぐ伸びる。364 ～ 366 は底部の一部が残り，中空で脚台は真っ直ぐ開き，底部は低く底面はくぼみ,脚台内面の天井部は丸い。364 は脚台端径 8.6 ㎝で，内外面ともヘラナデであり，脚台の端部は平坦である。365 は脚台端径 10 ㎝で，外面は粗い縦位のヘラナデであり，脚台の端部は歪である。外面はにぶい黄褐色で，内面は黒色であるが，割れ口は赤色を呈している。366 は脚台端径 13.8 ㎝，脚台高 5 ㎝と大型で，器壁が薄い。内外面ともヘラナデで，脚台端部は丸みを帯びている。

（２） 壺形土器（第 58 図 367 ～ 373）

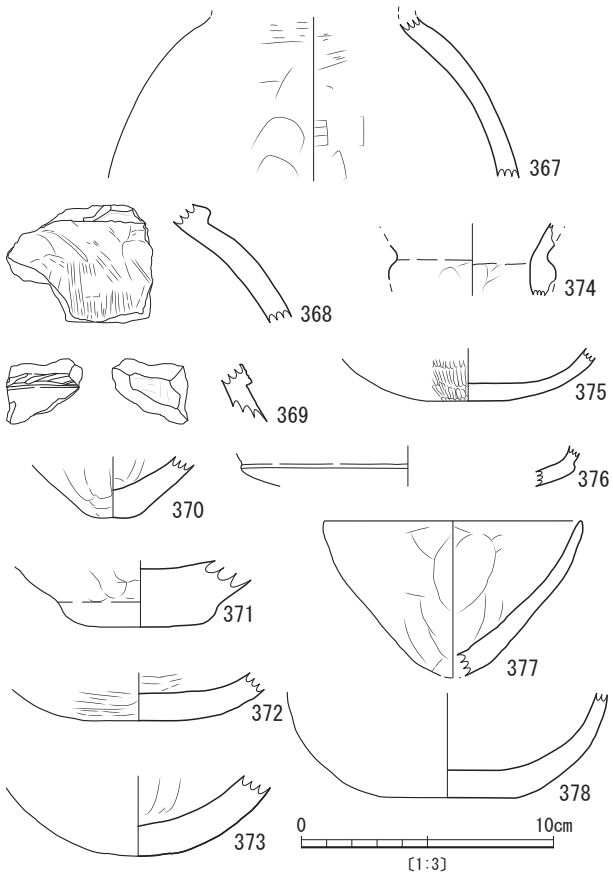
367 ～ 369 は小型の壺形土器の肩部で，外面は丁寧なヘラナデ・内面はヘラナデである。胎土に 4 ㎜大の茶色石・白色石・金雲母・角閃石を多く含む砂質土である。367 の外面は丁寧なヘラナデで，内面は横位のヘラナデである。焼成は良好で，胎土に 4 ㎜大の茶色石･白色石･金雲母・輝石を多く含む砂質土である。368 は肩部に幅広の貼付突帯があり，左下がりの刻み目がある。外面の一部に黒斑が見られる。369 は，貼付突帯があり，左下がりに刻目があるが，ハの字状に刻みを行った可能性もある。外面は縦位にハケナデとヘラナデ・内面はヘラナデである。

370 ～ 373 は底部で焼成は良い。371 と 373 は普通。370 は不安定な平底で，手づくね風の作りで丁寧な縦位のヘラナデである。371 は小さい丸底で底の器壁は厚い。内外面ともヘラナデで，外面は明褐色（一部黒色），内面は黒褐色である。372 は安定した丸底で内外面ともヘラナデである。373 は丸底で内面は縦位のヘラナデである。外面は赤みがかった淡茶褐色,内面は黒褐色である。

（３）小型丸底壺（第 58 図 374 ～ 376）

374 は口縁部から底部にかけての破片で，口縁部に向け外側に開き，底部に向けて丸みを帯びている。内外面ともヘラナデで，乳茶褐色である。胎土は茶色石・灰色石などの 3.5 ㎜大の石を多く含む砂質土である。

375 は底部である。375 は丹塗りである。安定した丸底で，胴部に向けて緩やかに立ち上がる。外面は丁寧な縦位のヘラミガキ，内面は縦位のヘラナデである。色調は外面が丹塗りにより光沢があり暗赤褐色で，底面付近は光沢のある黒褐色である。



第 58 図　古墳時代の遺物（２）

376 は浅い底部にやや外へ開き真っ直ぐ伸びる口縁である。内外面とも横位のヘラナデで，外面の調整は丁寧である。

（４）鉢形土器（第 58 図 377・378）

377 は円錐状をした完形品である。口径は 10.3 ㎝，器高は 6.2 ㎝で，口唇部は舌状になり底部は尖り気味である。器壁は口縁部から底部へかけて厚くなる。内外面はヘラナデであり，外面は縦方向である。

378 は底径 5 ㎝の平底である。内外面とも丁寧なナデ調整で，焼成は良い。

（５）須恵器（第 59 図 379 ～ 391）

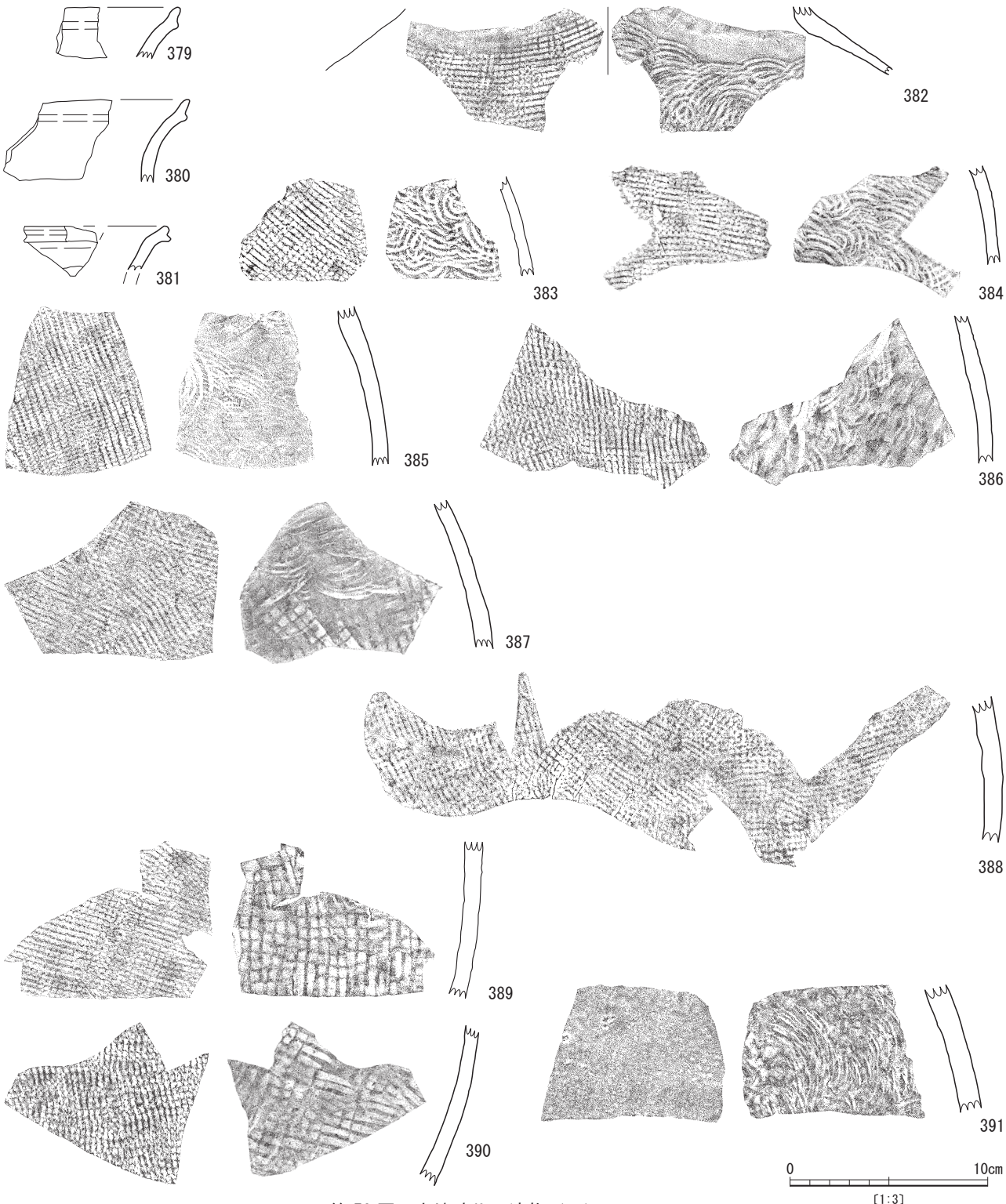
379 ～ 390 は甕の同一個体である。灰色で，４㎜大の白色石を含む密な胎土である。焼成度は良く，割れ口は暗赤褐色をしている。

379 ～ 381 はゆるやかに外反し，端部で立ち上がる口縁部である。端部は丸く，立ち上がり部分に浅い凹線が施されている。内外面とも横方向のヘラナデで仕上げる。379・380 は内面に自然釉，381 は内外面に薄い自然釉が見られる。

382 は肩部で，外面は正格子状のタタキ痕，内面の頸部付近はミガキに近いヘラナデで，下部は同心円状の当て具痕がある。外面には灰黄色の自然釉が見られる。

383 ～ 390 は胴部で，外面は正格子状のタタキ痕があり，灰黄色の自然釉が見られるものが多い。383 ～ 386 は内面に同心円状の当て具痕がある。387・388 の内面は上部に同心円，下部に正格子状の当て具痕がある。389・390 は底部近くで，内面には大きな格子状の当て具痕がある。

391 は甕の胴部で，外面は正格子状のタタキ痕が見られるが，摩滅していてはっきりとしない。内面は細かい同心円状の当て具痕がある。器壁が厚く，外面には灰オリーブ色の自然灰釉が被っている。割れ口は，にぶい赤褐色をしており，白色石・輝石を多く含む。



第 59 図　古墳時代の遺物（３）

第７節　古代の調査

１　遺構

古代の地形は東へ向かってゆるやかに下降傾斜しており，調査対象地では2.5ｍほどの比高差がある。南西端近くのＨ・Ｉ－57・58区から東側のＦ－59・60区付近へゆるやかに傾斜している。古代の遺構として掘立柱建物跡６棟，土坑10基，溝状遺構８条とともに，建物としてまとまらなかった柱穴88基が検出された(第60図)。

（１）　掘立柱建物跡（ＳＢ）

いずれも南北方向に長い２間×３間の建物が６棟あるが，このうち１棟は総柱建物で，３棟は用地外へ延びているため,全容が不明である。主軸方向が真北のもの(１号)，西へ25度ほど傾いたもの（２・５号），東へ３度程傾いたもの（３・４・６）の３種がある。これらは時期差の可能性がある。

ア　掘立柱建物跡１号（第61図）

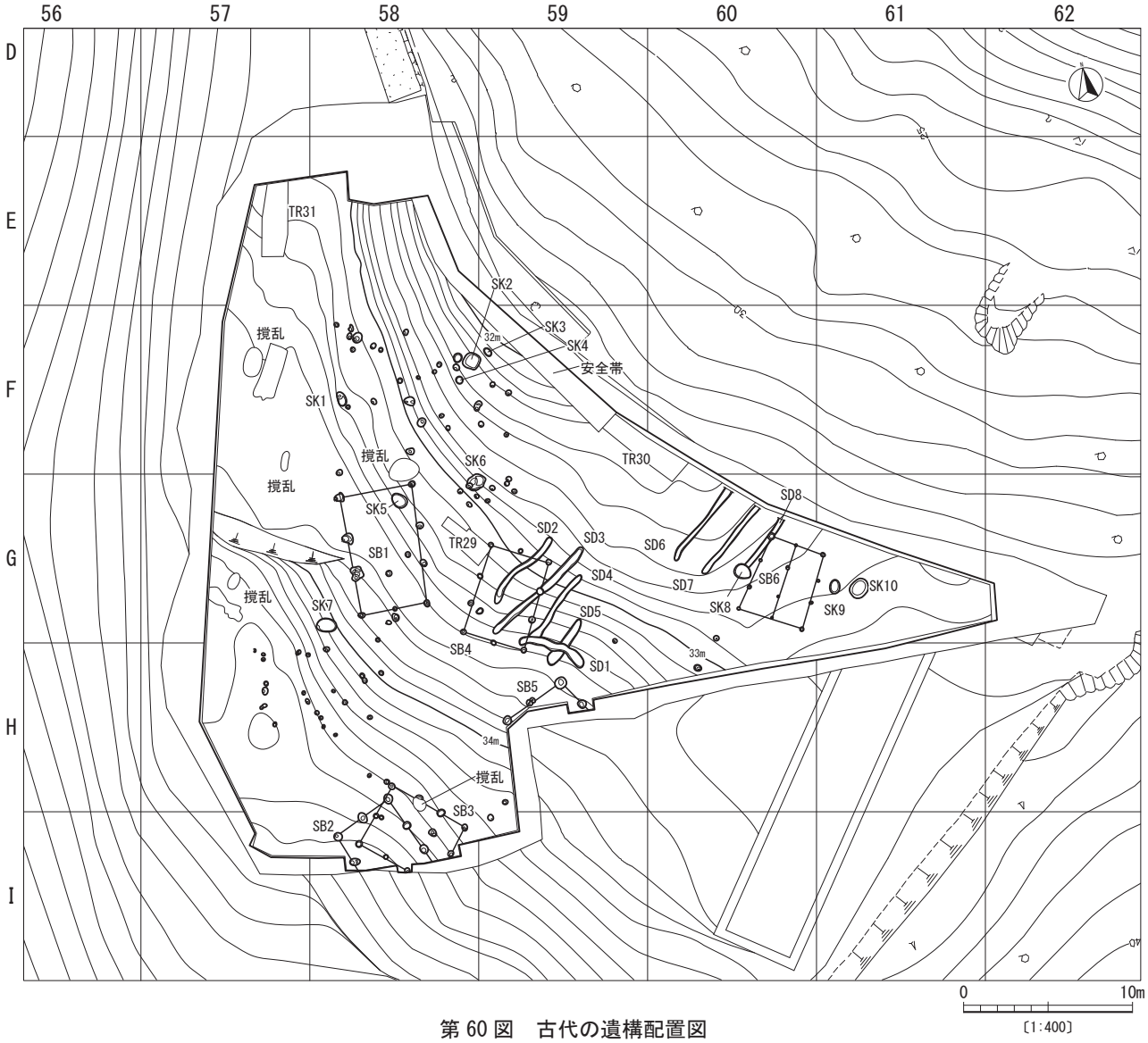
Ｇ－58区で検出された桁行7.0ｍの建物であるが，梁行は北側が4.2ｍ，南側が3.9ｍとやや台形状になっている。梁行北側の中央の柱穴は検出できなかった。当初からなかったか，浅くて削平されたものと思われる。主軸方位はＮ０度Ｅと真北である。柱間は北が4.2ｍ，南が2.0＋1.9ｍ，東側は北から2.4＋2.2＋2.4ｍ，西側は北から2.4＋2.4＋2.3ｍである。柱穴の直径は大小あり24×24㎝～61×73㎝で，深さは30～116㎝であるが，本来は１ｍ近くあったものと思われる。埋土は黒色砂質土が多いが，柱痕と思われる暗黒色砂質土のみられるものもある。

イ　掘立柱建物跡２号（第62図）

Ｈ・Ｉ－58区で検出された梁行3.8ｍ，桁行不明の建物で，南側が用地外に延びている。主軸方位はＮ25度Ｗである。柱間は北側が1.9ｍ等間,東側は北から1.9＋1.7＋αｍ，西側は1.8＋αｍである。柱穴の直径は39×39㎝～51×60㎝で，深さは27～87㎝である。埋土は黒色あるいは黒褐色砂質土の柱痕跡のまわりに褐灰色砂質土などがある。Ｐ４からは内面へラケズリ調整の土師甕破片が出土している。

ウ　掘立柱建物跡３号（第63･64図392～395）

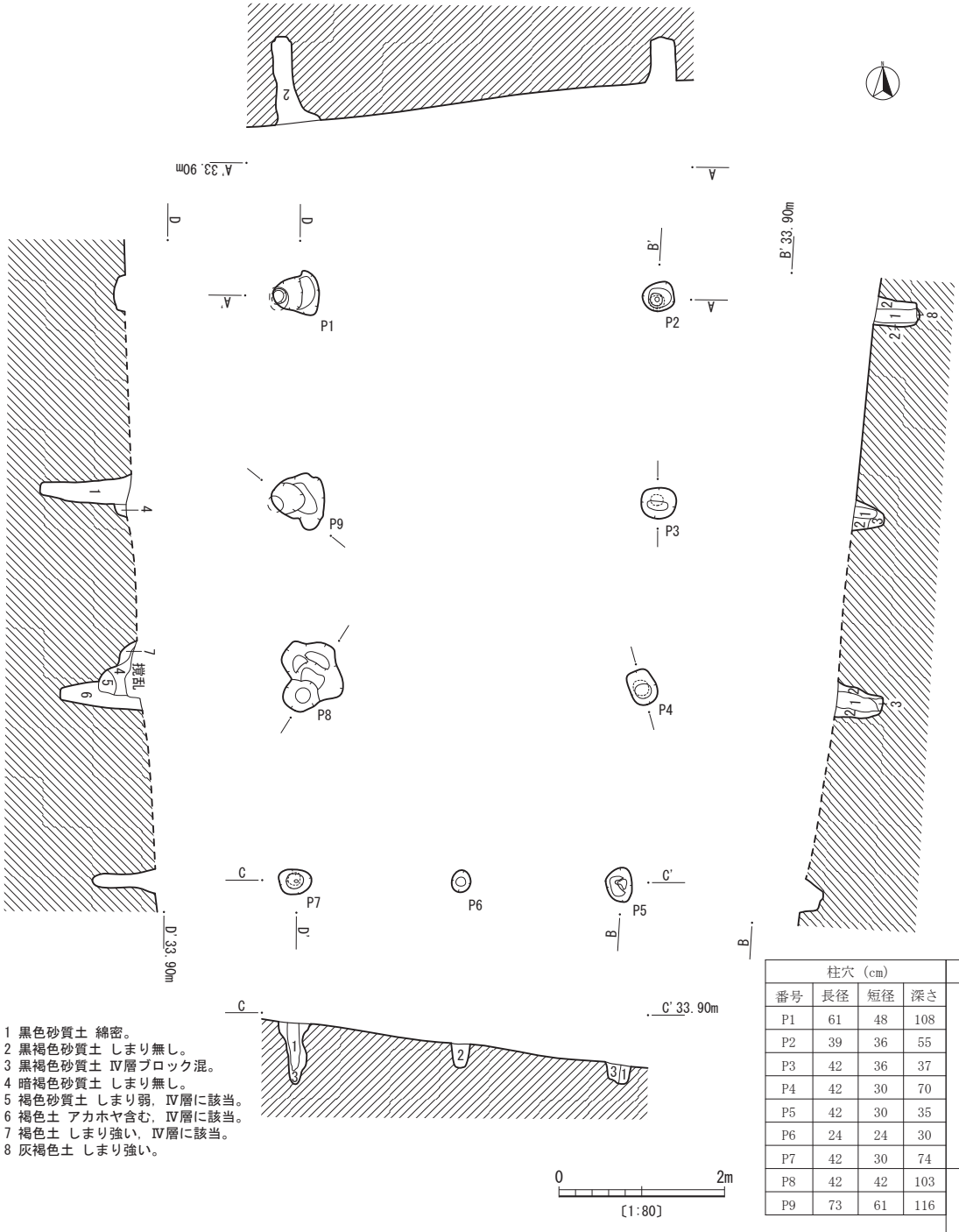
Ｈ・Ｉ－58区で検出された建物で，建物２号と切り



第60図　古代の遺構配置図

合っている。梁行 3.96 m，桁行 4.9 mだが，南西隅の柱穴は用地外に延びているため検出できなかった。主軸方位はN 49 度Wである。柱間は北西側が西から 1.92 ＋ 2.04 m，北東側が北から 1.9 ＋ 1.4 ＋ 1.6 mである。南西側は北から 1.8 ＋ 1.5 ＋ α m，南東側は西からα＋ 1.8 mである。柱穴の直径は 26 × 30 ㎝～ 42 × 51 ㎝，深さは 10 ～ 46 ㎝である。埋土は黒褐色砂質土の単層が多いが，褐灰色・暗灰黄色・黒色を呈するものもある。

建物周辺には同一個体と思われる多くの須恵器甕片が散在しており，392 はＰ 9 にはいっていた。これらの外面には正格子状タタキ痕，内面の上部には同心円状，下部には無文の当て具痕がみられる。４㎜大の白色石や輝石などを含むこまかい土を用い，外面は暗青灰色，内面は灰色を呈している。焼成度は，堅致な部分とやや軟質な部分とがある。これと同一と思われる破片は掘立柱建物跡２・３号周辺に集中しているが，もっとも離れた



柱穴（cm）				方向	柱穴間距離	
番号	長径	短径	深さ			
P1	61	48	108	桁行（cm）	P2-5	704
P2	39	36	55		P2-3	240
P3	42	36	37		P3-4	220
P4	42	30	70		P4-5	240
P5	42	30	35		P7-1	702
P6	24	24	30		P7-8	230
P7	42	30	74		P8-9	240
P8	42	42	103		P9-1	240
P9	73	61	116	梁行（cm）	P1-2	420
					P5-7	394
					P5-6	190
					P6-7	200

凡 例
柱痕

第 61 図　掘立柱建物跡１号

破片では，23 m離れたＧ－60 区で出土するなど広く散在している。本来，掘立柱建物跡２号あるいは３号で使用されたものが破損後に流出したものと思われる。Ｐ６からは内面ヘラケズリ調整の土師甕破片が出土している。

エ　掘立柱建物跡４号（第 65 図 396）

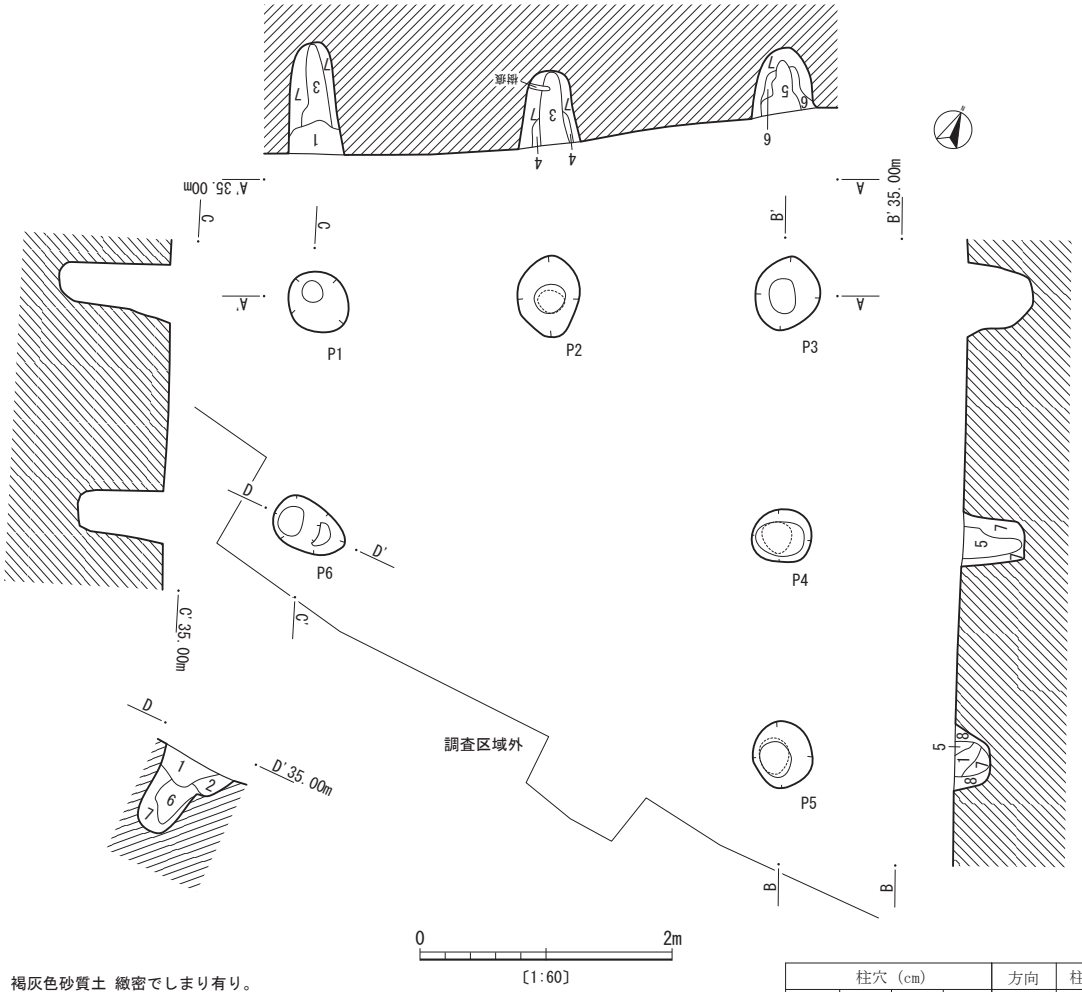
Ｇ・Ｈ－58・59 区で検出された梁行 3.6 m，桁行 5.4 mの建物である。溝状遺構１～４号と切り合っており，主軸方位はＮ 26.5 度Ｅである。柱間は北側が 1.8 m等間，南側が 1.9 ＋ 1.8 m，西側が北から 2.0 ＋ 1.7 ＋ 1.7 m，東側が 1.8 m等間でほぼ 1.8 mを基準としている。柱穴は直径が 26 ～ 42 ㎝，深さが 10 ～ 50 ㎝だった。埋土は黒色砂質土の単層が多いが，４基に柱痕跡がある。またＰ５の床面より少し上方には，大きな粘土塊がある。建物内から刻書のある土師器が出土している。396 は口径 13.4㎝，底径 6.4㎝，高さ 5.9㎝の埦で，内面の底から体部下半にかけて刻書がある。ヘラ様のもので鋭く「十」あるいは「×」印の沈線が描かれている。口縁はゆるやかに外反し，底部は厚さ 1㎝の充実高台となっている。外面は丁寧にナデている。また，Ｐ５からは土師器坏と甕が出土した。にぶい黄橙色をした坏は口縁部で，端部は丸みをおびている。甕の内面調整はていねいなヘラケズリである。

オ　掘立柱建物跡５号（第 66 図）

Ｈ－59 区で検出されたが，ほとんどの柱穴が南側の用地外へ延びており，北側だけが調査できた。主軸方位はＮ 22 度Ｗである。柱間は北側が 1.95 m等間の梁行 3.9 mで，桁行の東側は北端が 1.8 mである。柱穴の直径は 30 ～ 66 ㎝，深さは 22 ～ 64 ㎝だった。埋土は黒褐色砂質土の単層が多い。Ｐ４には抜き取り痕跡がみられた。

カ　掘立柱建物跡６号（第 67 図）

Ｇ－60・61 区で検出された梁行の北が 3.25 m，南が 4.0 m，桁行 4.6 mの，台形をした間取りの総柱建物で



1 褐灰色砂質土 緻密でしまり有り。
2 褐灰色砂質土 Ⅳ層多量含む。
3 黒色砂質土 緻密でしまり有り。
4 黒色砂質土 ややしまり弱い。
5 黒褐色砂質土 しまりなし。
6 黒褐色砂質土 しまり有り。
7 黒褐色砂質土 Ⅳ層少量含む。
8 黒褐色砂質土 Ⅳ層多量含む。

―凡例―
柱痕

柱穴（cm）				方向	柱穴間距離	
番号	長径	短径	深さ		P3-5	369
P1	48	48	87	桁行（cm）	P3-4	190
P2	66	48	60		P4-5	170
P3	60	51	54		P6-1	180
P4	48	42	48	梁行（cm）	P1-3	376
P5	54	48	27		P1-2	190
P6	39	39	69		P2-3	190

第 62 図　掘立柱建物跡２号

ある。主軸方位はＮ30度Ｅである。柱間は北が1.6＋1.7m，南が2.0＋1.9ｍで，西側が北から1.6＋1.7＋1.4m，中央が北から1.4＋1.8＋1.3ｍ，東側が北から1.6＋1.4＋1.6ｍである。中央柱はほぼ軸線にのっている。柱穴の直径は10～42㎝，深さは7～34㎝である。埋土は黒褐色あるいは黒色の砂質土だった。

（２） 土坑（ＳＫ，第68図）

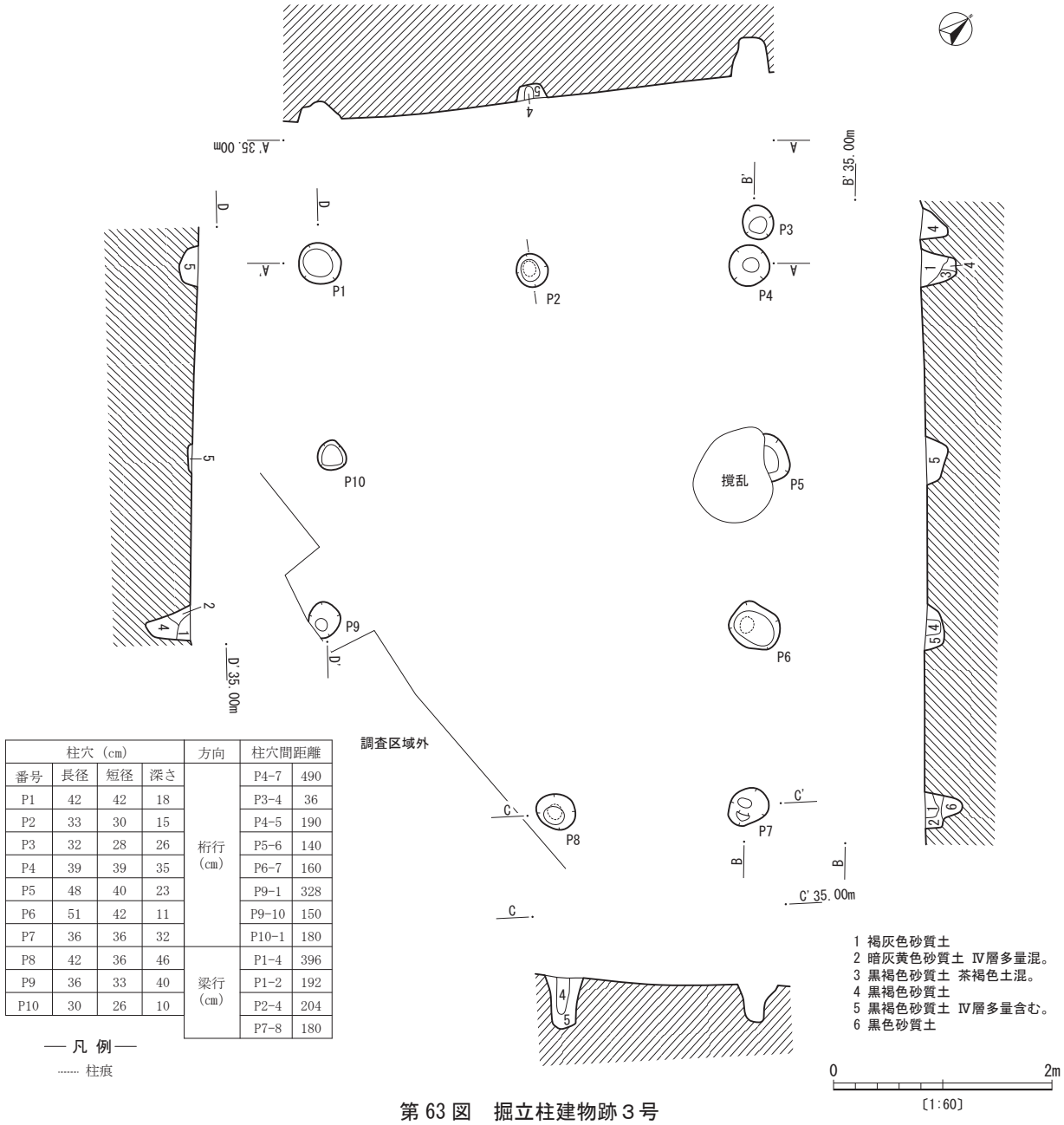
10基の土坑が検出された。掘立柱建物跡１号のあるＧ-58区付近と，掘立柱建物跡６号のあるＧ-60・61区付近に３基ずつある。残りの４基は建物群より北に離れて，うち３基は近接している。浅い土坑が多く，埋土は黒色砂質土のものと，褐灰色砂質土のものとがある。土坑６・７号を除き，土坑内からの出土遺物はない。

ア 土坑１号

Ｆ-58区で検出された南北に長い楕円形土坑である。長径85㎝，短径50㎝で，南側の深さは15㎝しかないが，北側の直径40㎝ほどは一段下がって深さが45㎝ある。埋土は黒色砂質土である。

イ 土坑２号

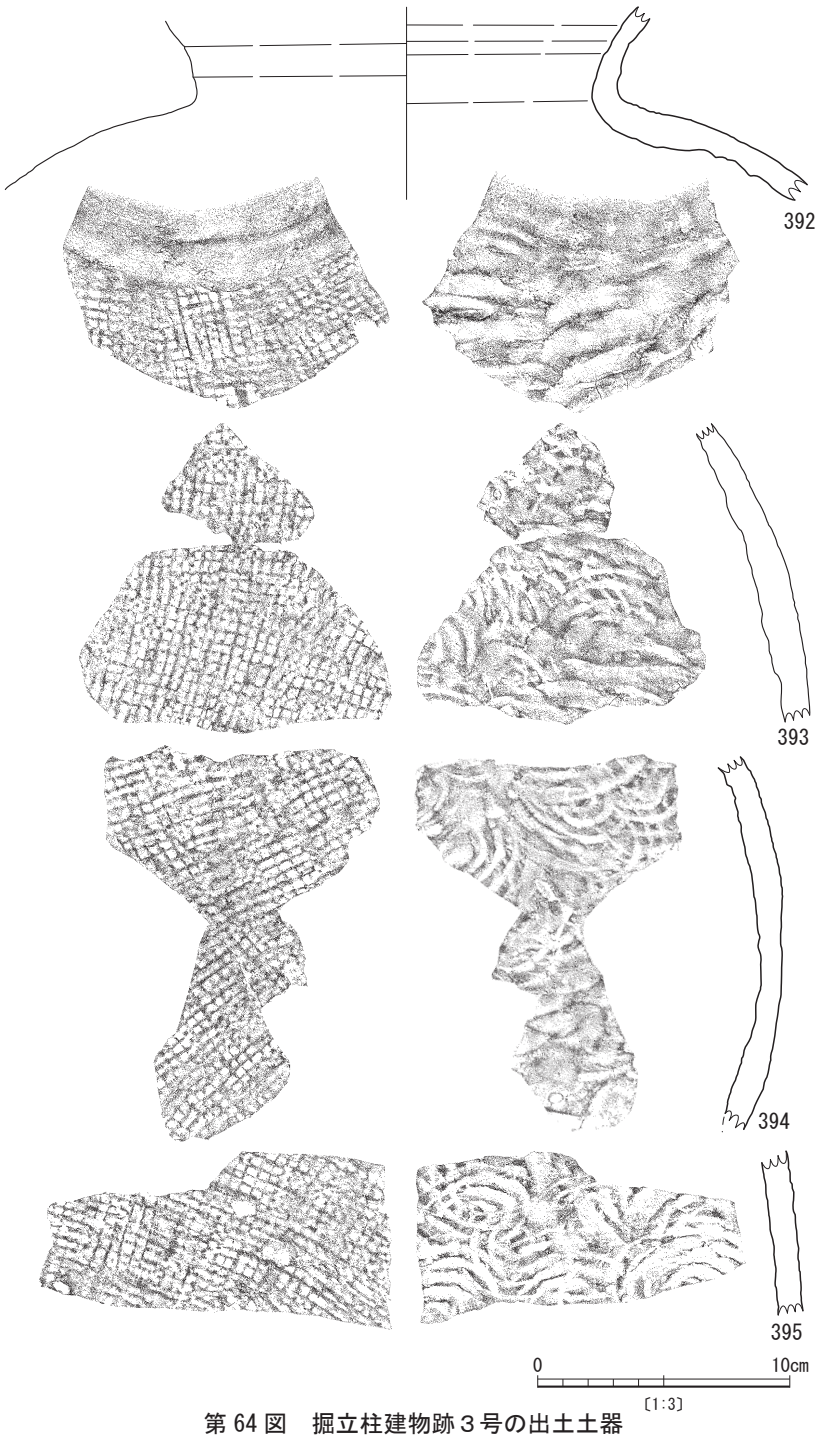
Ｆ-58・59区で検出された90㎝四方の正方形をした土坑である。周辺には土坑３・４号や柱穴がある。深さは88㎝で，埋土は池田軽石を含む褐灰色砂質土である。



柱穴（cm）				方向	柱穴間距離	
番号	長径	短径	深さ			
P1	42	42	18	桁行（cm）	P4-7	490
P2	33	30	15		P3-4	36
P3	32	28	26		P4-5	190
P4	39	39	35		P5-6	140
P5	48	40	23		P6-7	160
P6	51	42	11		P9-1	328
P7	36	36	32		P9-10	150
P8	42	36	46	梁行（cm）	P10-1	180
P9	36	33	40		P1-4	396
P10	30	26	10		P1-2	192
					P2-4	204
					P7-8	180

― 凡 例 ―
…… 柱痕

第63図 掘立柱建物跡３号



第 64 図　掘立柱建物跡３号の出土土器

ウ　土坑３号

F -59 区で検出された南北に長い楕円形土坑である。長径 58 ㎝，短径 36 ㎝で，深さは６㎝ある。埋土は褐灰色砂質土である。

エ　土坑４号

F -58 区で検出された直径 45 ㎝の円形土坑で，深さは８㎝ある。埋土は褐灰色砂質土である。

オ　土坑５号

G -58 区で検出された，北西から南東に主軸をもつ楕円形土坑で，掘立柱建物跡１号の北東隅近くに位置している。長径 100 ㎝，短径 80 ㎝で，深さは８㎝と浅い。埋土は黒色砂質土である。

カ　土坑６号

G -58･59 区で検出された楕円形土坑で，周辺には柱穴が密集している。長径 120 ㎝，短径 85 ㎝で，床は段になっており，深さは 18 ～ 30 ㎝ある。西端には径が 30 ～ 40 ㎝，深さ 115 ㎝の柱穴状の穴がある。埋土は黒色砂質土である。浅いほうの床面には土師甕の胴部片が出土している。頸部から肩部へ移る部分の破片で，外面はヘラ縦ナデ，内面は斜方向の丁寧なヘラケズリで，頸部付近はヘラ横ナデで仕上げている。他に弥生土器片も出土している。

キ　土坑７号

G -58 区で検出された東西に長い楕円形土坑である。長径 115㎝，短径 80㎝で，深さは 15㎝である。埋土は黒色砂質土である。図化できなかったが，土坑内から古代の土師器坏１点，甕３点と，古墳時代の土師器１点，弥生土器１点が出土している。坏はにぶい黄橙色を呈し，まっすぐ伸びる口縁部である。甕は分厚い作りで，頸部１点と胴部２点である。頸部内面は口縁部がヘラ横ナデ，胴部が丁寧なヘラケズリである。胴部はいずれも，外面がヘラナデ，内面が丁寧なヘラケズリである。土坑内からイネ果実１とササゲ属（リョクトウ，アズキ，ササゲなど）が同定されている。しかし，このイネ果実は放射性炭素年代測定の結果，現在もしくは比較的最近の混入と判断されている（第５章，第４節参照）。

ク　土坑８号

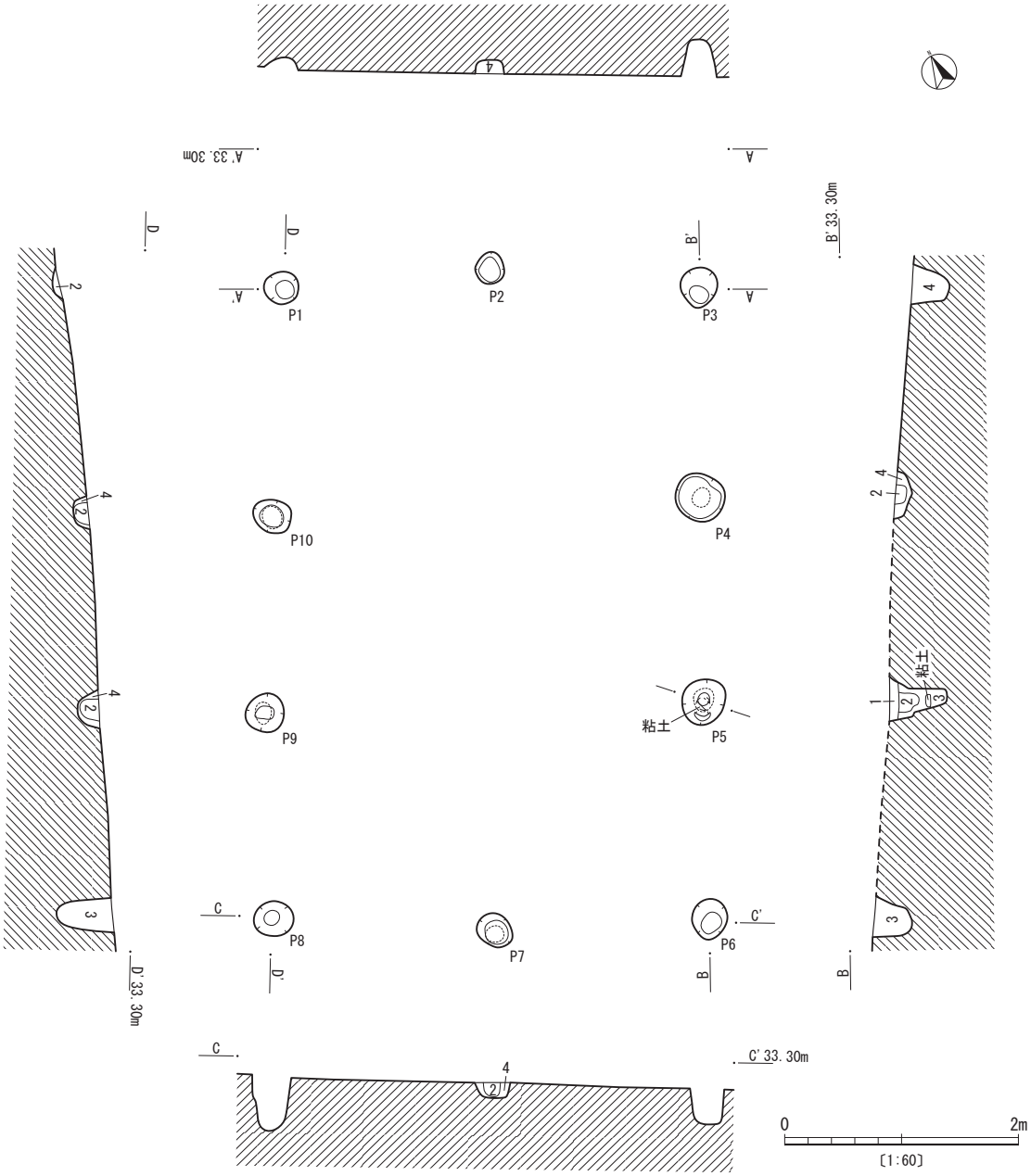
G -60 区で検出された東西に長い楕円形土坑である。長径 105 ㎝，短径 90 ㎝で，深さは６㎝と浅い。掘立柱建物跡６号の西側にあり，溝状遺構７号より新しい。埋土はアカホヤを含む黒色砂質土である。

ケ　土坑９号

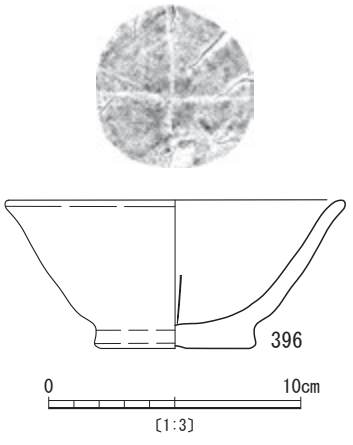
G -61 区で検出された南北に長い楕円形土坑で，土坑 10 号の西に隣接している。長径 85㎝，短径 60㎝で，深さは８㎝である。埋土は黒色砂質土である。

コ　土坑 10 号

G -61 区で検出された東西に長い楕円形土坑である。長径 125 ㎝，短径 100 ㎝で，深さは 20 ㎝である。埋土は黒色砂質土だが，下層はアカホヤを含み，上層に比べてやや明るい色調である。



1 暗褐色粘質土 チョコ層。
2 黒色砂質土 Ⅱb層該当。
3 黒色砂質土 アカホヤ含む，Ⅱb層該当。
4 黒色砂質土 Ⅳ層混，しまり弱い。



柱穴（cm）				方向	柱穴間距離	
番号	長径	短径	深さ			
P1	30	27	10	桁行（cm）	P3-6	536
P2	26	26	12		P3-4	180
P3	32	32	32		P4-5	180
P4	42	42	15		P5-6	180
P5	40	38	50		P8-1	536
P6	36	30	35		P8-9	170
P7	30	30	10		P9-10	170
P8	35	30	42		P10-1	200
P9	34	32	20	梁行（cm）	P1-3	356
P10	32	24	14		P1-2	180
					P2-3	180
					P6-8	376
					P6-7	180
					P7-8	190

凡例
柱痕

第 65 図 掘立柱建物跡４号と出土土器

（３） 溝状遺構（ＳＤ，第 69 図）

浅いＵ字状の溝が８条検出されており，このうち５条はＧ・Ｈ -59 区に，３条はＧ -60 区にある。Ｇ・Ｈ -59 区にある５条のうち４条は並行して南西から北東に向いているが，１条はこれとやや直交している。ともに端部は削平されている。Ｇ -60 区の３条はほぼ並行し，北東端は調査区外の急傾斜地へ延びており，南西端は削平されている。埋土はいずれもⅡｂ層に該当する黒褐色砂質土である。

ア　溝状遺構１号

Ｇ・Ｈ -59 区で検出され，西から南東へ向かい弓状に曲がっている。等高線に沿っているが，両端とも削られて延長部は検出できなかった。幅は 40 ～ 60 ㎝で，長さ約４ｍが検出できた。深さは２～５㎝である。溝状遺構４・５号より新しい。

イ　溝状遺構２号

Ｇ -59 区で検出され，南西から北東へ，ほぼまっすぐ延びている。幅は 30 ～ 40 ㎝で，長さ 5.2 ｍが検出できた。深さは２～５㎝である。

ウ　溝状遺構３号

Ｇ -59 区で検出され，南西から北東へ，溝状遺構２・４号と並行してまっすぐ延びている。幅は 30 ～ 45 ㎝で，長さ 7.3 ｍが検出できた。深さは２～５㎝である。

エ　溝状遺構４号

Ｇ -59 区で検出され，南西から北東へやや蛇行しながらも溝状遺構２・３・５号とほぼ並行している。幅は 30 ～ 55 ㎝で，長さ約５ｍが検出できた。深さは２～３㎝である。溝状遺構１号より古い。

オ　溝状遺構５号

Ｇ・Ｈ -59 区で検出され，南西から北東へ溝状遺構２～４号とほぼ並行し，まっすぐ延びている。幅は 50 ～ 70 ㎝で，長さ 3.25 ｍが検出できた。深さは２～３㎝である。掘立柱建物跡４号の柱穴であるＰ４より古い。

カ　溝状遺構６号

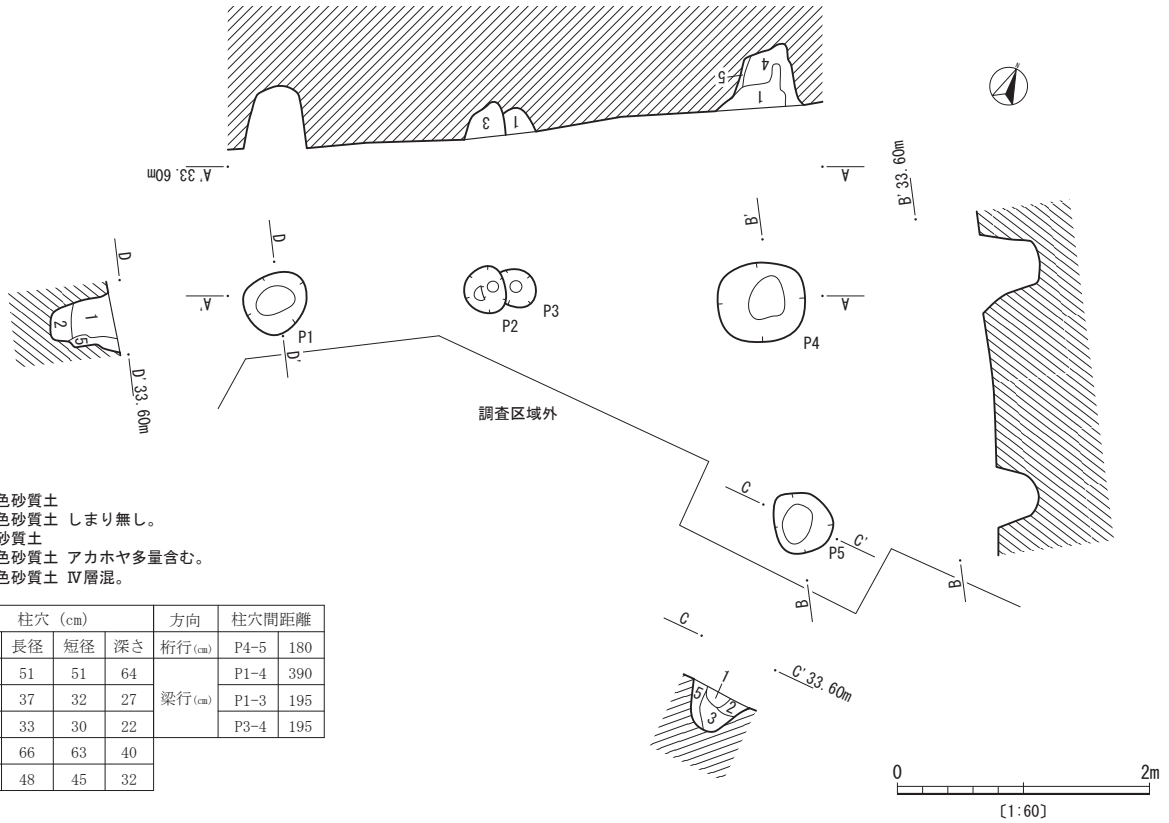
Ｇ -60 区で検出され，南西から北東へ溝状遺構７・８号と並行して，やや蛇行しているがまっすぐ延びている。幅は 20 ～ 50 ㎝で，長さ 5.3 ｍが検出できた。深さは約５㎝である。

キ　溝状遺構７号

Ｇ -60 区で検出され，南西から北東へ溝状遺構６・８号と並行してまっすぐ延びている。幅は 25 ～ 35 ㎝で長さ約５ｍが検出できた。深さは約２㎝ほどしかなく浅い。

ク　溝状遺構８号

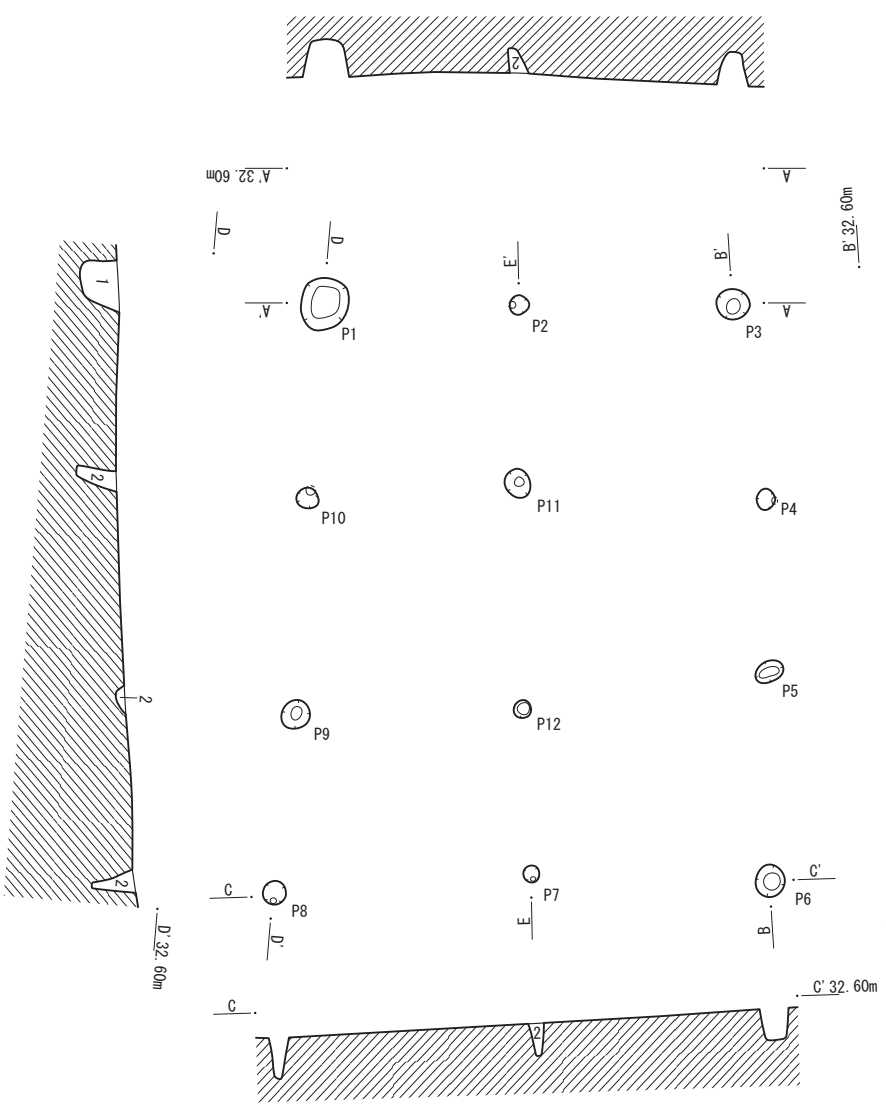
Ｇ -60 区で検出され，南西から北東へ溝状遺構７号と並行して，まっすぐ延びている。幅は 30 ～ 35 ㎝で，長さ 3.5 ｍが検出できた。深さは約２㎝ほどしかなく浅い。土坑４号や掘立柱建物跡６号のＰ１より古い。



1 黒褐色砂質土
2 黒褐色砂質土 しまり無し。
3 黒色砂質土
4 黒褐色砂質土 アカホヤ多量含む。
5 黒褐色砂質土 Ⅳ層混。

柱穴（㎝）				方向	柱穴間距離	
番号	長径	短径	深さ	桁行(㎝)	P4-5	180
P1	51	51	64		P1-4	390
P2	37	32	27	梁行(㎝)	P1-3	195
P3	33	30	22		P3-4	195
P4	66	63	40			
P5	48	45	32			

第 66 図　掘立柱建物跡５号



1 黒褐色砂質土 アカホヤ含む，Ⅱb層に該当。
2 黒色砂質土 Ⅱb層に該当。

柱穴（cm）				方向	柱穴間距離	
番号	長径	短径	深さ			
P1	42	37	22	桁行（cm）	P3-6	456
P2	16	14	14		P3-4	160
P3	26	26	18		P4-5	140
P4	18	14	26		P5-6	160
P5	22	18	15		P8-1	476
P6	24	24	30		P8-9	140
P7	12	10	31		P9-10	170
P8	18	18	34		P10-1	160
P9	23	23	8		P2-7	456
P10	17	17	34		P2-11	140
P11	23	21	20		P11-12	180
P12	12	10	7		P12-7	130
				梁行（cm）	P1-3	324
					P1-2	160
					P2-3	170
					P6-8	396
					P6-7	190
					P7-8	200

第 67 図　掘立柱建物跡６号

２　遺物

多くの土器とともに，土製品・鉄製品・石製品が出土している。出土している範囲はＥ～Ｉ－58～61 区と広がっているが，57 区と 58 区の西側は包含層が削平されていたこともあり，遺物の出土はない。掘立柱建物１号の周辺には少ない。建物はないが，傾斜の強いＥ・Ｆ－58 区には多くの遺物が出土している。

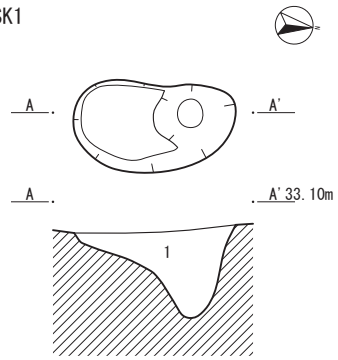
（１）　土器

土師器・焼塩土器・黒色土器・赤色土器・墨書土器・須恵器がある。

ア　土師器

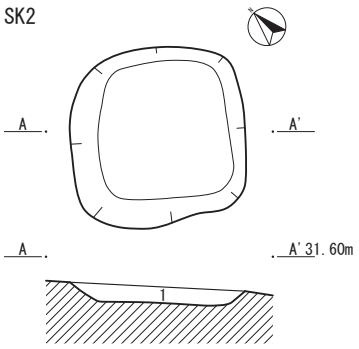
土器のなかでは，もっとも多く出土しており，坏類が 1,028 点，甕類が 2,534 点出土している。器種には坏・埦・大皿・鉢・甕などがある。

SK1



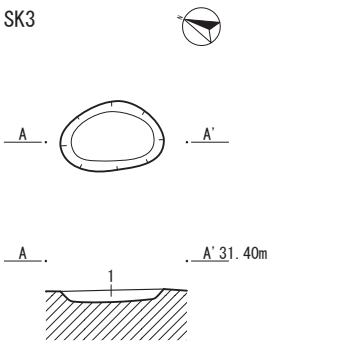
1 黒色砂質土

SK2



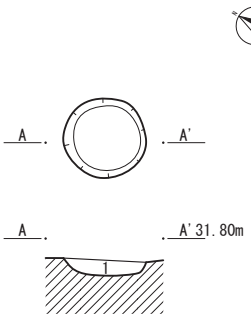
1 褐灰色砂質土 池田軽石含む，Ⅲ層に該当。

SK3



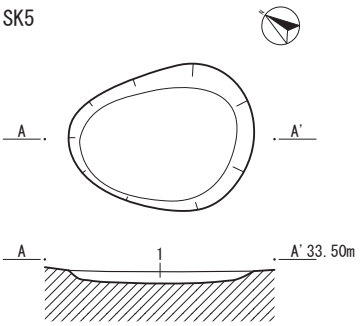
1 褐灰色砂質土 池田軽石含む，Ⅲ層に該当。

SK4



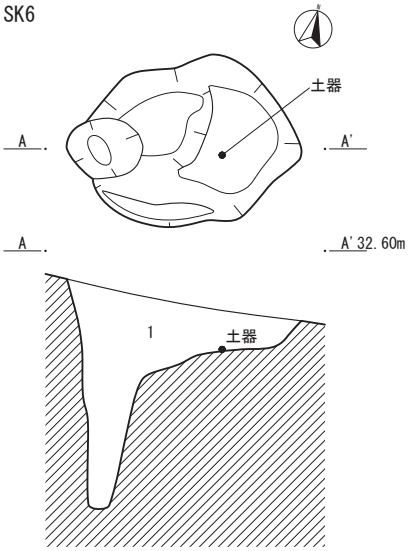
1 褐灰色砂質土 池田軽石含む。Ⅲ層に該当。

SK5



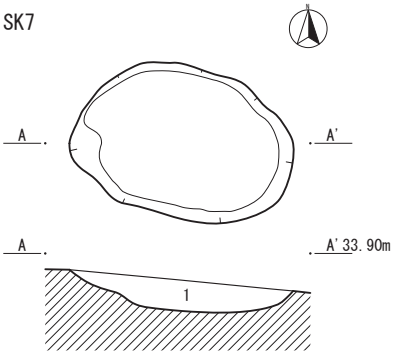
1 黒色砂質土

SK6



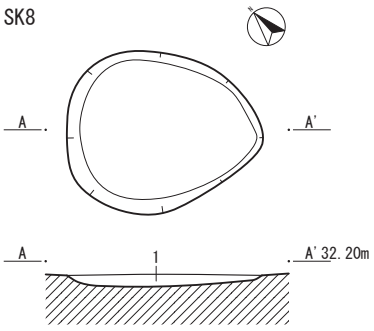
1 黒色砂質土

SK7



1 黒色砂質土

SK8

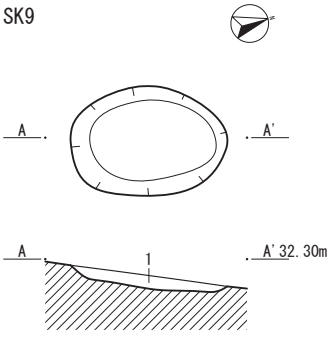


1 黒色砂質土 アカホヤを含む。

新旧対応表

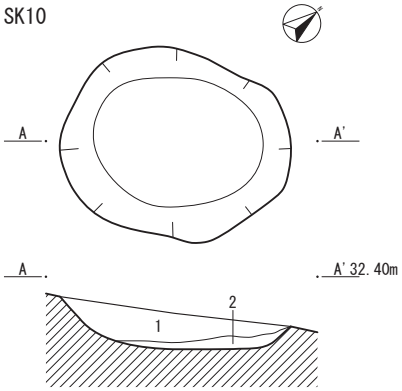
掲載No.	調査No.
SK1	SK5
SK2	SK7
SK3	SK8
SK4	SK9
SK5	SK1
SK6	SK4
SK7	SK10
SK8	SK12
SK9	SK14
SK10	SK13

SK9

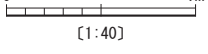


1 黒色砂質土

SK10

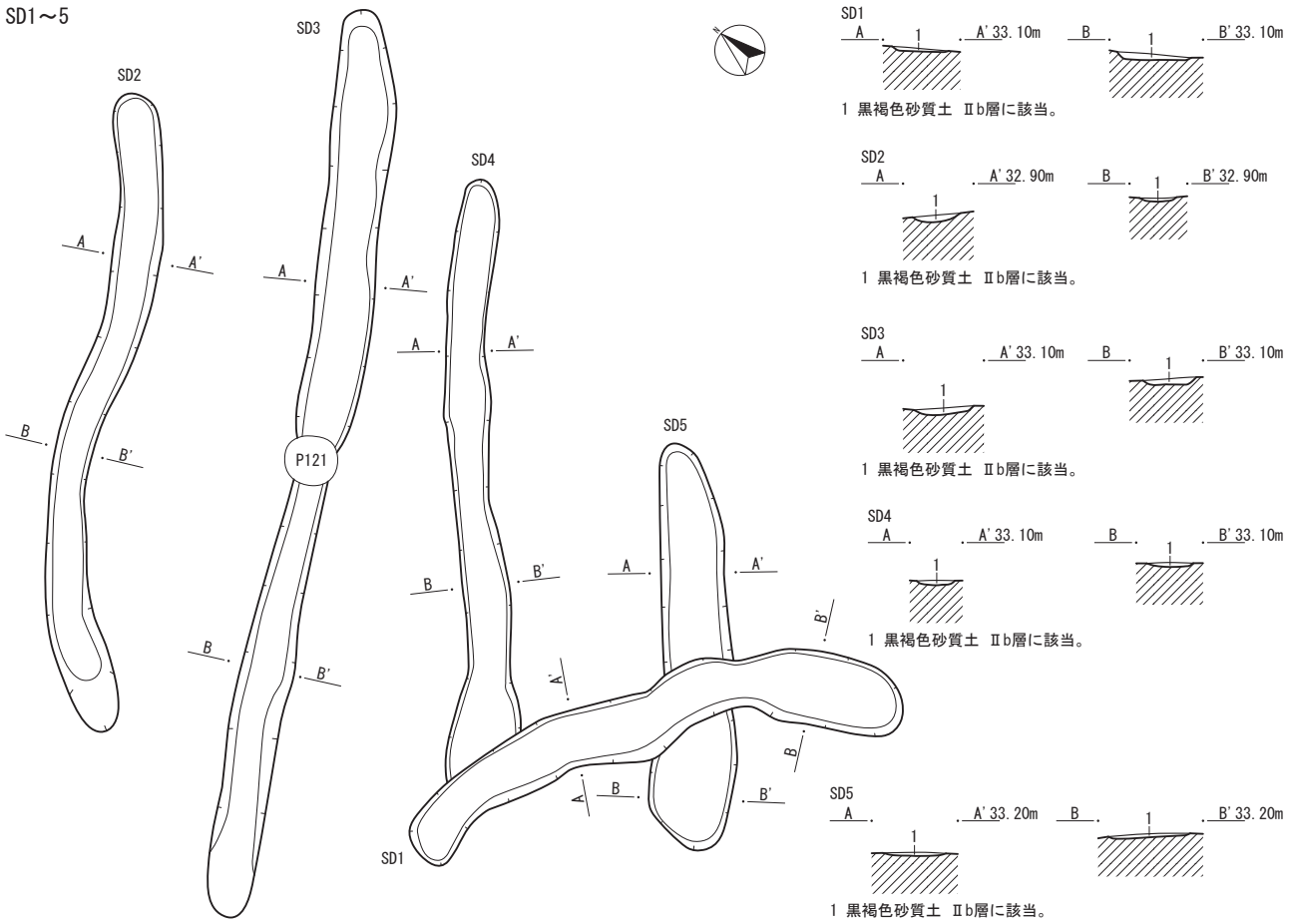


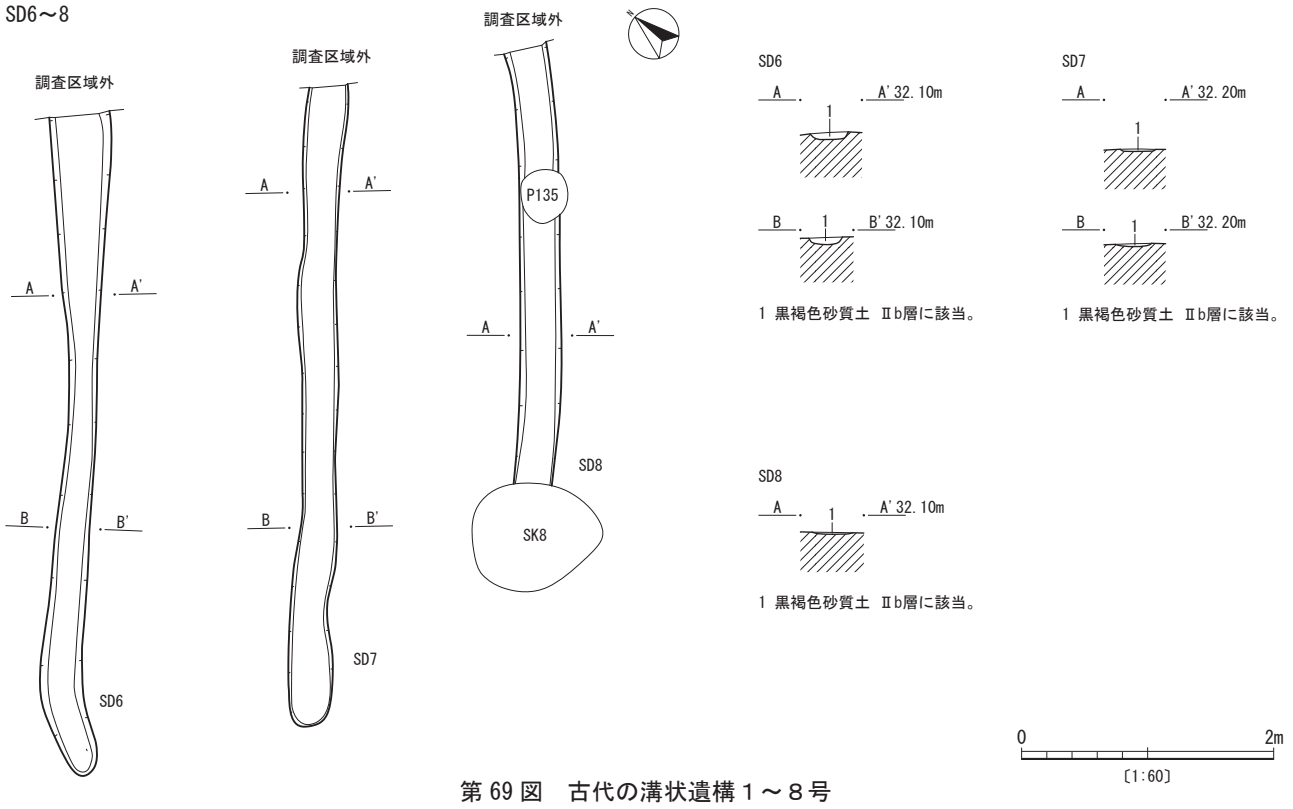
1 黒色砂質土 粘性あり，色調暗い。
2 黒色砂質土 アカホヤを含む。



〔1:40〕

第 68 図　古代の土坑 1 ～ 10 号





第 69 図　古代の溝状遺構１～８号

（ア） 坏（第 71 図 397 ～ 442）

底から外へ開きながらまっすぐ伸びる器形である。

397 と 398 は完形品である。397 は口径が 11.8cm，底径が 5.2cm，器高が 4.2cm ある。底から丸みをもって立ち上がり，まっすぐ口縁部へ開いて伸びている。内外とも浅黄橙色であるが，外面の口縁部と内面の底部は灰黄褐色，外面底部はにぶい赤褐色をしている。398 は口径が 13cm，底径が 6.4cm，器高が 4.1cm ある。底から丸みをもって立ち上がり，まっすぐ口縁部へ向かっているが，口縁部付近でやや外へ反っている。397 に比べて丸みをもった器形をしている。

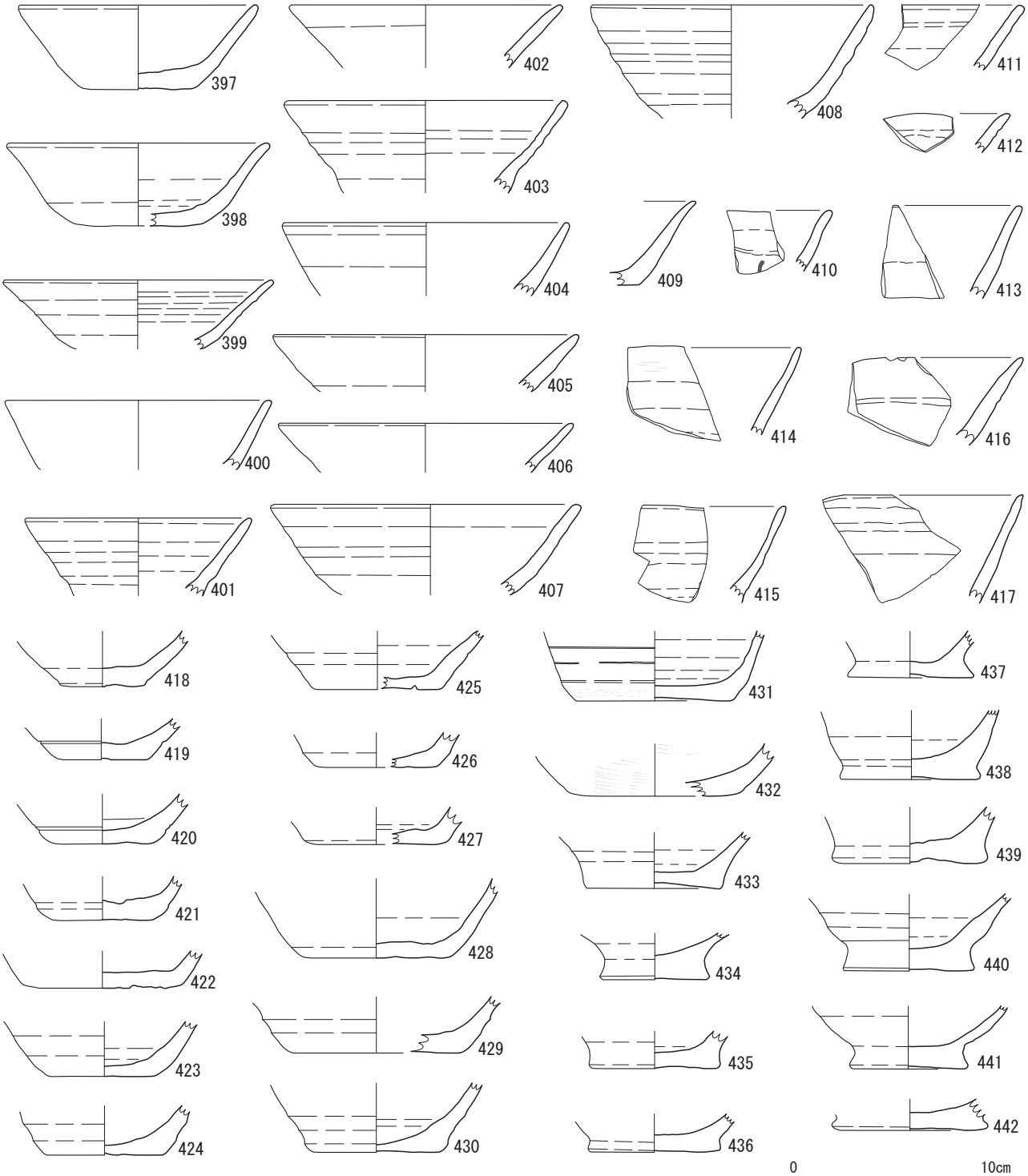
399 ～ 417 は口縁部から胴部までの破片である。口径は 11.2 ～ 15cm である。ほとんどが，底部から口縁部へ向かってまっすぐ伸びており，外へ強く広がるものと，直に近く伸びるものの２種がある。そのほかに，やや丸みをもって立ち上がるものもある。399 は口径が 13.5cm である。外面はろくろ整形がはっきり残っており，内面は浅いくぼみが筋状にみえる。400 は横ナデで仕上げているが，内面の口縁付近は特に丁寧である。401 は口径が 11.2cm と小さいが，器高は他とほぼ同大である。402 は外へ開き，内外とも丁寧なナデで仕上げている。403・404 は口径が 14cm とやや大きいが，403 が内外ともろくろ痕がよく残っているのに対し，404 はよくナデており，やや丸みをおびている。405・406 は外へ強く広がる器形をしており，405 の内面はミガキで仕上げている。407・408 は丸みをおびた器形をしている。408 は器高が６cm 以上と深く，内外とも丁寧にナデているが，外面にはろくろ痕が目立つ。明赤褐色を呈する。409 は口縁部がやや外反し，底部の厚さに比べて，口縁部は薄く仕上げている。410 は灰白色を呈しているが，口縁部付近が褐灰色に変色し，この部分の内面はよりていねいにナデている。外面に縦方向の墨痕らしきものが見える。411 ～ 413 は外へまっすぐ伸びる器形をし，414・415 は細い作りである。416・417 は 409 と同じように口縁部を薄く仕上げてある。灰白色を呈しているが，口縁端は 416 が赤みがかっており，417 は黒色化している。417 は外面下部も黒色化している。

418 ～ 442 は底部付近の破片である。底部切り離しはヘラ切りである。底径は５～８cm までのものが多いが，４cmのものや 8.4cm のものもある。418・419 は底径が４cm近くと小さく，底からまっすぐ口縁へ伸びている。419 の外面底部近くは，やや深いへこみがみられる。

第70図　古代の遺物出土分布図［1:350］

420 ～ 432 は底から体部へ丸みをもって立ち上がるものである。外面にはろくろびきの痕跡を残しているものが多いが，内面は多くのものが丁寧なナデ整形を施している。外面も丁寧にヘラナデを施したり，底面も切り離し痕をナデ消ししているものがある。420 の外面底部近くはややくぼみがみられ，内面も筋状のへこみがある。424 の外面底部近くはヘラナデで，ろくろ痕を消している。425 の底には溝状のくぼみがある。429 はややあげ底となっている。430 は外面の底近くを丁寧にナデて，丸みをつくっており，底面もナデている。431 は内面のろくろ痕跡が目立つが，外面の底近くはナデている。432 は内面・外面・底面ともハケナデ調整をしているが，内面はのちにヘラナデをしている。

433 ～ 442 底近くで外へ張り出し，低い充実高台風に作り出している。底は浅いあげ底となっているものが多く，内側へ曲がってややくぼみながら体部へ移るもの（433・436 など）と，やや立ち上がってから内側へ曲がるもの（434・437 など）とがある。436・438 などは張



第 71 図　古代の土師器（１）

り出しが短く，437 は張り出しが長い。440 はろくろ痕跡が良く残っている。442 の底部には切り離しのあとに，なんらかの圧痕が目立つ。内面はヘラミガキで仕上げている。

（イ） 埦（第 72 図 443 ～ 448）

外へ開きながら，やや内弯して口縁部へ至り，端部は丸みをおびている。底は高台の付くものと分厚いものとがある。443 は口径が 15cm で，高さが 6 cm 以上ある。内外とも丁寧にナデている。高台は 444 や 445 のように 1 cm を越す高いものと，446・447 のように低いものとがある。外へ広がり，端部は丸みをおびている。448 は底径が 6 cm で，厚さは 1 cm 以上ある。底近くでくびれ，外へ広がる器形となる。

（ウ） 大皿（第 72 図 449 ～ 451）

皿が 3 点あるがいずれも大きく，小皿は破片もない。449 は口径 14cm，底径 11.4cm，高さ 1.8cm である。丸みをもって立ち上がる分厚い底で，ややあげ底となる。外へ開きながら，まっすぐ伸び，口縁端部は丸みをおびている。450 と 451 は底付近の破片で，底径が約 12cm ある。450 は底部からの立ち上がりでやや内弯して開き，451 は丸みをもって口縁へ立ち上がる。451 は底部の立ち上がり付近をナデて丸く仕上げている。

（エ） 鉢（第 72 図 452・453）

全容は不明だが鉢と思われる破片が 2 点ある。452 は外へまっすぐ開く器形で，口縁端が細くなっている。内外ともハケ状のもので横方向にナデている。453 は体部下半で，外へ開きながら，まっすぐ口縁部へ伸びている。底部近くでくぼみがみられる。内外ともにぶい黄橙色を呈するが，外表面は赤色となっている。ともに焼成度は良好である。

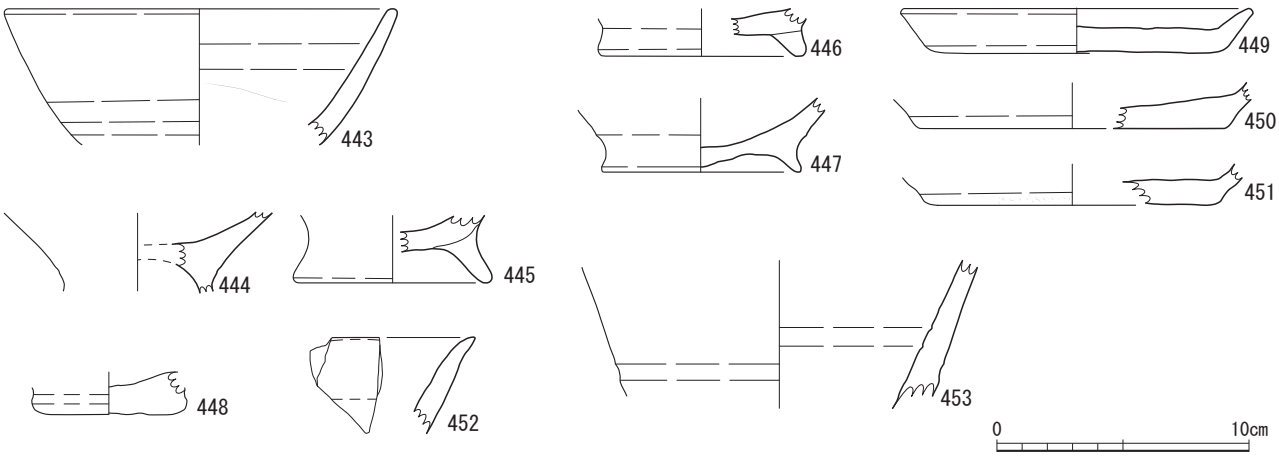
（オ） 甕（第 73 図 454 ～ 484）

甕は 2,534 点出土している。口縁部が外反し，外面と，内面口縁部をヘラで横方向にナデて整形し，胴部内面はヘラケズリによって薄く整形するという共通性を持つ。底部は大きな破片がなくはっきりしないが，丸底となるようである。完形品がないため法量は不明だが，口径は 20.8cm と小さいものから，30cm の大きいものまである。口縁部の形態や厚さには多様な様相がみられる。口縁部はいずれも丸みをもっておわるが，短いものと長いものとがある。

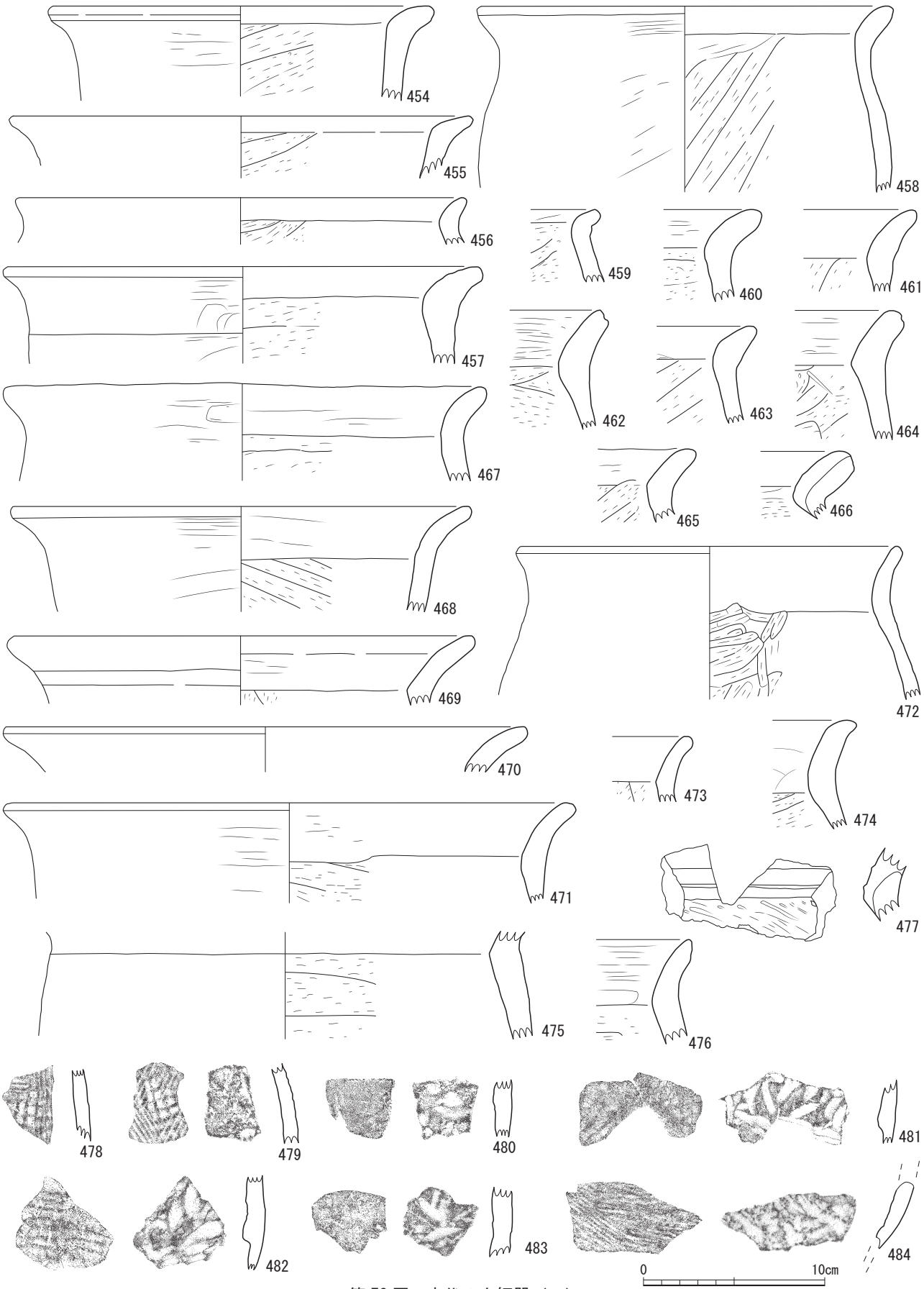
454 ～ 466 などが短いものである。長胴から口縁端近くの 1 ～ 2 cm で外へ屈曲している。454 の口唇部下部には凹線状のくぼみがある。455 は口縁端が細く，如意状となる。456 の口縁は右上斜めへ立ちあがる。457 は頸部が分厚くなるため，端部が細くみえる。458 は長胴形の胴部から細い頸部へくびれ，口縁部がやや分厚くなって右上へと立ち上がる。459 は短い口縁だが，頸部がこぶ状にふくらんでいる。460・461 は，くの字状に口縁部が外反しており，461 のヘラケズリは丁寧である。462・464 は口唇部に凹線が巡っている。463・465 の口縁は右上斜めへ立ち上がっている。

467 ～ 476 は 3 ～ 4 cm と長いものである。467 は口縁端がややでこぼこしており，一部には粘土が貼付けてある。468 は胴部から同じ厚さで如意状に屈曲している。469 は口縁部と胴部との境が屈曲しているもので，口縁端近くの内面はややくぼんでいる。ヘラナデは内外とも丁寧である。470 は外へ強く反っている。471 も外へゆるやかに反っている。472 は口径が 20.8cm と小さく，胴部は外へややふくらんでいる。外面にはススが広く付着している。473 は内面の口縁部と胴部境に稜ができるもので，内面調整はナデ，ケズリとも丁寧である。474 は胴内面を強くケズり，口縁との間に段ができる。口縁部は 4 cmと長く，端部は外へ張り出している。476 も口縁部が 3.5cm と長く，口唇部の下方に浅い凹線がみられる。ヘラケズリは丁寧である。475・477 は頸部付近の破片である。475 は口縁部と胴部の屈曲が強く曲がり，口径も大きい。

477 は口縁部内面に粘土を貼りつけて分厚くしている。口縁部の厚さはほぼ胴部と同じ 8 ～ 11cm ほどの厚さのものが多いが，厚くしたものもある。466 は 18mm



第 72 図　古代の土師器（2）



第 73 図　古代の土師器（３）

もある。断面観察によれば,貼りつけて厚く作っている。

478 ～ 484 は土師甕の器形・色調・焼成度などをしているが，外面タタキによる製作方法をしているものである。外面は正格子タタキであるが，そのあとハケあるいはヘラでナデ消しており，肉眼観察ではその痕跡が見にくいものもある。内面には同心円当て具痕を残しているものもあるが、478 ～ 480 はその痕跡をナデ消しており，ヘラナデあるいはヘラケズリのあとを残している。いっぽう，481 ～ 484 は当て具痕をそのまま残しており，深い痕跡が残っている。厚さは土師甕に比べて，やや薄くなっているが，それほど差はない。484 の外面はハケナデで仕上げており，他の破片に比べて薄い作りである。焼成度は土師甕とそれほど違いはないが，幾分堅い焼きとなっている。

イ　焼塩土器（第 74 図 485 ～ 510）

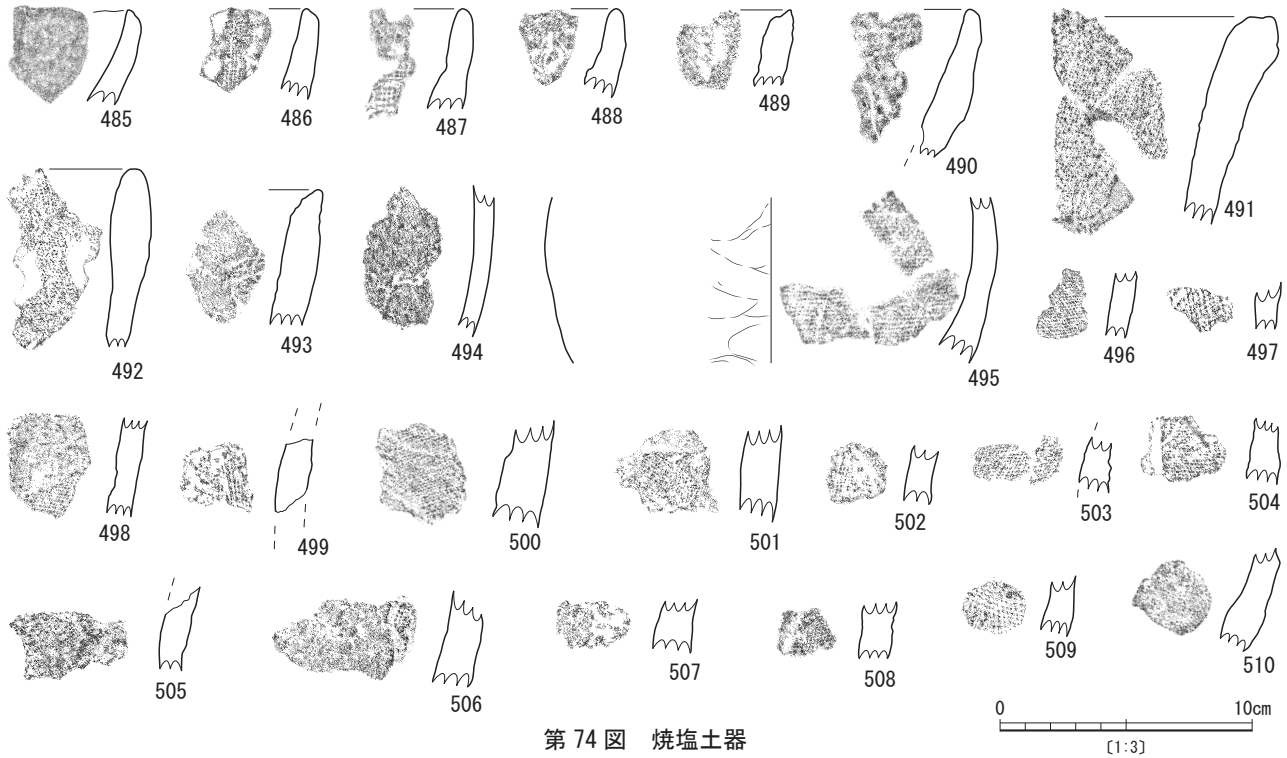
内面に布痕のある小型鉢形の土器で 34 点出土している。全形をうかがえるものはないが，円錐形をしていると思われる。小型のものが多いが，491 ～ 493・500 などのように中型となりそうなものもある。口縁部はやや内弯するものが多い。また，つまみ出すような雑な作りが多いが，485・486 などのように外側をヘラでケズって，とがらせたものもある。胴部は分厚いものと，薄い作りのものがある。500・504 のように内面に棒状圧痕のあるものもある。外面は叩いて整形しており，そのあとをヘラで雑にナデている。焼成度は軟質のものもあるが,堅いものが多い。茶色の石などを含むものが多いが,509 は金雲母を含んでいる。

ウ　黒色土器・赤色土器（第 75 図 511 ～ 520）

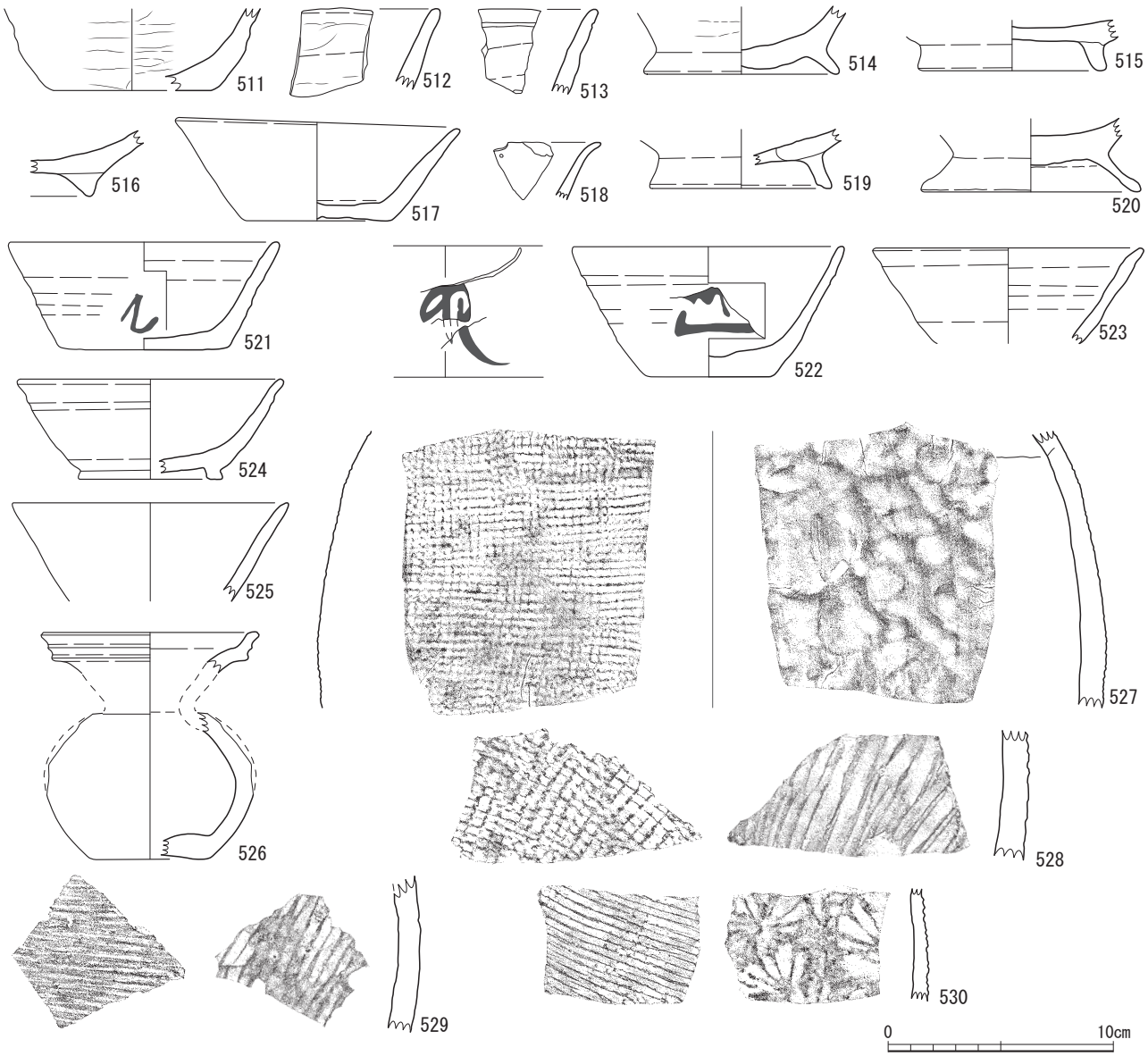
外面あるいは内面が，黒色や赤色を呈している坏・埦である。

511 ～ 516 は内面が黒色を呈した内黒土師器で，坏と埦がある。511 が坏である。口縁部付近を欠いているが，残存高 3.6cm，底径 7 cm である。底近くは丸みをもち，分厚い作りとなっている。外面はろくろびきの痕跡があるが，丁寧に横方向のヘラナデで仕上げている。内面は丁寧なヘラミガキで，光沢を呈している。内面は褐灰色だが，一部は明赤褐色を呈し，内赤土器と見間違うほどである。512 ～ 516 は埦である。口縁部は外へまっすぐ伸び，端部は丸みをおびている。外面はヘラナデだが，内面は丁寧なヘラミガキで仕上げている。底には外へ広がる高台が貼り付けられるが，スマートなものや三角形状のものなど様々ある。高台径は 8.5cm 前後である。514 は底部が分厚く，底のでこぼこが目立ち，内面の底中央はややへこんでいる。また，内面は広く黒色を呈しているが，一部はにぶい黄橙色を呈しており，内赤土器と見間違う様相を呈している。515 の外面は灰白色だが，高台部分のみ黄橙色と色調が異なっている。516 の高台端は摩耗が顕著である。

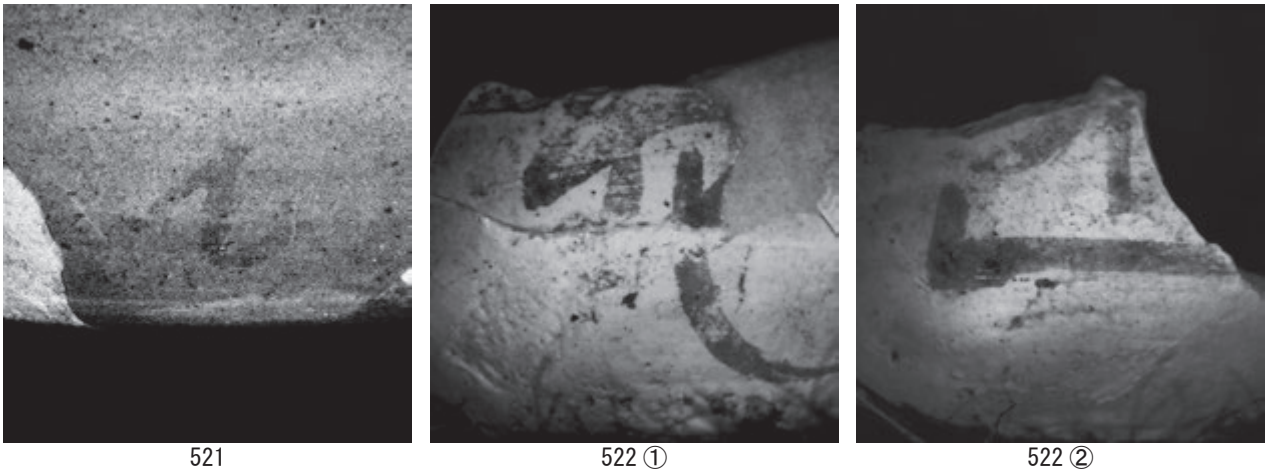
517 ～ 520 は赤色土器である。517 は口径 12.6cm，底径 6.5cm，高さ 4.4cm の浅黄橙色をした坏である。底から口縁へ向かってまっすぐ伸び，口縁端は丸みをおびている。内外とも丁寧なナデ整形がされ，底はややあげ底ぎみである。口縁部内面は明赤褐色を呈している。外面は赤褐色に塗布したあと，その上に赤黒色の塗料を付し



第 74 図　焼塩土器



第 75 図　黒色土器・赤色土器・墨書土器・須恵器



521　　522 ①　　522 ②

写真5　墨書土器赤外線写真

ている。518 ～ 520 は埦である。518 は端反り風に外反する口縁部で細い作りである。内面は横方向のヘラミガキで仕上げ，赤色を呈している。519・520 は高台の部分で，高台径は 519 が 8.1cm，520 が 9.8cm ある。519 は外へふんばる高台で，底部に内から外へ開けた径１cm ほどの穿孔がみられる。520 はほっそりした長い高台で，内側は赤茶褐色を呈するが，一部黒色の部分もあり内黒土師器のようにもみえる。

エ　墨書土器（第 75 図 521・522）

521 は口径 12cm，底径７cm，高さ 4.8cm の，底から口縁へ向かってまっすぐ伸びている須恵器坏である。黄灰色を呈し，須恵器としては軟質である。外面の体部下半に正位で，「乙」？の字が書かれている。９つの破片に破砕しているが，Ｅ～Ｇ -58 ～ 60 区と広い範囲に散布し，約 20.5 m離れた場所で出土した破片もある。

522 は口径 12cm，底径 5.8cm，高さ 5.8cm の深い土師器坏で，底から口縁へ向かってまっすぐ伸びる器形である。体部外面の相対する２か所に墨書がみられる。ともに正位で，一文字だが，口縁部が欠けているため解読できない。一つは「允」，あるいは「充」の可能性がある。あと一つは大ぶりな書体で，合わせ字の可能性もある。

オ　須恵器（第 75 図 523 ～ 530）

44 点の破片が出土しているが，38 点は甕である。

523 は口径 12cm の坏で，まっすぐ伸び，内外にろくろ痕跡がみられる。524 は高台付の坏で，口縁直径が 11.6cm，器高 4.5cm，高台直径 6.4cm である。底は丸みをおびてどっしりし，高台はやや外へ広がり低い。内外とも緑がかった灰色を呈しているが，口縁部付近は内外とも暗灰褐色となる。胎土には７mm 大の灰色石も含まれる。525 も口径 12.2cm の坏で，底から口縁へまっすぐ伸び，口縁端はとがっている。

526 は口径 9.6cm，推定高 10cm，底径５cm の小型壺で，頸部が欠けるが，色調・胎土等から同一個体と思われる。口縁部は二重口縁風となる。肩部は剥脱が目立つが，丸みをおびて，ふんばる形状である。底部は安定した平底だが，やや上げ底ぎみとなる。内面の一部に焼けぶくれがみられ，底にはわら状の圧痕がみられる。外面は灰釉が付着して光沢のある黒色であるが，肩部の一部は熱を受けて釉が溶け，茶がかった灰白色を呈している。

527 ～ 530 は甕である。527 は直径 35cm ほどの大きな破片で，外面に正格子タタキ，内面に無文の当て具痕がみられる。灰色を呈し上半部には自然灰釉がみられる。528 も外面に正格子タタキ痕がみられ，内面には，条痕の当て具痕がみられる。529 の外面には横方向の条痕タタキ，内面には縦方向の条痕当て具痕がみられる。外面は暗赤褐色，内面は赤褐色を呈し，外面上半には胡麻状の自然灰釉がみられる。530 は薄い破片で，外面に横長の長格子タタキが，内面に花文の当て具痕がみられる。外面の一部は摩耗している。

（２）　土製品

紡錘車が３点，ふいごの羽口が６点出土している。

ア　紡錘車（第 76 図 531 ～ 533）

いずれも坏の底部を再加工したものである。

531 は直径 5.8cm，厚さ 1.4cm，孔径 0.8cm である。外へやや張り出す底部の周辺を，丁寧に磨いて丸くしており，側縁部には坏部と底部境のくびれ部分が残っている。片面には内底部のへこみが丸くまわっている。532 は半欠品で，直径 6.5cm，厚さ１cm，孔径１cm である。外へやや張り出す底部を打ち欠いて円盤状に調整しているが，531 に比べて磨きが雑である。欠損部の摩滅が目立つ。533 は１／６ほどの破片で，直径 6.5cm，厚さ 0.8cm，孔径 0.6cm ほどと想定できる。周辺や両面とも丁寧に磨いており，段がみられない。

イ　ふいごの羽口（第 76 図 534 ～ 536）

６点に分かれているが，同一個体と思われる。

534 は先端部の破片で，外面は溶融し黒色のガラス質に変化している。先端に向かってややすぼまっている。535 の内面はにぶい橙色をしているが，まわりは灰白色を挟んで，褐灰色を呈している。先端近くだと思われる。536 は外径 5.5cm，孔径 1.8cm で，先端近くの外面一部が褐灰色・灰白色を呈しているが，その他は浅黄橙色あるいは明褐灰色を呈している。大きい石粒をほとんど含まず，割とこまかい精製土を用いている。

（３）　鉄製品（第 76 図 537 ～ 539）

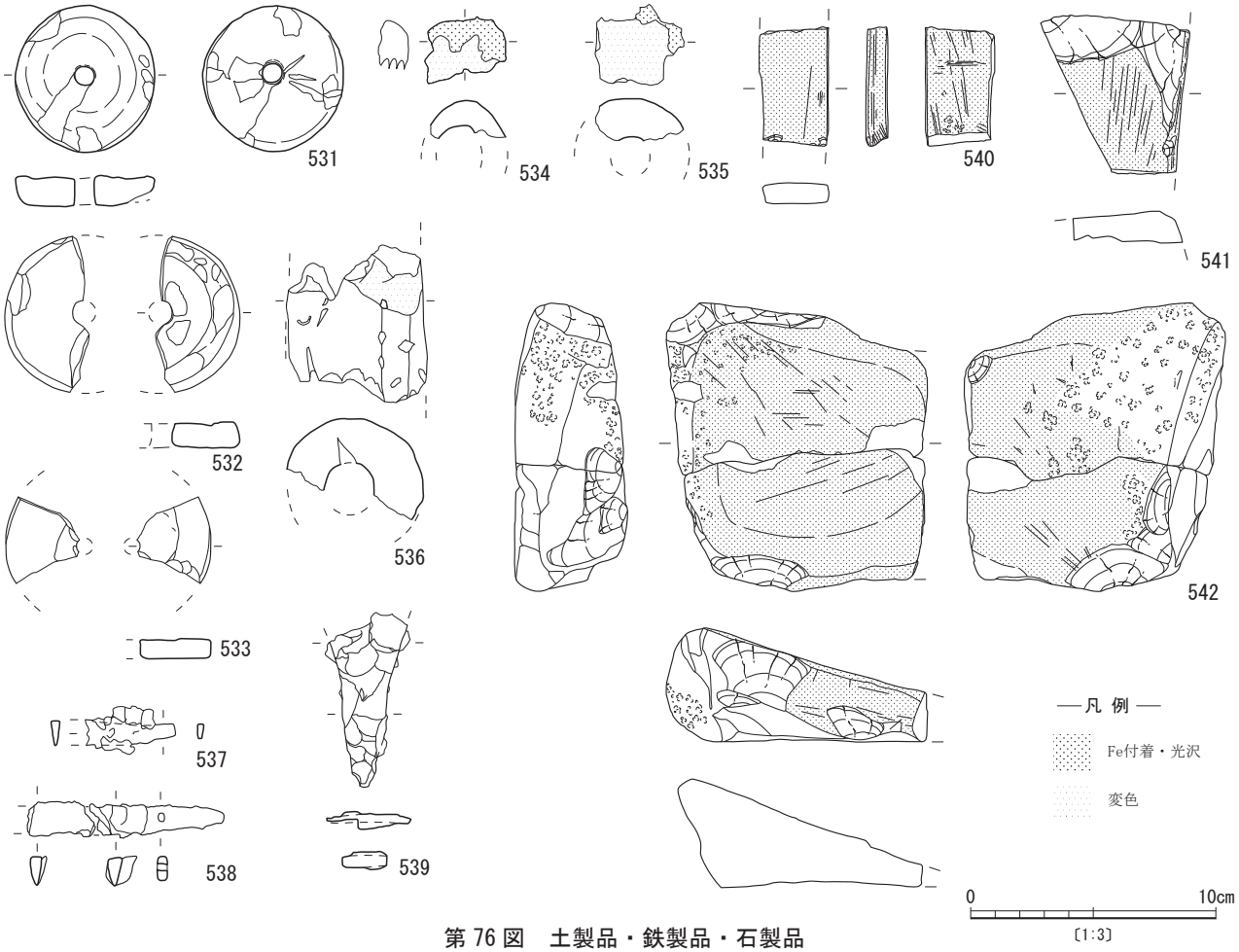
刀子２点と鏃１点が出土している。また，図化してないが，鉄滓６点と鉄くず１塊が出土している。鉄滓は３cm × ２cm ほどの小さいものから，９cm × ７cm の大きなものまであり，Ｇ 60・61- 区周辺で５点出土している。

537 は刃部先端が欠けており，残存長は 3.8cm である。柄部は長さ 0.9cm，幅 0.6cm，厚さ 0.3cm である。身部は幅 1.1cm で，背部の厚さが 0.35cm ある。538 も刃部先端が欠けており，残存長は８cm である。柄部は長さ３cm，幅 0.9cm，厚さ 0.4cm で，端部は丸みをおびている。身部との境付近に孔径 0.3cm ほどの目釘孔らしきものがみえる。身部の幅は 1.1cm，背部の厚さは 0.5cm である。錆化が進んで，刃部の接合は不可能だった。

539 は鏃で、先端部が欠けているため全形が不明である。身の先端に向かって広がっており，撓形を呈する平根系の鏃の形態を呈しているが，雁又鏃の可能性もある。

（４） 石製品（第 76 図 540 ～ 542）

砥石が３点出土している。540 は両端が欠損した幅 2.8cm,厚さ 0.9cm の提砥で,長さ 4.9cm が残存している。砂岩製で，表裏と，側面の一方を使用している。541 は三方と裏面を欠いている。砂岩製で，欠けてない表面と側面を使用している。542 は正方形様の軟質砂岩を利用した砥石である。雑然とした原石の両面と，二方向の側面を使用しているが，一方の側面（平面図の右上）は三角形状を呈するほど細く磨っている。



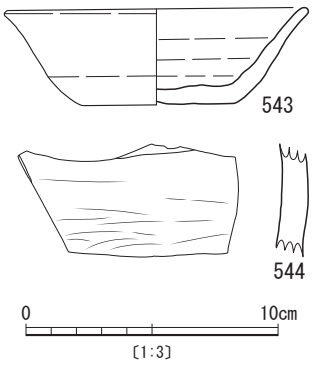
第 76 図　土製品・鉄製品・石製品

第８節　中世の調査（第 77 図 543･544）

中世の遺構は検出されず，遺物の出土も２点のみである。

543 は口径 12cm，底径６cm，高さ 4.2cm の瓦器坏である。口縁端・底とも丸みをおび，底から口縁へまっすぐ伸びている。外面から口縁内面にかけて褐灰色をし，内面体部と底部は灰白色を呈している。こまかい粘土を用いており，灰色石が含まれる。内外面とも横ナデで仕上げている。畿内産楠葉型Ⅲ－４類（橋本編年）に比定され，13 世紀後半のものと思われる。

544 は常滑焼甕の破片である。内外とも赤みがかった茶褐色を呈し，白石色や茶色石などの小石を多く含む粗い胎土で，小石の中には８㎜大のものもある。14 ～ 15 世紀頃のものと思われる。



第 77 図　中世の土器

第４表　縄文時代早期土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	器種	部位	分類	文様	色調		胎土							焼成
									外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	灰石	灰白石	
12	1	E59	Ⅱb	一括	深鉢	胴	下剝峯式土器	貝殻刺突文	橙	黒褐				○			○	普通
12	2	F58	Ⅱb	502	深鉢	胴	〃	くさび状突起	赤褐	赤褐	○			○	○	○		良好
12	3	H59	Ⅲ	4889	鉢	胴	押型文土器	山形押型文	橙	橙	○		○		○		○	普通

第５表　縄文時代前期土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	部位	調整		文様	色調		胎土					焼成	備考
						外面	内面		外面	内面	白石	黄白石	雲母	石英	角閃石		
14	4	F59, G58･59, H58･59	Ⅲ, Ⅳa･b	1330 他	口縁～胴	貝殻条痕→丁寧なナデ	貝殻条痕→丁寧なナデ	外：多条沈線の間に巻貝押圧 内：巻貝殻頂による沈線。5 組の補修孔	橙・黒褐	橙・黒褐	○					良好	黒石・輝石含む 口径 33.6cm
15	5	G58･59	Ⅱb, Ⅲ, Ⅳa･b	326 他	完形	縦方向二枚貝条痕	横方向二枚貝条痕→ナデ	2 ヵ所に突起。外：口縁近くに巻貝凹線。内：口縁近くに巻貝凹線。突起部は短絡凹線と巻貝刺突文	黒（底部：にぶい黄橙、褐灰）	赤褐	○	○				良好	底に白粘土付着 灰石・輝石含む 口径 33.0cm 器高 33.0cm
15	6	G58	Ⅲ, Ⅳb	1932 他	底付近	貝殻条痕	貝殻条痕	穿孔	黄褐・黒褐	黄褐・黒褐	○	○	○			普通	灰石含む
17	7	F58, G58･60, H58･59, I58	Ⅱ, Ⅱb, Ⅳa･b	1603 他	口縁～胴	貝殻条痕	貝殻条痕	口縁内面に条痕で波状。口唇部に巻貝刺突文。下部に補修孔	にぶい橙	にぶい橙	○				○	良好	外面にスス 口径 37.8cm 茶石含む
18	8	G59, H･I58	Ⅳa･b	4906 他	口縁～胴	貝殻条痕（斜）	横条痕	斜格子，口唇部に二枚貝押圧	灰褐・赤褐	灰褐・赤褐	○	○			○	良好	ススあり，8 ～ 11 同一
18	9	H58	Ⅳa･b	3965 他	口縁～胴	貝殻条痕（斜）	横条痕	斜格子，口唇部に二枚貝押圧	灰褐・赤褐	灰褐・赤褐	○	○			○	良好	ススあり，8 ～ 11 同一
18	10	H･I58	Ⅲa, Ⅳa･b	3749 他	口縁～胴	貝殻条痕（斜）	横条痕	斜格子，口唇部に二枚貝押圧	灰褐・赤褐	灰褐・赤褐	○	○			○	良好	ススあり，8 ～ 11 同一
18	11	I58	Ⅳa	5213	口縁～胴	貝殻条痕（斜）	横条痕	斜格子，口唇部に二枚貝押圧	灰褐・赤褐	灰褐・赤褐	○	○			○	良好	ススあり，8 ～ 11 同一
19	12	H58	Ⅳb	5227	口縁	貝殻条痕（斜）	貝殻条痕（横）	頂部に巻貝刺突	黒褐	黒褐	○	○				普通	輝石含む
19	13	G60	Ⅲ, Ⅲa	4620	口縁	条痕（斜・横）	条痕→ナデ	口縁に突起	にぶい褐	黒褐	○	○	○	○		良好	14 と同一，口径 16.4cm
19	14	G60	Ⅱb	3711	口縁	条痕（斜・横）	条痕→ナデ	口縁に突起	にぶい褐	黒褐	○	○	○	○		良好	13 と同一
19	15	G59	Ⅲ, Ⅳa･b	4106 他	胴	貝殻条痕（横）	条痕→ナデ	斜格子条痕	黒褐	灰黄褐	○	○		○		良好	茶石含む
19	16	G58	Ⅳb	5687	胴	貝殻条痕	ヘラ横ナデ	下位に補修円孔	にぶい黄褐・褐灰	にぶい黄褐・褐灰	○	○		○		普通	
19	17	H58	Ⅳb	5463 他	胴上半	貝殻条痕（横→縦→横）	貝殻条痕（横→縦→横）	三角突帯が巡り，そのあと部分的に縦方向三角突帯	にぶい褐	にぶい褐		○			○	普通	茶石含む
19	18	H59	Ⅳa･b	5110 他	底	貝殻条痕	貝殻条痕	－	明赤褐	明赤褐	○	○		○		良好	底に白粘土付着

1，器種は深鉢。2，4 ～ 5 は曽畑式土器，6 ～ 18 は条痕文系土器

第６表　縄文時代後期土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	部位	底径（cm）	調整		文様	色調		胎土						焼成	備考
							外面	内面		外面	内面	白石	雲母	石英	灰石	黒石	長石		
20	19	G59	Ⅳ	3908 他	口縁	－	ナデ	貝殻条痕	口唇押圧，押圧，凹線	褐	にぶい黄橙	○	○	○				良好	ススあり微量，雲母多
20	20	G61	Ⅳa	4829	胴	－	貝殻条痕	貝殻条痕→ナデ	凹線，V・U字状凹線	にぶい赤褐	黒褐	○	○	○				良好	21 と同一
20	21	G60	Ⅳ	5286	胴	－	貝殻条痕	貝殻条痕→ナデ	横・斜位の凹線	橙	黒褐	○	○	○				良好	20 と同一
20	22	G60	Ⅲ	3833	口縁	－	ナデ	ナデ	横位の凹線	にぶい橙	褐灰	○		○				良好	ススあり
20	23	G61	Ⅲa	3701	口縁	－	ナデ	ナデ	横位の凹線	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		○		普通	
20	24	H59	Ⅲ	4879	口縁	－	ナデ	ナデ	横凹線・縦押圧	明赤褐	明赤褐		○	○				良好	青灰色石含む
20	25	G61	Ⅳa	4852	口縁	－	ナデ	ナデ	横・縦・斜位の凹線	橙	明赤褐	○		○		○	○	良好	
20	26	G･H60	Ⅳa	4569 他	胴	－	貝殻条痕→ナデ	ナデ	横位の凹線	赤褐	にぶい褐	○	○	○				良好	
20	27	H60	Ⅳa	4675	口縁	－	ナデ	ナデ	口唇に押圧・長楕円状凹線	明赤褐	灰黄褐	○	○	○				良好	
20	28	G60	Ⅲ, Ⅲa	3626 他	口縁	－	ナデ	貝殻条痕→ナデ	口唇に押圧	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○				○	普通	ススあり微量
20	29	G60	Ⅱb	3835	口縁	－	ナデ	ナデ	口唇に押圧，波状口縁	黒	褐灰・にぶい黄橙	○		○				普通	ススあり多
20	30	G61	Ⅲa	3682	胴	－	ヨコナデ	ヨコナデ	矩形凹線文	赤褐	赤褐	○				○		良好	
20	31	G60･61	Ⅲ, Ⅳa	3831 他	口縁	－	ナデ	ナデ	横・縦位の凹線。口唇に深い切込，波状口縁	明赤褐	にぶい赤褐	○		○			○	普通	
20	32	G60	Ⅳa	4592	口縁	－	ナデ	貝殻条痕→ナデ	口唇に押圧、蓮弁文	褐灰	にぶい赤褐	○		○		○		普通	ススあり多
20	33	G61	Ⅳa	4835	口縁	－	貝殻条痕	ナデ	横位の凹線と縦短絡線	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○		○	○	良好	雲母多，34 と同一
20	34	G60	Ⅳa	4570	口縁	－	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕	横位の凹線と縦短絡線	黒褐	にぶい黄褐	○	○	○				良好	ススあり，雲母多，33 と同一

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	部位	底径（cm）	調整		文様	色調		胎土						焼成	備考
							外面	内面		外面	内面	白石	雲母	石英	灰石	黒石	長石		
20	35	G･H60	Ⅱb, Ⅲ	4666 他	胴	－	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕	凹線，縦短絡線	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○				普通	茶石含む
20	36	G60	Ⅳ	4014	口縁	－	ナデ	ナデ	縦押圧・横位の凹線	にぶい赤褐	橙	○		○		○		普通	
20	37	G60	Ⅲa	3710	口縁	－	ナデ	ナデ	横位の凹線。口縁上端に凹点，口唇にＷ字形貼付文，紐上列点	明黄褐	明黄褐	○		○				普通	輝石含む ス
20	38	G60	Ⅳa	5192	口縁	－	ナデ	ナデ	竹管文・縦・横位の凹線	浅黄橙	浅黄橙	○	○	○				良好	
21	39	G60	Ⅳa	4577	胴	－	ナデ	貝殻条痕→ナデ	縦位の凹線。間に押圧文	赤褐	にぶい橙	○		○		○		普通	40 と同一
21	40	G60	Ⅳa	4576	胴	－	ナデ	ナデ	斜位の凹線。押圧文	にぶい赤褐	明赤褐	○		○	○			普通	39 と同一
21	41	G61	Ⅱb	4845	胴	－	貝殻条痕	貝殻条痕	靴形文の凹線	黒褐	にぶい赤褐	○	○	○				良好	ス，雲母多
21	42	G60	Ⅳ	4018	胴	－	ナデ	貝殻条痕→ナデ	逆Ｚ字の凹線	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○				普通	
21	43	G60	Ⅳ	3943 他	胴	－	ナデ	ナデ	Ｚ字凹線	にぶい橙	灰褐	○	○	○			○	普通	
21	44	G60	Ⅲ	3832	胴	－	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕	横位の凹線	褐灰	褐灰	○	○	○			○	普通	
21	45	G60	Ⅳa	5195	胴	－	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕→ナデ	－	明赤褐	黒	○	○	○				良好	
21	46	H59	Ⅳa	4917	胴	－	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕→ナデ	－	暗赤褐	黒褐	○	○					良好	
21	47	G59, H58, SI1	Ⅲ， Ⅳa･b	1077 他	胴	－	条痕→ナデ	条痕	－	にぶい黄橙 黒褐	黒褐	○	○		○			良好	ス
21	48	G59･60, H58	Ⅳa･b	4408 他	胴～底	4.8	貝殻条痕	ナデ	－	胴部：灰褐 底部：橙	褐灰	○		○		○		普通	茶石含む
22	49	G61	Ⅳa	4843	底	－	ナデ	ナデ	縦位の連続凹線	にぶい赤褐	赤灰	○				○		良好	網代底
22	50	H59	Ⅳb	5437	底	－	ナデ	ヨコナデ	縦位の連続凹線	にぶい赤褐 （底：にぶい橙）	褐灰	○		○	○	○		良好	
22	51	G61	Ⅳa	4832	底	5.5	貝殻条痕	ナデ	－	にぶい橙	にぶい橙	○		○		○	○	普通	網代底
22	52	G60	Ⅲ，Ⅳa	4532 他	底	6.0	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕→ナデ	－	灰褐	褐灰	○		○		○		良好	黄色小石含む
22	53	G60･61	Ⅲ，Ⅳa	3846	底	13.0	ナデ	ナデ	－	明赤褐	赤褐	○		○		○		－	黄色小石含む
22	54	G61	Ⅳa	4833	底	－	ヨコナデ	ヨコナデ	－	褐灰	にぶい橙	○		○		○		良好	底に白土
22	55	G60	Ⅲ	4646	底	－	条痕→粗いナデ	ナデ	－	赤灰	黒	○	○	○				良好	底に白土・網代底
22	56	G60	Ⅳ	3959	底	－	粗いナデ	ナデ	－	赤褐	赤褐	○			○			良好	底に白土・網代底
22	57	G60	Ⅲ	4540	底	5.8	ナデ	ナデ	－	明赤褐	にぶい橙	○		○		○		普通	網代底
22	58	H58, G61	Ⅳa	4778 他	底	4.2	貝殻条痕→ナデ	ナデ	－	黄灰	黄灰	○		○		○		普通	網代底
22	59	G61	Ⅳa	4831	底	－	粗いナデ	貝殻条痕	－	赤灰	褐灰	○	○					良好	底に白土・網代底
22	60	G61	Ⅳa	4863	底	－	粗いナデ	粗いナデ	－	赤褐	にぶい赤褐	○	○					良好	底に白土・網代底
22	61	G59	Ⅲa	3554	底	－	粗いナデ	ナデ	－	黄灰	灰白	○		○		○		良好	
22	62	F59	Ⅳ	3932	底	5.6	ナデ	ナデ	－	赤褐	黒・赤褐	○	○					良好	
22	63	G59	Ⅳb	5551	底	7.6	ヨコナデ	ナデ	－	にぶい赤褐	黒褐	○			○			良好	
22	64	G61	Ⅲ，Ⅳb	4828 他	底	6.4	ユビナデ	－	－	赤灰・赤褐	赤	○		○		○	○	普通	底に白土・網代底
22	65	－	Ⅰ	－	口縁	－	ナデ	ナデ	口縁に２本の横沈線	橙	赤灰	○		○		○		良好	
22	66	F58	Ⅲ	1207	口縁	－	ていねいなナデ	ていねいなナデ	２条の横沈線	灰褐	灰褐	○	○	○				良好	黄色小石含む
22	67	SI1	②	4759	口縁	－	ナデ	ナデ	口縁部に２条横沈線	にぶい赤褐	黒褐	○	○	○				良好	
22	68	F58	Ⅲ	1214	胴	－	ナデ	ナデ	２条の横沈線文	明赤褐	にぶい赤褐	○		○				良好	

1，器種はすべて深鉢
2，19 ～ 21 は岩崎下層系，22 ～ 64 は岩崎上層式，65 ～ 68 は中岳Ⅱ式

第７表　縄文時代晩期土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	器種	部位	調整		文様	色調		胎土							焼成	備考
							外面	内面		外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	灰石	角閃石		
26	69	E ～ G58, G59	Ⅱb, Ⅲ， Ⅳb	1161 他	深鉢	口縁～胴	粗いハケ状ナデ	粗いハケ状ナデ	－	黒褐	にぶい褐	○		○			○	○	普通	
28	70	G59	Ⅳa	4190 他	深鉢	口縁～胴	ヘラナデ	ヘラナデ	－	にぶい褐・褐灰	にぶい褐・褐灰	○		○			○	○	普通	ス，口径 29.8cm
28	71	G58･59	Ⅲ， Ⅳa･b	1329 他	深鉢	口縁～胴	ヘラナデ	ヘラ横ナデ	－	黒	黒			○	○		○	○	良好	波状口縁，口径 26.0cm
28	72	G59 ～ 61	Ⅱb, Ⅲ， Ⅳa	3523 他	深鉢	口縁～胴	貝殻条痕→ヘラナデ	貝殻条痕→ヘラナデ	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○				○	○	普通	ス，口径 31..5cm
28	73	G58･59, H59, SI1	Ⅲ，Ⅳ， Ⅳa	339 他	深鉢	口縁～胴	ヘラナデ	ヘラ横ケズリ	屈曲部盛上げ	赤褐	赤褐	○	○	○				○	良好	口径 29.0cm
29	74	G60	Ⅱb	3270	深鉢	口縁	上：ヘラナデ 下：貝殻条痕	上：貝殻条痕 下：ナデ	－	黒	黒	○	○			○		○	普通	
29	75	H58	Ⅳa	4183	深鉢	口縁	ヘラミガキ	ヘラミガキ	－	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○		○				○	良好	ス

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	器種	部位	調整		文様	色調		胎土							焼成	備考
							外面	内面		外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	灰石	角閃石		
29	76	G58	Ⅲ	3997	深鉢	口縁	ヘラナデ	丁寧なヘラナデ	–	黒褐	灰黄褐	○	○					○	良好	スス
29	77	G59	Ⅲ，Ⅳa	1916他	深鉢	口縁	条痕	条痕→ナデ	–	黒褐	黒褐	○		○				○	良好	
29	78	H58	Ⅲ，Ⅲa	4166	深鉢	口縁	二枚貝条痕	条痕	–	にぶい褐	にぶい褐	○				○	○	○	普通	
29	79	G59, H58	Ⅱb	4152他	深鉢	口縁	粗い横ナデ	粗い横ナデ	–	にぶい黄	にぶい黄	○		○				○	良好	スス厚く付着
29	80	G59	Ⅳa	5036	深鉢	口縁	条痕	条痕→ヘラミガキ	–	黒褐	黒褐	○				○		○	良好	
29	81	G59	Ⅳa	1865	深鉢	口縁	貝殻条痕→ヘラナデ	貝殻条痕→ヘラナデ	–	褐灰	にぶい褐	○					○		普通	スス
29	82	H59	Ⅳa	5095	深鉢	口縁	ヘラナデ	ヘラナデ	–	黒褐	黒褐	○	○	○					良好	
29	83	G60	Ⅲa	3618	深鉢	口縁	粗いヘラ横ナデ	粗いヘラ横ナデ	–	褐灰	灰褐	○		○				○	普通	スス
29	84	G・H59	Ⅳa	4401他	深鉢	口縁～胴	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	–	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○			○	○	○		普通	口径24.0cm
29	85	G59	Ⅳb	5495	深鉢	口縁	ヘラナデ	ヘラナデ	–	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○						○	普通	
29	86	G60	Ⅲa，Ⅳa	3634他	深鉢	口縁	横条痕	横条痕	–	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○	○	○	良好	
29	87	H59	Ⅳ	3811	深鉢	口縁	粗いヘラナデ	粗いヘラナデ	–	にぶい橙	にぶい橙	○			○	○			良好	波状口縁
29	88	G59	Ⅳb，Ⅱb	2970他	深鉢	口縁	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	口縁に矩形突帯	にぶい褐	にぶい褐	○	○		○				普通	スス
29	89	G59・61, H59	Ⅳ，Ⅳa	3972他	深鉢	口縁	丁寧な横ナデ	横ナデ	–	にぶい褐	にぶい褐	○	○		○			○	普通	スス
29	90	F・H58	Ⅲ，Ⅳb	1718他	深鉢	口縁	丁寧な横ナデ	横ナデ	–	黒褐	灰褐	○					○	○	良好	
29	91	G58, SI1	Ⅱb	4913他	深鉢	口縁	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	–	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○				○	○	良好	
29	92	G58	Ⅲ	1319	深鉢	口縁	横ナデ	横ナデ	口唇部に巻貝押圧	黒褐	黒褐	○	○	○	○	○			普通	
29	93	G59	Ⅲa	3578	深鉢	口縁	貝殻条痕→ナデ	横ナデ	口縁端を貼付	にぶい橙	にぶい橙	○			○		○		普通	
29	94	G60	Ⅳa	4623	深鉢	口縁～胴	ヘラナデ	ヘラナデ	–	にぶい褐	にぶい褐		○	○			○	○	普通	スス
29	95	G59, H58	Ⅲ，Ⅳa・b	4051他	深鉢	口縁～胴	ヘラナデ	ヘラナデ	突起5ケ所の波状口縁	にぶい赤褐・橙	にぶい赤褐・橙	○		○			○	○	良好	スス，口径31.0cm
30	96	F59, G58～60, SI1	Ⅲ，Ⅳa・b	1400他	深鉢	口縁～胴	条痕→横ナデ	条痕→横ナデ	突帯に巻貝押圧	明赤褐・にぶい橙	明赤褐・にぶい橙			○	○			○	良好	スス，口径40.8cm
30	97	G・H59	Ⅳa・b	3887他	深鉢	口縁～胴	上：ハケ様ナデ下：ヘラ様ナデ	条痕	半円突帯の上にヘラ押圧	明褐灰・にぶい橙	明褐灰・にぶい橙	○	○		○	○	○		普通	口径34.0cm
30	98	G60	Ⅲ	3861他	深鉢	口縁	ヘラミガキ	ヘラミガキ	突帯に巻貝押圧	黒褐	灰褐	○	○				○	○	良好	スス
30	99	H58	Ⅳa	4730	深鉢	口縁	丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	突帯に巻貝押圧	灰褐	灰褐	○			○		○		良好	
30	100	G59・60	Ⅲa，Ⅳa	3580他	深鉢	口縁	丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	突帯に巻貝押圧	にぶい褐	にぶい褐	○		○				○	普通	
31	101	F59, G59～61, H60	Ⅲ，Ⅳa	2093他	深鉢	口縁～胴	貝殻条痕→横ナデ	貝殻条痕→横ナデ	突帯に巻貝押圧	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○				○	普通	内面下部は赤灰，口径43.6cm
31	102	G58	Ⅲ，Ⅳa	1344他	深鉢	口縁～胴	貝殻条痕→ヘラナデ	ヘラ縦ナデ	突帯に巻貝押圧	褐灰	にぶい黄橙	○		○				○	普通	
31	103	G58・59, H59	Ⅲ，Ⅳa・b	1626他	深鉢	口縁～胴	ヘラ横ナデ	条痕→丁寧なヘラ横ナデ	突帯に巻貝押圧	黒褐・褐灰	黒褐・褐灰	○				○		○	良好	スス，口径20.8cm
31	104	H59	Ⅱb	3427	深鉢	口縁	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	突帯にヘラ刻み	暗赤灰	赤褐	○		○		○		○	普通	
31	105	H59	Ⅳa	5088	深鉢	口縁	粗いヘラナデ	ヘラナデ	口縁端にヘラ押圧	黒褐	黒褐			○		○	○	○	良好	
31	106	G59	Ⅱb	2827	深鉢	口縁	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	口縁端にヘラ刻み	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○			○	○	良好	
31	107	G58	Ⅲ	1346	深鉢	胴上半	条痕	横ナデ	扁平突帯に巻貝押圧	褐灰	褐灰	○		○				○	良好	
31	108	E58	Ⅱb	1045	深鉢	胴上半	ヘラナデ	ヘラナデ	外側に三角突帯・巻貝刻み	灰褐	灰褐	○						○	良好	内面に丹
31	109	H59	Ⅳa	5096	深鉢	胴上半	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	突帯に左向き三角文	黒褐	褐灰	○			○		○	○	良好	スス
32	110	F59, G58～60, SI1	Ⅲ，Ⅳb	319他	深鉢	胴～底	ヘラ横ナデ	貝殻条痕→ナデ	–	褐灰	褐灰	○			○			○	普通	底径10.0cm
32	111	F60	Ⅲ	307他	深鉢	底	ヘラナデ	条痕→ヘラナデ	–	にぶい褐	にぶい褐	○				○	○	○	良好	底径10.0cm
32	112	G59	Ⅳa・b	4245他	深鉢	底	ヘラナデ	ヘラナデ	–	赤褐	赤褐	○			○		○	○	普通	底径8.6cm
32	113	G59	Ⅳb	5345	深鉢	底	ナデ	ナデ	–	にぶい赤褐	にぶい赤褐			○	○		○		普通	底径8.8cm
32	114	G58・59	Ⅲ，Ⅳa	1321他	深鉢	底	ヘラナデ	ヘラナデ	–	にぶい褐	にぶい褐	○					○	○	普通	底径10.0cm
32	115	G59	Ⅲ，Ⅳa	3886他	鉢	口縁～胴	条痕→ヘラ横ナデ	ヘラミガキ	–	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○				○	良好	口径50.0cm
32	116	F58, G58・59	Ⅲ，Ⅳb	1406他	鉢	口縁	ヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	–	黒褐	にぶい橙	○		○	○			○	良好	スス，口径41.0cm
33	117	F58・59, G58・59, H58・59, I58, J30	Ⅲ，Ⅲa，Ⅳ，Ⅳa	354他	鉢	完形	ナデ	丁寧なナデ	編布圧痕	にぶい黄橙	黒褐	○	○			○		○	普通	内側に押圧痕，スス，，口径54.0，器高16.0cm

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	器種	部位	調整		文様	色調		胎土							焼成	備考
							外面	内面		外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	灰石	角閃石		
34	118	F58・59, G58～61, H58・59, SI1	Ⅲ, Ⅲa, Ⅳa・b	1288他	鉢	完形	上：ヘラ横ナデ，口唇：ヘラミガキ	押圧仕上げ→上はヘラミガキ	編布圧痕	にぶい橙	にぶい橙	○		○					良好	コゲ，スス，口径40.0㎝，器高13.8㎝
35	119	F59, G58・59, H58・59, SI1	Ⅲ, Ⅳa・b	1477他	鉢	口縁	ヘラナデ	丁寧なナデ	網目，底近く4か所がこぶ状	にぶい褐	黒褐			○				○	普通	内面に押圧痕，スス，コゲ
39	120	F59	Ⅲ	1639	鉢	口縁	貝殻条痕→ヘラナデ	粗いナデ→丁寧なナデ	編布	褐灰	にぶい褐	○			○		○	○	良好	120～123は同一，スス
39	121	F59	Ⅲ	1583	鉢	口縁	貝殻条痕→ヘラナデ	粗いナデ→丁寧なナデ	編布	褐灰	にぶい褐	○			○		○	○	良好	120～123は同一，スス
39	122	F58	Ⅳa	2028	鉢	口縁	貝殻条痕→ヘラナデ	粗いナデ→丁寧なナデ	編布	褐灰	にぶい褐	○			○		○	○	良好	120～123は同一，スス
39	123	F59	Ⅲ	1680	鉢	口縁	貝殻条痕→ヘラナデ	粗いナデ→丁寧なナデ	編布	褐灰	にぶい褐	○			○		○	○	良好	120～123は同一，スス
39	124	G59	Ⅳa・b	1864他	鉢	胴	貝殻条痕→ヘラナデ	条痕→丁寧なヘラ横ナデ	編布	褐	褐	○	○	○	○		○	○	普通	124～129は同一，スス
39	125	T30	Ⅲ	370他	鉢	胴	貝殻条痕→ヘラナデ	条痕→丁寧なヘラ横ナデ	編布	褐	褐	○	○	○	○		○	○	普通	124～129は同一，スス
39	126	G59	Ⅳb	5491	鉢	胴	貝殻条痕→ヘラナデ	条痕→丁寧なヘラ横ナデ	編布	褐	褐	○	○	○	○		○	○	普通	124～129は同一，スス
39	127	H59	Ⅳ	－	鉢	胴	貝殻条痕→ヘラナデ	条痕→丁寧なヘラ横ナデ	編布	褐	褐	○	○	○	○		○	○	普通	124～129は同一，スス
39	128	G59	Ⅲa	3562	鉢	胴	貝殻条痕→ヘラナデ	条痕→丁寧なヘラ横ナデ	編布	褐	褐	○	○	○	○		○	○	普通	124～129は同一，スス
39	129	F59	Ⅲ	1558	鉢	胴	貝殻条痕→ヘラナデ	条痕→丁寧なヘラ横ナデ	編布	褐	褐	○	○	○	○			○	普通	124～129は同一，スス
39	130	G59・60, H59	Ⅲ, Ⅳa	4041他	鉢	胴上	ナデ	粗いヘラミガキ	網目	灰黄・明褐灰	灰黄・明褐灰	○		○				○	普通	130～137同一
39	131	F59, G59, H58	Ⅲ, Ⅳa・b	1696他	鉢	底	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	網目	灰白	明褐灰・黒褐	○	○					○	良好	130～137同一
39	132	G60	Ⅲ, Ⅳa	4510他	鉢	底	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	網目	灰白	明褐灰・黒褐	○	○					○	良好	130～137同一
39	133	F59	Ⅳb	5338	鉢	底	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	網目	灰白	明褐灰・黒褐	○	○					○	良好	130～137同一
39	134	G59	Ⅳb	5377	鉢	底	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	網目	灰白	明褐灰・黒褐	○	○					○	良好	130～137同一
39	135	G59	Ⅲa, Ⅳa	3559他	鉢	底	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	網目	灰白	明褐灰・黒褐	○	○					○	良好	130～137同一
39	136	G60	Ⅲa	3727	鉢	底	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	網目	灰白	明褐灰・黒褐	○	○					○	良好	130～137同一
39	137	G59	Ⅲ	4041	鉢	底	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	網目	灰白	表．上面に凹あり	○	○				○	○	良好	130～137同一
39	138	G59・60	Ⅳ	3881他	鉢	胴	網目	ヘラ横ナデ	網目	にぶい橙	黒	○						○	普通	
39	139	G58	Ⅳa	－	鉢	胴	編布	ヘラ横ナデ	編布	灰褐	褐灰	○		○				○	良好	139・140は同一
39	140	G59	Ⅳa	4419	鉢	胴	網布	ヘラ横ナデ	網布	灰褐	褐灰	○		○				○	良好	139・140は同一
39	141	D48	Ⅱ	－	鉢	胴	編布	ヘラナデ	編布	にぶい橙	灰褐	○		○			○	○	普通	
39	142	G60	Ⅱb	－	鉢	胴	編布	丁寧なヘラナデ	編布	にぶい橙	褐灰	○		○		○			普通	
39	143	G58	Ⅱb	3435	鉢	胴	編布	ヘラ横ナデ	編布	にぶい橙	黒褐	○						○	良好	
39	144	G59	Ⅳa	4320	鉢	口縁～胴	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	網布	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○					○	普通	ス ス
39	145	F・G59	Ⅲ	1707他	鉢	底	網布	ヘラミガキ	網布	にぶい黄橙	褐灰・黒褐	○	○					○	良好	145・146は同一
39	146	F59, G58・59	Ⅲ・Ⅳa	1345他	鉢	胴～底	網布	ヘラミガキ	網布	にぶい黄橙	褐灰・黒褐	○	○					○	良好	〃
39	147	G59, H58	Ⅳ・Ⅳa・b	317他	鉢	胴～底	ヘラナデ	ヘラミガキ	編布	にぶい橙	黒褐	○		○				○	良好	147・148は同一
39	148	H58	Ⅳb	5264	鉢	底	ヘラナデ	ヘラミガキ	編布	にぶい橙	黒褐	○		○				○	良好	147・148は同一
40	149	F59	Ⅲ・Ⅳa	1531他	浅鉢	口縁～肩	ヘラ横ミガキ	ヘラ横ミガキ	口唇部に凹線	にぶい褐色	にぶい褐色	○	○				○		良好	ス ス
40	150	G58	Ⅲ	－	浅鉢	口縁	ヘラ縦ミガキ	ナデ	口縁外面に沈線	にぶい橙	にぶい橙	○						○	普通	
40	151	F58, G58・61, I59	Ⅲ, Ⅳa・b	1717他	鉢	口縁～胴	ヘラ横ミガキ	ヘラ横ミガキ	－	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○			○	○	普通	スス，口径29.0㎝
40	152	G58・61,	Ⅲ, Ⅲa, Ⅳa・b	1480他	浅鉢	口縁～胴	ヘラミガキ	ヘラミガキ	－	にぶい褐・黒褐	にぶい褐・黒褐	○				○		○	良好	丹塗り，口径35.0㎝
40	153	H59・SK2	Ⅳa	4940他	浅鉢	口縁	ヘラミガキ	ヘラミガキ	屈曲部に1条の凹線	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○					良好	口径29.5cn
40	154	G58・59, H58, SI1	Ⅲ, Ⅳa	352他	浅鉢	口縁～胴	ヘラミガキ	ヘラミガキ	－	灰褐・黒褐	灰褐・黒褐	○		○				○	良好	外面に光沢，口径29.0㎝
40	155	I59	Ⅳa	5221	浅鉢	口縁～胴	ヘラミガキ	丁寧なヘラナデ	1条ずつ沈線	灰黄褐	灰黄褐	○					○	○	良好	未完の補修孔，口径32.6㎝
40	156	G・H58	Ⅲ, Ⅳa・b	1939他	浅鉢	口縁～胴	ヘラミガキ	ヘラミガキ	丹塗り	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○	○			○	良好	外面スス，広く黒褐，口径26.5㎝
40	157	F59	Ⅲ	1527	浅鉢	口縁	横ナデ	横ナデ	－	にぶい褐	にぶい褐	○					○	○	普通	スス
40	158	G59	Ⅳb	5571	浅鉢	口縁	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	－	褐	褐	○	○		○	○			良好	
40	159	F59	Ⅲ	1175	浅鉢	口縁	ヘラナデ	ヘラナデ，ミガキ，ケズリ	－	にぶい黄褐・褐	にぶい黄褐・褐	○		○	○		○		普通	
40	160	G59	Ⅲ	4052	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	－	灰褐	灰褐	○		○				○	普通	
40	161	F58	Ⅳa	2085	浅鉢	口縁	ヘラミガキ	ヘラナデ	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○			○	○	良好	
40	162	G60	Ⅱb	3271	浅鉢	口縁	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	－	灰褐	灰褐	○		○		○		○	普通	

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	器種	部位	調整		文様	色調		胎土							焼成	備考
							外面	内面		外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	灰石	角閃石		
40	163	F60	Ⅲ	312	浅鉢	口縁	ヘラ横ナデ	上：ヘラナデ→ヘラミガキ 下：ヘラケズリ	–	黒褐	黒褐	○					○	○	普通	
40	164	F59	Ⅲ，Ⅳa	1686 他	浅鉢	口縁	ヘラミガキ	ヘラミガキ	–	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○		○				○	良好	
40	165	G59	Ⅳa	4426	浅鉢	口縁	ヘラミガキ	ヘラミガキ	–	にぶい褐	黒褐	○	○					○	普通	
40	166	G59	Ⅳa	1894	浅鉢	口縁	ヘラミガキ	横ヘラナデ	丹塗り	赤	褐灰	○		○		○		○	良好	
40	167	G60	Ⅱb	–	浅鉢	口縁	丁寧なナデ	丁寧なナデ	丹塗り	にぶい褐	にぶい褐	○		○					普通	
40	168	F58･59	Ⅲ	1388 他	浅鉢	口縁	貝殻条痕	ナデ	玉縁状口縁	にぶい橙	にぶい橙	○	○			○		○	普通	黒石含む
40	169	G59	Ⅲ	1774	浅鉢	口縁	ミガキ様横ナデ	ヘラ横ナデ	三角突帯	にぶい褐	にぶい褐	○		○				○	良好	補修孔
40	170	F59	Ⅲ	1793	浅鉢	口縁	ヘラミガキ	ヘラミガキ	沈線	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○					普通	
40	171	G59	Ⅳb	5384	浅鉢	口縁	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	口縁端に突起	にぶい橙	にぶい橙	○		○			○	○	普通	
40	172	G59	Ⅳ	–	浅鉢	口縁	ヘラミガキ	ヘラミガキ	沈線（丹塗り）	黒褐	黒褐	○						○	普通	
41	173	G･H60	Ⅲa	3621 他	鉢	口縁～胴	ヘラミガキ	ヘラミガキ	–	黒褐・にぶい黄褐	黒褐・にぶい黄褐	○					○	○	良好	口径 21.0cm
41	174	G60	Ⅳa	4568	浅鉢	口縁～胴	ヘラミガキ	ヘラミガキ	突帯に巻貝押圧	黒褐	黒褐	○		○				○	良好	口径 21.0cm
41	175	G58	Ⅲ	1943	浅鉢	胴	丁寧なヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	沈線	灰褐	灰褐	○	○		○	○	○		普通	外面スス
41	176	G58･59	Ⅲ，Ⅳb	5569	浅鉢	胴	ヘラミガキ	ヘラミガキ	–	にぶい褐	にぶい褐	○		○				○	良好	外面スス
41	177	G59	Ⅳb	–	浅鉢	胴上半	ヘラナデ	ヘラミガキ	屈曲部に刻み	褐灰	褐灰	○				○		○	普通	
41	178	G59	Ⅳa	4292	浅鉢	胴上半	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	ヘラ刻み突帯	横ナデ	横ナデ	○				○		○	普通	
41	179	F58･59	Ⅲ	1284 他	浅鉢	胴～底	ヘラミガキ 底部：ヘラナデ	ヘラミガキ	–	にぶい赤褐	褐灰・にぶい橙	○		○				○	良好	外面スス
41	180	G61･H58	Ⅱb，Ⅳ，Ⅳb	3979 他	浅鉢	胴～底	ヘラミガキ	ヘラミガキ	底部近くに沈線	明褐灰	褐圧	○		○			○		良好	スス，底にコゲ
41	181	H59	Ⅳa	5074	浅鉢	底	ヘラミガキ	ヘラミガキ	–	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○			良好	
41	182	F58･H60	Ⅲ	1949 他	浅鉢	胴～底	条痕→ミガキ	横ミガキ	–	橙	黒	○		○			○		普通	
41	183	H59	Ⅳa	5065	浅鉢	底	ヘラミガキ	丁寧なナデ	–	にぶい橙	黒褐	○		○	○		○		良好	
41	184	G59	Ⅳb	5479 他	浅鉢	胴～底	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	1条の沈線	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○	○	○		○	普通	
41	185	H60	Ⅳ	3977	浅鉢	底	ナデ	ミガキ	–	にぶい褐	にぶい褐	○		○				○	普通	
41	186	G58	Ⅳb	2077	浅鉢	底	縦ナデ	横ナデ	–	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○				○	普通	
41	187	G59，H58･59	Ⅲ，Ⅳa･b	3794 他	浅鉢	胴～高台	ヘラミガキ	ヘラミガキ	丹塗り	赤	黒	○	○				○	○	普通	
41	188	G59	Ⅳa	4287	浅鉢	完形	ヘラミガキ	ヘラナデ	沈線	暗赤褐	赤	○		○		○		○	普通	内外面丹塗り，口径 19.0，器高 4.9cm
41	189	H58	Ⅳa	4155	鉢	口縁～胴	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	–	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		○		○	普通	ススが厚く，コゲ，口径 16.3cm
41	190	G60	Ⅲ	4551	鉢	口縁	丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ		にぶい赤褐	にぶい赤褐	○						○	良好	
42	191	I58	Ⅳa	5209 他	壺	口縁～胴	ヘラミガキ	ヘラミガキ	沈線十三叉文，浮文十突帯文，突帯	褐灰・にぶい褐	褐灰・にぶい褐	○	○	○					普通	口径 11.5cm，沈線内丹
42	192	G59	Ⅲ，Ⅳa	1357 他	壺	口縁	ミガキ	ミガキ	沈線，突帯	にぶい橙・黒褐	にぶい橙・黒褐	○		○	○		○		良好	底径 5.3cm
42	193	G60	Ⅲa	3642	壺	口縁	縦ミガキ横ナデ	横ナデ	丹塗り	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○			○	○	普通	
42	194	G59	Ⅱb	–	浅鉢	口縁	丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	–	灰褐	灰褐	○	○					○	普通	
42	195	H59	Ⅱb	3096	壺	口縁	横ナデ	横ナデ	三叉文（横と縦の凹線）	にぶい橙	にぶい橙	○		○			○	○	普通	
42	196	H59	Ⅱb	3422	壺	肩	ヘラナデ	ヘラナデ	沈線十三叉文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		○			○	普通	
42	197	G60	Ⅳa	4420	壺	胴	タタキ→ミガキ	横ナデ	肩部に把手	にぶい褐	褐灰	○	○				○	○	良好	
42	198	G58	Ⅲ	1837	壺	胴	ヘラミガキ	条痕→ナデ	–	にぶい橙	にぶい橙	○			○	○	○	○	普通	
42	199	F59	Ⅲ	1486	壺	胴	横ミガキ	横条痕	–	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○				○	普通	
42	200	H59	Ⅳa	4916	壺	胴上半	ヘラミガキ	横ナデ	–	明褐	明褐	○			○		○		良好	
42	201	F59	Ⅳ	3929	マリ	口縁～胴	丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	–	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○					普通	
42	202	H59	Ⅳa	5092	マリ	胴下部	ヘラミガキ	丁寧なヘラ縦ナデ	–	褐灰	褐灰	○		○				○	良好	
42	203	G60	Ⅳa	4565	マリ	胴	丁寧な横ナデ	横ナデ	–	にぶい黄	にぶい黄	○			○			○	普通	
42	204	G59	Ⅳa	4399 他	マリ	胴～底	丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	–	にぶい橙	にぶい橙	○	○		○		○		普通	
42	205	G60	Ⅳa	4631	台付鉢	脚台	丁寧な縦ナデ	横ナデ	突帯に巻貝押圧	にぶい橙	にぶい橙		○	○				○	良好	底径 6.0cm
42	206	G59	Ⅲ	4145	台付鉢	脚台	丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	–	にぶい褐	にぶい褐	○		○		○			普通	底径 8.0cm
42	207	SI1	床	4757	円盤	完形	–	–	周辺研磨	黒褐	黒褐	○		○	○				良好	径 5.6cm
42	208	Sb4-P5	–	–	円盤	完形	丁寧なミガキ	–	周辺研磨	淡橙・黒	淡橙・黒	○		○					普通	径 3.3cm
42	209	H59	Ⅳa	5113	円盤	完形	–	丁寧なナデ	周辺研磨	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○						○	普通	径 3.8～4.2cm

第８表　縄文時代石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	出土区	層	取上番号	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
44	210	打製石鏃	G59	Ⅳb	5142	2.3	1.4	0.2	0.7	頁岩	
44	211	打製石鏃	H59	Ⅲa	3663	(1.5)	2.2	0.3	1	安山岩	上半部欠損
44	212	打製石鏃	F59	Ⅳb	5650	(1.7)	1.3	0.3	0.6	安山岩	上半部欠損
44	213	打製石鏃	F59	Ⅳa	2045	1.7	0.8	0.3	0.4	チャート	鋸歯状縁
44	214	打製石鏃	G59	Ⅳa	－	(1.8)	(1.2)	0.3	0.6	安山岩	先端と左脚部欠損
44	215	打製石鏃	G59	Ⅲ	4074	1.6	1.4	0.3	0.5	頁岩	
44	216	打製石鏃	G59	Ⅳb	5679	1.6	1.3	0.4	0.7	安山岩	
44	217	打製石鏃	G59	Ⅳa	4306	1.7	1.8	0.4	0.8	安山岩	
44	218	打製石鏃	G59	Ⅳb	5543	1.8	(1.6)	0.3	0.6	安山岩	右脚部欠損
44	219	打製石鏃	SI 1	①	4772	(1.4)	1.7	0.3	0.8	安山岩	上半部欠損
44	220	打製石鏃	Ⅲ，Ⅲa	Ⅲ	3869	1.8	(2.6)	0.3	0.7	安山岩	左脚部欠損
44	221	打製石鏃	Ⅱb	Ⅳb	5651	(1.4)	(1.2)	0.3	0.5	安山岩	左脚部欠損
44	222	石錐	G59	Ⅲ	1785	5.9	1.3	0.7	3.9	頁岩	
44	223	石錐	G59	Ⅳa	4488	2.7	1.3	0.9	2.5	チャート	
44	224	石錐	G59	Ⅳa	4307	1.5	1.4	0.5	0.7	安山岩	
44	225	二次加工剥片	G58	Ⅳb	2006	1.9	1.2	0.6	1	黒曜石	石錐の可能性あり
44	226	二次加工剥片	H57	Ⅳb	2039	2.9	1.3	0.7	1.7	黒曜石	抉入石器
44	227	削器	F59	Ⅲ	1710	(4.2)	5.5	1.0	20.6	安山岩	
44	228	石匙	F59	Ⅲ	1702	6.3	(6.3)	(0.8)	21.1	頁岩	身部欠損
45	229	石匙	H57	Ⅲ	1928	5.8	(8.0)	1.4	42.5	頁岩	身部欠損
45	230	横刃形石器	G59	Ⅳa	4318	(7.3)	11.7	1.3	120.5	ホルンフェルス	
45	231	横刃形石器	G58	Ⅳb	5614	6.1	10.0	1.0	59.2	ホルンフェルス	
45	232	横刃形石器	G59	Ⅳa	5128	4.5	(10.3)	0.7	37	頁岩	
45	233	横刃形石器	－	Ⅲ	1942	5.0	7.2	1.5	55.3	ホルンフェルス	
45	234	横刃形石器	G59	Ⅳb	5533	5.8	7.5	1.6	48.6	頁岩	打製石斧欠損品転用か？
46	235	横刃形石器	G59	Ⅳb	4474	12.1	9.3	2.0	140	頁岩	
46	236	打製石斧	I58	Ⅲ	4903	19.5	11.4	2.8	488	頁岩	
46	237	打製石斧	G59	Ⅲ・Ⅳb	5400･1663･5681	16.5	8.0	2.0	233.9	頁岩	3点の破片が接合
46	238	打製石斧	G59	Ⅳa	4471	13.8	7.1	1.7	162.8	頁岩	
47	239	打製石斧	G59	Ⅳb	5399	11.4	9.1	1.7	173.7	頁岩	
47	240	打製石斧	I58	Ⅳa	4909	(8.6)	(7.9)	1.7	115.7	頁岩	刃部側欠損
47	241	打製石斧	H58	Ⅳa	4753	(10.1)	6.7	1.6	120.9	頁岩	基部側欠損
47	242	打製石斧	H58･59	Ⅱb･Ⅳa	3432･4686	(10.0)	9.2	1.4	182.4	頁岩	基部側欠損
47	243	打製石斧	G59	Ⅳb	5537	(7.2)	7.1	1.7	88.8	ホルンフェルス	基部側欠損
47	244	打製石斧	G59	Ⅳa	4470	(6.8)	9.9	1.9	121.9	頁岩	基部側欠損
47	245	打製石斧	G59	Ⅳa	4313	(4.8)	7.9	(1.6)	64.5	頁岩	基部側欠損
47	246	打製石斧	G59	Ⅳa	4317	15.5	6.6	1.8	223.3	ホルンフェルス	
47	247	打製石斧	G61	Ⅲ	4864	10.8	7.0	1.5	147.5	頁岩	刃部側欠損
48	248	打製石斧	G60	Ⅱb	2733	7.6	5.9	1.0	64.2	頁岩	基部側欠損，刃部に擦痕（研磨）
48	249	打製石斧	H58	Ⅳa	4694	(8.0)	5.5	1.9	105.2	頁岩	基部側欠損
48	250	打製石斧	F59	Ⅳa	2095	(4.9)	6.0	1.3	48.7	頁岩	刃部側欠損
48	251	打製石斧	G59	Ⅳb	5534	(6.3)	5.2	1.3	58.2	頁岩	刃部側欠損
48	252	打製石斧	G59	Ⅳa	4477	10.3	5.7	1.2	65	頁岩	
48	253	打製石斧	H59	Ⅲ	3816	11.1	5.0	1.2	86.3	頁岩	
48	254	打製石斧	H58	Ⅳ	1926	13.6	7.1	1.7	135.5	頁岩	
48	255	打製石斧	I58	Ⅳa	4908	(8.2)	(5.3)	1.6	110.8	頁岩	刃部側欠損，縁辺に擦痕（研磨）
48	256	打製石斧	G58	Ⅱb	3163	10.0	7.4	1.4	119.1	頁岩	
48	257	打製石斧	G58	Ⅲ	1835	4.3	3.1	0.7	11.9	頁岩	基部側欠損，石匙の身部の可能性あり
49	258	磨製石斧	H59	Ⅳa	5155	9.6	2.5	1.7	65.5	頁岩	定角式
49	259	磨製石斧	G58	Ⅲ	1523	(11.4)	3.5	2.0	115.8	頁岩	定角式，基部末端欠損
49	260	磨製石斧	G59	Ⅲ	1664	(4.1)	(1.9)	(0.9)	10.1	頁岩	小型，刃部・基部欠損
49	261	磨製石斧	G60	Ⅳa	4643	(7.4)	5.5	(1.3)	84.9	頁岩	基部側上半部欠損
49	262	磨製石斧	F59	Ⅱb	889	(4.9)	(4.2)	(1.5)	36.7	頁岩	基部側上半部欠損
49	263	磨製石斧	G58	Ⅳb	5615	(6.1)	(4.2)	(1.3)	35.9	頁岩	基部側上半部欠損
49	264	磨製石斧	－	Ⅰ	－	(14.9)	4.4	3.0	299.7	頁岩	乳棒状，再生加工品か？
49	265	磨製石斧	G59	Ⅳb	5133	(4.5)	(4.3)	(3.2)	85.6	砂岩	乳棒状，基部側残存
50	266	敲石	G61	Ⅳb	5321	7.3	5.5	4.5	256.3	安山岩	
50	267	敲石	H59	Ⅳa	4301	6.1	4.7	4.1	164.3	安山岩	
50	268	敲石	H58	Ⅳb	5472	5.7	3.5	3.0	88.4	安山岩	表と右側面に若干の磨痕あり
50	269	磨石類	G59	Ⅳa	5277･5152･4476	11.0	11.3	4.7	929.9	安山岩	3点接合，右側－上面－左側面にかけて敲打痕
50	270	磨石類	G58･59	Ⅳa	4315・5701	8.9	6.5	1.8	138.1	砂岩	下面と右側面に敲打痕，敲打によりはがれた破片が接合
50	271	磨石類	G59	Ⅳa	5129	12.0	10.1	4.9	734.1	安山岩	赤化がみられる，表・下面・右側面に敲打痕
50	272	磨石類	－	Ⅰ	－	8.6	7.0	4.5	363.5	安山岩	
50	273	磨石類	G59	Ⅳa	4487	6.3	5.9	1.8	89.1	砂岩	赤化がみられる
50	274	磨石類	G58	Ⅳ	2022	11.0	7.6	5.0	607.2	安山岩	下面に敲打痕
51	275	磨石類	G59	Ⅳa	4302	(5.8)	(9.8)	(4.8)	300.7	安山岩	下面に敲打痕
51	276	磨石類	G59	Ⅳa	5130	(4.3)	(7.2)	(4.4)	196.2	花崗岩	
51	277	磨石類	F58	Ⅲ	1150	(6.9)	(11.7)	(7.2)	853	花崗岩	
51	278	磨石類	F58	Ⅳa	2101	(6.3)	(7.9)	(5.0)	348.3	花崗岩	
51	279	磨石類	SI1	②	4771	(6.0)	(5.1)	(5.2)	141.6	安山岩	表．上面に凹あり
51	280	磨石類	E58	Ⅱb	734	(7.3)	(4.3)	(4.6)	193.4	砂岩	下面の敲痕は顕著
51	281	磨石類	F58	Ⅳa	2090	11.2	8.9	6.9	953.4	安山岩	全面磨痕
52	282	石皿	G58	Ⅳb	2081	(27.3)	(19.3)	(4.1)	3059.8	花崗岩	扁平石皿・赤化がみられる
52	283	石皿	G60	Ⅲ・Ⅳ	5184・3961	(20.7)	(10.6)	(9.9)	3095.2	花崗岩	扁平石皿
52	284	石皿	H60	Ⅳa	5181	(18.5)	(14.3)	(7.4)	2877.5	花崗岩	扁平石皿
52	285	石皿	G59	Ⅳ	3920	(12.3)	(10.0)	(7.2)	1222.6	花崗岩	扁平石皿
52	286	石皿	G59	Ⅲ	4008	(10.9)	(14.7)	(4.5)	935.2	砂岩	扁平石皿
52	287	石皿	G60	Ⅳb	5402	(10.9)	(22.2)	(8.1)	2346.6	花崗岩	扁平石皿
52	288	石皿	G61	Ⅳa	4868	(7.0)	(8.1)	(8.0)	564.7	花崗岩	扁平石皿

挿図番号	掲載番号	器種	出土区	層	取上番号	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
52	289	砥石	G58	Ⅱa下	－	(7.3)	(11.1)	(4.9)	501.7	砂岩	
52	290	砥石	G59	Ⅳb	5148	(11.7)	(5.7)	(1.2)	104.9	砂岩	

第９表　土坑１号出土弥生時代土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	部位	口径（cm）	底径（cm）	調整		文様	色調		胎土							焼成	備考
								外面	内面		外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	灰石	黒石		
53	291	SK1	－	5440	脚台	－	6.8	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	－	赤褐	黒褐		○	○	○	○			良好	底ヘラナデ

291 は甕形土器

第 10 表　弥生時代土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	部位	口径（cm）	底径（cm）	調整		文様	色調		胎土							焼成	備考
								外面	内面		外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	灰石	黒石		
55	292	G59	Ⅱb	2882	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	口縁の三角突帯に巻貝押圧	暗赤灰	暗赤褐	○	○						普通	
55	293	I58	Ⅱb	2363	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	－	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○			○				良好	
55	294	F58	Ⅲ	1947	口～胴	16.6	－	ヘラナデ	ヘラナデ	胴上半に鋸歯状沈線と４条の沈線	黄褐	黄褐	○			○	○	○	○	良好	ススス
55	295	G58	Ⅱb	438	口縁	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	－	黄褐	黄褐			○	○		○		良好	
55	296	G61	Ⅲ	4811	口縁	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	口唇に凹線	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○	○				良好	
55	297	I58	Ⅱb	3995	口～胴	26.4	－	横ナデ	横ナデ	口唇に凹線	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○			○	○		○	良好	
55	298	G59	Ⅳ	3894	口縁	24.0	－	ヘラナデ	ヘラナデ	口唇に凹線	黒褐	黒褐～灰黄	○			○			○	良好	
55	299	G61	Ⅲ，Ⅳ	3681 他	口～胴	30.0	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	口唇に凹線・肩部に三角突帯	にぶい褐	にぶい褐			○	○	○			良好	ススス
55	300	G59	Ⅱb	3027	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	口唇に凹線・三角突帯	明赤褐	明赤褐	○			○			○	良好	
55	301	G61	Ⅲ，Ⅲa	3825	口縁	15.2	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	－	褐灰	褐灰	○	○		○		○		良好	
55	302	G61	Ⅱb	3694	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ縦ナデ	口唇に浅い凹線	明赤褐	明赤褐	○		○	○		○		普通	
55	303	E48	Ⅰ	－	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	口唇に凹線	黄褐・褐灰	黄褐・褐灰		○	○		○			良好	ススス
55	304	H59	Ⅱa	2417	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○		○		○	普通	
55	305	H60	Ⅳ	3976	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ斜ナデ	－	黒褐	黒褐	○	○		○		○		良好	
55	306	G61	Ⅱb	3511	口縁	30.4	－	横ナデ	横ナデ	口唇に凹線	にぶい赤褐	橙	○			○	○	○	○	良好	
55	307	H58	Ⅱb	2444 他	口縁	30.4	－	ヘラナデ	ヘラナデ	－	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○	○		○		普通	
55	308	F58･59，G58	Ⅱb，Ⅲ	1095 他	口～胴	27.0	－	ヘラナデ	ヘラ横ナデ	口唇に凹線，2条の三角突帯	明赤褐	明赤褐		○	○	○				良好	ススス
55	309	G59･60，H59	Ⅱb，Ⅲa	2806 他	口縁	32.2	－	ヘラ横ナデ	ヘラナデ	口唇に浅い凹線	にぶい橙	にぶい橙	○		○	○		○		良好	角閃石含む
55	310	G･H59	Ⅲa	3669 他	口縁	20.3	－	ヘラ横ナデ	ヘラ縦ナデ	口唇に凹線	黒褐	黒褐	○		○			○		良好	
55	311	G61	Ⅲa	3697	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	口唇に凹線	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○	○	○	○		普通	ススス
55	312	G61	Ⅲa	3702	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	－	にぶい赤褐	灰赤	○		○	○			○	良好	
55	313	－	Ⅰ	－	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	口唇に凹線・三角突帯	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○	○		○		良好	
55	314	G60	Ⅱb	5197	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	口唇に凹線	にぶい褐	にぶい褐	○		○	○				良好	
55	315	G60	Ⅲa	3619	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	三角突帯	明赤褐	灰褐	○	○		○	○			良好	長石含む
55	316	H58	Ⅳa	4794	口縁	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	－	にぶい橙	にぶい橙	○			○	○	○		普通	
56	317	G61	Ⅲ	4803	肩	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	3条の三角突帯	灰褐	灰褐	○		○	○				良好	厚くスス
56	318	G60	Ⅲ	4494	肩	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	3条の三角突帯	にぶい赤褐	にぶい赤褐				○				良好	スス
56	319	E･F58	Ⅲ	1203 他	肩	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	頸部下に3条の沈線	褐灰	明赤褐	○		○	○				良好	スス
56	320	F58･59，G59	Ⅱb	1087 他	胴上半	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	3条以上の三角突帯	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○			○				良好	
56	321	G59，H58	Ⅳa	4260 他	胴上半	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	2条以上の三角突帯	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○	○				良好	スス
56	322	F58，G59	Ⅱc，Ⅳa	1147 他	胴上半	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	3条の三角突帯	にぶい褐	にぶい褐	○		○	○	○			良好	
56	323	F58，G59	Ⅱ，Ⅲ	1276	胴と脚台の境	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	三角突帯	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		○			良好	
56	324	F59	Ⅱb	1112	脚台	－	7.0	ヘラナデ	ヘラナデ	－	にぶい褐	にぶい褐	○			○		○		普通	
56	325	F58	Ⅲ	1246	脚台	－	7.0	ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○			○		○		良好	
56	326	F58	Ⅳ	1275	高台	－	6.6	ヘラナデ	－	高台に浅い沈線	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○			○		○		良好	
56	327	H58	Ⅱb	404	高台	－	6.4	ヘラナデ	－	高台に浅い沈線	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○	○		○		良好	
56	328	G59	Ⅳa	4344 他	胴～脚	－	7.0	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	脚台ヘラ凹線	褐	黒褐	○	○	○	○				良好	
56	329	H59	Ⅳa	4930	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	口唇に凹線，縦ヘラ短絡沈線	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○			○	○	○		良好	
56	330	F58	Ⅱb	547 他	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	－	赤褐	赤褐	○	○		○	○	○		良好	
56	331	G60	Ⅳa	4626	口縁	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	口唇にヘラ凹線	黄褐	黄褐	○			○		○		良好	
56	332	G59	Ⅲa	3721	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	口唇に凹線	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○			○		○		良好	
56	333	H58	Ⅱb	3392	口縁	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	口縁内に１条の三角突帯	黄褐	黄褐	○	○		○	○			良好	
56	334	I58	Ⅲa	3735	口縁	－	19.0	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	口唇に凹線	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○			○		○		良好	
56	335	G61	Ⅱa	－	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	二叉状口縁	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○			○		○		良好	
56	336	G60	Ⅱb	2656	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	二叉状口縁	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○			○	○	○		良好	
56	337	G61	Ⅲa	3680	肩	－	－	ヘラ横ナデ	ナデ	2条以上の突帯	にぶい褐	褐灰	○			○		○		普通	

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	部位	口径（cm）	底径（cm）	調整		文様	色調		胎土							焼成	備考
								外面	内面		外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	灰石	黒石		
56	338	H60	Ⅱb	2739	肩	−	−	ハケ斜めナデ	ヘラナデ	1条以上の三角突帯	灰白	灰白	○			○		○		普通	
56	339	G58	Ⅱb	426	肩	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	2条以上の三角突帯	にぶい褐	にぶい橙	○			○	○	○		良好	
56	340	G59	Ⅲa	3575	底	−	4.4	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	−	にぶい黄橙	褐	○			○				良好	
56	341	H61	Ⅲ	4746	底	−	−	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	−	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○	○	○			普通	
56	342	F59	Ⅱb	1910	底	−	−	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	−	赤褐、橙	赤褐・橙	○	○		○	○	○		良好	
56	343	F57	Ⅲ	1676	底	−	5.6	ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	−	褐	褐灰	○			○	○			良好	
56	344	H59	Ⅱb	3289	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	−	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○	○		○		普通	
56	345	F58	Ⅱc	1153	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	三角突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○			○	○			良好	ススス

1, 292 ～ 328 は甕形土器，329 ～ 343 は壺形土器，344 は大型甕形土器，345 は蓋形土器
2, 294・297・298・306・312・315・331・333 は内外面，326 は外面，343 は内面が丁寧なナデ，316 は外面は粗く，内面は丁寧なナデ

第 11 表　弥生時代石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	出土区	層	取上番号	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
56	346	磨製石鏃	G61	Ⅳa	4865	3.0	1.9	0.3	1.9	粘板岩	

第 12 表　古墳時代土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	器種	取上番号	部位	底径（cm）	調整		色調		胎土							焼成	備考
								外面	内面	外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	灰石	長石		
57	347	H58	Ⅱb	甕	407	口縁	−	ヘラ横ナデ（あるいは斜め）	ヘラナデ	淡茶褐	茶褐	○		○	○	○		○	良好	ススス
57	348	G59	Ⅳ	甕	3874	口縁	−	ハケナデ	口縁ハケナデ，胴ヘラナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			○	○	○	普通	全面ススス
57	349	I58	Ⅱb	甕	2365	口縁	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	乳茶褐	乳茶褐		○	○		○			良好	内面の口縁近くと外面にススス
57	350	F58	Ⅲ	甕	1233	口縁	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	明黄褐	明黄褐	○				○			良好	ススス
57	351	G59	Ⅱb	甕	3210	口縁	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	暗褐	暗褐	○			○	○	○		良好	
57	352	G59	Ⅱb	甕	−	口縁	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○			○	○	○		普通	ススス
57	353	G59	Ⅲ	甕	4036	口縁	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐	淡茶褐	○		○	○	○			良好	厚くススス
57	354	G59	Ⅳ	甕	3911	頸	−	ヘラナデ	ヘラナデ	褐灰	明黄褐	○							良好	
57	355	G59	Ⅱb	甕	−	頸	−	ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい橙	浅黄	○		○		○	○		良好	頸部に三角突帯
57	356	G61	Ⅲ，Ⅲa	甕	3501 他	頸	−	ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○				○	良好	内面は灰色がかる
57	357	F・G58	Ⅱb	甕	1257 他	頸	−	ヘラナデ	ヘラナデ	浅黄	浅黄					○	○	○	普通	下がりのヘラ押しのある三角突帯
57	358	G61	Ⅱb	甕	2535	肩	−	ハケ縦ナデ	ヘラケズリ	にぶい橙	にぶい橙		○			○	○		良好	
57	359	F59	Ⅱb	甕	−	頸～肩	−	ハケナデ	ヘラケズリ	浅黄橙	浅黄橙	○	○			○			良好	
57	360	E58	Ⅲ	甕	746	肩	−	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	褐	褐	○		○		○		○	普通	厚くススス。薄手
57	361	F58・G59	Ⅱb，Ⅲ	甕	1376 他	底	−	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	にぶい黄橙	褐灰	○					○	○	普通	
57	362	H58	Ⅲ	甕	1394	脚台	7.6	ハケ縦ナデ	ヘラ横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○					○		普通	底径 7.6cm
57	363	F58・59	Ⅲ	甕	1254 他	脚台	9.0	ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○		○			○		普通	底径 9cm
57	364	G59・H60 SI1	Ⅲ	甕	1913	脚台	8.6	ヘラナデ	ヘラナデ	灰黄褐	黒	○				○		○	普通	底径 8.6cm
57	365	F58	Ⅲb	甕	925	脚台	10.0	粗いヘラ縦ナデ	ヘラナデ	にぶい黄褐	黒			○		○	○		普通	底径 10cm
57	366	G59	Ⅳa	甕	4204 他	脚台	13.8	ヘラナデ	ヘラナデ	灰白	灰白	○			○	○		○	普通	底径 13.8cm
58	367	E58	Ⅲ	壺	751	胴～肩	−	丁寧なヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	乳茶褐	淡茶褐	○	○		○	○			良好	
58	368	F58	Ⅱc	壺	1146	肩	−	ハケ・ヘラナデ	ヘラナデ	浅黄	にぶい黄橙	○				○		○	普通	ヘラ刻みのある幅広突帯
58	369	G60	Ⅱb	壺	3597	肩	−	丁寧なヘラナデ	ヘラナデ	明黄褐	明黄褐		○				○	○	普通	ヘラ刻みのある方形突帯
58	370	G59	Ⅲ	壺	4141	底	−	丁寧なヘラ縦ナデ	縦ヘラナデ	乳茶褐	乳茶褐		○	○	○	○			良好	ススス
58	371	G61	Ⅱb	壺	2551	底	−	ヘラナデ	ヘラナデ	明赤褐	黒褐	○		○		○			普通	
58	372	G60	Ⅱb	壺	3261	底	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐	茶褐	○	○			○			良好	
58	373	G60	Ⅱb	壺	3521	底	−	ヘラナデ	ヘラ縦ナデ	赤みかかった淡茶褐	黒褐	○	○			○	○		普通	
58	374	F59	Ⅱb	小型丸底壺	−	頸	−	ヘラナデ	ヘラナデ	乳茶褐	乳茶褐	○	○				○		普通	青灰石含む
58	375	G59・60	Ⅱb，Ⅳ	小型丸底壺	2723 他	底	−	ヘラ縦ミガキ	ヘラ縦ナデ	暗赤褐・黒褐	明赤褐	○	○	○			○		普通	光沢，丹塗り
58	376	F59	Ⅲ	小型丸底壺	1491	底	−	丁寧なヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐	淡黒褐	○	○						普通	黒輝石含む
58	377	G59	Ⅲa	鉢	3555	完形	−	ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	乳茶褐	乳茶褐		○			○	○	○	良好	口径 10.3cm，高さ 6.2cm
58	378	E58	Ⅱb	鉢	1039 他	底	5.0	丁寧なナデ	丁寧なナデ	にぶい橙・黒	橙			○	○	○	○		良好	底径 5cm

347 は中津野式土器，348 ～ 357・361 ～ 378 は辻堂原式土器，358 ～ 360 は布留系土器

第 13 表　古墳時代須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	器種	部位	調整		色調		胎土			焼成	備考
							外面	内面	外面	内面	白石	黄白石	小石		
59	379	F59	Ⅱb	494	甕	口縁	横方向ヘラナデ	横方向ヘラナデ	褐灰	褐灰（自然釉）				良好	379 ～ 390 は同一
59	380	I58	Ⅱb	3994	甕	口縁	横方向ヘラナデ	横方向ヘラナデ	暗青灰	暗青灰	○		○	良好	内面下は青黒色
59	381	G60	Ⅱb	2717	甕	口縁	横方向ヘラナデ	横方向ヘラナデ	–	–				良好	内外に薄く自然釉
59	382	G60, H59	Ⅱb	3047	甕	肩	ミガキに近いヘラナデ，正格子タタキ	ミガキに近いヘラナデ，同心円	暗灰	暗灰				良好	379 ～ 390 は同一
59	383	H58	Ⅱb	2520	甕	胴	正格子タタキ	同心円	灰（黄白自然釉）	灰	○			良好	379 ～ 390 は同一
59	384	H58, G59・60	Ⅱb, Ⅲa	2383 他	甕	胴	正格子タタキ	同心円	灰（黄白自然釉）	灰	○			良好	379 ～ 390 は同一
59	385	G58	Ⅱb	423	甕	胴	正格子タタキ	同心円	灰	灰	○	○		良好	379 ～ 390 は同一
59	386	H59	Ⅱb	2407 他	甕	胴	正格子タタキ	同心円	暗灰（一部自然釉）	灰	○			良好	379 ～ 390 は同一
59	387	G60	Ⅲa	3612	甕	胴	正格子タタキ	上：同心円 下：正格子	灰（黄褐自然釉）	灰	○		○	良好	379 ～ 390 は同一
59	388	G58, H59, I58	Ⅲ，Ⅲa	433 他	甕	胴	正格子タタキ	条痕・正格子	暗灰	暗灰				良好	379 ～ 390 は同一
59	389	G58, H58・59	Ⅱb	2394 他	甕	胴	正格子タタキ	上：同心円 下：正格子	暗灰	灰	○			良好	379 ～ 390 は同一
59	390	H59	Ⅱb	3180 他	甕	胴	正格子タタキ	上：同心円 下：正格子	暗灰	灰	○			良好	379 ～ 390 は同一
59	391	調査区Ⅰ	撹乱	–	甕	胴	正格子タタキ	同心円	–	灰	○			良好	輝石含む

第 14 表　掘立柱建物跡３号出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	器種	部位	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	調整		色調		胎土				焼成	備考
										外面	内面	外面	内面	白石	黄白石	灰石	輝石		
65	392	SB3	–	–	甕	頸～肩				正格子	同心円	暗青灰	暗青灰			○		普通	392 ～ 396 は同一，茶石含む
65	393	H59, I58	Ⅱ，Ⅱb	3003 他	甕	胴	–	–	–	正格子	同心円	灰	灰	○				普通	392 ～ 396 は同一
65	394	G・H59, I58	Ⅱb	2359 他	甕	胴	–	–	–	正格子	同心円	暗青灰	灰	○			○	良好	392 ～ 396 は同一
65	395	H58	Ⅱb	2346	甕	胴	–	–	–	正格子	同心円	暗青灰	灰	○			○	良好	392 ～ 396 は同一

第 15 表　掘立柱建物跡４号出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	部位	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	調整		色調		胎土							焼成	備考
									外面	内面	外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	灰石	輝石		
65	396	F59, SB4	Ⅱb	2921 他	完形	13.4	6.4	5.9	ろくろびき、丁寧なナデ	ろくろびき	灰白，一部黄褐	灰白							○	普通	底部はヘラ切りの充実高台、内面に×印の沈線（又は十字）

第 16 表　古代土師器坏，埦，皿，鉢類観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	部位	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	調整		色調		胎土							焼成	備考
									外面	内面	外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	灰石	輝石		
71	397	H59・60	Ⅱb, Ⅲ	2758 他	完形	11.8	5.2	4.2	丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	浅黄橙 口縁：灰黄褐	浅黄橙		○				○		良好	底は外面にぶい赤褐，内面灰黄褐
71	398	G58	Ⅱb	416	完形	13.0	6.4	4.1	ナデ	ナデ	灰白	灰白	○					○		普通	
71	399	G58	Ⅱb	–	口縁	13.5	–	–	横方向ヘラナデ	横方向ヘラナデ	浅黄橙	浅黄橙		○			○	○		普通	
71	400	G59	Ⅱb	2983 他	口縁	13.2	–	–	横ナデ	横ナデ	灰白	褐灰						○	○	普通	
71	401	E58	Ⅱb	711	口縁	11.2	–	–	–	–	にぶい黄橙	にぶい黄橙							○	普通	
71	402	G59	Ⅱb	–	口縁	13.4	–	–	丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	灰白	灰白	○	○				○		普通	
71	403	E58, F59	Ⅱb	705 他	口縁	14.0	–	–	–	–	灰白	灰白								普通	磨耗，外面一部褐灰
71	404	E58	Ⅱb	1049	口縁	14.0	–	–	横ナデ	横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	○	○						普通	
71	405	E58	Ⅱb	952	口縁	15.0	–	–	横ナデ	横ナデミガキ	にぶい橙	にぶい橙					○	○		普通	
71	406	F58・59, G58	Ⅲ，Ⅲa	447 他	口縁	14.7	–	–	–	–	浅黄橙	浅黄橙								普通	
71	407	G60・61	Ⅱb	2607 他	口縁～胴	14.8	–	–	ヘラナデ 下：ヘラケズリ風ナデ	ヘラナデ	灰白	灰白		○						普通	
71	408	G59	Ⅱb	2862	口縁	13.8	–	–	丁寧なナデ	丁寧な横ナデ	明赤褐	明赤褐							○	普通	
71	409	H59	Ⅱb	3302	完形	–	–	4.1	横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		○			良好	
71	410	G61	Ⅳa	4817	口縁	–	–	–	横ナデ	横ナデ	灰白	灰白								普通	口縁は褐灰，墨書
71	411	F58	Ⅱb	–	口縁	–	–	–	–	–	浅黄橙	浅黄橙		○			○	○		普通	
71	412	G61	Ⅱb	3436	口縁	–	–	–	横ナデ	横ナデ	–	にぶい橙～黒褐	○	○				○		良好	
71	413	G61	Ⅱb	3512	口縁	–	–	–	丁寧なナデ	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						普通	
71	414	G58・59	Ⅱ	–	口縁	–	–	–	ヘラナデ	丁寧なナデ	灰白	灰白	○				○			普通	
71	415	E・F58	Ⅱb	835	口縁	–	–	–	横ナデ	横ナデ	灰白	灰白								普通	
71	416	H59	Ⅱb	3063	口縁	–	–	–	横ナデ	横ナデ	灰白	灰白		○					○	普通	口縁端は赤っぽい
71	417	E58	Ⅱb	684	口縁	–	–	–	横ナデ	横ナデ	灰白	灰白	○				○			普通	内面の口縁付近と外面下部など黒色化
71	418	F58・59	Ⅱb	1047 他	底	–	4.0	–	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	灰白	灰白						○		良好	

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整		色調		胎土							焼成	備考
									外面	内面	外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	灰石	輝石		
71	419	F59	Ⅱb	1103	底	−	4.0	−	−	丁寧なナデ	灰白	灰白	○	○						良好	
71	420	G59	Ⅱb	2898	底	−	5.0	−	ろくろびき	ナデ	灰白	灰白	○	○						普通	
71	421	H58	Ⅱb	2527	底	−	5.0	−	ろくろびき	ナデ	橙	橙	○	○		○		○		良好	内面に古い傷痕
71	422	−	−	−	底	−	7.6	−	丁寧なナデ	丁寧なナデ	灰白	灰白		○		○		○		普通	
71	423	G61	Ⅱb	3496	胴～底	−	5.2	2.6	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	○	○						良好	
71	424	F58	Ⅱb	855	底	−	5.8	−	底付近ナデ	ナデ	にぶい黄橙	淡橙							○	普通	
71	425	H60	Ⅱb	2755	胴～底	−	6.2	−	ヘラナデ	ヘラナデ	桐	桐	○		○		○			良好	底に溝状くぼみ
71	426	G59	Ⅱb	909	底	−	6.0	−	ナデ	ろくろびき	浅黄橙	浅黄橙								良好	
71	427	H60	Ⅱb	3147	底	−	7.2	−	ヘラナデ	ヘラナデ	橙	橙	○	○	○			○		良好	
71	428	H59	Ⅱb	3420	胴下～底	−	7.0	−	丁寧なナデ	−	明赤褐	にぶい黄	○		○	○		○		良好	黒石含む
71	429	H59	Ⅱb	3055 他	底	−	8.4	−	ナデ	丁寧なナデ	灰白	灰白		○				○		普通	外面の一部スス
71	430	F58	Ⅱb	803	胴下～底	−	6.0	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙				○				普通	
71	431	H59	Ⅱb	2415	胴～底	−	7.8	−	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙		○			○	○		良好	
71	432	H59	Ⅱb	2570	底	−	8.0	−	ハケナデ	ハケ→ヘラナデ	灰白	灰白		○		○		○		普通	摩滅が目立つ
71	433	F58	Ⅱb	1007	底	−	6.8	2.7	ナデ	ナデ	灰白	灰白						○		良好	
71	434	G59	Ⅱb	2905	底	−	5.1	2.2	ナデ	ナデ	橙	橙	○				○			良好	
71	435	F58	Ⅱb	1050	底	−	6.5	−	ヘラナデ	−	灰白	灰白							○	普通	底一部褐灰
71	436	E58	Ⅱb	633	底	−	6.4	1.9	ナデ	ナデ	灰白	灰白	○	○						良好	
71	437	F58	Ⅱb	508	底	−	6.2	2.2	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙		○					○	良好	
71	438	G60	Ⅱb	3284	胴～底	−	6.8	3.4	ナデ	ナデ	黄橙	黄橙		○					○	良好	
71	439	F58	Ⅱb	555	底	−	7.5	−	ナデ	ナデ	灰白	灰白								良好	
71	440	F59	Ⅱb	1170	胴～底	−	6.4	3.8	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	○	○						良好	
71	441	H58	Ⅱb	2519 他	胴～底	−	5.6	3.1	−	−	橙	橙						○		良好	
71	442	G58	Ⅱb	431	底	−	7.8	−	ヘラナデ	ヘラミガキ	褐灰	灰白								良好	底はナデ圧痕目立つ
72	443	G58	Ⅱ	−	口縁	15.0	−	−	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○						普通	
72	444	F58	Ⅱb	927 他	高台～底	−	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	灰白	灰白								良好	
72	445	F58	Ⅱb	859	高台	−	7.5	−	丁寧なナデ	丁寧なナデ	灰白	灰白								普通	軟質
72	446	G60	Ⅱb	2609	高台～底	−	8.0	−	ナデ	ナデ	赤橙	赤橙		○			○			普通	外面はにぶい黄橙、摩滅目立つ
72	447	H58	Ⅱb	2490	高台～底	−	7.6	−	ろくろびき	ろくろびき	明赤褐	明赤褐	○	○		○		○		良好	
72	448	F58	Ⅱb	521	底部	−	6.0	−	ヘラナデ	ヘラナデ	灰白	褐灰	○	○						普通	
72	449	F58	Ⅱb	512 他	口縁～底	14.0	11.4	1.8	ナデ	ナデ	橙	橙	○						○	良好	ややあげ底
72	450	G60	Ⅱb	3262	底	−	12.0	−	ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○		○				普通	長石含む
72	451	H58･59	Ⅱb	2482 他	底	−	11.8	−	ヘラナデ	ろくろびき	橙	橙		○		○		○		良好	
72	452	H59	Ⅱb	3061	口縁	−	−	−	ハケ状横ナデ	ハケ状横ナデ	橙	橙					○	○		良好	大皿又は鉢
72	453	H59	Ⅱb	3052	胴下	−	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	赤	にぶい黄橙	○		○					良好	

397 ～ 442 は坏。443 ～ 448 は埦，449 ～ 451 は大皿，452・453 は鉢。

第 17 表　古代土師器甕観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	部位	口径(cm)	調整		色調		胎土						焼成	備考
							外面	内面	外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	灰石		
73	454	H58	Ⅱb	2428 他	口縁～胴	20.8	ヘラ横ナデ	口縁ヘラ横ナデ，胴ヘラケズリ	灰赤	灰赤	○		○		○	○	良好	ススス
73	455	H59	Ⅱb	3304 他	口縁～胴	25.2	ヘラ横ナデ	口縁ヘラ横ナデ，胴ヘラケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐		○			○	○	良好	
73	456	F58	Ⅱb	850	口縁～胴	24.8	ヘラ横ナデ	口縁ヘラ横ナデ，胴ヘラケズリ	黒褐	にぶい黄橙	○		○				良好	ススス
73	457	G61	Ⅱb	3507	口縁～胴	26.0	ヘラ横ナデ	口縁ヘラ横ナデ，胴ヘラケズリ	褐	褐	○	○	○		○		普通	
73	458	G59	Ⅱb	2835 他	口縁～胴上	23.0	ヘラ横ナデ	口縁ヘラ横ナデ，胴ヘラケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐		○	○		○	○	普通	ススス
73	459	G59	Ⅲa	3574	口縁～胴	−	ヘラナデ	口縁ヘラ横ナデ，胴ヘラケズリ	にぶい赤褐	にぶい橙	○		○				良好	
73	460	G61	Ⅱb	3242	口縁～胴	−	ヘラ横ナデ	口縁ヘラ横ナデ，胴ヘラケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○		○		○	○	良好	
73	461	G61	Ⅱb	2577	口縁	−	ヘラ横ナデ	口縁ヘラ横ナデ，胴ヘラケズリ	明赤褐	明赤褐		○			○		良好	外面一部は赤灰
73	462	G59	Ⅱb	2973	口縁	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	褐灰	にぶい黄橙			○		○		普通	ススス，口唇に凹線
73	463	G59	Ⅲ，Ⅲa	3187	口縁	−	ヘラ横ナデ	口縁ヘラ横ナデ，胴ヘラケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○		○	○	普通	
73	464	G58･59	Ⅱb	2875	口縁	−	ヘラ横ナデ	口縁ヘラ横ナデ，胴ヘラケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙			○		○	○	普通	口唇に凹線
73	465	F59,G60	Ⅱb	3443	口縁	−	粗いヘラ横ナデ	口縁ヘラ横ナデ，胴ヘラケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐			○		○	○	普通	ススス
73	466	F58	Ⅱb	587	口縁	−	ヘラ横ナデ	口縁ヘラ横ナデ，胴ヘラケズリ	赤褐	赤褐	○		○	○	○	○	良好	
73	467	G59	Ⅱb	3199	口縁	26.0	ヘラ横ナデ	口縁ヘラ横ナデ，胴ヘラケズリ	黒褐	にぶい赤褐			○		○	○	普通	口縁に粘土貼付
73	468	G59	Ⅱb	2832 他	口縁～胴	25.0	ヘラ横ナデ	口縁ヘラ横ナデ，胴ヘラケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○					○	普通	内面の一部は黒褐
73	469	−	Ⅰ	−	口縁	25.0	丁寧なヘラ横ナデ	口縁丁寧なヘラ横ナデ，胴ヘラケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			○		普通	

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	部位	口径（cm）	調整		色調		胎土						焼成	備考
							外面	内面	外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	灰石		
73	470	G61,H59	Ⅱb	3425他	口縁	28.8	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○	○			普通	
73	471	F58	Ⅱb	1068	口縁～胴上	30.0	ヘラ横ナデ	口縁ヘラ横ナデ，胴ヘラケズリ	褐	褐	○			○			良好	
73	472	H59	Ⅱb	3101	口縁～胴上	20.8	ヘラ横ナデ	上ヘラ横ナデ，下ヘラケズリ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○		○	○	○	良好	ス
73	473	H59	Ⅱb	3132	口縁	－	ヘラ横ナデ	口縁丁寧なヘラ横ナデ，胴ヘラケズリ	にぶい黄褐	褐灰	○	○			○	○	良好	
73	474	F59,G58	Ⅱb	442	口縁	－	ヘラ横ナデ	口縁：ヘラナデ，胴：ヘラケズリ	褐	灰黄褐	○		○		○		普通	
73	475	G59	Ⅱb	1084	頸～胴	－	ヘラ横ナデ	口縁ヘラ横ナデ，胴ヘラケズリ	にぶい橙	褐	○			○	○	○	良好	
73	476	E58	Ⅱb	618他	口縁	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ，胴：丁寧なヘラケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○		普通	口唇に浅い凹線
73	477	F58	Ⅱb	858他	頸	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ，ヘラケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○			○	○		良好	外面の一部は黒褐

第18表　似非土師器・焼塩土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	器種	部位	調整		色調		胎土							焼成	備考
							外面	内面	外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	灰石	角閃石		
73	478	H59	Ⅱb	3070	土師甕	胴	正格子タタキ→ヘラナデ	ヘラケズリ	褐灰	明赤褐			○	○		○		良好	
73	479	I59	Ⅱb	2323	土師甕	胴	正格子タタキ→ヘラナデ	ヘラケズリ	褐灰	明赤褐			○	○		○		良好	
73	480	G60	Ⅱb	2710	土師甕	胴	ヘラナデ	同心円	灰褐	にぶい橙	○	○			○	○		良好	
73	481	H･I58	Ⅱb	2350他	土師甕	胴	正格子タタキ→繊維状ナデ	同心円	褐灰	にぶい黄橙	○	○						良好	
73	482	H58	Ⅱb	2442	土師甕	胴	正格子タタキ→ヘラナデ	同心円	黒褐	褐灰				○		○		良好	
73	483	H59	Ⅱb	3121	土師甕	胴	ヘラナデ	同心円	灰褐	灰褐	○	○			○	○		良好	
73	484	F58	Ⅱb	763	土師甕	胴	ハケナデ	同心円	褐灰	にぶい黄橙	○	○	○			○		良好	
74	485	G59	Ⅱb	2912	焼塩土器	口縁	ナデ	布痕	明赤褐	明赤褐		○	○				○	普通	内外とも摩滅
74	486	H59	Ⅰ	－	焼塩土器	口縁	ナデ	布痕	にぶい橙	にぶい橙	○	○				○		普通	摩滅
74	487	－	Ⅲ，Ⅲa	－	焼塩土器	口縁	－	布痕	にぶい橙	にぶい橙		○	○					－	
74	488	H59	Ⅱb	3129	焼塩土器	口縁	ナデ	布痕	にぶい橙	にぶい橙	○					○	○	普通	
74	489	F58	Ⅱb	530	焼塩土器	口縁	ナデ	布痕	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○			○		普通	
74	490	G59	Ⅱb	2871	焼塩土器	口縁	ナデ	布痕	にぶい橙	にぶい橙		○				○		普通	摩滅
74	491	F58	Ⅱb	934	焼塩土器	口縁	ヘラ横ナデ	布痕	赤褐	にぶい褐	○	○	○					良好	
74	492	E58	Ⅱb	608	焼塩土器	胴	粗いナデ	布痕	橙	橙	○	○						普通	摩滅，輝石含む
74	493	E58	Ⅱb	731	焼塩土器	口縁	－	布痕	にぶい橙	にぶい橙		○	○		○			普通	
74	494	G59	Ⅱb	2867	焼塩土器	胴	ナデ	布痕	橙	橙	○	○	○			○		普通	
74	495	I59	Ⅱb	2369	焼塩土器	胴	粗いナデ	布痕	にぶい橙	にぶい橙	○	○						普通	摩滅
74	496	F58	Ⅱb	561	焼塩土器	胴	ナデ	布痕	橙	橙			○				○	普通	
74	497	G61	Ⅱb	－	焼塩土器	胴	ナデ	布痕	橙	橙	○		○		○	○		良好	
74	498	E58	Ⅱb	708	焼塩土器	胴	ナデ	布痕	にぶい橙	にぶい橙	○	○					○	良好	
74	499	F59	Ⅱb	－	焼塩土器	胴	ナデ	布痕	にぶい褐	にぶい褐	○		○				○	良好	
74	500	F58	Ⅱb	1157	焼塩土器	胴	ヘラナデ	布痕	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			○			良好	
74	501	F59	Ⅱb	1125	焼塩土器	胴	粗いヘラナデ	布痕	赤褐	赤褐	○	○				○		良好	輝石含む
74	502	－	－	－	焼塩土器	胴	ナデ	布痕	赤褐	赤褐	○	○				○		良好	
74	503	E･F58	Ⅱ・Ⅱb	－	焼塩土器	胴	条痕様ナデ	布痕	にぶい橙	にぶい橙	○	○				○	○	良好	
74	504	F58	Ⅱb	－	焼塩土器	胴	ナデ	布痕	明赤褐	明赤褐	○	○					○	普通	
74	505	G59	Ⅱa	－	焼塩土器	胴	ナデ	布痕	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			○	○		良好	
74	506	E58	Ⅱb	947	焼塩土器	胴	ヘラナデ	布痕	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○				○	良好	
74	507	F58	Ⅱb	－	焼塩土器	胴	ナデ	布痕	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○						良好	
74	508	F58	Ⅱb	886	焼塩土器	胴	ナデ	布痕	にぶい橙	にぶい橙		○	○		○			良好	
74	509	H60	Ⅱb	－	焼塩土器	胴	ヘラナデ	布痕	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○		○	○	○		良好	
74	510	G60	Ⅱb	－	焼塩土器	胴	ナデ	布痕	橙	橙	○	○				○		普通	摩滅

1，478 ～ 484 は似非土師器

第19表　黒色・赤色・墨書土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	部位	底径（cm）	調整		色調		胎土					焼成	備考
							外面	内面	外面	内面	白石	茶石	黄白石	石英	輝石		
75	511	G60,I59	Ⅱb	2318他	底	7.0	丁寧な横ナデ	丁寧なミガキ	橙	褐灰	○					良好	長石含む
75	512	G61	Ⅱb	3514	口縁	－	ナデ	ミガキ	灰白	褐灰	○				○	普通	外面に一部にぶい赤褐
75	513	H59	Ⅱb	3123	口縁	－	横ナデ	丁寧な横ミガキ	にぶい黄橙	黒	○				○	良好	内面に光沢
75	514	－	Ⅰ	－	底・高台	8.6	横ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒・にぶい黄橙	○				○	良好	外面に一部黒褐
75	515	H58	Ⅱb	－	底・高台	8.4	ナデ	ミガキ	灰白	黒褐		○		○		普通	高台ににぶい黄橙
75	516	G58	Ⅲ	4131	底・高台	－	ナデ	ミガキ	にぶい橙	黒褐	○		○	○		普通	
75	517	G61	Ⅱb	3487	完形	6.5	丁寧なナデ	丁寧なナデ	浅黄橙・赤褐上に赤黒	浅黄橙・明赤褐		○				良好	灰石含む
75	518	G60	Ⅱb	－	口縁	－	丁寧な横ナデ	横ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○					普通	灰石含む
75	519	G･H60	Ⅱb	2703他	底・高台	8.1	横ナデ	丁寧な横ナデ	橙	橙	○					普通	穿孔有り

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	部位	底径(cm)	調整		色調		胎土					焼成	備考
							外面	内面	外面	内面	白石	茶石	黄白石	石英	輝石		
75	520	F59	Ⅲ, Ⅲa	1177	底・高台	9.8	横ナデ	丁寧なミガキ	浅黄橙	赤茶褐・黒	○				○	良好	
75	521	E58, F58･60, G58･59	Ⅱb	522 他	完形	7.0	ナデ	ナデ	黄灰	黄灰	○					普通	外面墨書「乙」？ 灰石含む，須恵器坏
75	522	F61	Ⅱ	3488	完形	5.8	ろくろびき	ろくろびき	灰白	灰白	○					良好	内外面墨書（不明瞭） 土師器坏

1,511 は内黒土師器坏，512 ～ 516 は内黒土師器埦，517 は赤色土器坏，518 ～ 520 は内赤土器埦，521･522 は墨書土器

第 20 表　古代須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整		色調		胎土				焼成	備考
										外面	内面	外面	内面	白石	黄白石	灰石	輝石		
75	523	F59	Ⅱb	2780	坏	口縁	12.0	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	褐灰	褐灰					普通	
75	524	G61, H59	Ⅱb	3183 他	坏	完形	11.6	6.4	4.5	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	緑がかった灰	緑がかった灰	○	○	○		普通	口縁付近暗灰褐
75	525	H59	Ⅱb	3303 他	坏	口縁	12.2	－	－	丁寧なナデ	丁寧なナデ	にぶい黄褐	灰白	○				良好	雲母含む
75	526	H59	Ⅱa	2601 他	小壺	完形	9.6	5.0	(10.0)	ナデ	無文	黒色・灰白色	暗灰褐	○				良好	自然釉， 底にわら状圧痕
75	527	G59	Ⅱb	2843	壺	胴	－	－	－	正格子	無文	灰	灰	○				良好	外面上半に 自然釉
75	528	G59	Ⅱb	2931	甕	胴	－	－	－	正格子	条痕	灰	灰褐	○	○			良好	
75	529	G59	Ⅱb	2500	甕	胴	－	－	－	横条痕	縦条痕	暗赤褐	赤褐	○	○			良好	外面上半にゴマ
75	530	F59	Ⅱb	1166	甕	胴	－	－	－	横長の長格子	花文	褐灰	褐灰		○			良好	外面は一部摩耗

第 21 表　紡錘車・ふいごの羽口観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	器種	部位	調整		色調		胎土							焼成	備考
							外面	内面	外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	灰石	角閃石		
76	531	G60	Ⅱb	2649	紡錘車	完形	周辺ミガキ	－	浅黄橙	浅黄橙								普通	坏底転用，径 5.8･ 孔径 0.8cm
76	532	G58	Ⅱb	3155	紡錘車	半欠	周辺ミガキ	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙								普通	坏底転用，径 6.5･ 孔径 1cm
76	533	G60	Ⅱb	－	紡錘車	部分	周辺ミガキ	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○				○		普通	坏底転用，径 6.5･ 孔径 0.6cm
76	534	H59	Ⅱb	3429	ふいごの羽口	羽口端	－	－	黒の鉄分付着	黒の鉄分付着	○							－	
76	535	H59	Ⅱb	3288	ふいごの羽口	先端近	ヘラナデ	ヘラナデ	灰白・明褐灰・ 褐灰	にぶい橙色				○		○		－	
76	536	H59	Ⅱb	3307	ふいごの羽口	先端近	ヘラナデ	ヘラナデ	灰白・明褐灰・ 褐灰	灰白・明褐灰・ 褐灰				○		○		－	外径 5.5cm 孔径 1.8cm

第 22 表　古代鉄製品観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	器種	部位	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重量	備考
76	537	F58	Ⅱb	786	刀子	先端欠	(3.8)	1.1	0.35		
76	538	G61	Ⅱa	－	刀子	先端欠	(8.0)	1.4	0.4		目釘孔有り
76	539	G61	Ⅱa	－	鉄鏃	先端欠	(7.1)	3.2	0.8		

第 23 表　古代石製品観察表

挿図番号	掲載番号	器種	区	層	取り上げ番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(G)	石材	備考
76	540	砥石	H59	Ⅱa	一括	(4.9)	(2.8)	0.9	23.4	砂岩	堤砥
76	541	砥石	F58	Ⅱb	528	(6.5)	(6.1)	(1.4)	56.2	砂岩	
76	542	砥石	G60	Ⅳ	3960	11.7	(10.7)	4.6	481.8	砂岩	

第 24 表　中世土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	器種	部位	分類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整		色調		胎土			焼成	備考
											外面	内面	外面	内面	白石	茶石	石英		
77	543	H59, F60	Ⅱb, Ⅲ	2457 他	坏	完形	瓦器	12.0	6.0	4.2	横ナデ	横ナデ	褐灰	口縁：褐灰 灰白				普通	灰石含む
77	544	H59	Ⅱa	－	甕	胴	常滑	－	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	赤みがかった茶褐	赤みがかった茶褐	○	○	○	良好	

第５章　自然科学分析

第１節　自然科学分析の種類と目的

第１地点に関する自然科学分析は，平成 24 年度に「液状化現象に伴う噴砂のテフラ分析」と「土器付着炭質物の放射性炭素年代測定」,「堆積物の植物珪酸体分析」,「出土炭化物の放射性炭素年代測定」,「遺構内出土の種実同定」を行った。

「液状化現象に伴う噴砂のテフラ分析」では，噴砂及び上位と下位の火山灰とされる堆積物に含まれる火山砕屑物を分析し,それらの由来するテフラを同定する。「土器付着炭質物の放射性炭素年代測定」では，土器付着物について放射性炭素年代測定を実施し，土器型式と年代との関係に関する基礎資料を得る。「堆積物の植物珪酸体分析」では，縄文時代前期～古代にかけての調査区の植生変遷について検討することを目的とした。「出土炭化物の放射性炭素年代測定」では，遺構内埋土から出土した炭化物の年代を測定することによって，遺構の年代を知る手がかりを目的とした。「遺構内出土の種実同定」では，遺構内埋土から種実を検出し，その種類や構成を調べることで，過去の植生や植物利用の実態を明らかにすることを目的として行った。

分析結果については，第２節以降に詳細に記載してあるので，譲ることとしたい。なお，今回は第１地点に関する科学分析を対象とした。第２地点については，今後刊行の報告書において報告する予定である。このため，納品された報告書を基に第１地点のみ再編を行い，体裁を整え掲載している。

２　自然科学分析に関する一覧

掲載節	分析の内容	分析委託業者
第２節	テフラ分析 （液状化現象に伴う噴砂）	パリノ・サーヴェイ株式会社
第３節 １	土器付着炭質物の放射性炭素年代測定	パリノ・サーヴェイ株式会社
第３節 ２	堆積物の植物珪酸体分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
第４節 １	遺構内埋土の出土炭化物における放射性炭素年代測定	株式会社古環境研究所
第４節 ２	遺構内出土の種実同定	株式会社古環境研究所

第２節　永吉天神段遺跡のテフラ分析（液状化現象に伴う噴砂）

パリノ・サーヴェイ株式会社

層位の解釈について

分析依頼時にＶａ・Ｖｂ・Ｖｃ・Ｖｄとして依頼したが，分析結果と周辺の層位とを検討し，第６図の基本土層図との対比として，Ｖａ（基本層位）がＶａ（分析），Ｖａと二次シラスの混土がＶｂ（分析），Ｖｂ（基本層位）がＶｃ（分析），Ｖｃ（基本層位）がＶｄ（分析）となる。

分析依頼時と基本層位の対応表

分析依頼時（本報告）の記載	基本層位
Ｖａ	Ｖａ
Ｖｂ	Ｖａと二次シラスの混土
Ｖｃ	Ｖｂ
Ｖｄ	Ｖｃ

はじめに

曽於郡大崎町に所在する永吉天神段遺跡は，非溶結の流紋岩質角礫含有軽石凝灰岩いわゆるシラス（鹿児島県地質図編集委員会 , 1990）からなる台地上に位置する。台地上面の標高は約 35 ｍとされ，周辺は開析が進んでいる。遺跡の位置する段丘も入戸火砕流堆積物の原面が侵食されて形成された二次シラス段丘面（町田ほか編 , 2001）に相当する。平成 24 年度の発掘調査では，縄文時代前期，同晩期，弥生時代中期および平安時代の各時期におよぶ遺構・遺物が確認されている。また，今回の発掘調査では，約 7,300 年前に起こった鬼界カルデラの噴火時に発生した地震による噴砂とされる砂脈が確認されている。

本報告では，この砂脈について，その上位と下位の火山灰とされる堆積物および噴砂自体に含まれる火山砕屑物，特に斑晶鉱物と火山ガラスを抽出し，その鉱物組成や形態の特徴，さらには屈折率を捉えることによって，それらの火山砕屑物の由来するテフラを同定する。

１　試料

試料は，調査区内の土層断面より採取された堆積物４点である。試料の採取された断面では，約 7,300 年前に起こった鬼界カルデラの噴火に伴う地震により発生した液状化現象に伴う噴砂とされる幅 15㎝の砂脈が確認されている。発掘調査所見では，液状化現象は段丘を構成するシラスの２次堆積層中で発生した可能性が高いと考えられており，砂脈は旧石器時代から縄文時代早期とされるローム層を貫き，当時の地表面に噴出したとされている。また，当時の地表面に噴出した砂脈の直下には，7,300 年前の鬼界カルデラの噴火において最初に噴出した幸屋軽石（町田・新井 , 2003）とされる軽石層が堆積し，砂脈の直上には，幸屋軽石の後に噴出した幸屋火砕流（町田・新井 , 2003）により発生した細粒火山灰いわゆるアカホヤ火山灰が堆積していると考えられている。

試料は，発掘調査所見により分層されたＶａ，Ｖｂ，Ｖｃ，Ｖｄの各層より１点ずつ採取されている。Ｖａ層およびＶｂ層はアカホヤ火山灰とされ，Ｖｃ層およびＶ

ｄ層が噴砂とされている。分析時の観察では，Ｖａ層は褐色を呈するシルト質砂，Ｖｂ層は褐色を呈する砂質シルトであり，径２～10㎜の灰白色を呈する風化して脆弱な軽石粒が多量に含まれている。Ｖｃ層は，灰黄褐色を呈する中砂～粗砂であり，径１～７㎜の灰白色を呈する風化して脆弱な軽石粒が中量程度含まれている。Ｖｄ層は，黄褐色を呈する中砂～粗砂であり，径２～４㎜の灰白色を呈する風化して脆弱な軽石粒が中量程度含まれている。

２　分析方法

試料より適量を採取し，水を加え，超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し，250メッシュの分析篩上にて水洗して粒径が１／16㎜より小さい粒子を除去する。乾燥させた後，篩別して，得られた粒径１／４㎜－１／８㎜の砂分を，ポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離し，得られた重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際，不透明な粒については，斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

一方，重液分離により得られた軽鉱物分については，火山ガラスとそれ以外の粒子を，偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで計数し，火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは，その形態によりバブル型，中間型，軽石型の３つの型に分類する。各型の形態は，バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるＹ字状の高まりを持つもの，中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの，軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

屈折率の測定は，処理後に得られた軽鉱物分から摘出した火山ガラスと重鉱物分から摘出した斜方輝石とを対象として，古澤（1995）のＭＡＩＯＴを使用した温度変化法を用いる。

３　結果

（１）　テフラ組成分析

分析結果を第25表，第78図に示す。重鉱物組成は４点ともに斜方輝石が最も多く，50％弱を占め，次いで不透明鉱物（ほとんど磁鉄鉱とされる）が多く，約40％を占める。これら以外の重鉱物も４点ともに同様であり，少量の単斜輝石と微量または極めて微量の角閃石が含まれる。ただし，詳細にみればＶｃ層の単斜輝石は他の試料に比べて少なく，Ｖｄ層には角閃石は認められない。

火山ガラス比では，Ｖａ層に約60％の火山ガラスが含まれ，Ｖｂ層では約45％，Ｖｃ層では約30％，Ｖｄ層では約20％と下位ほど量比は少なくなる。火山ガラスの形態組成は，いずれもバブル型と軽石型とからなるが，Ｖａ層とＶｃ層ではバブル型が多く，Ｖｂ層とＶｄ層では両者同程度である。なお，Ｖｃ層以外の試料では，褐色を呈するバブル型火山ガラスが少量認められた。

（２）　屈折率測定

各試料の測定結果を図２に示す。以下に火山ガラスと斜方輝石に分けて述べる。

ア　火山ガラス

Ｖａ層とＶｄ層のレンジは概ね近似しており，レンジの下限はｎ1.505または1.506，レンジの上限はｎ1.511である。また，モードは，ｎ1.508－1.509を示す。なお，Ｖｄ層には，上述したレンジより低い屈折率を示す火山ガラスが極めて微量検出された。Ｖｃ層では，火山ガラスのほとんどがｎ1.499－1.500の非常に狭いレンジに集中する。ただし，ｎ1.508程度の高い屈折率の火山ガラスも極めて微量検出された。ＶｂＶ層では，ｎ1.499－1.500に集中する火山ガラスとｎ1.506－1.511のレンジを示す火山ガラスとが混在する。両者同程度の量比である。

イ　斜方輝石

４点のうち，Ｖａ層とＶｄ層のレンジは比較的低い値を示しており，Ｖａ層のレンジはγ1.706－1.714，Ｖｄ層のレンジはγ1.704－1.711である。モードは，両試料ともにγ1.710前後にある。ＶｂＶ層とＶｃ層のレンジは，上記２点に比べて高く，ＶｂＶ層はγ1.724－1.730，Ｖｃ層はγ1.720－1.725である。モードはＶｂＶ層は明瞭ではないが，Ｖｃ層はγ1.723付近にある。

４　考察

Ｖａ層で検出された火山ガラスは，バブル型の多い形態組成とその屈折率および褐色のものも含まれるなどの特徴から，町田・新井（1978）のいう鬼界アカホヤ火山灰（Ｋ－Ａｈ）に由来すると考えられる。斜方輝石を主体とする重鉱物組成もＫ－Ａｈの特徴と一致し，斜方輝石の屈折率もＫ－Ａｈのそれとほぼ一致する。これらのことから，Ｖａ層は，発掘調査所見で示されたようにＫ－Ａｈの降下堆積層である可能性が高いと考えられる。

ＶｂＶ層で検出された火山ガラスは，Ｖａ層の火山ガラスに比べると軽石型の割合がやや多く，そしてさらに大きな違いとして，Ｖａ層と同様のＫ－Ａｈの火山ガラスとともにＫ－Ａｈの火山ガラスとは明らかに異なる屈折率を有するテフラに由来する火山ガラスも混在していることが指摘できる。Ｋ－Ａｈとは異なるテフラの火山ガラスは，ｎ1.499－1.500の非常に狭いレンジに集中するという特徴から，町田・新井（1976）のいう姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ）に由来すると考えられる。ＶｂＶ層の斜方輝石の屈折率をみても，Ｋ－Ａｈのそれより明らかに高い値を示し，その値はＡＴのそれとほぼ一致している。一方，Ｖｃ層から検出された火山ガラスは，屈折率の状

況から，そのほとんどがＡＴに由来する火山ガラスである。また，斜方輝石の屈折率もＡＴのそれとほぼ一致する。Ｖｃ層は，発掘調査所見により，二次シラスの液状化した噴砂であると考えられているが，二次シラスはすなわちＡＴとされる砕屑物を多量に含んでいる堆積物である。したがって，Ｖｂ層およびＶｃ層から検出された，屈折率がｎ 1.499 － 1.500 の火山ガラスと高屈折率の斜方輝石は，二次シラスに由来すると考えられる。このことは，Ｖｃ層が，二次シラスの液状化した噴砂であることを支持している。また，Ｖｂ層は，噴砂とＫ－Ａｈの混在する層位の堆積物であることが推定される。

Ｖｄ層については，発掘調査所見では噴砂とされたが，検出された火山ガラスと斜方輝石の屈折率の値は，ＡＴよりもＫ－Ａｈの値に相当する。したがって，Ｖｄ層中には二次シラスに由来する砕屑物はほとんど含まれていないと判断されることから，Ｖｄ層は噴砂には相当しない可能性が高い。一方で，Ｋ－Ａｈ層とされるＶａ層とは色調も異なり，軽石粒が含まれるなどの違いも認められる。発掘調査所見では，当時の地表に広がったことを示す噴砂の直下には，幸屋軽石層が堆積するとされていることから，Ｖｄ層は幸屋軽石層に相当する可能性があると考えられる。

引用文献

古澤明，1995，「火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別」『地質学雑誌』P101, 123 ～ 133

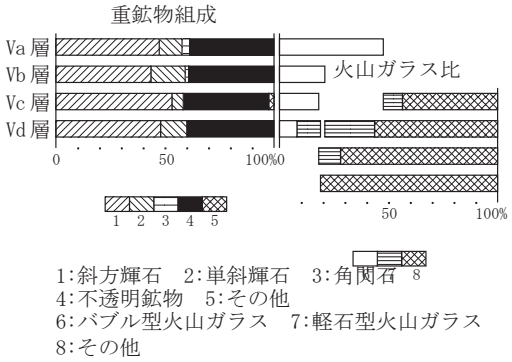
鹿児島県地質図編集委員会，1990，鹿児島県地質図縮尺 10 万分の 1　鹿児島県

町田洋・新井房夫，1976，「広域に分布する火山灰－姶良Ｔｎ火山灰の発見とその意義」『科学』P46, 339 ～ 347

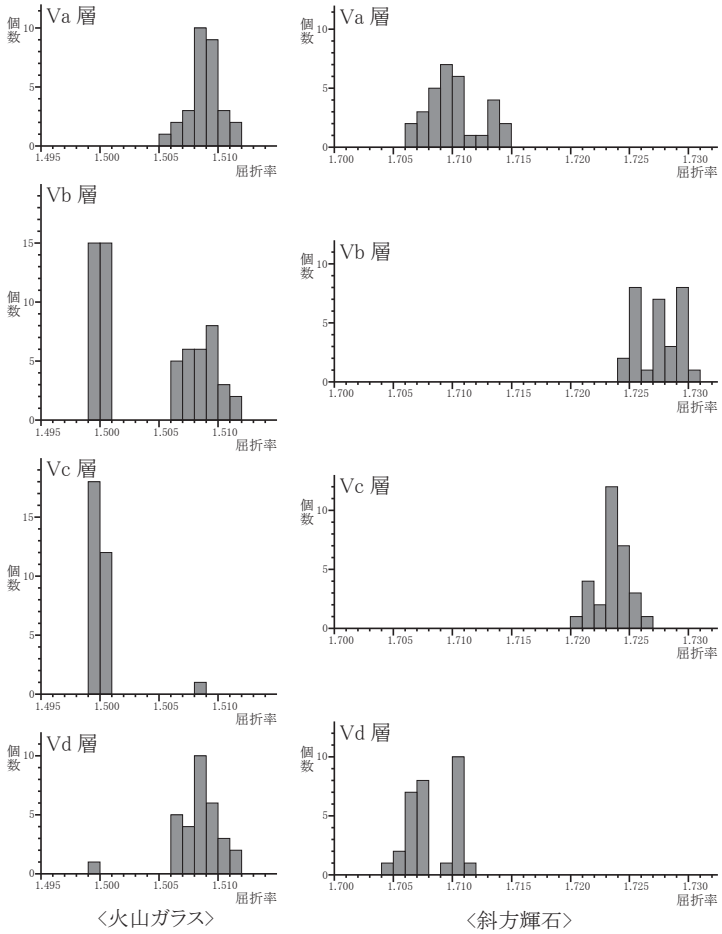
町田洋・新井房夫，1978，「南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰」『第四紀研究』P17, 143 ～ 163

町田洋・新井房夫，2003，「新編火山灰アトラス」 東京大学出版会，P336

町田洋・太田陽子・河名俊男・森脇広・長岡信治（編），2001，「日本の地形７」『九州・南西諸島』東京大学出版会，P355



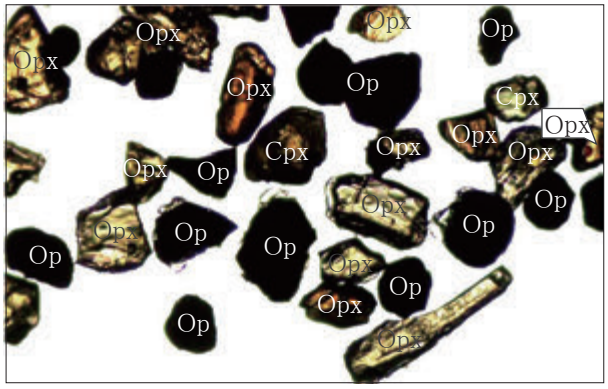
第 78 図　重鉱物組成および火山ガラス比



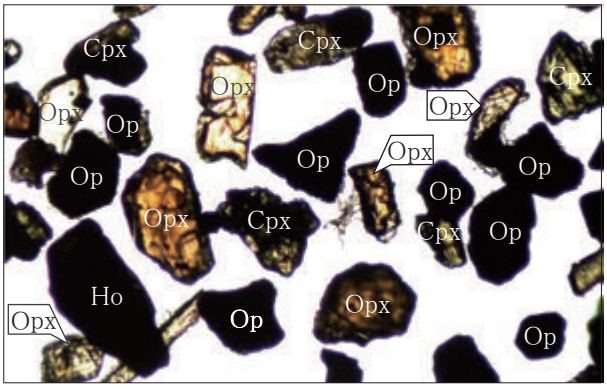
第 79 図　火山ガラスおよび斜方輝石の屈曲率

第 25 表　テフラ組成分析結果

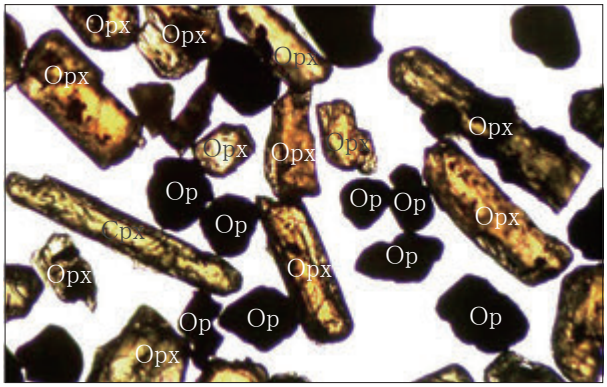
試料名	Va 層	Vb 層	Vc 層	Vd 層
カンラン石	0	0	1	0
斜方輝石	118	108	133	120
単斜輝石	26	39	13	30
角閃石	9	4	1	0
不透明鉱物	96	97	98	100
その他	1	2	4	0
合計	250	250	250	250
バブル型火山ガラス	119	52	45	20
中間型火山ガラス	0	0	1	0
軽石型火山ガラス	22	57	25	27
その他	109	141	179	203
合計	250	250	250	250



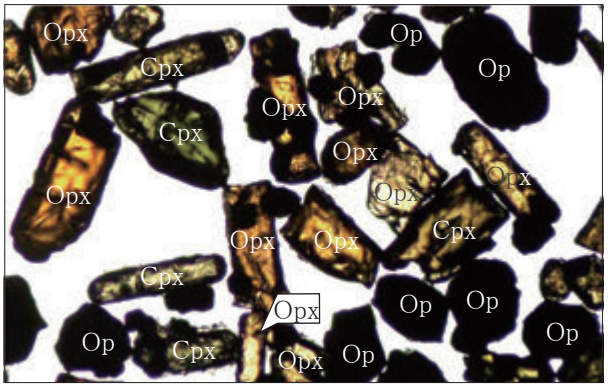
1. 重鉱物(Va層)



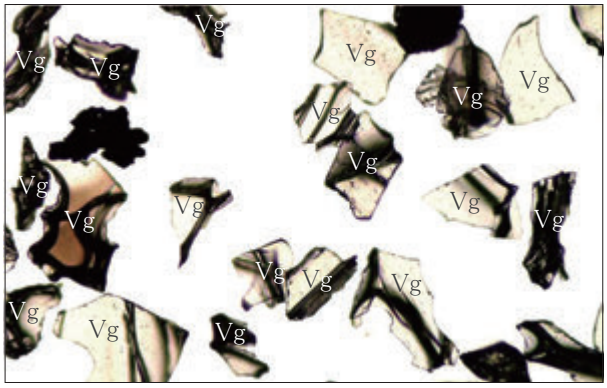
2.重鉱物(Vb層)



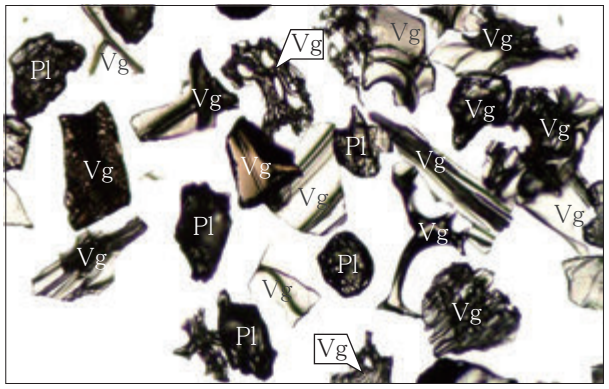
3. 重鉱物(Vc層)



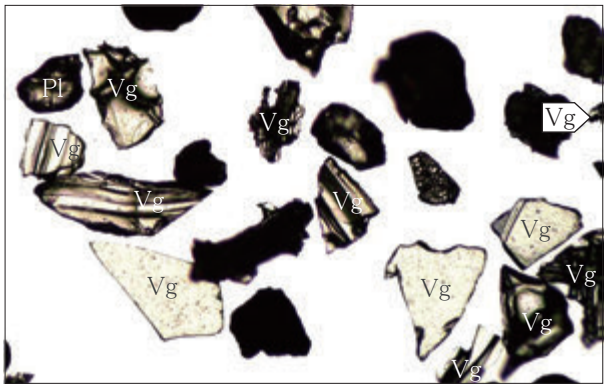
4. 重鉱物(Vd層)



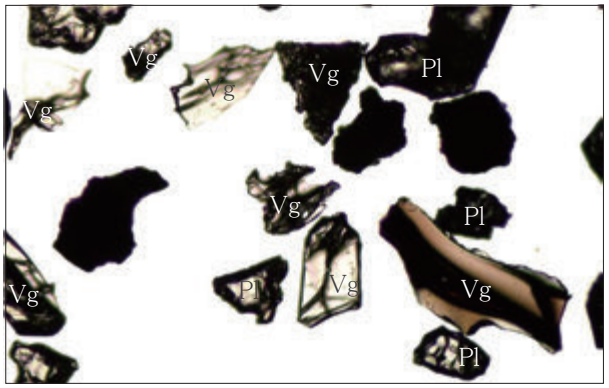
5. 火山ガラス(Va層)



6. 火山ガラス(Vb層)



7. 火山ガラス(Vc層)



8. 火山ガラス(Vd層)

0.5mm

Opx:斜方輝石. Cpx:単斜輝石. Ho:角閃石. Op:不透明鉱物. Vg:火山ガラス. Pl:斜長石.

第80図　重鉱物・火山ガラス

第３節　土器付着炭質物の放射性炭素年代測定と堆積物の植物珪酸体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では，永吉天神段遺跡における総合理解を深めるために以下に示す２課題について，自然科学分析調査を実施する。

（１）調査で検出された縄文時代晩期～弥生時代前期の土器付着物について放射性炭素年代測定を実施し，土器型式と年代との関係に関する基礎資料を得る。

（２）第１地点における縄文時代前期～古代にかけての調査区の植生変遷について検討することを目的として，植物珪酸体分析を実施する。

以下に，課題別に分析結果を報告する。

１　土器付着炭質物の放射性炭素年代測定

（１）　試料

分析対象土器試料は，Ｇ－58 区Ⅲ層から出土した縄文時代晩期～弥生時代前期の土器（本報告書 73：取上遺物番号 339）に付着した炭質物１点である。

（２）　分析方法

試料の表面や内部に土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合には，これらをピンセットや超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後，ＨＣＩによる炭酸塩など酸可溶成分の除去，NaOH による腐植酸などアルカリ可溶成分の除去，ＨＣＩによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩など酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ，１ｇの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて，管内を真空にして封じきり，500℃（30 分）850℃（２時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し，真空ラインにて CO2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し，グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１㎜の孔にプレスして，タンデム加速器のイオン源に装着し，測定する。測定機器は，３ＭＶ小型タンデム加速器をベースとした，14 Ｃ－ＡＭＳ専用装置（NEC Pelletron 9 SDH －２）を使用する。

ＡＭＳ測定時に，標準試料である米国国立標準局（ＮＩＳＴ）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また，測定中同時に 13 Ｃ／12 Ｃの測定も行うため，この値を用いてδ 13 Ｃを算出する。

放射性炭素の半減期は，ＬＩＢＢＹの半減期 5,568 年を使用する。また，測定年代は 1,950 年を基点とした年代（ＢＰ）であり，誤差は標準偏差（One Sigma；68%）に相当する年代である。暦年較正は，RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0（Copyright 1986－2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い，誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは，大気中の 14 Ｃ濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14 Ｃ濃度の変動および半減期の違い（14 Ｃの半減期 5,730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正に関しては，本来 10 年単位で表すのが通例であるが，将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算，再検討に対応するため，１年単位で表している。暦年較正は，測定誤差σと２σ双方の値を示す（σは統計的に真の値が 68%，２σは真の値が 95%の確率で存在する範囲）。また表中の相対比とは，σと２σの範囲をそれぞれ１とした場合に，その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

（３）　結果

放射性炭素年代測定および暦年較正結果を第 26 表，第 81 図に示す。

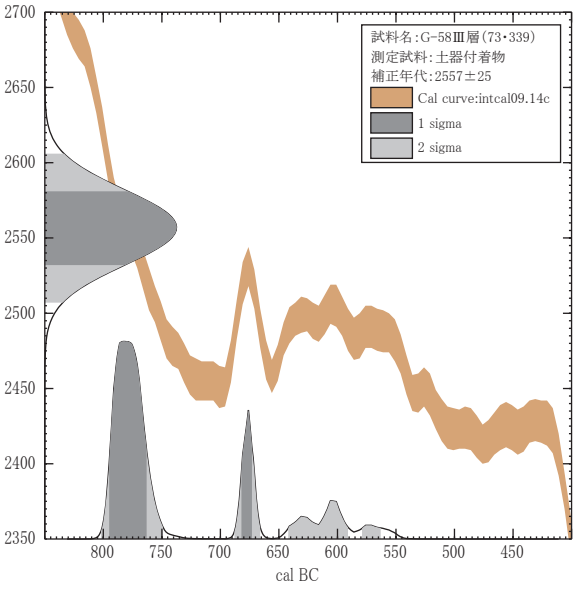
（４）　考察

縄文時代晩期～弥生時代前期の突帯紋土器の年代値は，2560 ± 30yBP（暦年：cal BC 801 － 749：68.7%）を示した。この年代値は西本編（2006・2007）による縄文時代晩期～弥生時代前期の年代値に比定され，同調的といえる。

第 26 表　出土土器付着物の放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料名	測定年代 BP	δ 13 C (‰)	補正年代 BP	暦年較正年代（cal）															Code No.
				誤差	cal AD							cal BP						相対比	
73 29T 区Ⅲ層 （遺物番号 339）	2590 ± 30	-26.82 ± 0.38	2560 ± 30 (2557 ± 25)	σ	cal	BC	795	－	cal	BC	762	cal	BP	2,744	－	2,711	0.839	IAAA-123423
					cal	BC	681	－	cal	BC	672	cal	BP	2,630	－	2,621	0.161	
				2 σ	cal	BC	801	－	cal	BC	749	cal	BP	2,750	－	2,698	0.687	
					cal	BC	687	－	cal	BC	666	cal	BP	2,636	－	2,615	0.163	
					cal	BC	642	－	cal	BC	590	cal	BP	2,591	－	2,539	0.127	
					cal	BC	579	－	cal	BC	562	cal	BP	2,528	－	2,511	0.023	

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
2) 測定年代・補正年代に付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の 68%が入る範囲）を年代値に換算した値。
3) 暦年計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を使用。
4) 暦年計算には補正年代値の括弧内に示した丸める前の値を使用している。
5) 統計的に真の値が入る確率はσは 68%、２σは 95% である．相対比は、σ、２σのそれぞれを１とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。



第 81 図　暦年較正結果

2　堆積物の植物珪酸体分析

（1）　試料

分析試料は第１地点の堆積断面から採取された以下の５点である。調査地点は段丘上緩斜面地に位置する。

試料１（Ⅳｂ層）：パミス混じり褐色土壌とその偽礫からなる。上部はやや土壌生成が進行しており，発掘調査により曽畑式土器（縄文前期）が出土する。本層は崩積性の堆積物の可能性があり，堆積後に土壌生成が進行する。

試料２（Ⅳａ層）:暗褐色腐植質土壌（褐色森林土？）。縄文時代晩期から弥生時代前期の突帯紋土器が出土する。樹木由来とみられる根成孔隙が比較的密に分布する。生物擾乱が著しく，土壌生成が進行している。

試料３（Ⅲ層）　：暗褐色腐植質土壌からなる。土壌生成が進行している。弥生時代前期～中期の遺物が出土する。上位層準からのびる根成孔隙が分布する。

試料４（Ⅱｂ層）：黒色腐植質土壌からなる。土壌生成が進行しており，著しく擾乱されている。古代の遺物が出土する。

試料５（Ⅱａ層）：黒色腐植質土壌からなる。基本的な層相は試料４と類似する。古代以降に形成されたと推定される。

（2）　分析方法

植物珪酸体の抽出と定量は，ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いる。試料を 105℃で 24 時間乾燥（絶乾），試料約１ｇに対し直径約 40 μｍのガラスビーズを約 0.02 ｇ添加(0.1mg の精度で秤量)，電気炉灰化法(550℃・６時間）による脱有機物処理，超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）による分散，沈底法による 20 μｍ以下の微粒子除去，封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成する。同定は，400 倍の偏光顕微鏡下で，おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行う。計数は，ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に，計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて，試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求める。

（3）　結果

植物珪酸体分析結果を第 27 表・第 82 図に示す。産出した植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。主要な分類群について顕微鏡写真を写真６に示す。

イネ科：イネ，キビ族型，ススキ属型（おもにススキ属），ウシクサ族

イネ科タケ亜科:メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節，ヤダケ属），ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節），チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など），ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など），マダケ属型（マダケ属，ホウライチク属），未分類等

イネ科その他：表皮毛起源，棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来），茎部起源，未分類等

樹木珪酸体：ブナ科（シイ属），クスノキ科，その他）

以上の植物珪酸体の層位的産状をみると，Ⅳｂ層～Ⅲ層ではクスノキ科・ブナ科に由来する樹木起源植物珪酸体の含量密度が高く，Ⅱｂ層・Ⅱａ層で低くなる。また，Ⅲ層より上位ではキビ族型。ススキ属を含むウシクサ族，キビ族，メダケ節などのササ類が増加する。また栽培種のイネがⅡｂ層・Ⅱａ層から産出するが，含量密度は高くない。

（4）　考察

今回のような土壌生成が進行している堆積物中の植物珪酸体群集は局地的な植生ないしその変遷を反映している可能性が高い。そのため，今回の結果が調査域の広い範囲の植生を反映しているかは空間的な分析調査の実施が必要である。ここでは，調査域の普遍的傾向を反映しているものと考え，縄文時代前期以降の植生変遷について検討する。

植物珪酸体の層位的産状は，調査地点の堆積層の層相変化と良く対応している。褐色森林土とみられる褐色腐植質土壌のⅣｂ・Ⅲ層から黒色腐植質土壌のⅡｂ・Ⅱａ層にかけて，樹木起源植物珪酸体が減少し，開けた場所に草地植生を形成するススキ属を含むウシクサ族や，ネザサ節・メダケ節型を含むタケ亜科が増加している。このことは調査区の植生が林地から草地へ変化したことを示唆している。すなわち，縄文時代晩期～弥生時代前期の頃はクスノキ科の樹木などが生育する褐色森林土の発達する林地であったが，弥生時代中期以降になり，何らかの理由により森林植生が衰退し，草地植生が卓越する開けた場所に変化し，黒ボク土が形成される環境に変化

していったと考えられる。この変化の原因としては，人間による植生撹乱があげられるが，地形変化などの影響も考慮する必要がある。いずれにせよ調査区周辺の森林植生は弥生時代中期頃を境に衰退していったと思われる。

古代以降になると，森林植生の衰退はさらに顕著となる。古代以降のⅡａ・Ⅱｂ層からは栽培種のイネが産出するようになる。当該期の調査区が耕作地として土地利用が行われていた，あるいは農業資材として稲藁が持ち込まれたなどの可能性が考えられる。Ⅱａ・Ⅱｂ層における土地利用状況については土壌微細形態学的検討による作土の可能性の検証を行い，複合的に評価する必要がある。

なお，崩積性堆積物の可能性があるⅣｂ層の植物珪酸体群集は，調査地点の植生を反映しているのではなく，再堆積する以前の場所の植生を反映している可能性が高い。ススキ属を含むウシクサ族などが少ないこともそのことに関係しているとみられ，Ⅳｂ層形成期以前の調査地点背後の台地やその斜面にはクスノキ科などの樹木からなる安定した森林植生が成立していたことが推定される。また，Ⅳａ層で増加するススキ属を含むウシクサ族については，Ⅳｂ層の堆積により，調査区一帯の植生が大きく破壊された後，先駆植生として分布したものに由来する可能性がある。

今回の結果では，縄文時代前期から古代までの植生変遷を推定したが，実際の植生変遷はもっと複雑であった可能性がある。例えば，Ⅲ層などのように長期にわたって土壌生成が進行している堆積物中の植物珪酸体群集は複数世代の植生の再生・更新を反映している可能性がある。この点も当時の植生を検討する上で考慮すべき事項であり，調査区周辺の谷底低地での花粉分析結果との複合化により，検討していきたい課題である。

引用文献

１　土器付着炭質物の放射性炭素年代測定

西本豊弘　編，2006，新弥生時代のはじまり　第１巻　弥生時代の新年代，雄山閣，143 p

西本豊弘　編，2007，新弥生時代のはじまり　第２巻　縄文時代から弥生時代へ，雄山閣，185 p

２　堆積物の植物珪酸体珪酸体分析

杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－考古学と自然科学，19，p 69 ～ 84

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史，第四紀研究，38（２），p 109 ～ 123

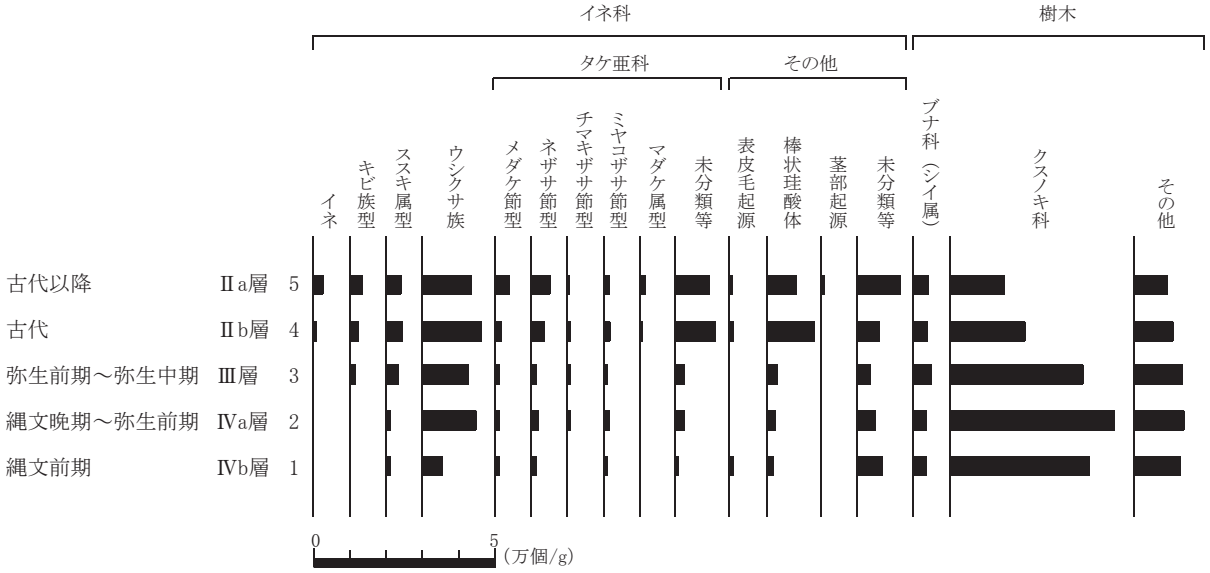
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－考古学と自然科学，９，p 15 ～ 29

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（５）－プラント・オパール分析による水田址の探査－考古学と自然科学，17，p 73 ～ 85

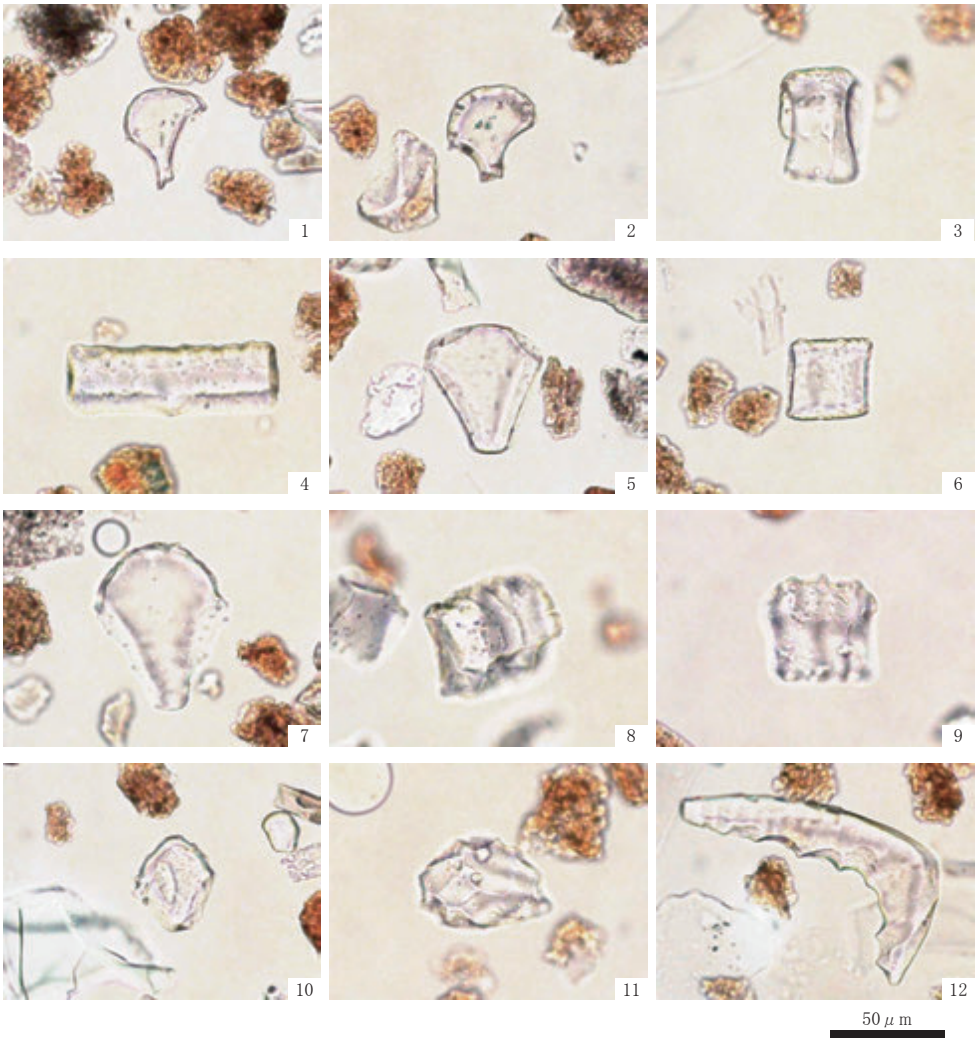
第 27 表　植物珪酸体分析結果

分類群	学名	試料番号				
		1	2	3	4	5
イネ科	Gramineae					
イネ	Oryza sativa	－	－	－	7	26
キビ族型	Paniceae type	－	－	13	21	32
ススキ属型	Miscanthus type	7	7	33	42	39
ウシクサ族	Andropogoneae type	53	148	126	161	135
タケ亜科	Bambusoideae					
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	7	7	7	14	39
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	13	20	13	35	52
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	－	7	7	7	6
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	7	13	7	14	13
マダケ属型	Phyllostachys	－	－	－	7	13
未分類等	Others	7	20	20	105	90
その他のイネ科	Others					
表皮毛起源	Husk hair origin	7	－	－	7	6
棒状珪酸体	Rodshaped	13	20	26	126	77
茎部起源	Stem origin	－	－	－	－	6
未分類等	Others	66	47	33	56	116
樹木起源	Arboreal					
ブナ科（シイ属）	Castanopsis	33	34	46	35	39
クスノキ科	Lauraceae	382	450	364	203	148
その他	Others	125	134	132	105	90
植物珪酸体総数	Total	717	906	828	940	902

数値は含量密度（100 個 /g）を示す。



第82図　植物珪酸体含量密度の層位分布



1. イネ（試料5）　2. イネ（試料5）　3. イネ（試料5）、4. キビ族型（試料5）　5. ススキ属型（試料5）
6. ウシクサ族（試料2）　7. メダケ節型（試料5）　8. ネザサ節型（試料5）　9. ネザサ節型(試料1)
10. マダケ属型(試料5)　11. ブナ科（シイ属（試料1）　12. クスノキ科（試料1）

写真６　植物珪酸体

第４節　遺構内埋土の出土炭化物における放射性炭素年代測定と種実同定

株式会社 古環境研究所

１　放射性炭素年代測定

はじめに

放射性炭素年代測定は，光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}Ｃ）の濃度が，放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体,骨,貝殻,土壌，土器付着炭化物などが測定対象となり，約５万年前までの年代測定が可能である。

（１） 試料と方法

次表 28 に，試料の採取箇所，種類，前処理・調整法および測定法を示す。

第 28 表　試料の採取箇所等

試料名	採取箇所	種類	前処理・調整	測定法
No.1	土坑７号	炭化米	酸 - アルカリ - 酸洗浄	AMS
No.5	竪穴住居跡１号（東西ベルト②層床直上付近）	炭化植物片	酸 - アルカリ - 酸洗浄	AMS

AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）
No.２～No.４・No.６～９については、調査第２地点のため、記載を省いている。

（２） 測定結果

加速器質量分析法（ＡＭＳ）によって得られた ^{14}Ｃ濃度について同位体分別効果の補正を行い，放射性炭素（^{14}Ｃ）年代および暦年代（較正年代）を算出した。次表 29 にこれらの結果を示す。

ア　未補正 ^{14}Ｃ年代

試料の ^{14}Ｃ／^{12}Ｃ比から，単純に現在（ＡＤ 1950 年）から何年前かを計算した値。^{14}Ｃの半減期は 5,730 年であるが，国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いている。

イ　δ（デルタ）^{13}Ｃ測定値

試料の測定 ^{14}Ｃ／^{12}Ｃ比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}Ｃ／^{12}Ｃ）。この値は標準物質（ＰＤＢ）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料のδ ^{13}Ｃ値を－ 25（‰）に標準化することで同位体分別効果を補正している。

ウ　^{14}Ｃ年代

δ ^{13}Ｃ測定値により同位体分別効果を補正して算出した年代。暦年代較正にはこの年代値を使用する。

エ　暦年代（Calendar Years）

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}Ｃ濃度の変動および ^{14}Ｃの半減期の違いを較正することで，より実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には，年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}Ｃ測定値およびサンゴのＵ／Th（ウラン／トリウム）年代と ^{14}Ｃ年代の比較により作成された較正曲線（IntCal 09）を使用した。

較正暦年代は，^{14}Ｃ年代値の偏差の幅を較正曲線に投した暦年代の幅で表し，ここでは２σ（シグマ）（95％確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では，複数の値が表記される場合もある。

（３） 所見

加速器質量分析法（ＡＭＳ）による放射性炭素年代測定の結果，No.１の炭化米では 50 ± 30 年ＢＰ（２σ暦年代でＡＤ 1700 ～ 1720，1820 ～ 1830，1880 ～ 1920，1950 ～年），No.５の炭化植物片では 2150 ± 30 年ＢＰ（ＢＣ 350 ～ 290，230 ～ 220，210 ～ 110 年），このうち，50 ± 30 年ＢＰの年代値が得られたNo.１の炭化米については，現在もしくは比較的最近の混入と考えられる。

第 29 表　放射性炭素（^{14}Ｃ）年代および暦年代（較正年代）測定結果

試料名	測定No.（Beta-）	未補正 14 Ｃ年代（年 BP）	δ 13 Ｃ（‰）	14 Ｃ年代（年 BP）	暦年代（較正年代）（２σ：95％確率）
No.１	340384	40 ± 30	-24.6	50 ± 30	Cal　AD 1700-1720，1820-1830，1880-1920，1950-
No.５	340388	2180 ± 30	-27.1	2150 ± 30	Cal　BC 350-290，230-220，210-110

BP:Before Physics(Present)，Cal:Calibrated，BC:紀元前，AD:西暦紀元

文献

Paula J Reimer et al，(2009) IntCal 09 and Marine 09　Radiocarbon Age Calibration Curves，0 － 50,000 Years cal　BP Radiocarbon，51，p 1111 ～ 1150

中村俊夫（2003）放射性炭素年代測定法と暦年代較正，環境考古学マニュアル，同成社，p 301 ～ 322

第 83 図　較正曲線

試料 No. 1

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-24.6:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-340384**

Conventional radiocarbon age: **50±30 BP**

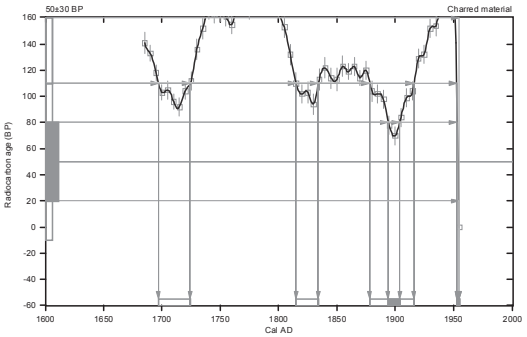
2 Sigma calibrated results[2]: (95% probability) **Cal AD 1700 to 1720 (Cal BP 250 to 230) and Cal AD 1820 to 1830 (Cal BP 140 to 120) and Cal AD 1880 to 1920 (Cal BP 70 to 30) and Cal AD Post 1950**

[2] 2 Sigma range being quoted is the maximum antiquity based on the minus 2 Sigma range

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal AD Post 1950

1 Sigma calibrated results: (68% probability) Cal AD 1890 to 1900 (Cal BP 60 to 50) and Cal AD Post 1950



References:

Database used
INTCAL09

References to INTCAL09 database
Heaton,et.al.,2009, Radiocarbon 51(4):1151-1164, Reimer,et.al, 2009, Radiocarbon 51(4):1111-1150, Stuiver,et.al,1993, Radiocarbon 35(1):1-244, Oeschger,et.al.,1975,Tellus 27:168-192

Mathematics used for calibration scenario
A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2):317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

試料 No. 5

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-27.1:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-340388**

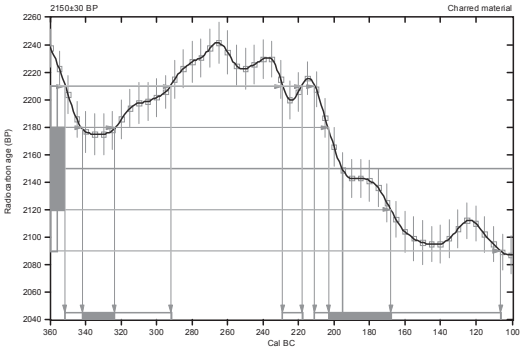
Conventional radiocarbon age: **2150±30 BP**

2 Sigma calibrated results: (95% probability) **Cal BC 350 to 290 (Cal BP 2300 to 2240) and Cal BC 230 to 220 (Cal BP 2180 to 2170) and Cal BC 210 to 110 (Cal BP 2160 to 2060)**

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 200 (Cal BP 2140)

1 Sigma calibrated results: (68% probability) Cal BC 340 to 320 (Cal BP 2290 to 2270) and Cal BC 200 to 170 (Cal BP 2150 to 2120)



References:

Database used
INTCAL09

References to INTCAL09 database
Heaton,et.al.,2009, Radiocarbon 51(4):1151-1164, Reimer,et.al, 2009, Radiocarbon 51(4):1111-1150, Stuiver,et.al,1993, Radiocarbon 35(1):1-244, Oeschger,et.al.,1975,Tellus 27:168-192

Mathematics used for calibration scenario
A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2):317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

BETA

Consistent Accuracy
Delivered On Time

Beta Analytic Inc
4985 SW 74 Court
Miami, Florida 33155
Tel: 305-667-5167
Fax: 305-663-0964
beta@radiocarbon.com
www.radiocarbon.com

Mr. Darden Hood
President

Mr. Ronald Hatfield
Mr. Christopher Patrick
Deputy Directors

The Radiocarbon Laboratory Accredited to ISO-17025 Testing Standards (PJLA Accreditation #59423)

Quality Assurance Report

This report provides the results of reference materials used to validate radiocarbon dating results on unknown materials, prior to reporting. Known age reference materials were analyzed as QA measurements to verify the accuracy of the results. These are analyzed in multiple detectors. This report quotes the results of the QA measurements.

Report Date: January 24, 2013
Submitter: Mr. Sumihisa Matsuyama

QA MEASUREMENTS

FIRI-I wood standard (international standard)

Expected value: 4490 +/- 40 BP
Measured value: 4500 +/- 40 BP
Agreement: accepted

Reference Sample

Expected age: 18340 +/- 180 BP
Measured age: 18360 +/- 70 BP
Agreement: accepted

Reference Sample

Expected age: 29330 +/- 300 BP
Measured age: 29300 +/- 170 BP
Agreement: accepted

Reference Sample

Expected age: 104.6 +/- 0.2 pMC
Measured age: 104.8 +/- 0.2 pMC
Agreement: accepted

COMMENT: All standards were within accepted ranges.

Validation: Darden Hood Date: January 24, 2013

２　遺構内出土の種実同定

はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く，堆積物や遺構内などに残存している場合がある。堆積物や遺構埋土などから種実を検出し，その種類や構成を調べることで，過去の植生や植物利用の実態を明らかにすることができる。

（１）　試料

試料は，土坑６号，土坑７号，土坑 10 号，竪穴住居跡１号（東西ベルト②層床直上付近）から採取された選別済みの種実類４式である。試料の詳細を第 30 表に示す。

（２）　方法

種実類について肉眼および双眼実体顕微鏡で観察し，形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科，属，種の階級で示した。

（３）　結果

ア　分類群

種実同定の結果，草本２分類群が同定された。分析結果を第 30 表に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載し，主要な分類群について写真を示す。なお，写真に示したものについては大きさ（長さ×幅㎜）を記載した。

〔草本〕

イネ　Oryza sativa L　炭化果実（完形・破片）イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し，胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。長さ×幅(㎜)：4.38 × 2.30（写真①）。

ササゲ属　Vigna　炭化子葉（半形）マメ科

黒色で楕円形を呈す。へそは縦に細長い。ササゲ属にはリョクトウ，アズキ，ササゲなどの栽培植物が含まれるが，現状の研究では識別は困難である。長さ×幅(㎜)：4.18 × 2.63（写真②・③）

他の植物片　other plant fragments

種実以外で部位の不明な植物由来の遺体。

イ　種実群集の特徴

（ア）　土坑６号

種実は認められなかった。

（イ）　土坑７号

イネ果実１，ササゲ属１が同定された。

（ウ）　土坑 10 号

種実は認められなかった。

（エ）　竪穴住居跡１号

（東西ベルト②層床直上付近）

種実は認められなかった。

（４）　所見

種実同定の結果，土坑７号ではイネ果実（炭化米），土坑７号ではササゲ属の炭化子葉が認められた。イネおよびササゲ属（リョクトウ，アズキ，ササゲなど）は栽培植物であり，弥生時代以降は比較的多く検出されている。

文献

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494 p

笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類，弥生文化の研究第２巻生業，雄山閣出版，p 131 ～ 139

佐藤敏也（1988）弥生のイネ，弥生文化の研究第２巻生業，雄山閣出版株式会社，p97 ～ 111

南木睦彦（1991）栽培植物，古墳時代の研究第４巻生産と流通Ⅰ，雄山閣出版株式会社，p 165?174

① イネ炭化果実（土坑７号･AMS試料）　② ササゲ属子葉半形（土坑７号）　③ 同左

1.0㎜

写真７　種実写真

第 30 表　永吉天神段遺跡における種実同定結果

No.	調査区	遺構名	分類群 学名	分類群 和名	部位	個数	洗浄土の重量(kg)	AMS 試料
1	調査区１	土坑６号	other plant fragments	他の植物片		0.96g	3.5	
2		土坑７号	Oryza sativa L.	イネ	炭化果実	1	13.7	○１点
			Vigna	ササゲ属	炭化子葉（半形）	1		
			other plant fragments	他の植物片		1.65g		
3		土坑 10 号	other plant fragments	他の植物片	（破片）	0.40g	15.7	
4	調査区１	竪穴住居跡１号（東西ベルト②層床直上付近）	other plant fragments	他の植物片		6.50g	9	○１点

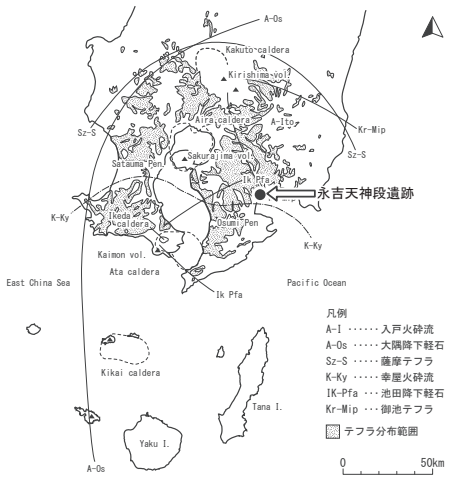
第６章　総括

第１節　縄文時代早期の液状化現象（噴砂跡）について

液状化に伴う噴砂跡は,第４章第１節で記したように,Ｖｃ層（幸屋軽石）以下のローム層の液状化に伴う噴砂と判断される幅約 15 ㎝の砂脈が貫き，Ｖａ層（アカホヤ火山灰）とＶｃ層の間にシラス（入戸火砕流）の二次堆積物が堆積をなしているものである。

砂脈は，主として細粒の軽石及び粗粒のガラス質の火山灰からなり，径が５㎝程度の白色・明灰色の軽石が見られた。軽石の摩耗から，入戸火砕流の二次堆積物と判断される。砂脈は，約 7,300 年前に鬼界カルデラから噴出したと考えられるＶａ層とＶｃ層の間に 20 ～ 30 ㎝の厚さで挟まれていた。Ｖｂ層(噴砂層)の直下のＶｃ層は，径 0.5 ㎜程度の淡黄色軽石などからなる厚さ５㎝（厚い部分では約 15 ㎝）の降下軽石層であり，上部には，径１㎝程度の火山豆石が多く含まれていた。Ｖｂ層の直上には，オレンジ色を呈した粗粒ガラス質火山灰Ｖａ層が厚さ約 10 ～ 30 ㎝にわたってのっている。

第５章第２節の自然科学分析（テフラ分析）においても発掘調査所見で示された内容と同様の分析結果報告を得ている。また井村隆介鹿児島大学准教授によると,「本遺跡の液状化に伴う噴砂跡は，鬼界カルデラの噴火に伴う可能性が高い。普通の地震の場合は，震度５以上で液状化が起こると考えられるが，巨大噴火に伴う断続的な地震についてはデータがなく直ちに震度５以上の揺れがあったとはいえないが，噴火当時，液状化を引き起こす揺れがあったと判断される。」また「種子島・屋久島地域での噴礫の発生は火砕流噴火の直前～同時期の１度だけであったが，薩摩・大隅半島南半部での噴砂は噴礫の発生と同時期だけでなく，鬼界アカホヤ火山灰の降下中にも発生した」（成尾・小林 2002）とも述べられている。



（中村・奥野・成尾1997一部改変）

第 84 図　南九州の火山灰と第四紀後期の主なテフラ

これらのことから,本遺跡の液状化現象（噴砂跡）は，約 7,300 年前の鬼界カルデラによる幸屋降下軽石の噴火に続いて起きた幸屋火砕流の噴火に伴う２回の地震によって引き起こされた可能性が高いと考える。また，遺跡周辺での液状化現象（噴砂跡）としては,「鹿児島県肝属郡の沖積平野に臨むシラス台地において，液状化の跡が数か所発見された。この液状化は，大半が二次シラス層から発生しており，断面幅十数㎝の砂脈状になって噴出している。二次シラスの液状化の形態は，上部は大半がアカホヤ下面もしくは内部に達しているが，アカホヤ下位のローム層で停止したものもある。」（岡林･安福･兵動・成尾 1996）と報告されている。それを裏付けるように，近年の発掘調査においても，鹿屋市串良町細山田の川久保遺跡，大崎町仮宿の荒園遺跡，大崎町井俣の平良上Ｃ遺跡などシラス台地の縁辺部でも河川に近い低地部において，液状化に伴う噴砂跡が確認されている。いずれの遺跡も，幸屋降下軽石の直上に二次シラスの堆積層が見られ，鬼界カルデラの噴火に伴う地震による液状化現象の可能性が高いと判断される。

近年の発掘調査で蓄積される資料からは，壺形土器や土製耳飾り，土偶などが出現した南九州の縄文時代早期後半の成熟した物質文化が鬼界カルデラの噴火によって突如として途切れた。また,土器形態からも噴火以前は，押型文土器など外来系土器の伝播はあったものの基本的には，南九州特有の円筒形土器文化を踏襲していた。それが，鬼界カルデラ噴火後の縄文時代前期には，轟式土器や曽畑式土器など北部九州に起源をもつ土器型式が展開されるようになった。液状化現象は，年代が明確に押さえることから，鬼界カルデラの噴火が南九州の縄文時代早期の文化・自然に与えた影響は，噴火による火砕流や火山灰だけでなく，噴火に伴う地震や液状化現象によるものも考慮に入れなければならない。また，東日本大地震以来，南海トラフに伴う地震（震度６）も想定されており，遺跡の状況から周辺地域の低地では地震に伴う液状化現象がおこる可能性がある。今後の地震に対する防災・減災を検討する上でも，発掘調査で得られるデータの蓄積も必要と考える。

第２節　縄文時代前期の土器について

本遺跡の当該時期の土器は，出土量こそ多くないものの曽畑式土器後半段階から縄文時代前期末～中期初頭の深浦式土器成立段階を考える上で重要な資料群である。曽畑式土器は，一般に全面施文を行うものが多いのに対し，４は施文が口縁部周辺に集約されている。その口縁部文様も縦位区画を先行する形で割り付けをし，その後

横位区画を行っており，南九州地方の典型的な曽畑式土器とはやや一線を画している。しかし口縁部内面に横位沈線が巡り，外面は胴部下半から横位の貝殻条痕調整が残る点などは，粗雑化が進む曽畑式土器の後半段階にあたるⅤ期～Ⅵ期（堂込 2008）に類似する点もある。また，横位区画された沈線間に各一条の巻貝殻頂部の押圧による円形刺突を施文する点は，日置市東市来町市ノ原遺跡で出土した 17- Ｃ類土器の一部に類例を見つけることができる。いずれにせよ縦位区画により割付けを行う点や，間隔の開いた横位区画を行いその区画内に刺突文を施す点などは，その後の深浦式土器日木山段階（相美 2008）の文様モチーフに近似し，曽畑式土器の後半段階でも終末の時期に該当すると考えられる。

５は，先述の市ノ原遺跡出土の 17- Ｃ類土器の一部にあたる轟Ｄ式土器（水ノ江 1990）に比定されるものと同一と考えられる。従来轟Ｄ式土器の分布の中心は中九州地方とされてきた。しかし，本遺跡出土資料も含め，南九州地方での出土例も増加しており，近年では南九州地方においても在地の曽畑式土器から轟Ｄ式土器が成立したとする見解もある（堂込 2013）。その編年観で本遺跡出土の該当資料を見た場合，曽畑式土器にみられる口縁部刺突が縦位区画として残存し，内外面の横位短沈線は轟Ｄ式土器に多く見られる２本単位の沈線に繋がる要素と考えられる。地紋として条線が施されている点も轟Ｄ式土器の特徴して挙げることができる。

７～ 16・18 はいわゆる縄文時代前期末～中期前葉の時期に比定されている条痕文土器（相美 2006）である。口唇部刺突や貝殻による条痕調整後に、斜格子状条痕を施す点では，縄文時代早期末の轟Ａ式土器（苗畑 2008）に類似する点も多く，特に８～ 11 の個体は実測図上では，轟Ａ式土器と弁別することが困難な部分が多い。ただし，轟Ａ式土器の多くが口唇部外面より刻目を入れるのに対して，本遺跡出土資料は口唇部上方より刺突や刻目を入れている点で大きく異なっている。

また，斜格子状条痕が浅い点や器壁がやや薄い点なども轟Ａ式土器と異なる部分である。これまで轟式土器や轟系土器として報告されてきた条痕文土器は，屋久島町一湊松山遺跡において，曽畑式土器～深浦式土器と複数の層にわたって伴出していることなどからも，轟Ａ式土器と異なり，縄文時代前期後葉から中期前葉の時期に位置づけることが妥当である。条痕文土器の近隣の類例として，鹿屋市中ノ原遺跡出土の第Ⅱ類土器が挙げられる（相美伊久雄氏御教示）。

17 は条痕文土器と条痕調整や胎土・色調・焼成などから近似性が伺えるが，やや丸みをおびた三角突帯が貼り付けられている点が特徴的である。南九州地方出土の轟Ｂ式土器にみられる突帯や，曽畑式土器に後続する深浦式土器日木山段階や，石峰段階の突帯とも形状が異なっている。深浦式土器に比べ，突帯がやや太めである点や粘土紐を貼り付ける際のナデ付けが丁寧である点が異なっている。突帯に刻目があるという点では異なるものの，突帯の形状や貼り付け方で類似する資料として伊佐市瀬ノ上遺跡出土Ⅳ類土器が挙げられる（相美氏御教示）。瀬ノ上遺跡Ⅴ類土器はこれまでも多くの論考で曽畑式土器後半段階に位置付けられており（堂込 2008 など），瀬ノ上遺跡Ⅴ類土器と型式学的に類似する瀬ノ上遺跡Ⅳ類土器を介して，本遺跡出土の 17 も同様の曽畑式土器後半段階の時期と考えることができる。

また，本遺跡出土の前期該当土器には型式学的近親性を示す要素がいくつかある。その１つが類似した施文具による土器外面への円形刺突である。これは４～６・12～ 14 の個体に共通する。

次に，４・５・６では沈線と刺突の違いはあるものの，口縁部～胴部上半における縦位区画が見られる点が共通する。特に４の鈎状沈線と弧状沈線による縦位区画のモチーフは，17 の弧状の浅い沈線によるモチーフとも類似している。このような個体間の近親性は共時性を示す要素として考えられる。

条痕文土器に関しては，本遺跡から深浦式土器が出土していないことや，他の前期該当土器と出土位置が近いことから，条痕文土器単独の時期を想定するよりは，他の曽畑式土器後半段階の一群と伴出としたと考える方が妥当であろう。

このように本遺跡出土の前期該当土器は，曽畑式土器後半段階でも深浦式土器成立に近い前期末段階に比定できよう。

第３節　縄文時代後期の土器について

１　位置づけ

後期初頭，前半，後半に該当すると考えられる土器が出土し，文様や調整から次のような観点で分類した。

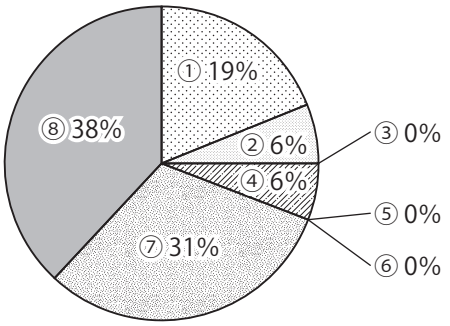
19 ～ 21 は口縁部を若干肥厚させ，やや太めの凹線を施すことから後期初頭の土器と考えられる。22 ～ 48 は口唇部が平坦で，口唇部に斜めに刻目を入れており，文様も単純化され，凹線幅も狭くなる傾向があることから，前半の土器と考えられる。65 ～ 68 は口縁端部近くでわずかに外反し，沈線を施し，胴部が屈曲し沈線があるために後半の土器と考えられる。

２　網代底について

網代底は，本来腐敗して現在まで残る可能性が少ない当時の編み物の情報を得られる数少ない資料である。そこで，数は少ないが本遺跡の網代底の分類を試みた。７分類の他に，付着している白色土の有無も記載した。「県内では網代編みともじり編みでは，平編みが圧倒的に多く，また，それ以外の網代編みを加えると，網代編みが全体の 77％を占め，次に網代編みともじり編みを併用

したものが多い。また，薩摩半島では指宿式土器，大隅半島では岩崎式土器の時期（後期前半）が多い。」（富山2007）とされる。本遺跡でも，平編みが多く，判別できたものはすべて網代編みとなっている。時期も，後期前半と考えられる土器で，県下の傾向と変化はない。

底面の白色土の付着については，全体の52%となっている。粘土質のものであり，土器全体に見られないことや網代底のみに付着していることが分かる。



第85図　底部編み方圧痕類別

第31表　編み方分類

①	平編み（網代編み　1本越1本潜り1本送り）
②	綾編み（網代編み　①以外の単位）
③	平編みと綾編みの組み合わせ
④	①～③以外で単位の分からない網代編み
⑤	もじり編み
⑥	網代編みともじり編みの併用
⑦	編み方不明
⑧	無

第32表　永吉天神段遺跡網代底一覧

掲載番号	編み方	白色土
48	⑧	無
49	⑦	無
50	⑧	無
51	①	無
52	⑧	無
53	④（ナデ消し）	有
54	①（置き換え）	有
55	⑦	有
56	⑦	有
57	④（ナデ消し）	有
58	①	有
59	②（可能性有り）	有
60	⑦（ナデ消し）	無
61	⑧	無
62	⑧	無
63	⑧（ナデ）	有
64	⑦	有

第４節　縄文時代晩期の土器について

縄文時代晩期の土器は，調査区G -58･59区を中心に，地形の傾斜に沿い調査区の北側と東側に出土している。ここでは，掲載土器の分類について述べたい。

１　深鉢

無文のものと刻目突帯を施すものに分かれる。無文のものは，口縁部がわずかに肥厚するものとしないもの，直行，内弯し，胴部屈曲が明瞭でないものが多い。また，口径が胴径を上回らないものが多い。波状口縁となるものも見られる。これらの特徴から，黒川式土器の新様式（堂込1997），干河原段階（東2002，2009）と指摘しているものである。いわゆる刻目突帯文土器は，屈曲型胴部２条甕と屈曲型胴部突帯甕が見られ，突帯文期のⅡ期（藤尾1993）に該当する。

２　組織痕土器

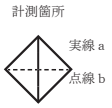
組織痕土器の型離れ材として使用している敷物は，編布と網であった。以下は，その観察結果である。観察については，「渡辺2005」を参考に行った。肉眼観察で，計測値の間隔は，糸の中心間の距離で計測している。

器形は鍋状の鉢形土器であり，内外面にスス・コゲの付着しているものが多いことから，煮炊き具として使用された可能性が高い。117は口径54㎝・器高16㎝，118は口径40㎝・器高13.8㎝，119は口縁部が欠損しているため推測値だが，口径約26㎝･器高14㎝である。口径の大小によって，器高の差はないことが分かる。

また，大・中・小と揃っており，全体的に底面が摩滅を受けている印象がある。119は底部近くに，器壁の厚さが1.2㎝の瘤状の膨らみが４か所あるという特徴がある。瘤状の膨らみの用途は，不明である。ただし，接地面よりも若干高い位置にあり，地面等に置いたときには，不安定であるので，煮炊き時に土器を安定させる用途以外を考える必要がある。

第33表　網目圧痕一覧表

掲載番号	出土区	層	部位	サイズ（㎜）	
				a	b
119	F～H -58・59	Ⅲ～Ⅳ	胴部～底部	7	6
130 ～ 137	F ～ G-59 ～ 60	Ⅲ～Ⅳ	胴部～底部	10	5
138	G -59・６０	Ⅳ	胴	4	3



第34表　編布圧痕一覧表

掲載番号	出土区	層	部位	経糸（縦）		緯糸（横）	
				間隔（㎜）	密度（本／cm）	間隔（㎜）	密度（本／cm）
117	F ～ J-58・59	Ⅲ～Ⅳ	完形	7	1	0.7	14
118	F ～ J-58・60	Ⅲ～Ⅳ	完形	8	1	1	10
120 ～ 123	F-58・59	Ⅲ・Ⅳ	口縁部・胴部	5	2	1	10
124 ～ 129	F-58・59	Ⅲ・Ⅳ	口縁部・胴部	15	1	2	5
139・140	G-58・59	Ⅳ		6	2	1.5	6～8
141	D-48	Ⅱ	胴	2.1	1	1.4	7
142	G-60	Ⅱ	胴	6	2～3	1.2	8
143	G-58	Ⅱ	胴	6	2	1.5	6～8
144	G-59	Ⅳ	口縁～胴部	1	2	2.5	3～4
145・146	F・G-58・59	Ⅲ・ⅣⅣ	底部	5	2	1.2	8
147・148	G・H-58	Ⅳ	底部	7	2	1.2	8

３　浅鉢

浅鉢は器面が研磨されている精製土器が多数を占める。149と150は，口縁部が短く立ち上がり沈線を施し，口唇部を玉縁状に仕上げており，古い様相を呈するものである。

その他の土器は，口縁部が外反，直行するもので，口縁部と胴部の間で屈曲するもの，151・156のように口径が胴径を上回らないものもある。口縁部・胴部に沈線や

丹塗り・刻目突帯を施すものがある。器形から黒川式土器の新様式（堂込 1997）と思われる。突帯文系土器Ⅰｂ期（宮地 2008 ｂ），上水流遺跡Ｃ８類としているもので，「刻目突帯文土器とともに出土することが多い資料」（上水流遺跡 2007）と報告されている。三叉文は見られないが，175 は三叉文を意識したものかもしれない。

４　壺形土器

東和幸氏が茶家形土器（東 2009）としているもので，三叉文が見られる。特質すべきは，197 である。把手が付き，外面にタタキ痕・内面に当て具痕が見られるもので，器形や成形技法から，朝鮮系無文土器の影響を受けている可能性もある。なお，調整が条痕とナデと考えれば，縄文系土器と考えられ，北部九州の影響等を受け，在地で変容したものとも考えられる。

５　まとめ

Ｇ -58・59 区の竪穴住居跡 1 号を中心に遺物が集中して，傾斜面に沿い広がることから，この地に人々が定住していた可能性がある。当該時期の集落構成は，類例が少なく不明であるが，小単位で集落を構成していたのではないだろうか。土器は黒川式土器の新段階（干河原段階含）が中心である。本文で述べたように，包含層出土の土器として記載したが，第 24 図より黒川式土器（干河原段階含）・刻目突帯文土器と組織痕土器の一部が竪穴住居跡１号内から出土していることから，共伴する可能性もある。

また，土器の組成は鹿屋市吾平町の中尾遺跡に近いが，「中尾遺跡から出土している小型の茶家形土器は黒川式土器にその先駆的な様相が見られるもので，曽於市末吉町上中段遺跡など刻目突帯文土器の時期には姿を消している。～（省略）干河原段階の土器と刻目突帯文土器との差は大きく，あと一段階か二段階の土器群が入る可能性がある。」（東 2009）と述べていることから，縄文時代晩期から弥生時代をつなぐ間に入る時期のものか，南九州では，黒川式新様式や干河原段階，組織痕土器，刻目突帯文土器が明確に分かれるのでなく，ある程度の時期幅で，共伴する可能性がある。今後，遺構内出土の類例の増加を期待したい。

なお 197 は，仮に朝鮮系無文土器の影響を受けたのであれば，朝鮮半島南部の無文土器時代の前期～中期に位置する可能性があり（武末純一福岡大学教授御教示），黒川式土器～山ノ寺・夜臼式の時期に重なる。直接・間接は不明であるが，従来考えられていたよりも早い時期から，朝鮮半島の影響を南九州でも受けていた可能性がある。県内では，南さつま市金峰町下堀遺跡から朝鮮系無文土器の磨研の壺が出土している。

第５節　弥生時代について

甕形土器の形式学的な方向性は，

①　口縁部が短いものから長いものへ
②　垂れ下がるものから逆Ｌ字状を経て「く」の字状へ
③　口唇部が丸みを帯びるものから凹線を施すものへ

を基本とする。また内面が突出することも，中期中葉頃から中期後半へかけての特徴である。292 は口縁部に低い三角突帯があり，巻貝押圧から前期の高橋式土器に比定される。前期に関する遺物は１点のみである。293 ～ 298 は口縁部が短く，垂れ下がるか逆Ｌ字状を呈しており，入来Ⅱ式土器に比定される。294 は胴部に鋸歯状沈線などが施され，古手の可能性が高い。299 ～ 303・305 は口縁部が長く，逆Ｌ字状を呈しており，山ノ口Ⅰ式土器に比定される。304 は口縁部上面が凹み，内側が突出していることから，熊本県を中心とする九州西海岸に多く出土する黒髪式土器と比定される。肉眼観察での色調・胎土から，在地で生産されたものでなく，搬入品である。305･306 は山ノ口式土器だが，内側が突出することから，黒髪式土器の影響を受けている。306 ～ 315 は口縁部が逆Ｌ字状で，水平または内側がわずかに下がるもので，山ノ口Ⅱ式土器に比定される。316 は後期～終末の土器で，松木薗式土器または中津野式土器に比定される。

胴部から脚台については，その器形から山ノ口Ⅱ式土器に比定されるが，319 は沈線を施すことから古い様相を残している。

壺形土器は前期末から中期にかけての形式学的な方向性は，

①　肩部に沈線を施すものから施さないものへ
②　口縁部に刻目を施すものから施さないものへ
③　肥厚するものから垂れ下がるものへ
④　さらに貼り付けて口縁外縁を強調するものへ
⑤　肥厚がなくなるものへ

などいくつか見られる。329 ～ 336 は山ノ口式土器に比定されるが，329 は口縁部に刻目を施すことから古い様相が見られる。胴部や大型甕形土器・蓋は小片のため，型式は不明だが，概ね同時期のものと推測される。

当該時期の遺構は１基で遺物量も少ないことから，定住生活の場とは考えにくい。第１地点と比高差 20 ｍの台地の縁辺部である第２地点からは，竪穴住居跡・周溝状遺構など多数の遺構が検出されている。多量の遺物も出土していることから，第１地点の遺物の多くは，流れ込みと考えられる。南九州の編年で，入来Ⅱ式土器から山ノ口式Ⅱ式土器が出土していることから，第２地点の竪穴住居跡の遺物を細分することにより，並行関係が分かってくると考える。今後の課題である。

第６節　古墳時代について

遺構は検出されなかった。遺物の数は少ないが，成川式土器が出土している。小破片が多いため明確な時期は不明だが，甕形土器口縁部の外反度から，東原式土器か

ら辻堂原式土器の時期と推測される。第２地点からも，概ねこの時期の遺構・遺物が発見されている。

特筆すべき遺物として，布留系土師器甕が出土しており，胎土の肉眼観察から搬入品である。360 も布留系土師器甕だが，胎土は在地のものであることから，模倣品である。また，２個体であるが，須恵器の甕も出土している。陶邑窯産のものと考えられる。

第７節　古代について

古代の大隅国は鹿児島湾奥を中心として活動し，その周辺については国境・郡鏡など不明な点が少なくない。大崎周辺についても日向国に属していた可能性が強いとされているものの，国境等は不明である。考古資料においても，鹿児島湾奥とともに都城平野周辺については東九州自動車道建設に伴う調査によって，いくらかは分かってきたが，大隅半島中・南部については，いまだに不明な点が多いのが現状である。そうした中で，今回の調査ではいくつかの興味ある資料が得られた。ここでは，その２～３点について，考察を加えながら報告したい。

今回確認できた遺構は，掘立柱建物跡６棟・土坑７基などである。掘立柱建物跡は，２×３間の規模をもち，うち１棟は総柱建物である。主軸方向は３方向あり，２号・３号のように切り合っているものがあることから，時期差を示している可能性がある。また，柱間に規則性はないが，２号・４号は 1.8 ｍを基準としており，時期的には古い可能性がある。軸から考え，３時期と考えられる。１号，２・５号，３・４・６号の組み合わせである。柱穴の切り合いがないために，順序については不明であるが，出土している遺物から，それほど時期差のない建物群であろう。なお６～８号溝状遺構の状況から，調査区東側の一段低い部分に集落が広がるか，２・５号掘立柱建物跡から南側の平坦地に広がる可能性が高い。

次に，出土遺物から集落の時期について松田朝由氏の分類（松田 2004）を参考に検討したい。土師器の坏は，多くが丸みを帯びており，底から外へ開きながらまっすぐ伸びる器形をしており，充実高台のものも見られることから，坏５・６類としているのものが中心である。

甕は頸部から口縁部までの長さが短く，口縁部が外反し，内外面の口縁部をヘラ横方向にナデ整形し，胴部内面はヘラケズリによって薄く整形するのが特徴である。また，外面胴部下にタタキ痕を有するものも見られる。甕５類や甕８・９類に近いと判断される。なお，「タタキ痕のあるものは出土例が少ない。」とされており（上床・吉元 2012），同様の甕は都城市中尾下遺跡でも類例が見られ，「9 世紀第２四半期以降に相当する。」（近沢 2010）とされている。皿は，大皿があるものの小皿はなく，埦・鉢は少ない。須恵器も数は少ないが，坏は低い坏部に高台が付くタイプである。黒色土器は埦が多く，口縁部はまっすぐ伸び，端部は丸みを帯びている。外面はヘラナデで，内面は丁寧なヘラミガキである。埦１・２類と類似する。さらに，黒色土器や赤色土器の中には，色を二重に重ねた彩色の工夫をしたものがある。また，出土した遺物の中には，墨書土器・ヘラ描き土器・須恵器の小壺・焼塩土器・紡錘車・提砥・鉄製品など特殊なものも含まれている。墨書土器はともに字が解読できなかったが，３つの字が書かれている。ヘラ描き土器も記号と思われる。須恵器の小壺は水滴とも考えられ，鉄製刀子・提砥も併せて，識字層の居住する集落だった可能性が高い。また，フイゴの羽口・鉄滓の出土は小鍛冶のできる集落であることを示しており，多くの焼塩土器の出土は，豊富な食生活や特殊な階級層の存在を想定できる。

以上のことから，本遺跡の当該時期の遺物はⅡ及びⅢ期（松田 2004）で，９世紀から 10 世紀前半頃の短期間の時期のものと考えられる。

次にこの時期になぜ，これらの遺物をもつ集落が形成されたのたのか，周辺遺跡を含めて考察したい。

当該時期の同様な遺構・遺物がある遺跡として，本遺跡から直線距離で約８㎞の曽於郡大崎町野方の天神段遺跡や約 14 ㎞の鹿屋市輝北町下百引の新田遺跡がある。両遺跡とも，古代～中世の遺構・遺物が発見されているが，特に，中世遺跡としての評価が高い。天神段遺跡は，鹿屋・輝北・都城・志布志を結ぶ交通の要衝として，人や物の往来があったことを想定され，古代では「日向国の救仁郷に属し，大隅国の境界に位置しており，（略）古代駅路等，日向国を含めた広域で捉えていく必要があると言えよう。」（深川 2015）とされている。また，新田遺跡も，大隅半島では随一の中世遺跡として評価され，「鹿屋街道・大隅街道の筋にあたり，昔から交通の要衝であり，歴史的素地形成に適していたと言えよう。」（前田 2005）と報告されている。古代の掘立柱建物跡５棟があり，柱穴の径や深さが中世のものと比較して規模が大きいと報告されている。

本遺跡も，第２地点において，中世の集落跡や屋敷墓と考えられる土坑墓等が検出されており，両遺跡の古代・中世で発見されている遺構・遺物と共通性が高い。また，「古代の全盛期と考えられる９世紀後半は，在地権力者の積極的な土地開発に伴い，交通路や河川に沿った要衝の地に数多くの集落が営まれたことが推測されている。」（深野 2014）とある。

以上のことから，本遺跡の古代の集落も，交通の要衝地の１つとして，水滴や焼塩土器・鉄製品など特殊なものを持つ識字層が居住したと考えられ，中世へ至るものと考えられる。

＜参考＞

整理作業・報告書作成作業の結果，各時代の土器点数を記載する。石器については本文中に記載してある。

※（　）内は掲載点数を示す。

○総点数　6,716 点（426 点）

○縄文時代早期　点数３点（３点）

○縄文時代前期　点数 95 点（11 点）

○縄文時代後期　点数 209 点（50 点）

○縄文時代晩期　点数 1,080 点（123 点）

深鉢 769 点（32 点），突帯文 27 点（17 点），浅鉢 174 点（27 点），丹塗 26 点（８点），マリ 23 点（４点），鉢 10 点（10 点），組織痕 40 点（14 点），壺８点（８点），土製品３点（３点）

○弥生時代　点数 824 点（55 点）

甕 803 点（39 点），壺 24 点（15 点），蓋１点（１点）

○古墳時代　点数 315 点（45 点）

甕 226 点（20 点），壺 12 点（７点），小型壺７（３点），高坏１点（１点），鉢２点（２点），須恵器 67 点（13 点）

○古代　点数 3,728 点（140 点）

土師器甕 2,534 点（24 点），土師器坏類 1,028 点（60 点），内黒土師器 63 点（７点），内赤土師器 15 点（３点），焼塩土器 34 点（26 点），似非土師器 10 点（７点），須恵器甕 38 点（７点），須恵器壺２点（２点），須恵器坏４点（４点）

○中世　点数２点（２点）

○時代不明　点数 463 点

引用・参考文献

上床真・吉元輝幸 2012『北麓原Ｄ遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（168）

岡林巧・安福規之・兵動正幸・成尾英仁 1996「液状化した二次しらすの非排水せん断特性」土木学会西部支部

黒川忠広 2007b「鹿児島県下の三叉文施文土器について」『南九州縄文通信』No.18 南九州縄文研究会

栗畑光博 2008「轟式土器」『総覧　縄文土器』アム・プロポーション

相美伊久雄 2006「条痕文土器と縄文施文土器」大河８号

近沢恒典 2010『中尾下遺跡』都城市文化財調査報告書第 98 集

堂込秀人 1997「南九州縄文晩期土器の再検討－入佐式と黒川式の細分－」『鹿児島考古』第 31 号 鹿児島県考古学会

堂込秀人 2008「曽畑式土器」『総覧　縄文土器』アム･プロポーション

堂込秀人 2013「曽畑式土器の展開～轟Ｄ式土器の祖型式の設定～」『鹿児島考古』第 43 号　鹿児島県考古学会

富山孝一 2007「底部編物圧痕について」『上水流遺跡１』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（113）

中村俊夫・奥野充・成尾英仁 1997「火山噴火の年代測定法～特に加速器質量分析（ＡＭＳ）法による 14Ｃ年代測定について～」『月刊地球』総特集南九州の火山噴火と遺跡年代　海洋出版株式会社

成尾英仁・小林哲夫 2002「鬼界カルデラ，6.5KaBP 噴火に誘発された２度の巨大地震」『第四紀研究』東京大学出版会

町田洋・荒井房夫 2003「新篇火山灰アトラス」東京大学出版

野間口勇 2007a「本県における干河原段階の現状について」『上水流遺跡１』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（113）

東和幸 2002「縄文時代晩期土器について」『計志加里遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（38）

東和幸 2009「干河原段階の土器」『南九州縄文通信 No.20 南の縄文・地域文化論考』新東晃一代表還暦記念論文集上巻　南九州縄文研究会

深川祐子 2015『天神段遺跡』（公財）鹿児島県埋蔵文化財調査センター報告書（３）

深野信之 2014「考古学からみた古代大隅国」『古代文化』第 66 巻第２号　公益財団法人古代学協会

藤尾慎一郎 1993「南九州の突帯文土器」『鹿児島考古』第 27 号　鹿児島県考古学会

前田和信 2005『新田遺跡・吉元遺跡』輝北町埋蔵文化財発掘調査報告書（２）

松田朝由 2004「土器の製作技術と土器様相」『九養岡遺跡・踊場遺跡・高篠遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（71）

水ノ江和同 1990「西北九州の曽畑式土器」『伊木力遺跡』同志社大学文学部考古学調査報告７

宮地総一郎 2008a「黒色磨研土器」

宮地総一郎 2008b「凸帯文系土器(九州地方)」『総覧　縄文土器』アム・プロポーション

渡辺誠 2005「下柊迫遺跡出土の組織痕土器について」『下柊迫遺跡』高尾野町教育委員会埋蔵文化財調査報告書（4）

参考報告書

鹿児島県教育委員会・鹿児島県立埋蔵文化財センター
NO48『榎田下・中ノ丸・川ノ上・中ノ原遺跡』1988
NO19『一湊松山遺跡』1996　NO87『中尾遺跡』2005
NO140『市ノ原遺跡（第３地点）』2009

大口市教育委員会 1986『瀬ノ上・平田遺跡』大口市埋蔵文化財発掘調査報告書（5）

※調査成果・総括をまとめるにあたり，以下の方々にご指導いただいた。感謝申し上げます。

福岡大学	武末　純一　教授
志布志市教育委員会	相美　伊久雄　氏
徳島大学	端野　晋平　准教授
	三阪　一徳　助教
	脇山　佳奈　特任助教
福岡県教育庁	宮地　聡一郎　氏

（順不同）

写　真　図　版

図版1　東半部全景・遺物出土状況

全景（北西から）

遺物出土状況（北東から）

図版2　西半部全景・遺物出土状況

全景（西から）

遺物出土状況（南西から）

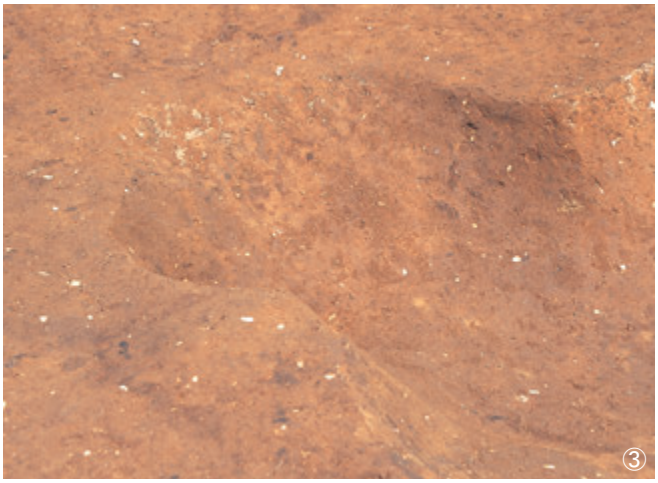
図版３　液状化現象・縄文時代の土器出土状況

①下層確認トレンチ１（南西から）　②下層確認トレンチ５（北から）　③下層確認トレンチ２（南東から）
④・⑤縄文時代前期の土器　⑥・⑦縄文時代晩期の突帯文土器

図版4　縄文時代晩期の竪穴住居跡

①完掘（南から）　②土層（南から）　③検出状況（西から）　④遺物出土状況（南から）

図版５　縄文・弥生時代の土坑と古代の溝状遺構



①縄文時代晩期の土坑２号（北西から）　②縄文時代晩期の土坑２号（北西から）　③縄文時代晩期の土坑１号（南から）
④弥生時代の土坑１号（北から）　⑤溝状遺構２・３号（北東から）　⑥溝状遺構４号断面　⑦溝状遺構１～５号（南西から）
⑧溝状遺構６号断面

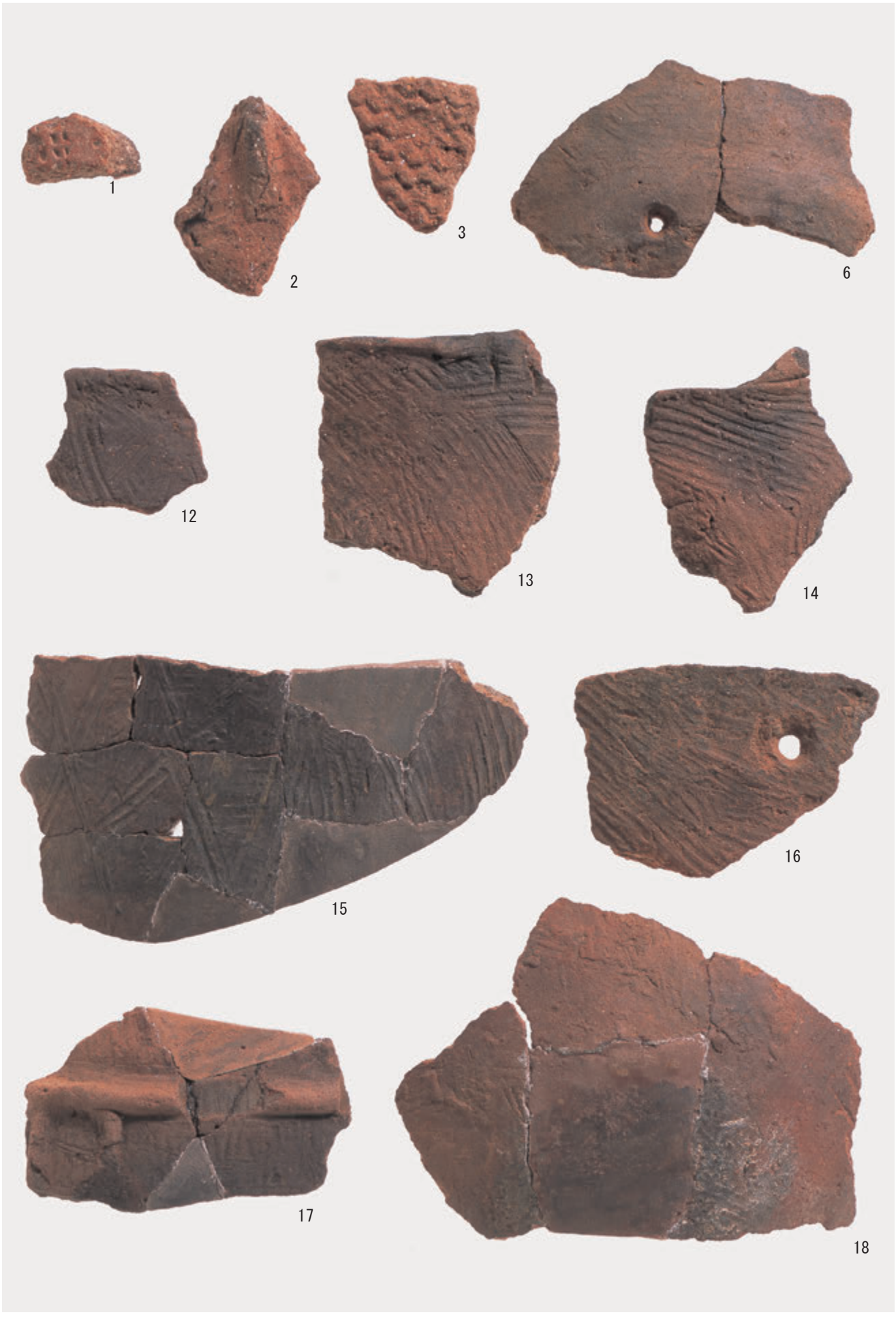
図版６　古代の掘立柱建物跡

①１号検出状況（南から）　②１号完掘状況（南から）　③２号検出状況（北から）　④２号完掘状況（北から）
⑤３号完掘状況（北西から）　⑥４号完掘状況（南から）　⑦５号完掘状況（北西から）　⑧６号完掘状況（北東から）

図版7　古代の土坑・紡錘車出土状況

①～⑦古代の土坑　①３号（南東から）　②５号（南西から）　③６号（北東から）　④８～ 10 号（北から）
⑤９・10 号（東から）　⑥９号（北から）　⑦ 10 号（南東から）　⑧紡錘車出土状況（G 60 区）

図版８　縄文時代早期・前期の土器

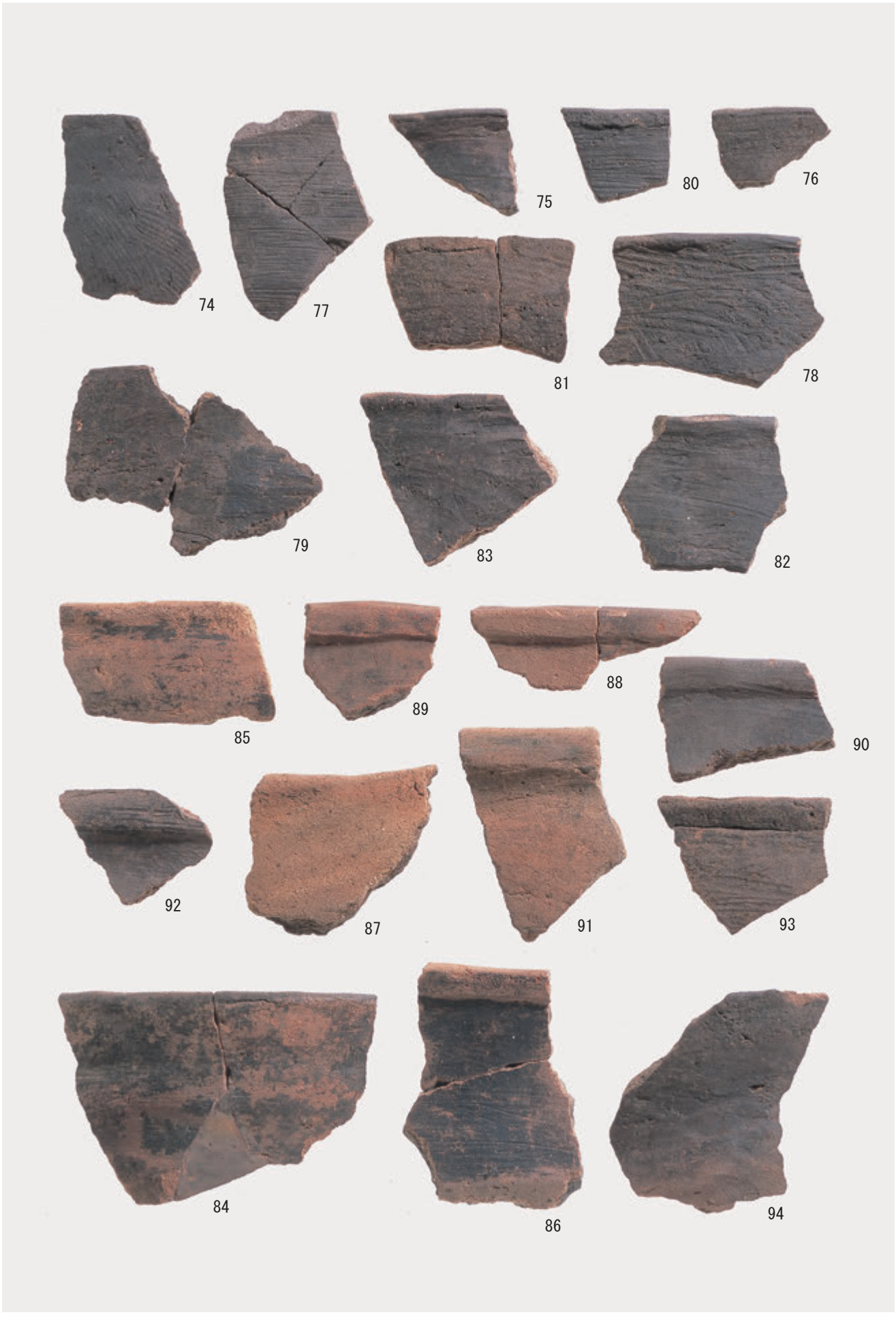


図版９　縄文時代前期の土器

図版10　縄文時代後期の土器（1）

47
48
49
50
56
54
55
51
52
59
64
57
60
63
61
53
58
65
66
62
68
67

図版12　縄文時代晩期の土器（1）


74
77
75
80
76
81
78
79
83
82
85
89
88
90
92
87
91
93
84
86
94

図版14　縄文時代晩期の土器（3）

117

117

図版16　縄文時代晩期の土器（5）

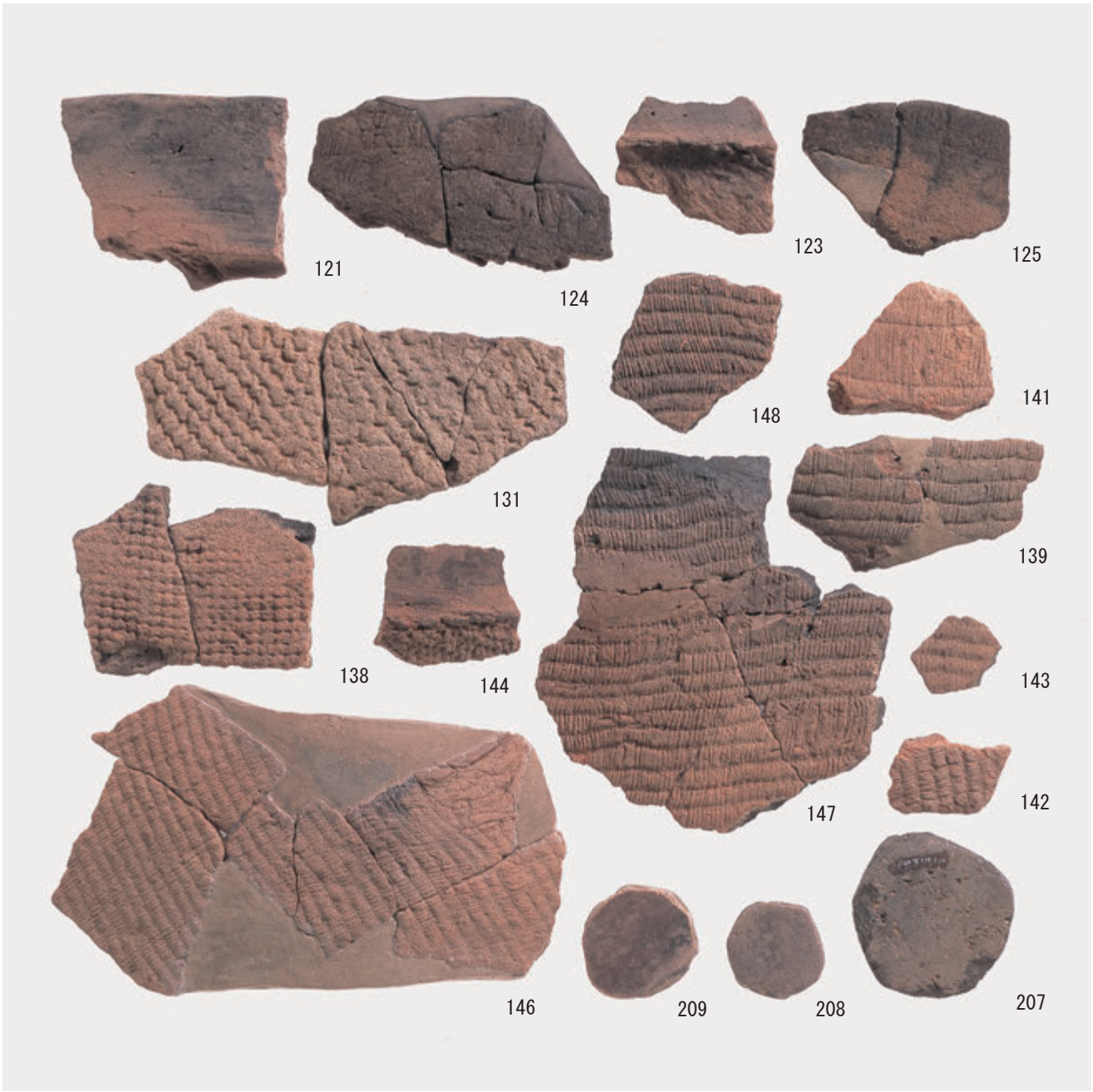
118

118

119

119

図版18　縄文時代晩期の土器（7）



150
186
181
189
185
149
183
184
155
151
154
156
153

図版20　縄文時代晩期の土器（9）

179

180

182

187

188

191

192

204

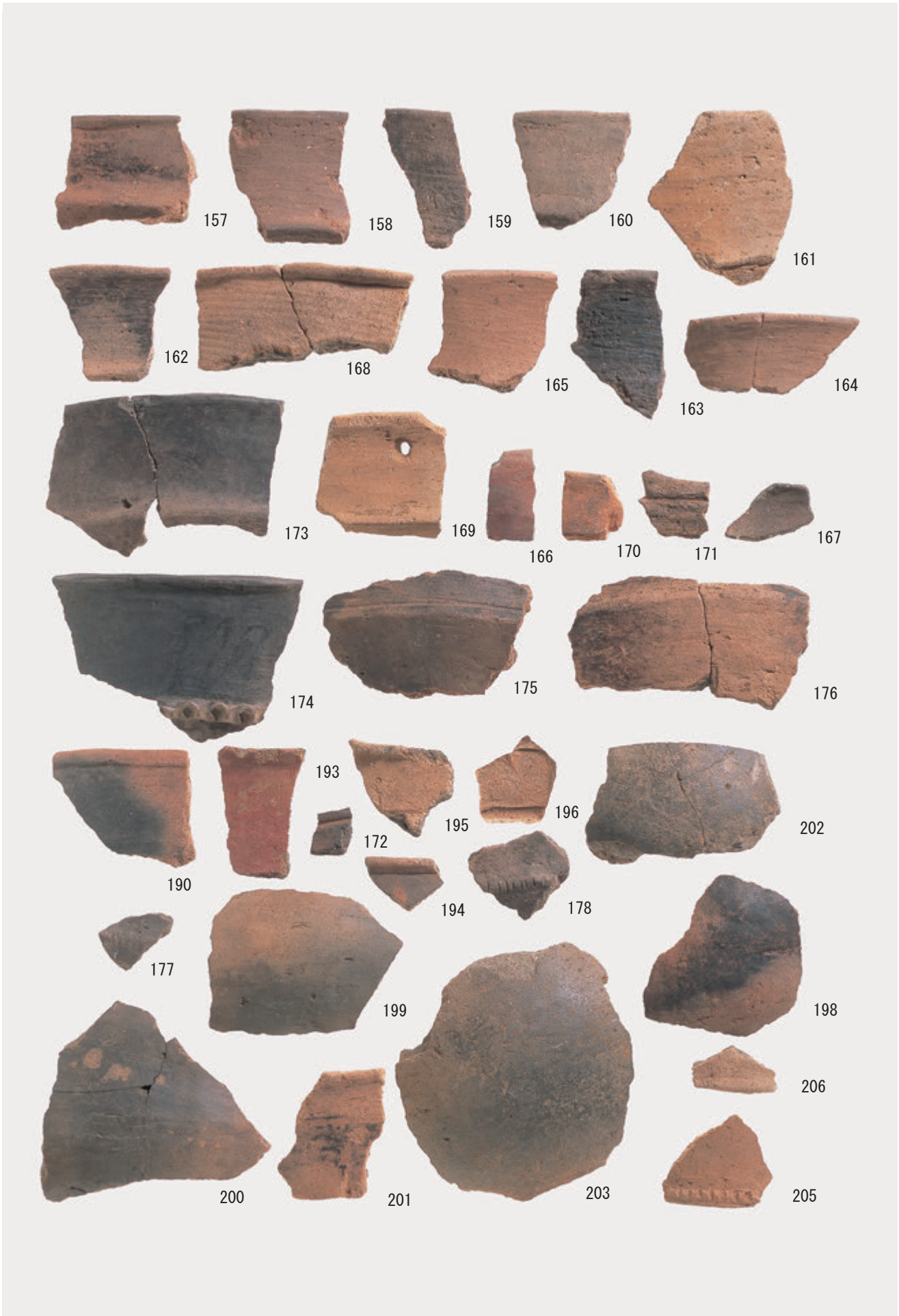
197

197

197

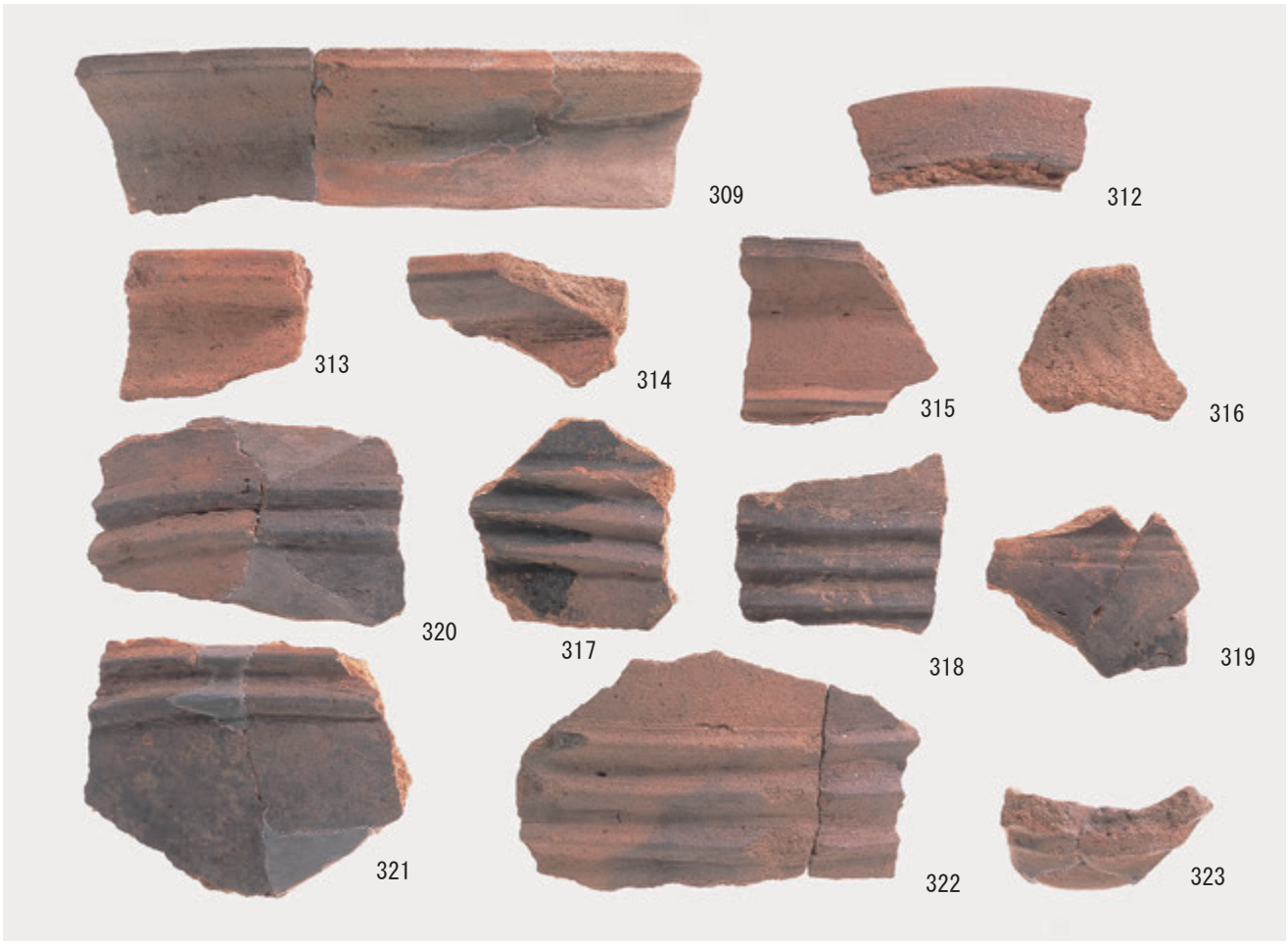
197

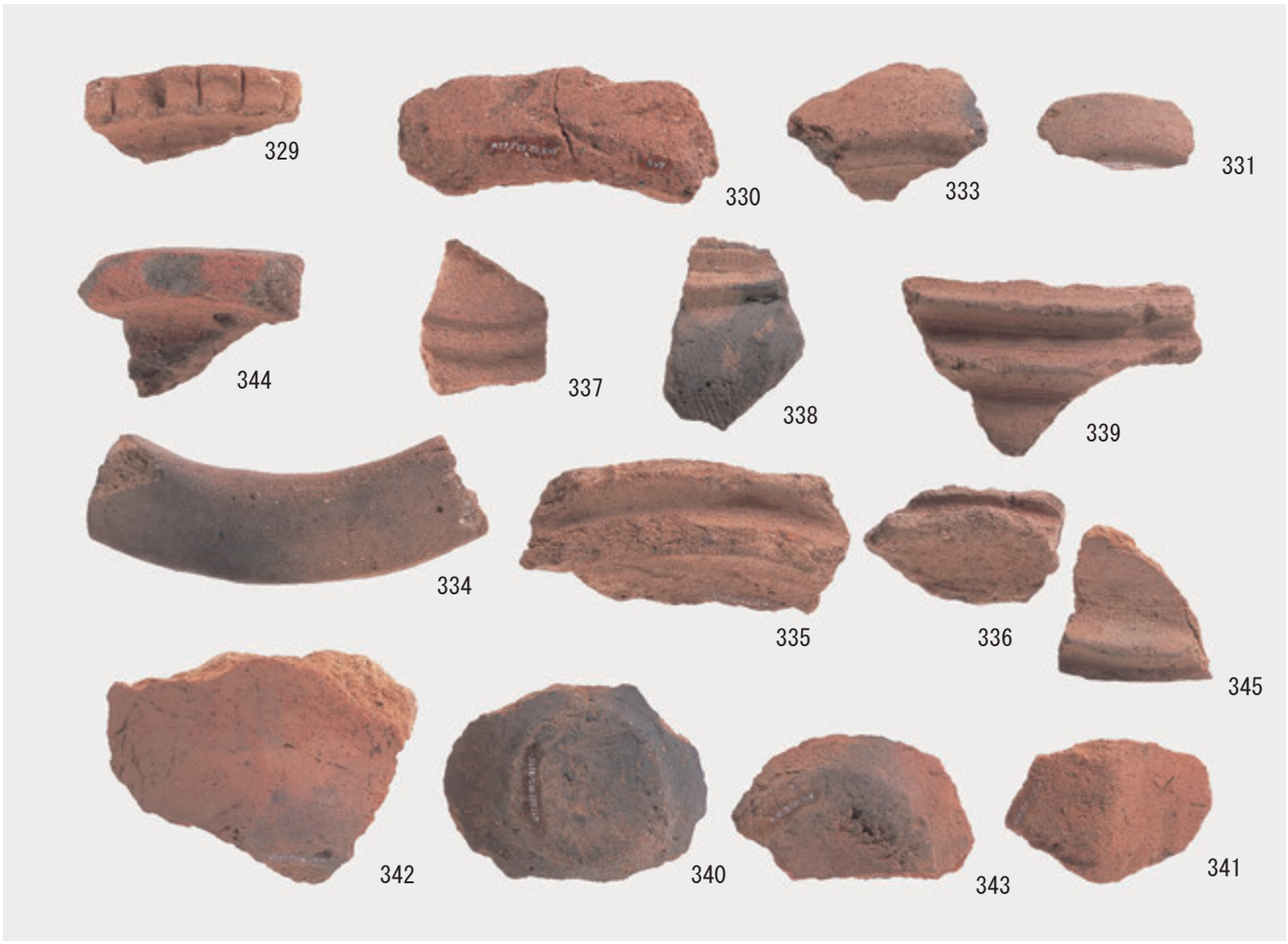
図版22　縄文時代晩期の土器（11）



292
293
298
294
296
310
303
294
307
301
295
305
297
300
332
311
299
302
308
306
304

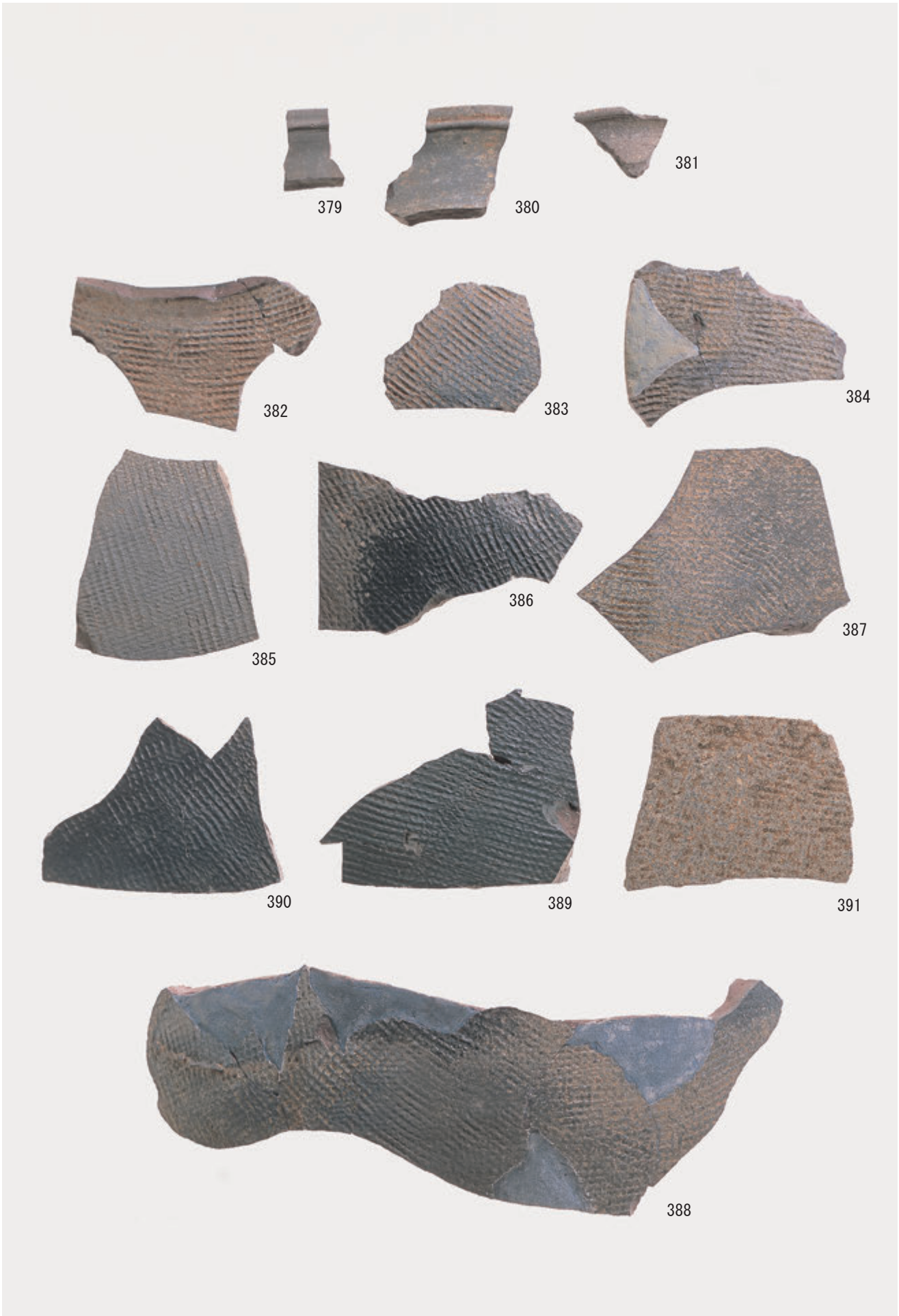
図版24　弥生時代の土器（2）



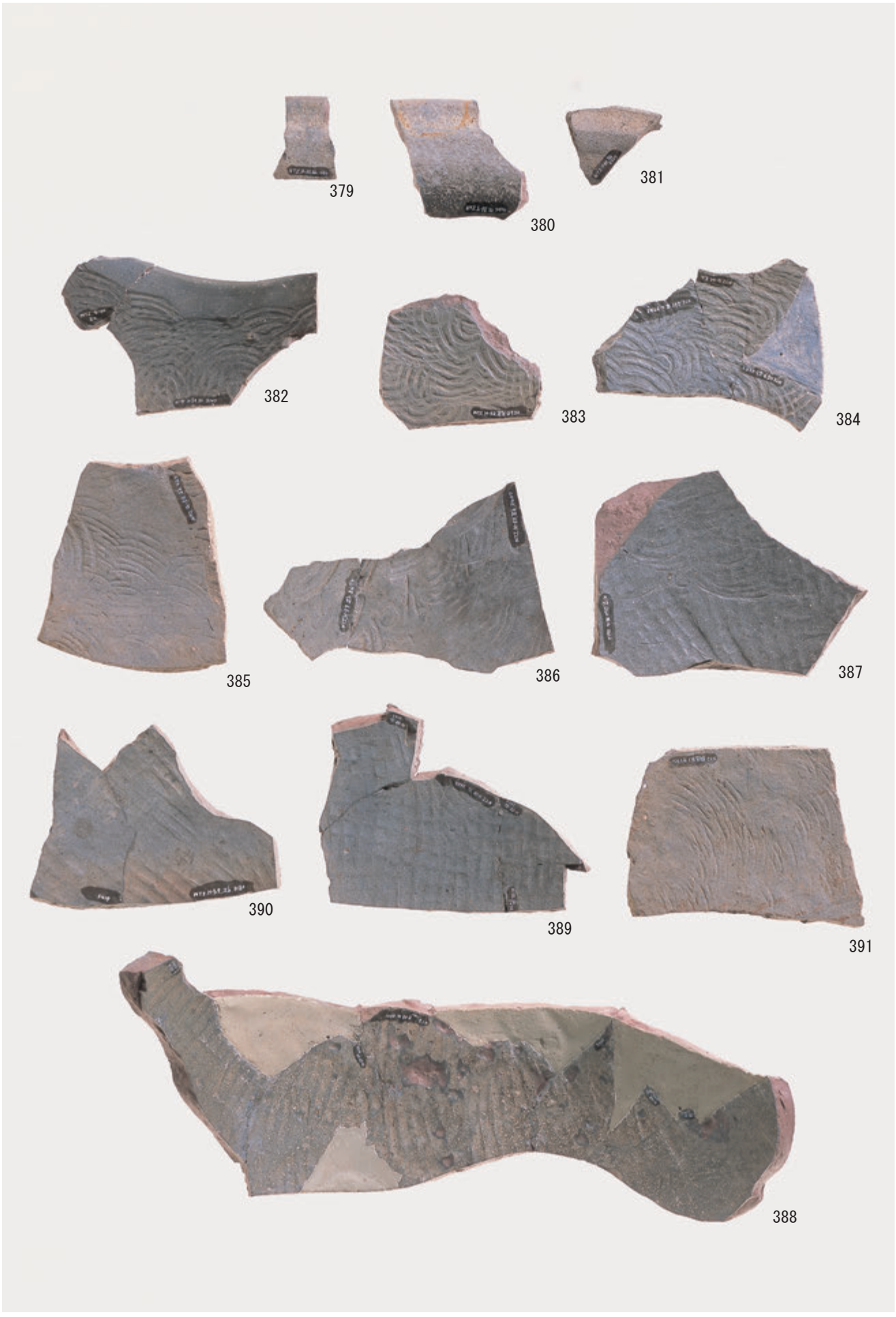

329
330
333
331
344
337
338
339
334
335
336
345
342
340
343
341

369
370
374
376
367
368
375
372
377
373
371
378

図版26　古墳時代の土器（2）


379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391

図版28　古墳時代の須恵器（裏）



396

396

524

407

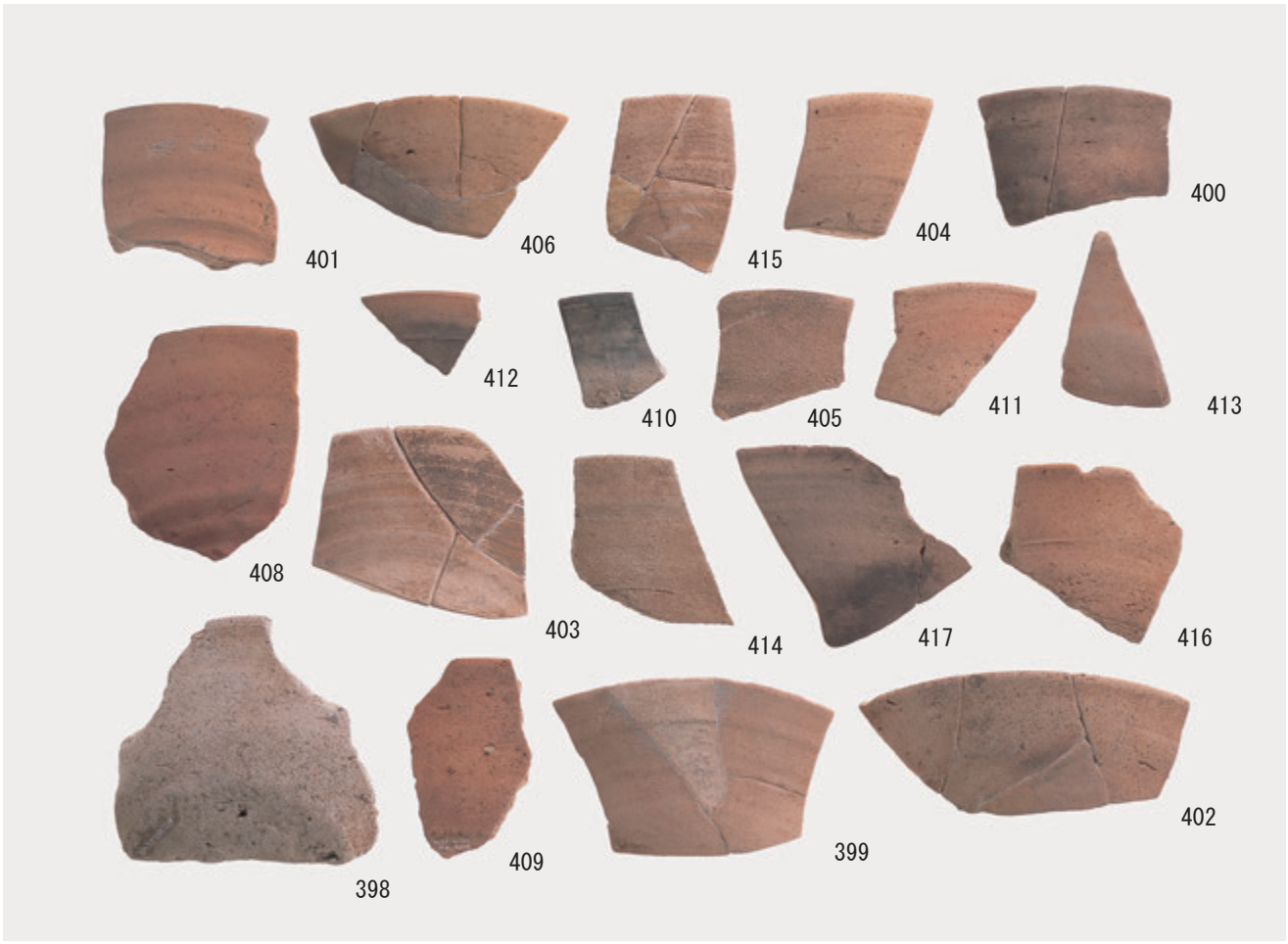
397

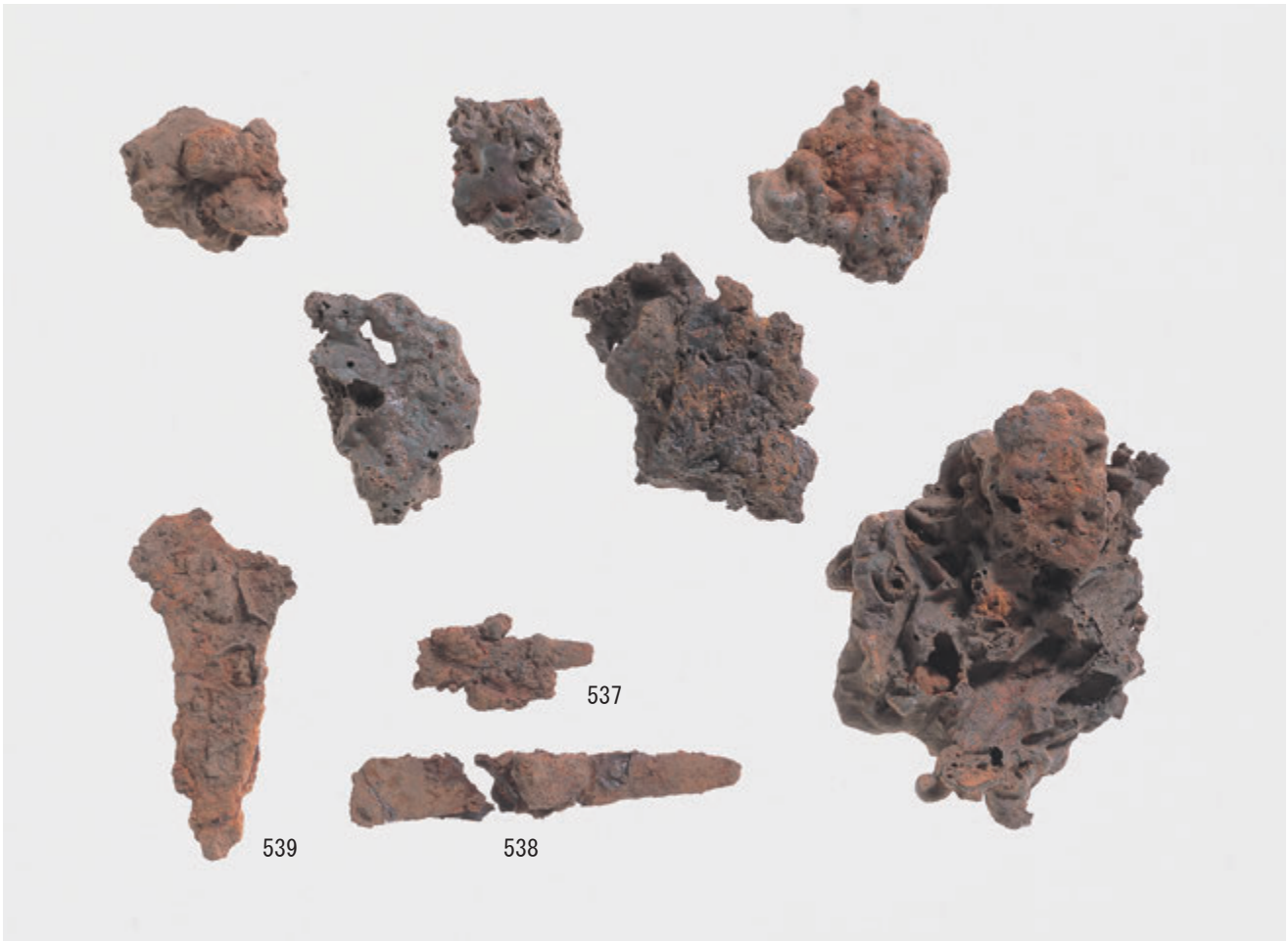
517

525

526

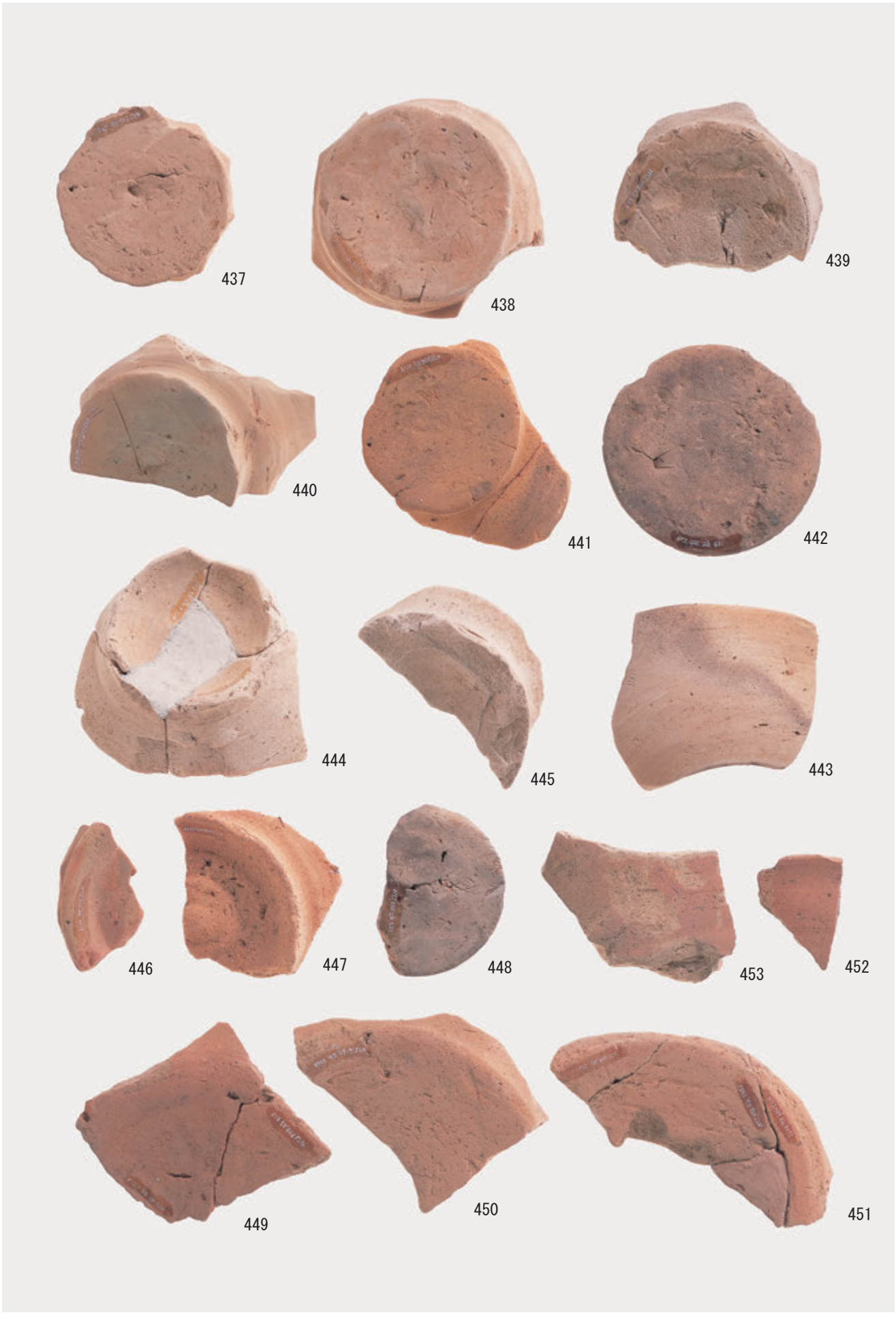
図版30　古代の土師器（2）・鉄製品・鉄滓

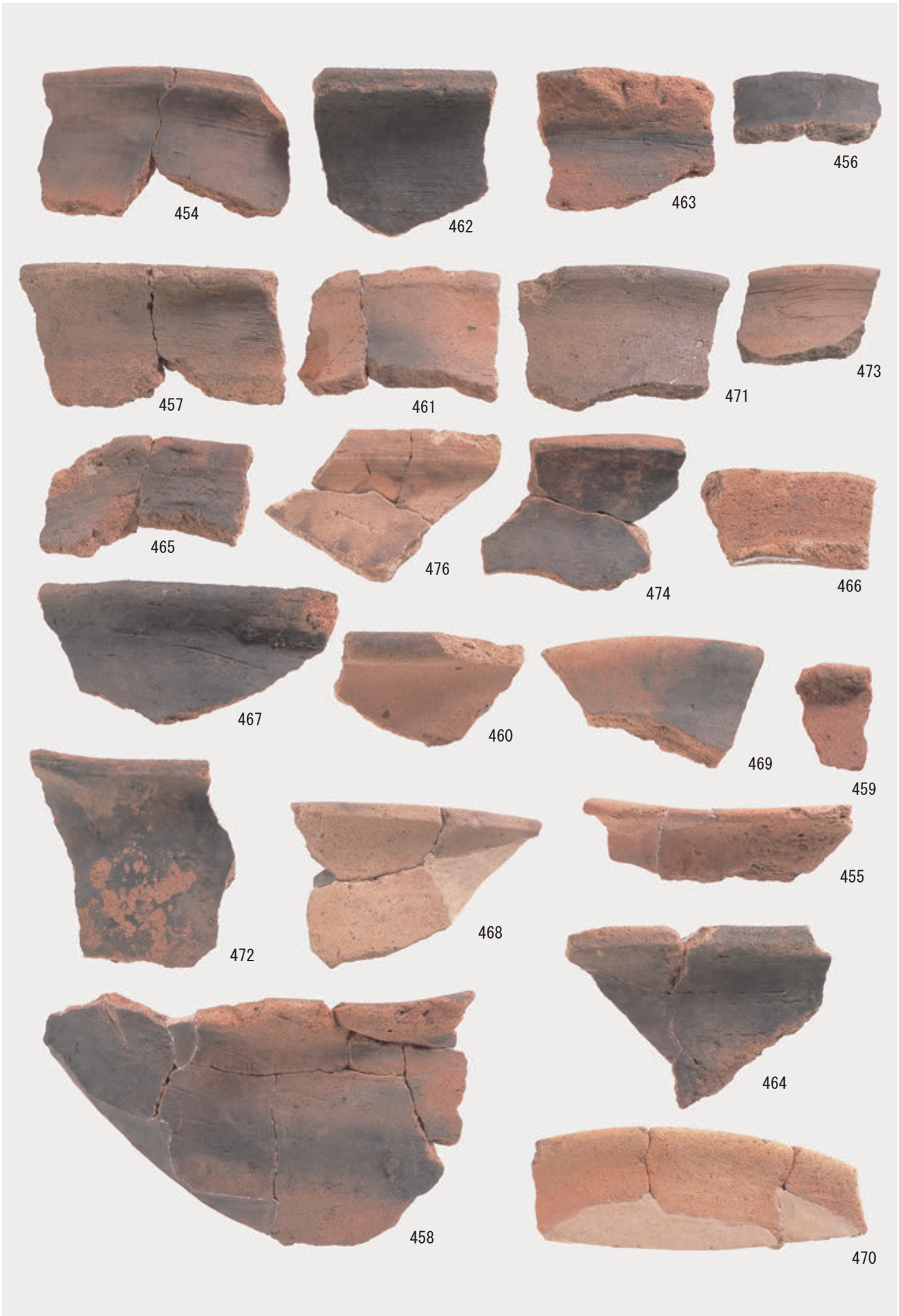




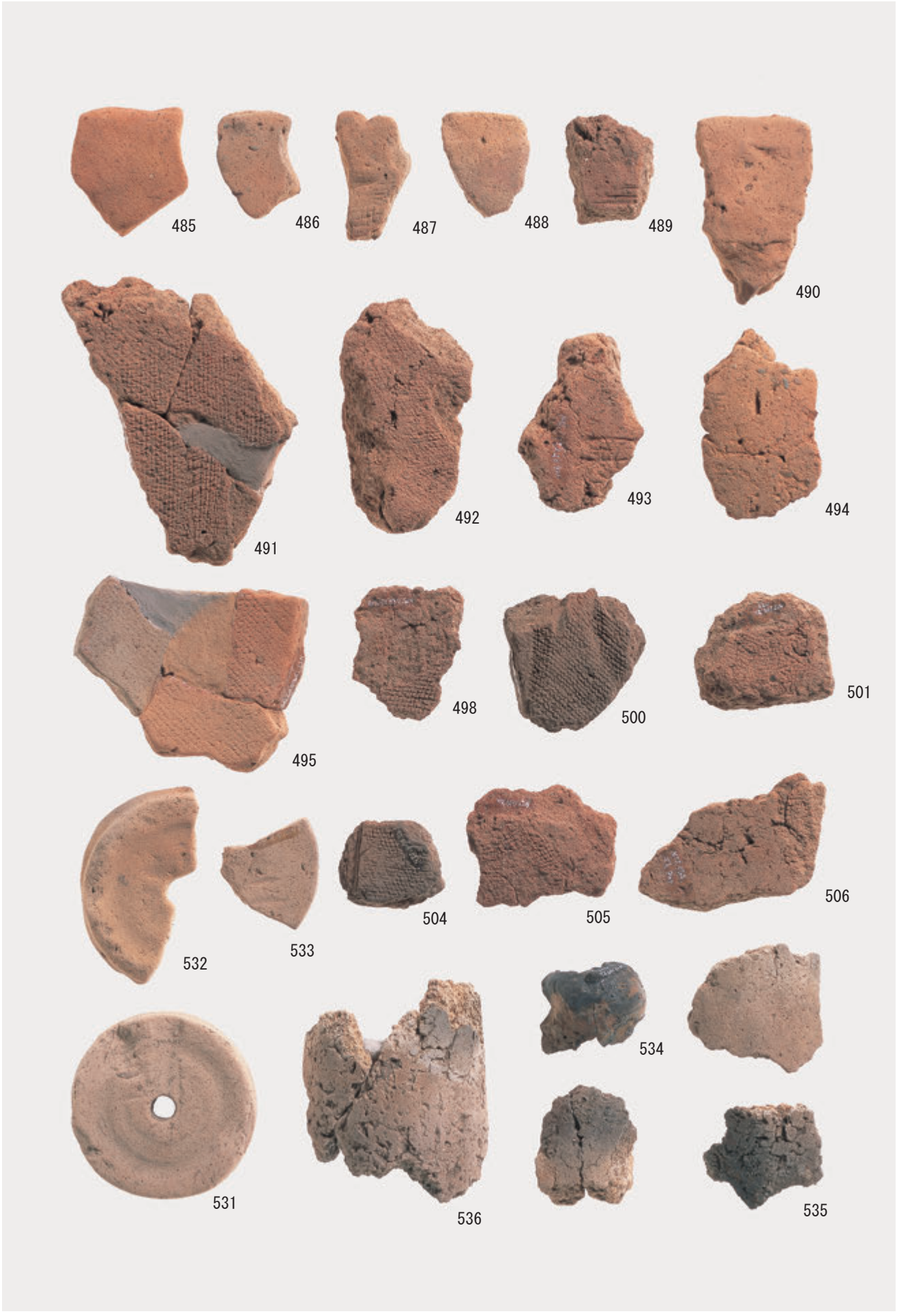
420
418
422
419
423
421
424
425
426
429
430
427
432
431
435
436
428
433
434

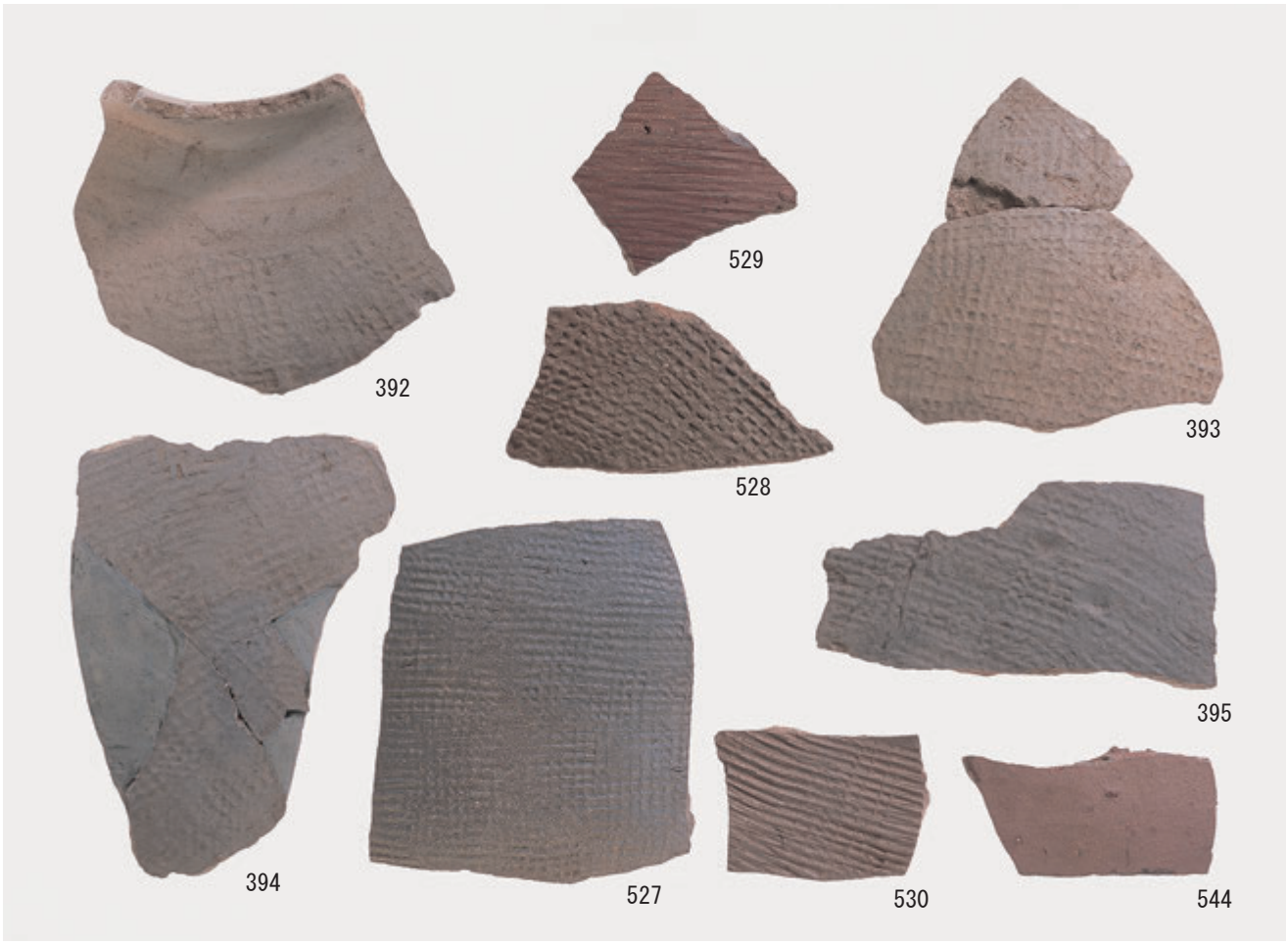
図版32　古代の土師器（4）

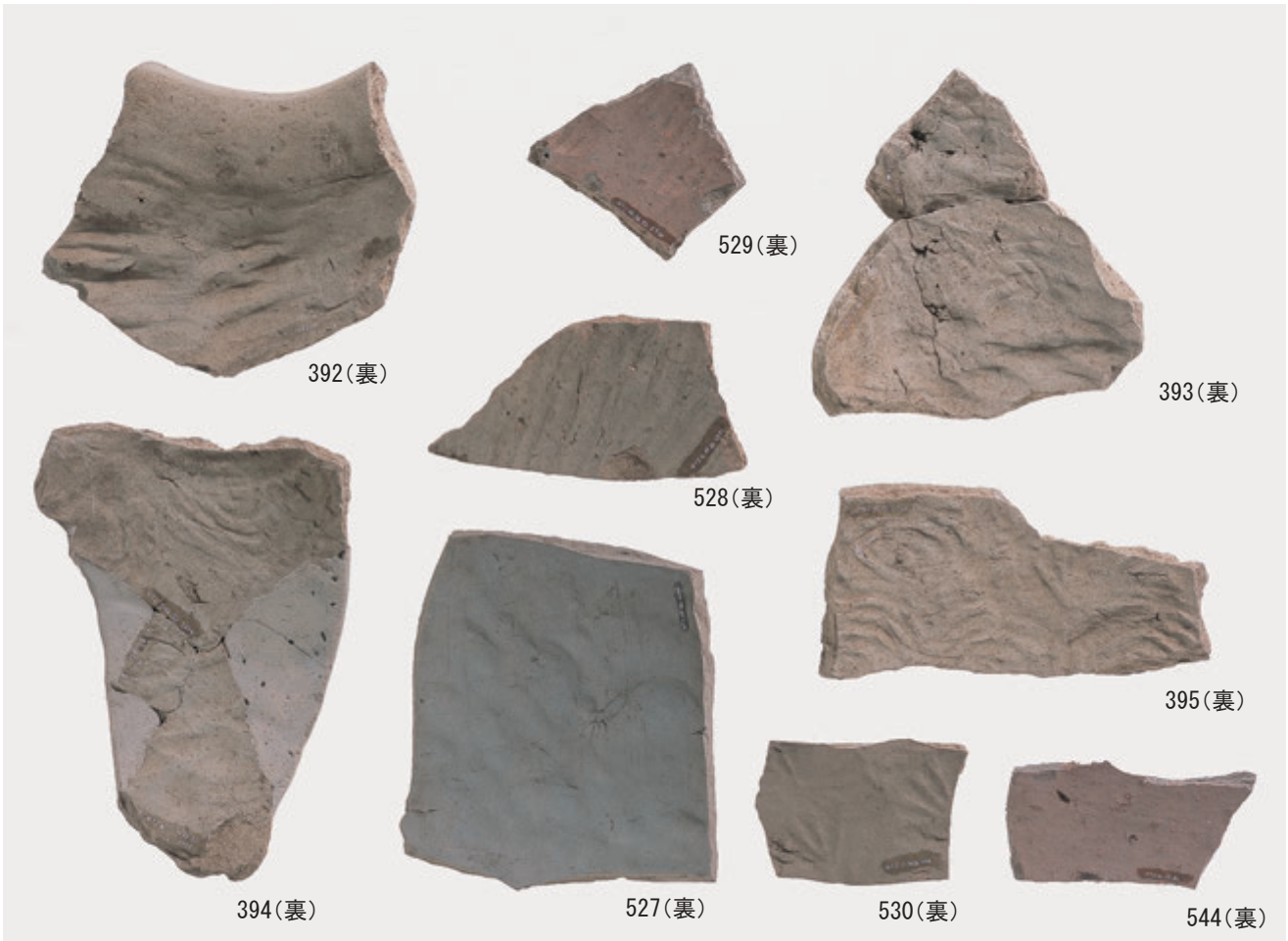



454
462
463
456
457
461
471
473
465
476
474
466
467
460
469
459
472
468
455
464
458
470

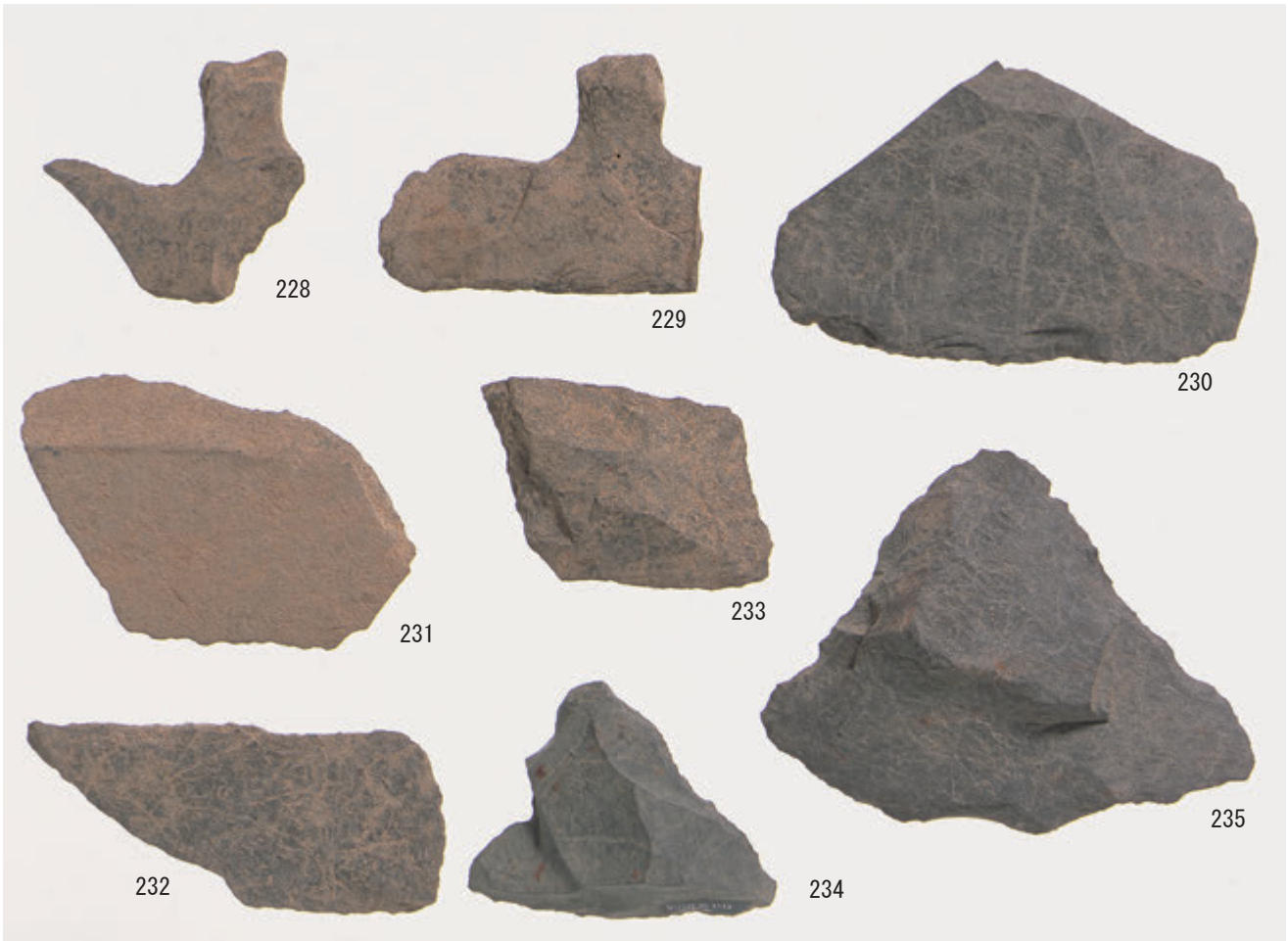
図版34 墨書土器・瓦器・黒色土器・赤色土器・須恵器


485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
498
500
501
504
505
506
531
532
533
534
535
536


392
529
528
393
394
527
530
395
544


392(裏)
529(裏)
393(裏)
528(裏)
394(裏)
527(裏)
530(裏)
395(裏)
544(裏)

346
210
211
212
222
223
224
225
226
213
214
215
216
227
217
218
219
220
221


228
229
230
231
233
235
232
234

図版38　石器（2）

236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257

264
258
259
260
261
262
263
265

269
271
281
274
278
277
275
272
276
280
266
267
279
270
273
268

図版40　石器（4）

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（８）
東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良 ＪＣＴ.）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

永吉天神段遺跡
第１地点

発行年月　２０１６年3月
編集・発行　鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL　0995-70-0574　　FAX　0995-70-0576
印刷所　濱島印刷株式会社
〒890-0052　鹿児島市上之園町17番２号
TEL　099-255-6121　　FAX　099-259-1629

鹿児島県